

7.4尺(220cm)になる。検出した柱穴は9個で円形プランである。

#### S B09 (第12図)

第2加工段西側にある建物である。柱間距離は、桁行が東から4.0尺(118.8cm)、4.0尺(118cm)である。検出した柱穴は3個で円形プランである。建物としているが、検出した柱穴の個数等から柵列の可能性もあると思われる。

#### S B10 (第12図)

第2加工段の西側、S B09と並行に並ぶ建物である。柱間距離は、桁行が東から2.0尺(59.4cm)、4.0尺(118.8cm)、2.0尺(59.4cm)である。検出した柱穴は4個で円形プランである。S B09と同様で柵列の可能性もあると思われる。S B10からは須恵器の蓋・壺・土師器の甕が出土している。

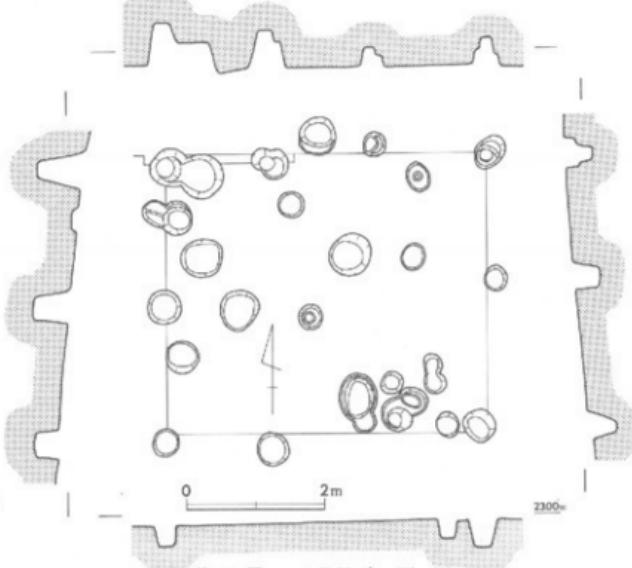
#### S B07 (第10図)

第2加工段にある2間(296cm)×3間(385cm)以上の東西棟建物跡で、建物軸方向N-14°-Wを測る。柱間距離は、桁行は北から4尺(119cm)、4.5尺(133cm)になり、梁行は5尺(148cm)等間になる。検出した柱穴は7個で円形プランである。

#### S B08 (第11図)

第2加工段にある2間(398cm)×3間(459cm)の東西棟建物跡で、建物軸方向はN-0°-Eを測る。柱間距離は、桁行は東から5.5尺(163cm)、5尺(148cm)になり、梁行は北から6尺(178cm)、

第10図 S B07 実測図

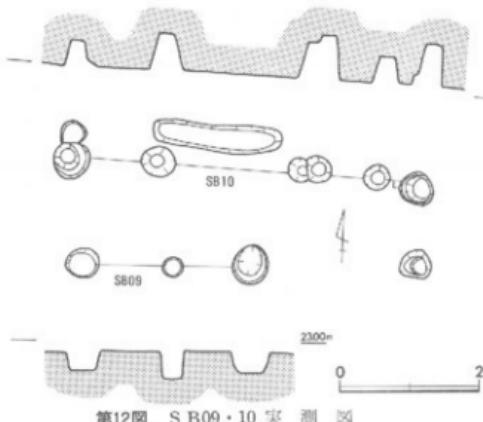


第11図 S B08 実測図

離は、桁行が東から2.0尺(59.4cm)、4.0尺(118.8cm)、2.0尺(59.4cm)である。検出した柱穴は

4個で円形プランである。S B09と同様で柵列の可能性もあると思われる。S B10からは須恵器の蓋・壺・土師器の甕が出土している。

才ノ峰遺跡



第12図 S B09・10 実測図

物跡で、建物軸方向はN  
-13°-Wを測る。柱間  
距離は、桁行は東から6  
尺(178cm)、6.2尺(184  
cm)、6尺(178cm)にな  
り、梁行は6.5尺(193cm)  
になる。検出した柱穴は  
5個で円形プランである。

S B13 (第15図)

第6加工段にある1間  
(110)×3間(427cm)  
以上の棟建物跡で、建物  
軸方向はN-10°-Eを  
測る。柱間距離は、桁行  
東から4尺(119cm)5.7  
尺(169cm)、4.7尺(139cm)  
になり、梁行3.7尺(110cm)  
になる。検出した柱穴は5個で円形  
プランである。建物は第6加工段の西側に位置しており、建物の北側には、斜面から平垣面に移ら  
うとする場所に浅い溝が組られており、この建物に伴っていた可能性もあると思われるものである。

S B14 (第16図)

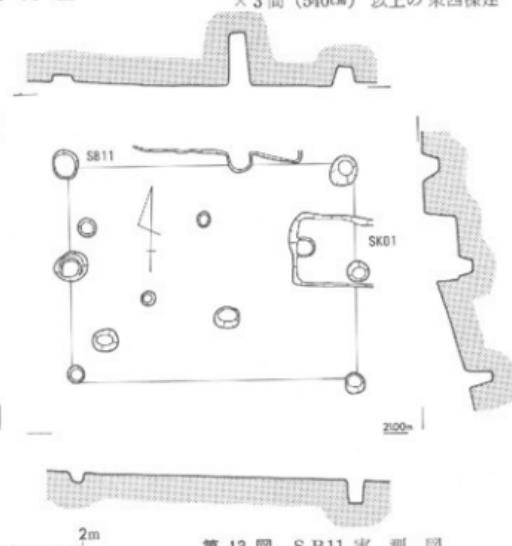
第6加工段にある1間(157cm)×3間(486cm)以上の東西棟建物跡で、建物軸方向はN-6°-

S B11 (第13図)

第3加工段にある2間(305cm)  
×2間(412cm)の東西棟建物跡  
で、建物軸方向はN-2°-Wを測  
る。柱間距離は、桁行は東から  
5.5尺(163cm)、8.4尺(249cm)  
になり、梁行は北から5.3尺(157  
cm)、5尺(148cm)になる。検出  
した柱穴は7個で円形プランであ  
る。

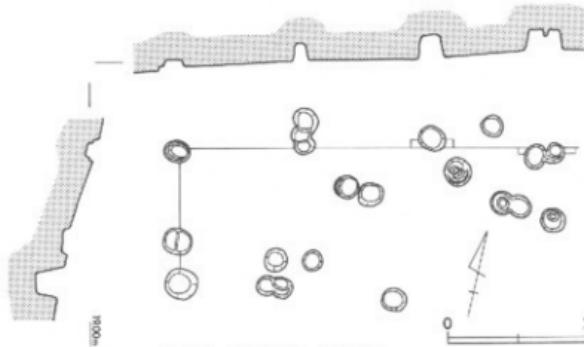
S B12 (第14図)

第4加工段にある1間(193cm)  
×3間(540cm)以上の東西棟建



第13図 S B11 実測図

才ノ峰遺跡



第14図 SB12 実測図

はN-0°-Eを測る。柱間距離は  
桁行は東から6.5尺(193cm)、6.7  
尺(199cm)、6尺(178cm)になり、  
梁行は北から7尺(208cm)4  
尺(119cm)になる。検出した柱  
穴は6個で円形プランである。

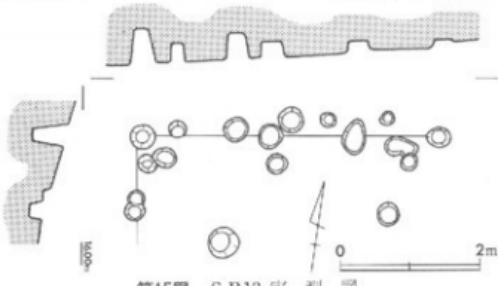
S B16 (第18図)

第6加工段にある1間(119cm)  
×4間(512cm)の東西棟建物跡

Wを測る。柱間距離は、  
— 桁行東から5.7尺(169  
cm)、5尺(148cm)、  
5.7尺になり、梁行は  
5.3尺(157cm)になる。  
検出した柱穴は5個で  
ある。

S B15 (第17図)

第6加工段にある2  
間(327×57cm)  
の建物跡で建物軸方向

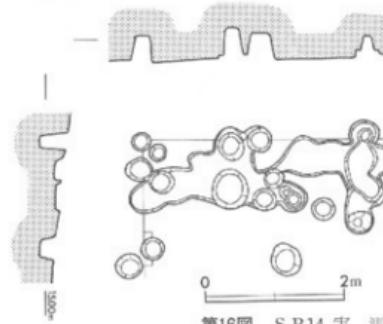


第15図 SB13 実測図

で、建物軸方向はN-0°-  
Eを測る。柱間距離は、桁  
行は東から4.5尺(133cm)、  
4.7尺(139cm)、3.4尺(101  
cm)、4.7尺(139cm)になり、  
梁行4尺(119cm)になる検  
出した柱穴は7個で円形ブ  
ランである。

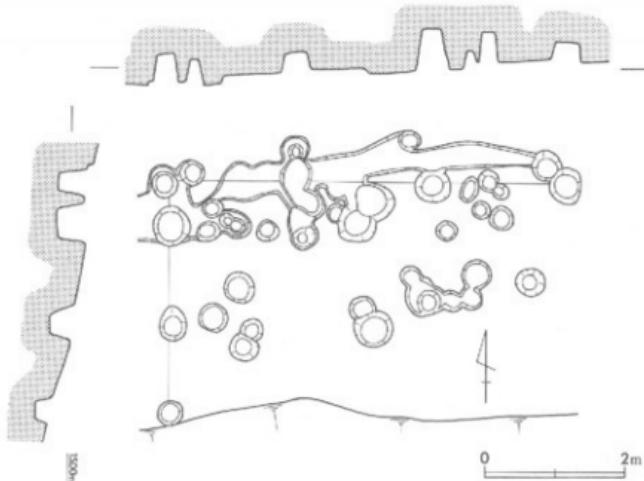
第6加工段遺物出土状態

(第19図)

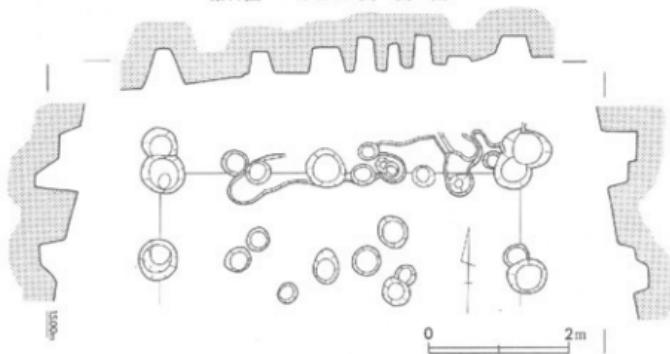


第16図 SB14 実測図

第6加工段で、東側の建物群(SB14・15・16)から図示の可能な遺物が比較的多く、まとまって出土している。遺物は、須恵器10、手捏土器4、土錘1である。遺物は建物北側、斜面が平坦面におりた場所に集中している。須恵器は、蓋1、环5、壺3、罐1、高环1である。蓋91と环189は、セットになると思われる。环201、204も同様な時期のものと思われる。环234は、高台が直立に立ち上り、环部も内窓気味に立ち上り189とは器形が違うことから時期的には差がある。手捏土



第17図 SB15 実測図



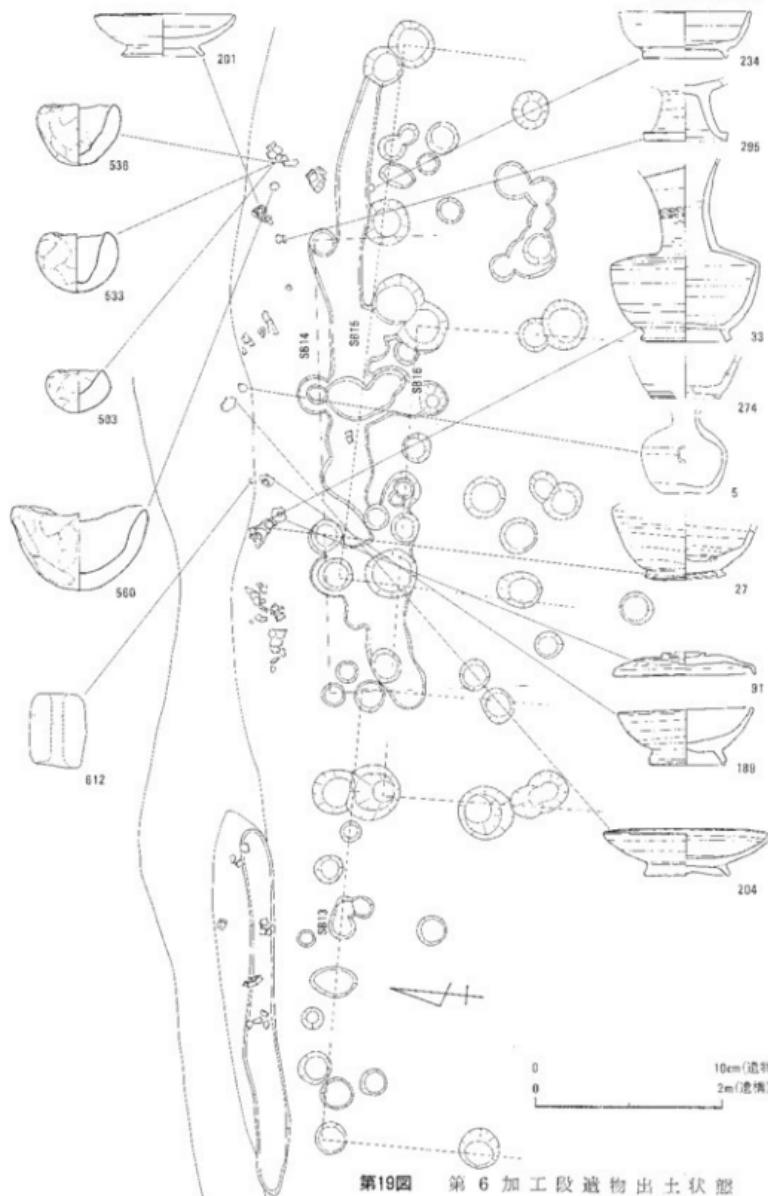
第18図 SB16 実測図

器は、大小4個が第6加工段東側から集中して出土している。埴物が数株複合していることや、最下の加工段の為、流入品があったことを考えると、SB14、SB15、SB16にそれぞれの遺物が伴うのかは不明である。

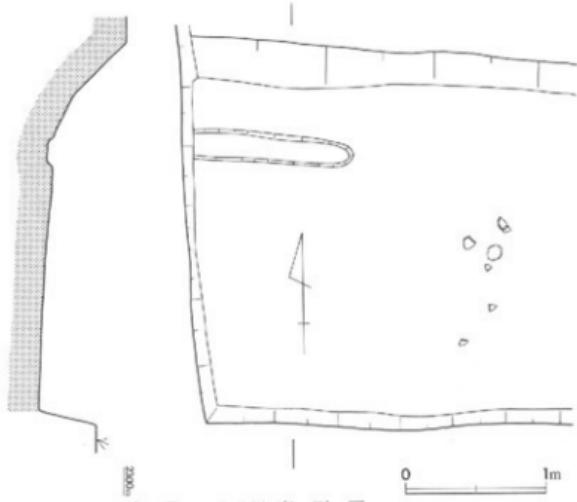
#### S I 01 (第20図)

第2加工段の西側に位置している。平坦面の斜面寄りの場所に溝が掘られているが一部しか検出しておらず不明である。遺構面よりやや浮いた状態で土師器、須恵器が出土した。溝は幅約20.0cm、長さ約1.1mを測る。溝以外の柱穴、土壙といった遺構は、調査範囲内では発見できなかったが、平坦面はさらに西側に続くと思われる。

才ノ岬遺跡



### 第19圖 第6加工段遺物出土狀態



第20図 S 101 実測図

## S 102 (第21図)

第3加工段の西側より検出した。幅約40cm、深さ約10.0cmの「コ」の字状の溝をめぐらし、その内側に、円形は不整形な土壙を穿っている。土壙及び溝からは遺物は発見できなかった。S 102の南側は斜面となっており消失している。溝の内面は東西3.6m、南北1.4mの平坦面で、径約60.0cm、深さ40.0cmの円形土壙(西側)。

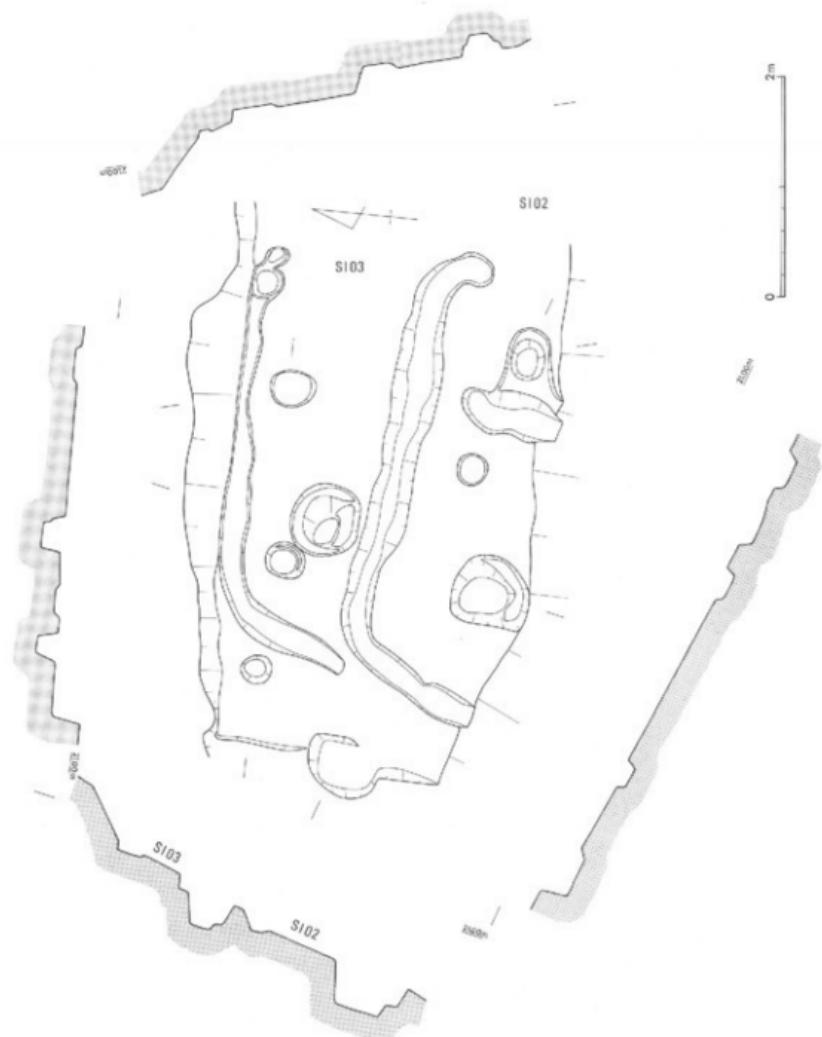
と、径約1.0cm、深さ約20.0mの平面プランが不整形な土壙(東側)検出された。

このS 102は、S 103と複合していて、前者の床を取りはずしたところで検出されたものである。S 103と遺構は酷似しているが、明確に柱穴と考えられるピットは発見できなかった。南側斜面が流失しているところから、S 102は今少し南方へ床面が広がっていたと考えられよう。

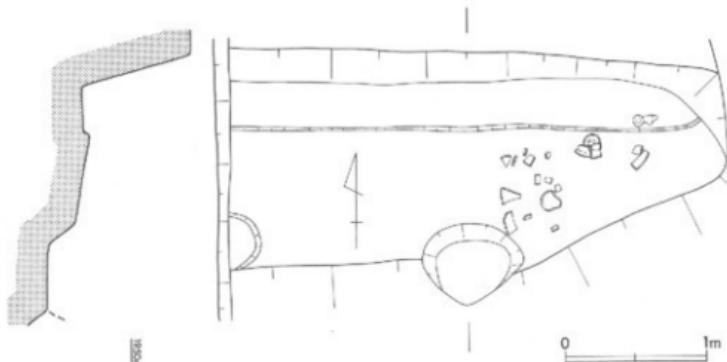
## S 103 (第21図)

S 102と同様に第3加工段で検出された。幅約25.0cm、深さ5.0cmの「L」字状の溝がめぐる。溝から南は約2.6mの平坦面があり、前述のS 102はその床下から検出した遺構である。S 102とS 103の床面との差は10.0cmある。S 103は平面プランが円形の土壙(西側)と、少し離れたところに不整形な土壙(東側)をもつ。前者は径約70.0m、深さ40.0mで、須恵器壊(第33図138)と同蓋(第31図104)と壺片が出土した。須恵器は壺片を除く壺と蓋は焼成があまく、特に蓋は土師質であった。しかし、蓋の機能からして供伴した壺とセットで使用するのにさしつかえはなかったものと思われる。東側の不整形な土壙は長径1.2m、短径0.5m、深さ0.2mで、石錘(第58図489)が入れられていた。S 102と同様に柱穴と考えられるピットは検出できなかった。

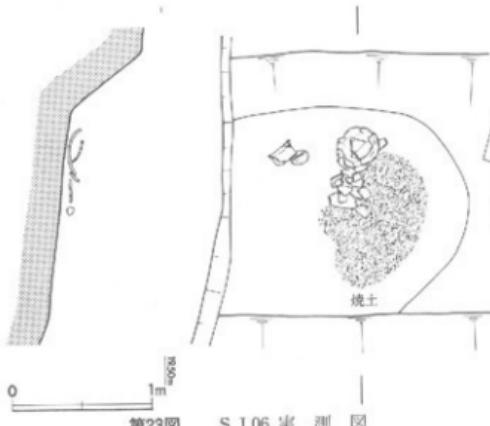
S 102、S 103のある第3加工段は、他の加工段と比較した場合にその遺構のありかたに違いが認められる。すなわち、掘立柱建物跡の他に、S 102、S 103といった住居跡状遺構、土壙があるからである。おそらく、S 102、S B11、SK02が同時期に、相互に深い関係を持ちながら存在し、S 103とSK01がその後に同様な関係を保ちながら構築されたのであろう。第3加工段のこれらの遺構は、出土した石錘とともに、この遺跡の中では、かなり性格の異ったものであったことが推測されるのである。



第21図 S102・03実測図



第22図 S I 05 実測図



第23図 S I 06 実測図

## S I 05 (第22図)

第3加工段と第6加工段の中間斜面で検出された。北側に幅35cm、深さ10.0cmの溝があり、平坦面上には、径 $0.7 \times 0.6m$ 、深さ0.2mのピットがある。平坦面の幅(南北方向)は約1.7mある。丘陵の測量図をみると、遺構は西側の未発掘部分にも続くと考えられ、これを第5加工段とした。発掘区画崩で柱穴状ピットも検出されている。遺物は土製カマド、土師器、7世紀後半と考えられる須恵器が出土している。

## S I 06 (第23図)

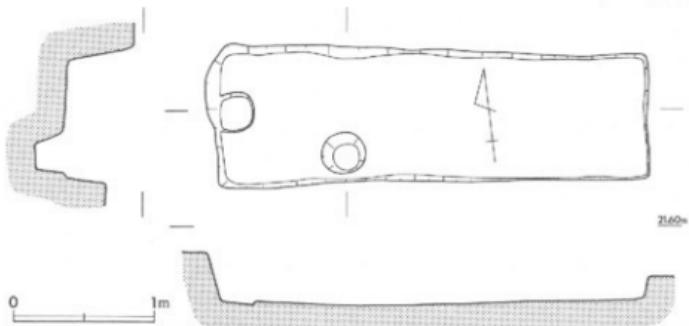
第3加工段の南側斜面で検出された。調査範囲内では遺構の北側に溝はみられなかった。平坦面の幅は約1.5mある。発掘以前の丘陵測量図から、遺構はさらに西側の未発掘部分にも広がっていると考えられるので、これを第7加工段とした。

## S I 104 (第3図)

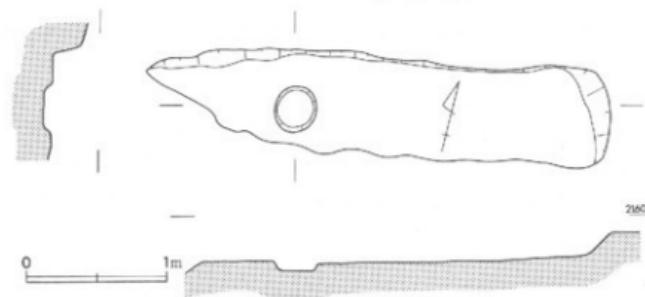
第4加工段の西端に溝のみ検出された。溝の南側には平坦面ではなく、斜面となっている。もともと掘立柱建物跡等の遺構があったものが、斜面の為に流失したものと思われる。

溝は長さ3.0m、深さ0.2mで、溝及び、その付近からは、遺物は発見することはできなかった。

東側に隣接して、S B12が検出された。



第24図 SK01 実測図



第25図 SK02 実測図

## SK01（第24図）

第3加工段の中央部に位置しており、長軸方向で $3.1m$ 、短軸方向で $1.0m$ 、深さ $0.5m$ を測る土壇である。平面形は、長方形で底面は平坦である。土壇内からは、土師器、須恵器の破片が出土している。いずれも床面よりも浮いた状態で出土している。SK01は、SB11と重複しているがSK01の床面を検出した際にSB11の柱穴を検出している。このことより、SK01（新）、SB11（古）という新旧関係にあると思われる。

## SK02（第25図）

第3加工段の中央部、SK01の北側に平行して位置している。現存する、長径 $3.2m$ 、短径 $0.6m$ で、深さは $0.2m$ を測る。平面形も長方形であることから、SK01と同様な土壇であると思われる。南側は流失している。

(宮沢明久)

## 須恵器（第27図～42図）

須恵器は発掘調査区全域にわたり出土した。特に多く出土したのは、遺構の検出されたIII区丘陵南側斜面と、その下のII区水田部であった。図示したのは図化可能なものの一部である。

第26図1は山陰地方古墳時代須恵器編年のI期（山本清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』昭和40年）に相当するもので、1点のみの出土である。才ノ峰遺跡出土須恵器の中では、この資料

のみが逸脱した存在である。S B03の柱穴内から出土した。内面口唇部に使用痕と考えられる磨滅が認められるので、S B03の時期を示すか、又は、7世紀代以降に何らかの事情で使用されていた可能性がある。集落内からこの時期の須恵器の出土は、鳥取県米子市育木遺跡からも報告されている（鳥取県教育委員会『育木遺跡発掘調査報告書』II 附和52年3月）。

## 蓋環

蓋环蓋A 58、59、60、61、62、63、65、66、67、68（第30図）は口径9.3~11.3cm、器高が3.0cm以上のものである。天井部はへラおこし、いくぶん丸味がある。

蓋环蓋B 64（第30図）。口径は蓋环蓋Aと変わらないが、器高が3.0cm以下で、天井部が平坦である。

また、69~72、74、75（第30図）も蓋环蓋の天井部であるが、小破片の為、復元は不可能である。

蓋环身A 76（第30図）、110（第32図）。口径が8.0cm以下、器高が2.5cm内外の小形の身である。

蓋环身B 108、109（第32図）。口径は13.0~14.0cm、器高が3.0~4.0cm内の中形のものである。

蓋环身C 105、106、107（第32図）。口径が14.0cm以上、器高が4.0cm内外の大形のものである。

この他蓋环と考えられるものに、111~118（第32図）があるが、蓋、身のいずれともうけとられるものである。

## 高台のつく环

体部を内湾しながら立ち上がる（第36図189~208、第37図209~229、第39図225、226）もの（A類）と、体部が逆「八」の字状を呈し直線上に立ち上がる（第37図230、第38図231~251、第39図252~258）もの（B類）に大別できる。

A<sub>1</sub> 底部外面がへラ切りのままで未調整のもの（第36図189~203）。

A<sub>2</sub> 底部外面に静止糸切り痕を残すか、もしくはそれを回転ナデにより消す（第36図202~208、第37図209~218）。

A<sub>3</sub> 底部外面に回転糸切り痕を残す（第37図222~228）もの。

B<sub>1</sub> 体部が逆「八」の字状を呈し直線的に立ち上がり、底部外面に回転糸切り痕を残し未調整（第38図231~242、245~251、第39図252~258）。

B<sub>2</sub> B<sub>1</sub>の体部が中ほどより外傾するもの（第38図243、244）。

第37図229は高台部の特徴が第28図26の壺のそれと同じくする。

## 高台のつかない环

A類は底部から体部にかけて内湾しながら立ち上がり、底部外面はへラ切り手法によるもの（第22図119、120、123~127）。B類は底部外面は静止糸切痕、もしくは回転糸切痕を残し、体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部は小さく「く」の字状を呈す。C類は底部外面に回転糸切痕を残し、体部は逆「八」の字状に直線的に立ち上がる。



第26図 須恵器実測図(1)

A<sub>1</sub> 口径が12.0cm前後のもので口縁部は小さく「く」の字状を呈す（第32図120、122～127）。

A<sub>2</sub> 口径が15.5cm、口唇部は「く」の字状にならない（第32図119）。

このうち、第32図126は、次のB類に近い形態をとる。

B<sub>1</sub> 口径が13.0cmまでの坏で、静止糸切痕を残すもの（第33図128～30）と、回転糸切痕を残すもの（第33図1321～140、142～144、第34図159、第35図160～62、164）がある。

B<sub>2</sub> 口径が130cmをこえるもので、底部外面に回転糸切痕を残す。口縁部はB<sub>1</sub>類ほど「く」の字状にならない。（第34図146～158、第35図163、165）

C 口径は12.0cm未満で、底部外面は回転糸切痕を残し未調整（第35図167～169）。

#### 蓋

図示できた蓋は合計29個体で、これをらら形態と口径か、A、B、C、Dの四種に大別した。さらに、A、B、CはA<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>、B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>、C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>に、DはD<sub>1</sub>、D<sub>2</sub>、D<sub>3</sub>に細分を試みた。

蓋A 摳宝珠状、または、環状のつまみがつき、内面にかえりがみられるもの。A<sub>1</sub>は、口径11.8～14.0cm（第31図、77、78、79、82）、A<sub>2</sub>は口径16.0cm以上（第31図80、81、83、84、85、86、87、88、89）のものである。

蓋B 環状つまみがつき、口縁が長く垂れさがる。B<sub>1</sub>は口径13.8～15.0cm（第31図91、92、93）、B<sub>2</sub>は口径16.0～170cm（第31図94）である。

蓋C 摳宝珠状つまみがつき、口縁が短く、断面は三角形に近くなる。口縁部よりやや上方が、内側に若干凹む。口径12.5cmの蓋C<sub>1</sub>（第40図277）と18.0cm内外の蓋C<sub>2</sub>（第31図90、95）がある。

蓋D 口縁部が鳥頭状になり、口縁部のやや上方の凹みが口唇部より下に出るものもある。口径13.0cm以上の蓋D<sub>1</sub>（第31図100、101、102）は回転糸切痕をつまみ周辺に残す。口径18.0cm内外は蓋D<sub>2</sub>（第31図98、99）。さらに口径の大きな蓋D<sub>3</sub>（第31図103）がある。

以上の外に、黄褐色土師質に焼成された蓋104（第31図）がある。風化が進み細かな観察は不明であるが、摸宝珠状のつまみがつく。138（第33図）の坏とともに、S I 03内のピット内から出土した。

また、40図277は、硯蓋である。

#### 盤

口縁部まで復元できるのは6個体ある（第40図）。底部のみのものは第39図にまとめた（第39図259～269）。いずれも、底部外面は回転糸切痕を残し、低い高台がつく。口径が20.0cmまでのもの（A類）とそれを越えるもの（B類）とに大別した。

盤A<sub>1</sub> 体部が逆「八」の字状を呈し、やや外反する（第40図270～272）。

盤A<sub>2</sub> 体部が内湾しながら立ち上がる（第40図273～275）。

盤B 器高は盤Aとあまり変わらないが、口径、高台径が大きなもの（第40図276）。（第39図259～266、269もこれに分類できよう。）

## 才ノ峰遺跡

### 皿

皿A 口径が10.0cm未満の小形のもの（第36図185～188）。このうち187は焼明皿として使用され、185、186もその可能性がある。188のみは底部内面に使用痕があるのでそれ以外の機能が考えられる。

皿B 口径が13.0cm前後のもの（第36図179～183、第35図177）。

皿C 口径が14.0cm以上のもの（第35図172～178）。

皿D 体部が直線的に大きく開くもの（第36図184）。

### 高环

高环は全体を知ることのできるものはなく、脚部、もしくは环部の破片である（第41図、42図）。脚部に、円形、方形、線刻により透し、または、二条の波線により脚部を上下二段に区画するものと（A）、同らそれらの表現のないもの（B）に大別される。

A<sub>1</sub> 283（第41図）。円形の透しを脚部に有する。

A<sub>2</sub> 280、286、294（第41図）。脚部を二条の沈線で上下に区画し、それぞれに、方形、あるいは沈線により透しを入れたもの。

B<sub>1</sub> 脚部の高さが6.0cm未満で、「八」の字状を呈す（第41図292、295、296）。

B<sub>2</sub> 脚部が高くなり、端部がさらに末広がる（第41図297～299）。

この他、第42図305、306は、小形の高环形須恵器である。これらは日常使用されたものではないう。

### 壺

第27図11～13、第28図23～35、第42図320、321、323、324は壺である。いずれも完形品はない。頸部をみると長さが比較的短く逆「八」の字状を呈し、直線的に立ち上がるもの（23）、頸部に二条の沈線を入れ、口縁付近で外返し広がるもの（24、33）、口縁がさらに広がるもの（25）の三種がある。

底部外面をみると、ナデ調査するもの（26、27、36）、静止糸切痕を残すもの（31）、回転糸切痕を残すもの（33、34）があり、丸底に近く内面青海波、外面格子状の叩き痕を残すもの（18～20）、低い高台がつき体部が内湾しないもの（321～324）の各種が存在する。

さらに胸部の形態をみると、球状を呈するもの（32）、肩の張るもの（27、33）、その中間的なものの（30）がある。

この他に、小形の花瓶形にあると思われる壺がある（11～13、320）。外面底部は回転糸切痕を残し、低い高台のつくもの（13、320）とつかないもの（11、12）がある。

### 甕（第27図）

甕A 14、15。広口で二ヶ所に上向きの把手が貼り付けられる。

甕B 16。甕Aと器形は似ると思われるが、小形で、甕Cのような高台がつくものと考えられる。

甕C 18、19、20。丸底、またはそれに近い形態をとり、内外面に叩き工具痕が残り未調査。外

面底部に高台を貼りつけるものである。壺Cのような把手がつくか、あるいは、壺になる可能性もある。底部が高台と同じほど出るものもある。

壺D 37、38、39、40、41、42、45、46(第29図)、36(第28図)は大形の壺で頸が長く直線的に外反する。外面にあまり振幅のない波状文が三段施される。

壺E 43、44(第29図)。頸部から口縁部にかけて「く」の字状にまがり、頭部は短い大形のものである。

#### 鉢(第42図)

鉢A 325(第42図)。外面底部がわずかに凹む、平底風。体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり、肩部でさらに内湾する。内外面とも文様、叩き痕はみられない。

鉢B 322(第42図)。平底で、まき上げ手法による。体部は直線的に開きながら立ち上がる。

#### 提瓶

第27図17。1個体のみ出土した。吊手は肩部に、著しく退化したものが貼り付けられる。

#### 瓶

瓶A 体部が球状になり、上半に二条の沈線が入る。体部下半はヘラ削り調整(第27図6)。

瓶B 3、4(第27図)。体部に肩が張り、体部下半はヘラ削り調整を施す。

瓶C 7、8、10(第27図)。体部下半はヘラ削り調整。底部は回転糸切痕を残し未調整である。

#### 陶器

硯蓋 277(第40図)。須恵器蓋I類に分類したもので、口径12.5cm、器高は4.0cmで縁部は珠状のつまみがつく。内面は硯面のように磨減したところはみられなく、墨が付着している。これは、筆を整えたと考えられる。

円面鏡1 278(第40図)。陸部の一部が残る。復元すれば陸部の径は約8.0cmである。中央にむかいで浅く凹んだ陸部である。池部はU字形を呈する。使用痕はなく、自然釉のかかったままである。脚部はほとんど欠くがアーチ形の透しがめぐるものである。

円面鏡2 279(第40図)。復元した最大径は約10.0cmになる。半円球状の陸部で、狭い池がめぐる。使用痕は認められない。脚部は長方形の透しがめぐる。

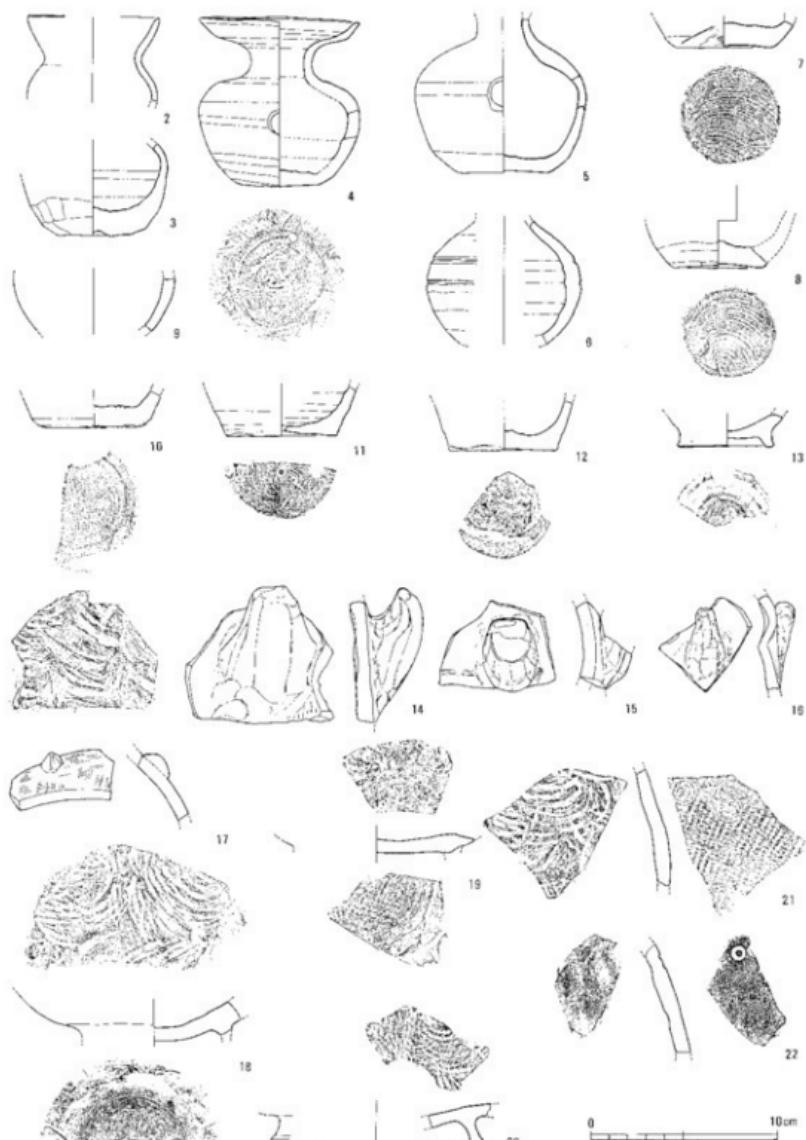
この他に、須恵器として不自然な磨減痕があり、転用硯と考えられるものに95(第31図)がある。

#### ヘラ記号について

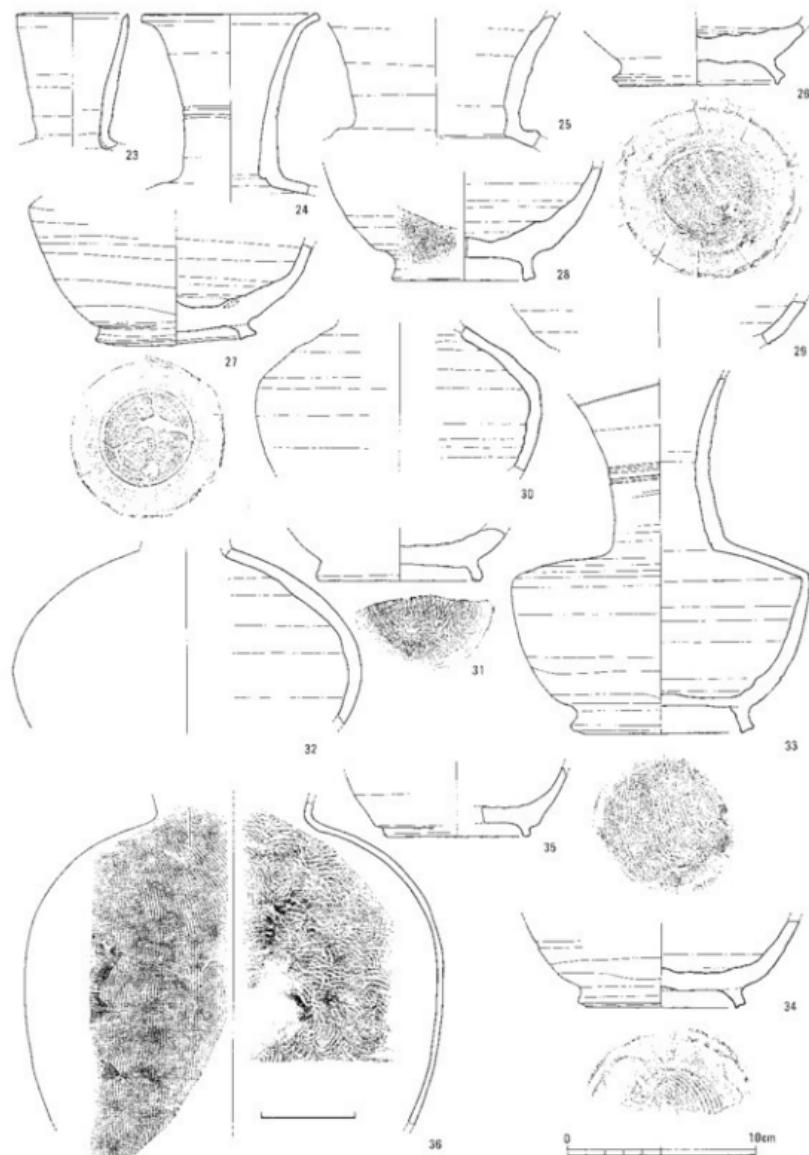
図示した須恵器のうちヘラ記号のあるものは35点あった。このうち「×」は21点あり他のヘラ記号を圧倒している。また器種をみると壺が28で、そのヘラ記号もやはり「×」が多い。さらにヘラ記号を有する須恵器の時期は、ほとんど、7世紀代におさまり、8世紀以降と考えられるものは4点のみであった。

(内田律雄)

才ノ跡遺跡

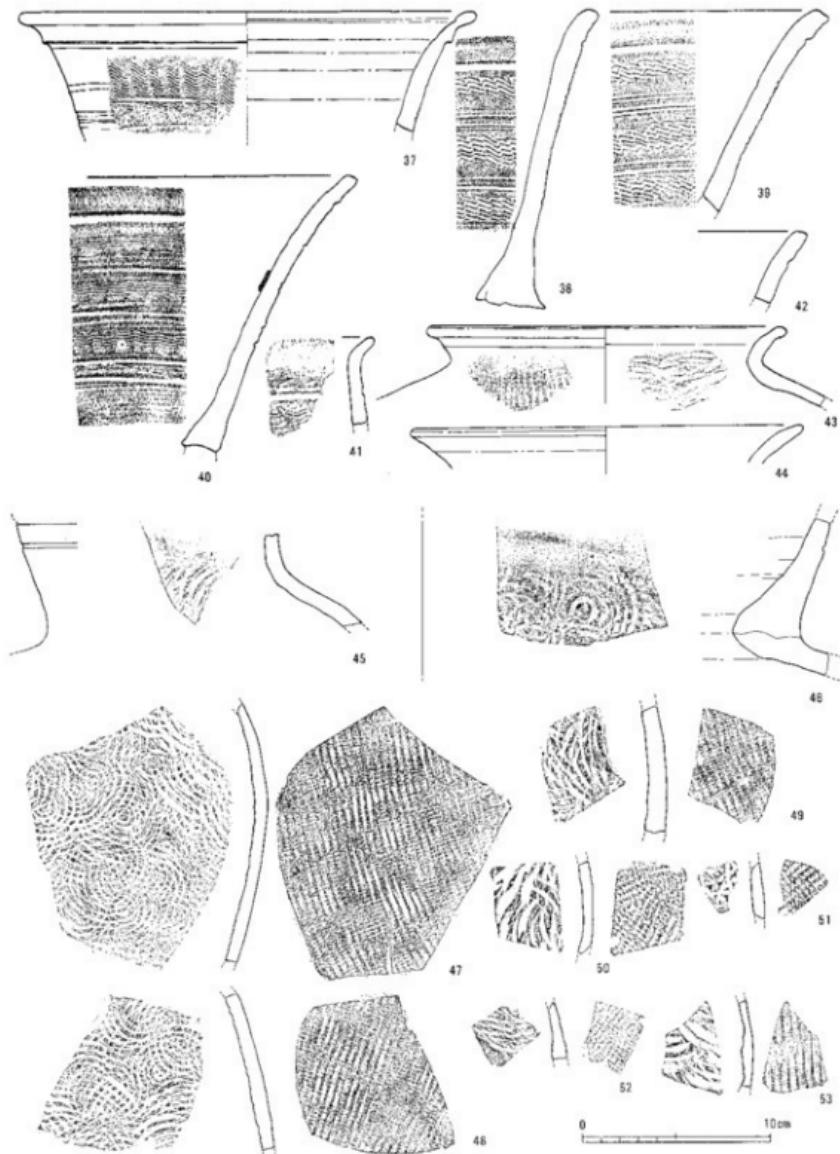


第27図 策應器実測図(2)



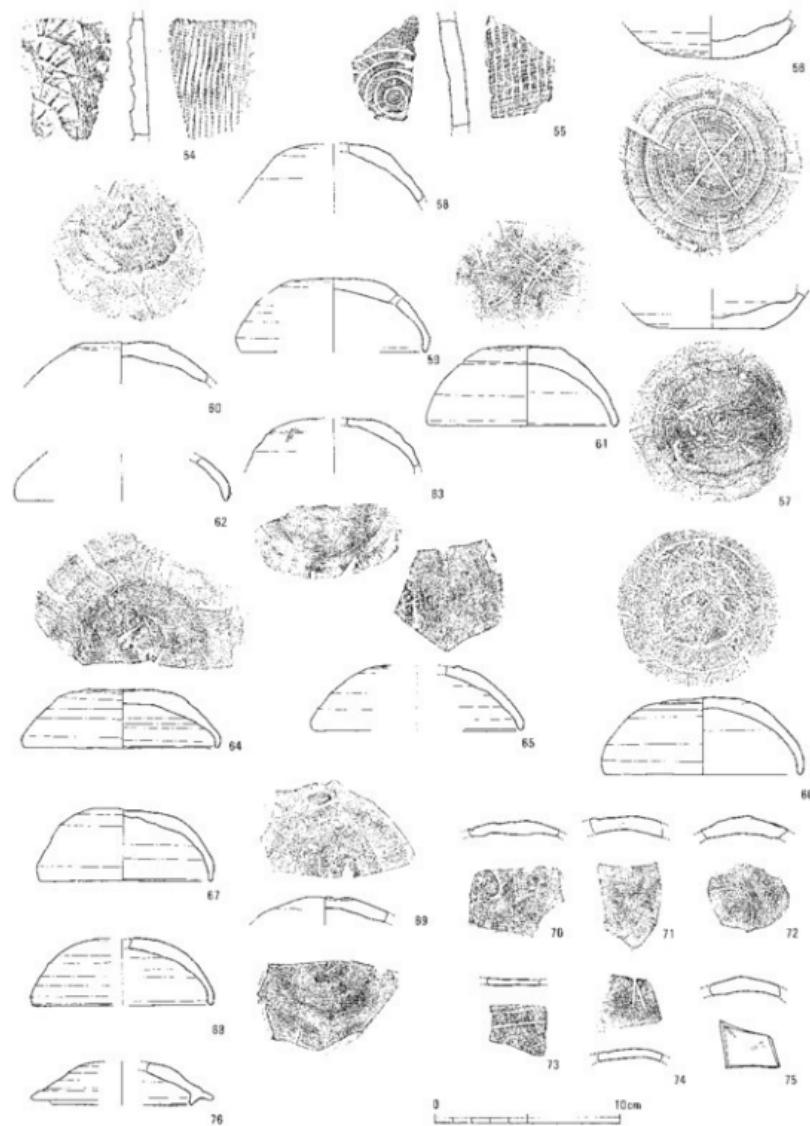
第28図 須恵器実測図(8)

才ノ峰遺跡



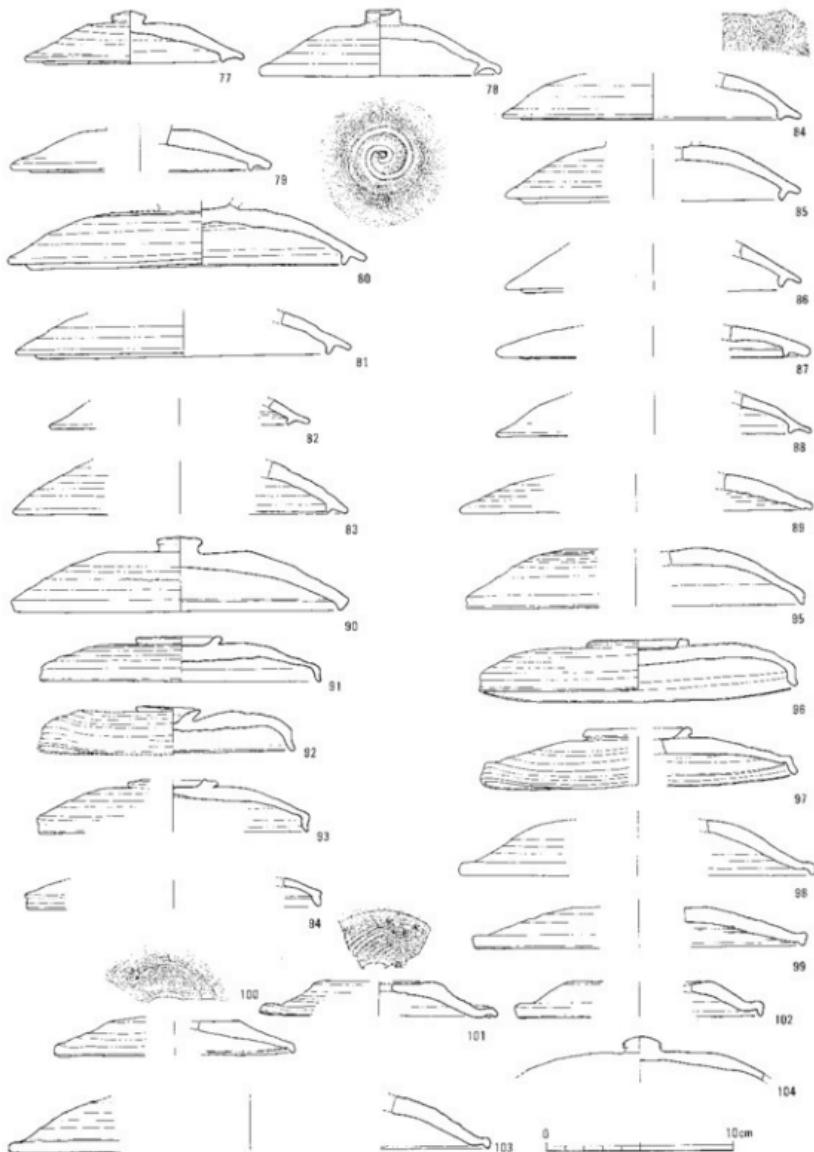
第29図 須恵器実測図(4)

才ノ峰遺跡



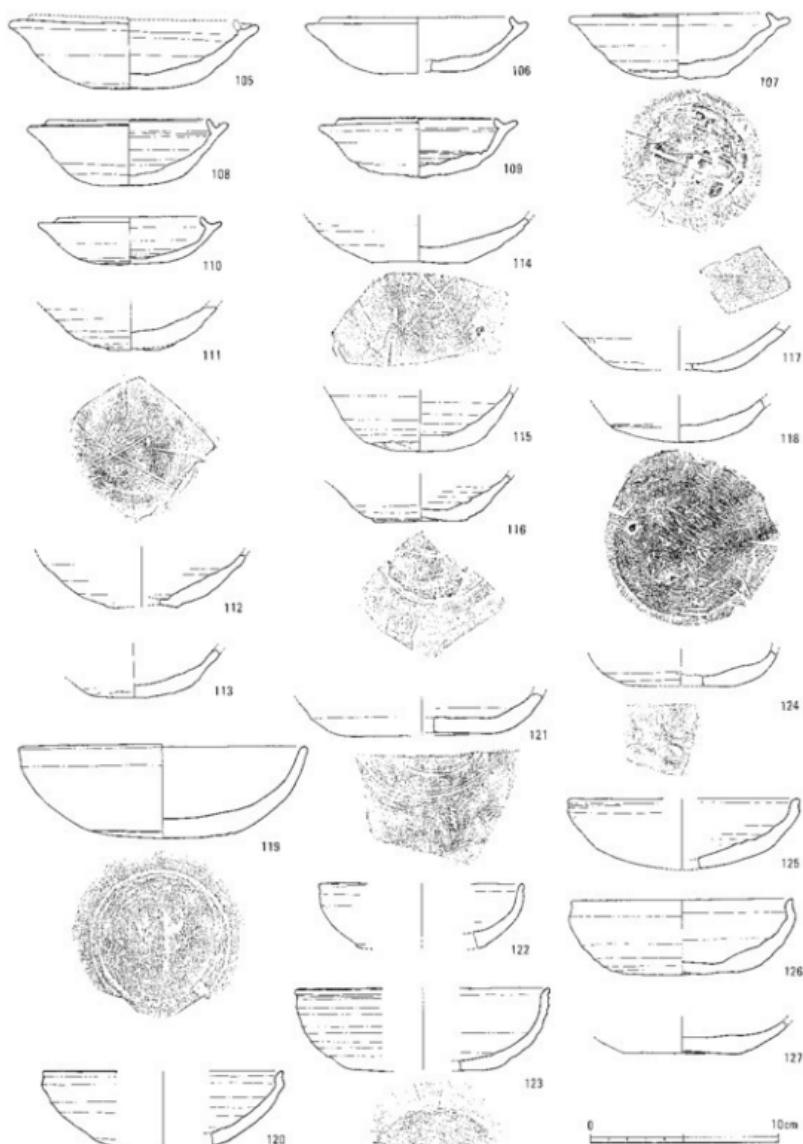
第30図 須恵器実測図(3)

才ノ崎遺跡



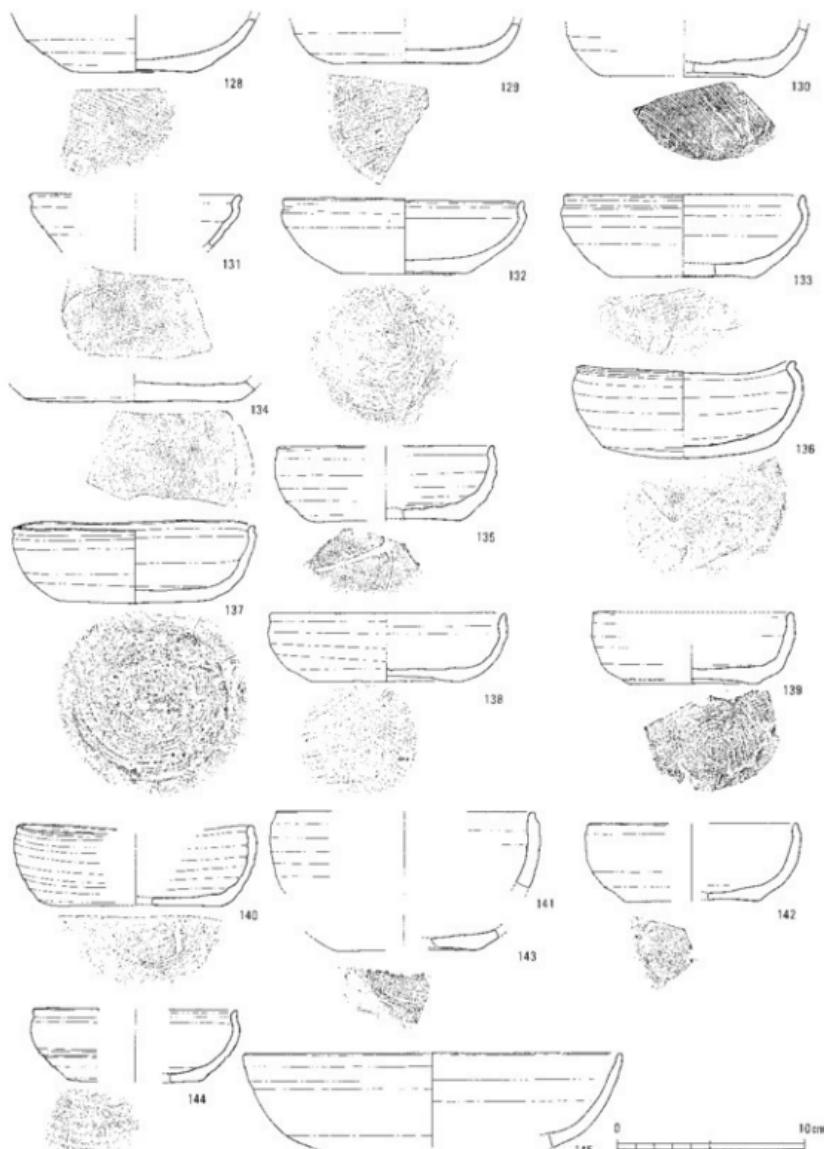
第31図 須恵器実測図(6)

才ノ岬遺跡



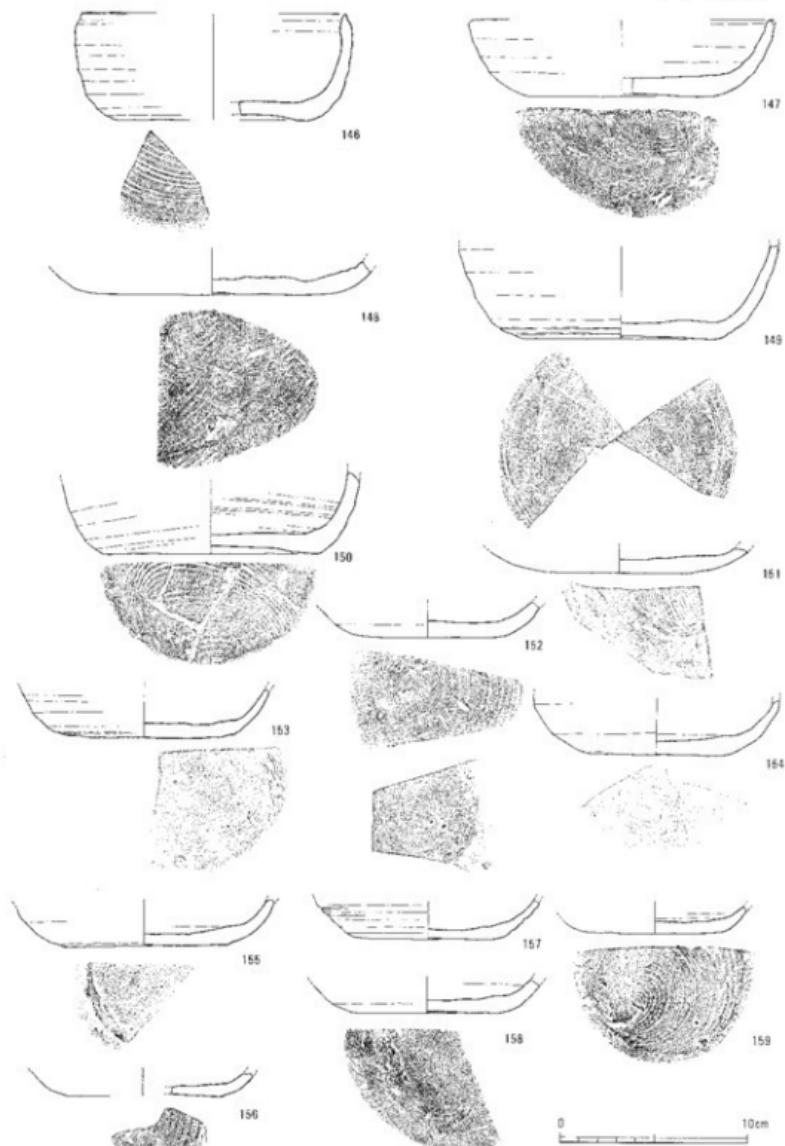
第32図 須恵器実測図(↑)

才ノ峰遺跡



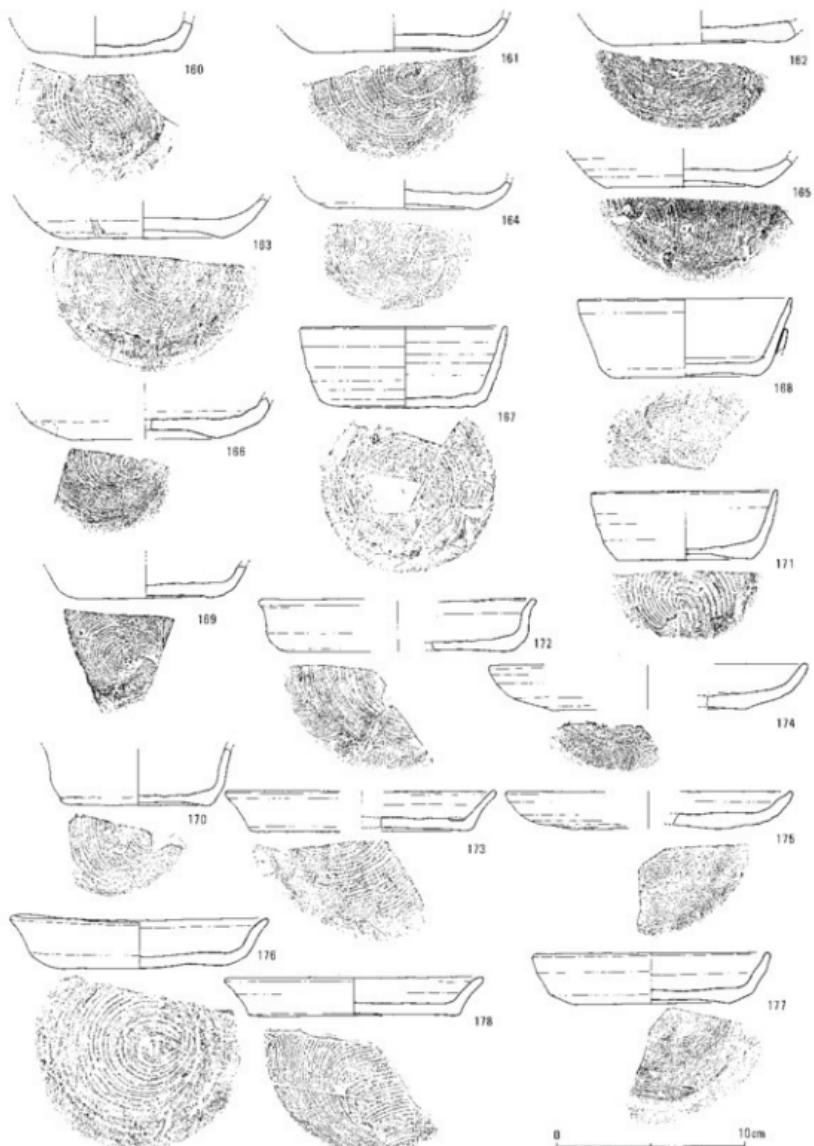
第33図 須恵器 灰測図(8)

才ノ跡遺跡



第34図 須恵器実測図(9)

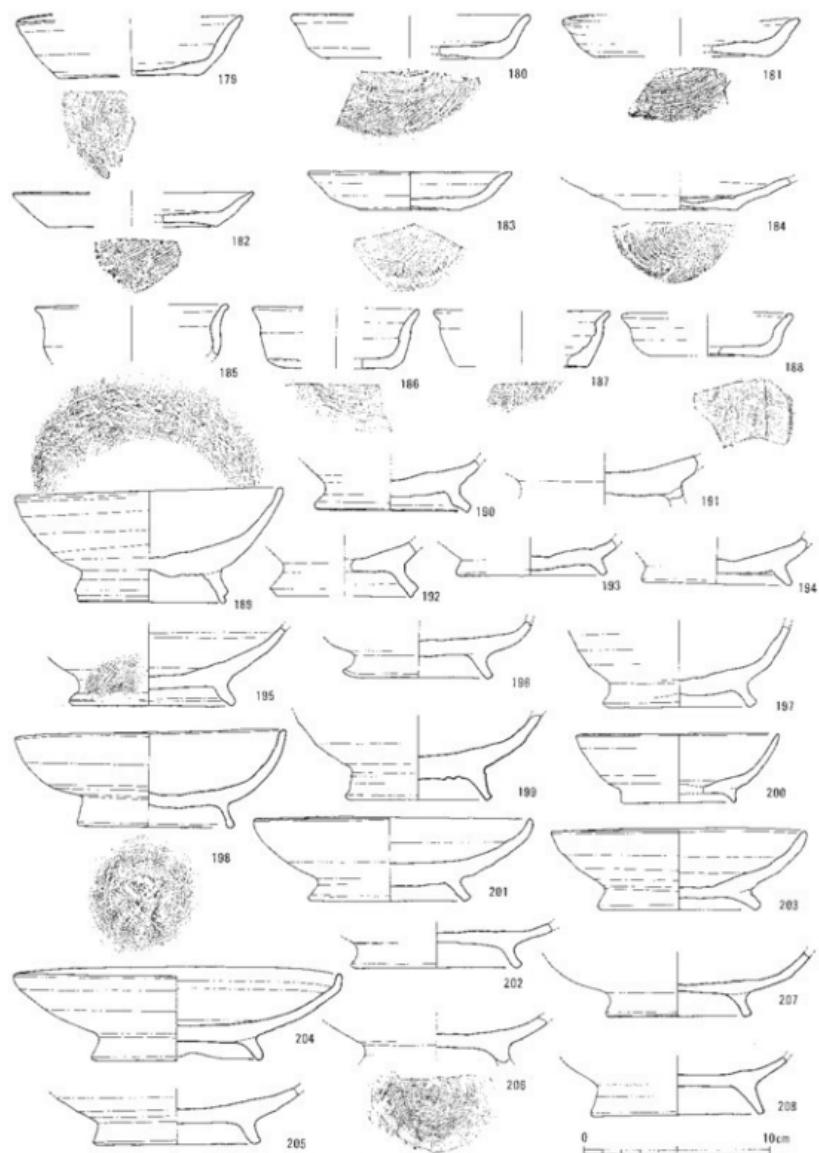
才ノ峰遺跡



第35図 須恵器実測図

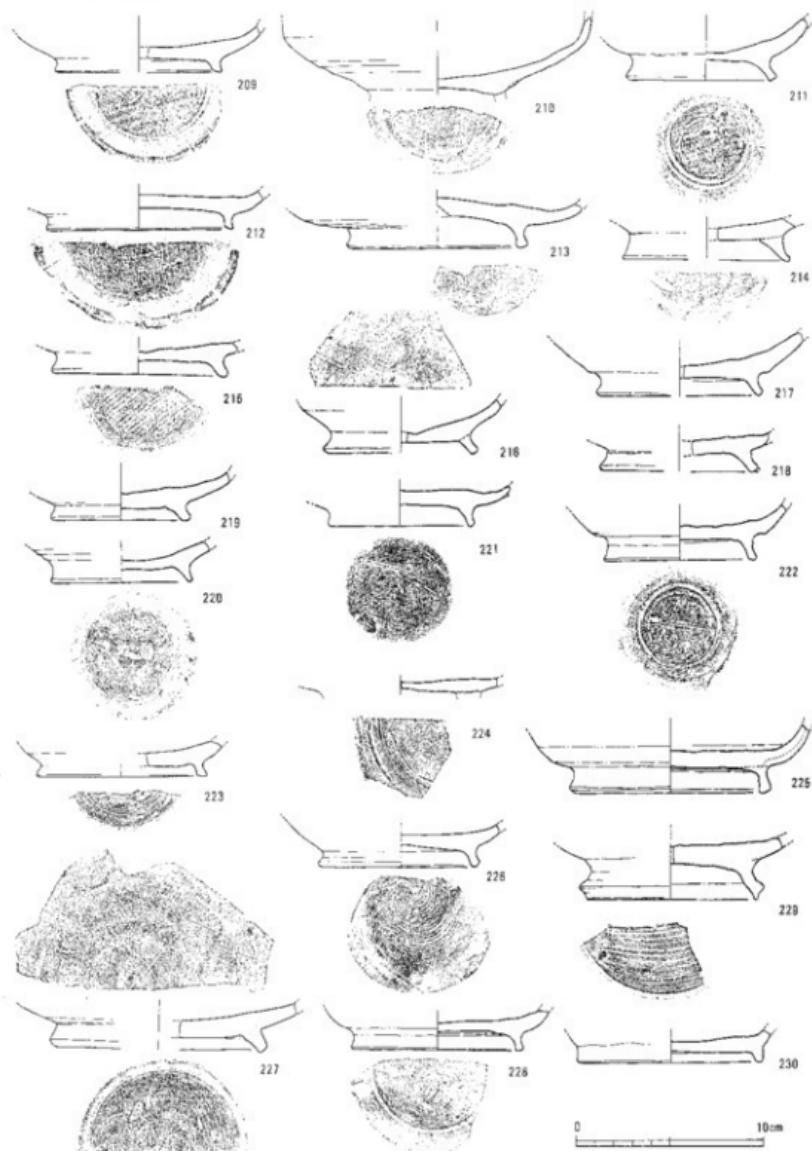
0 10cm

才ノ崎遺跡



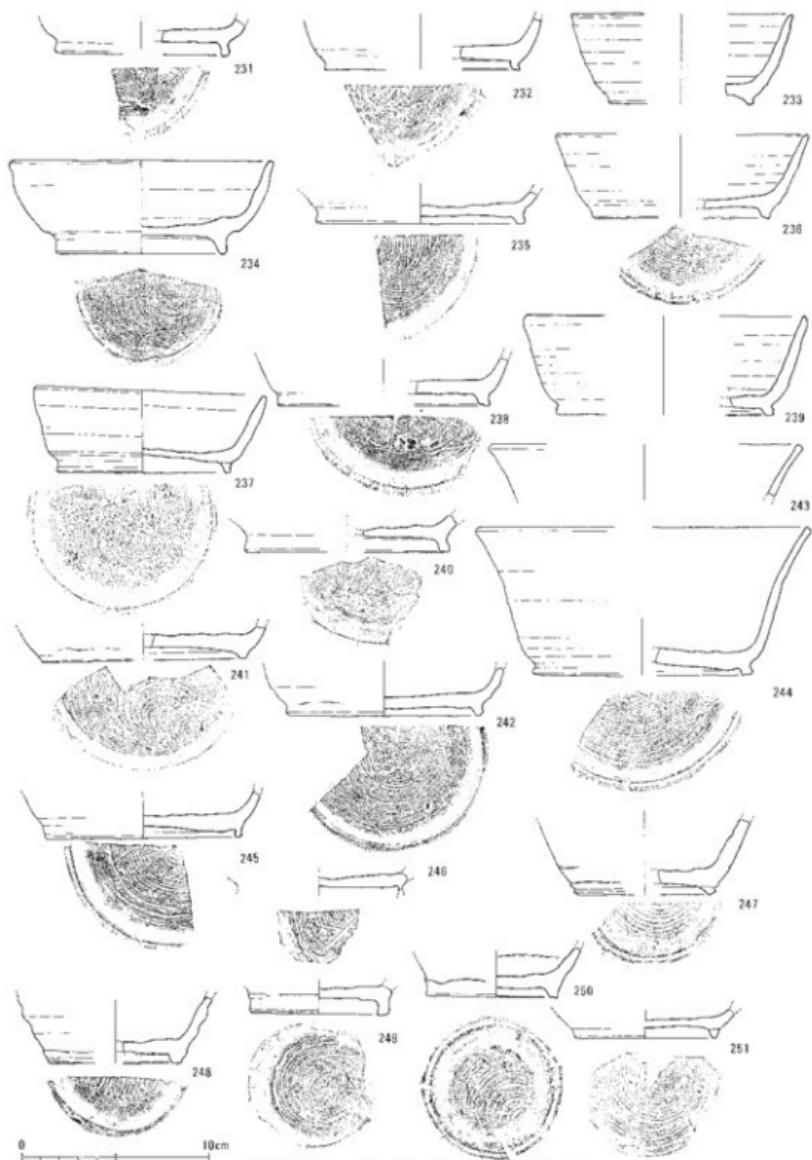
第36図 須恵器実測図(II)

才ノ岬遺跡



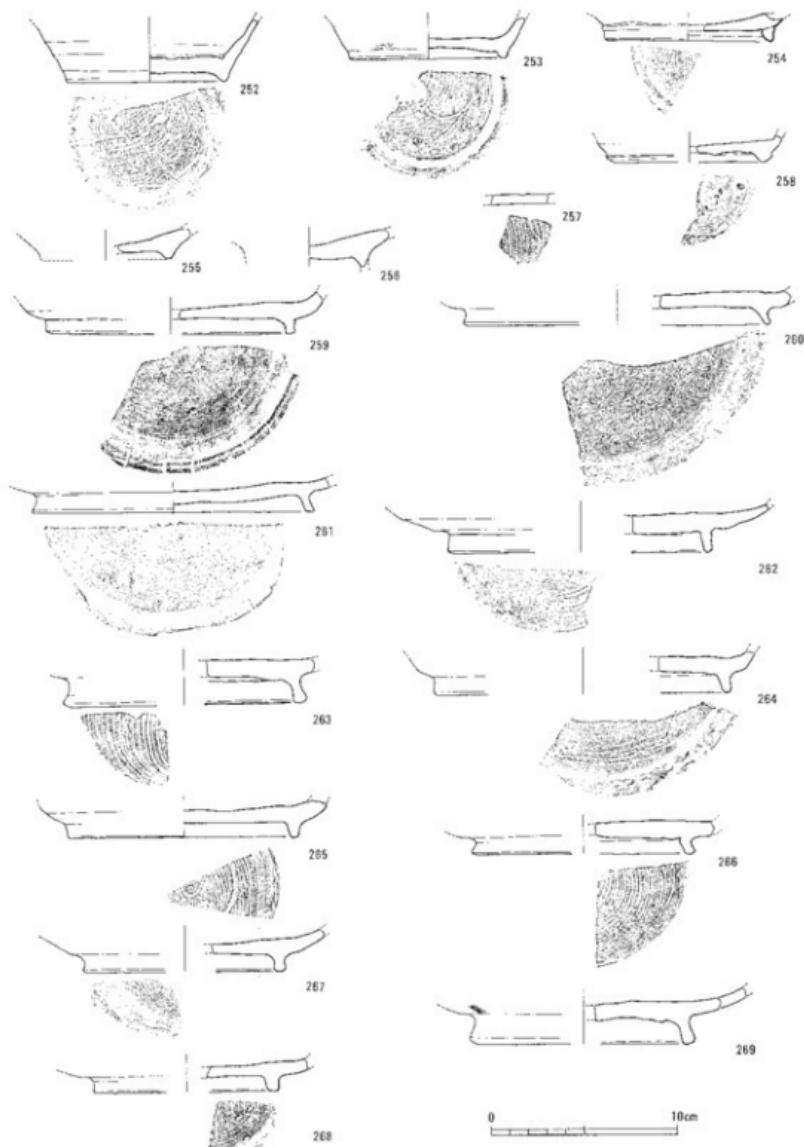
第37図 須恵器実測図 (15)

才ノ跡遺跡

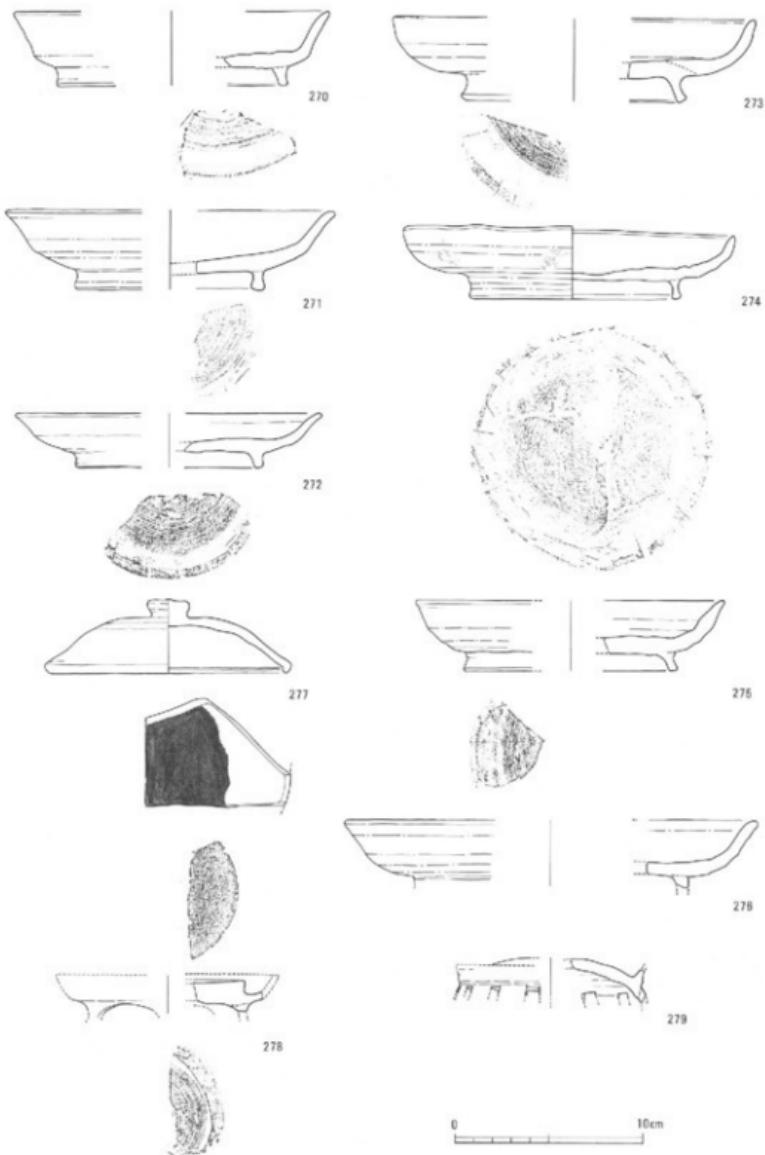


第38圖 須恵器実測図(1)

才ノ峰遺跡

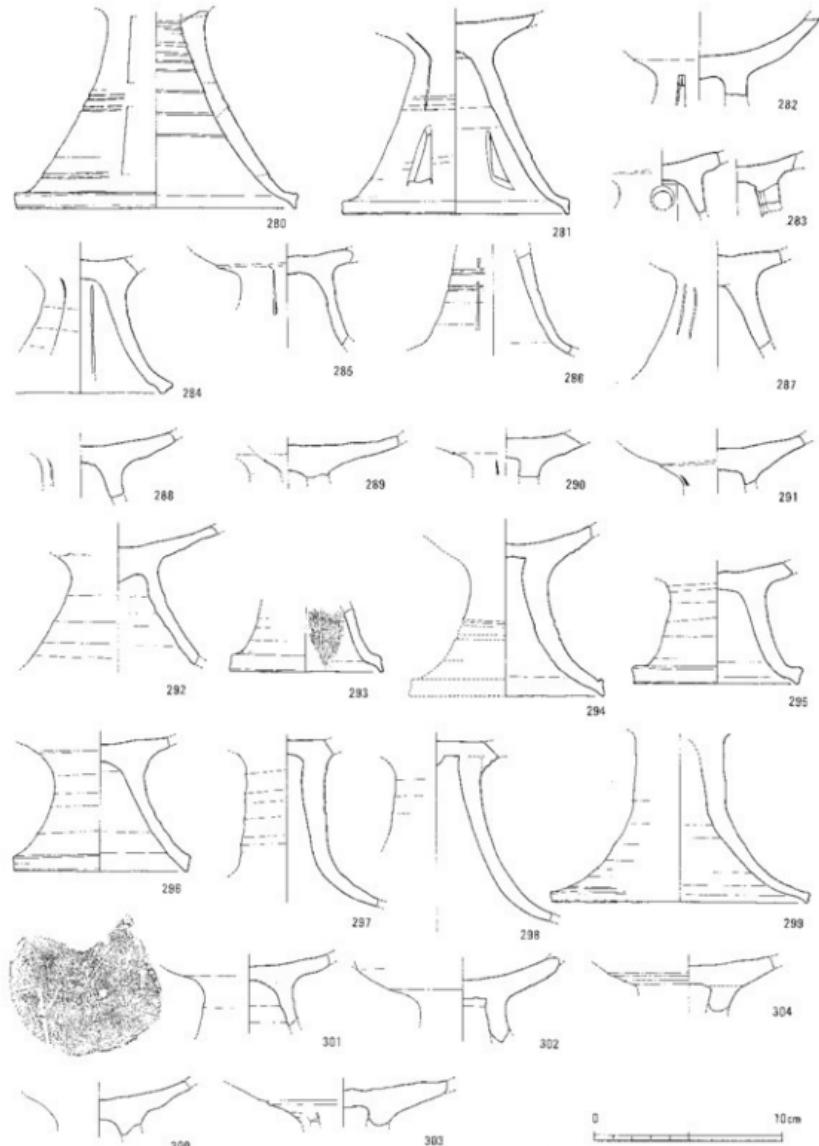


第39図 須恵器実測図(1)

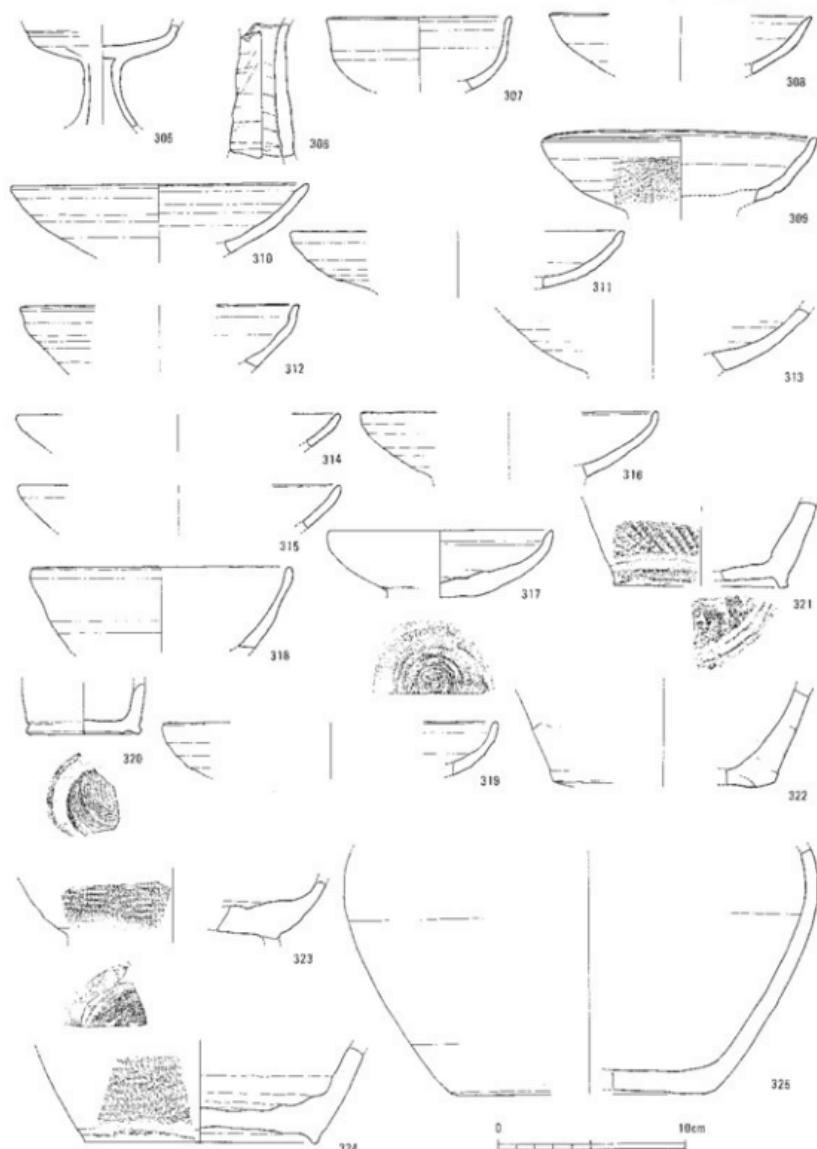


第40圖 須恵器実測図(19)

才ノ井遺跡



第41図 猿 恵 帯 実 測 図 06



第42図 須恵器実測図(1)

## 土師器

土師器、甕（第43図326～351、44図352～360、45図368～371）は、「く」の字形の口縁で肩があり張らず、頸部から胴部にかけて直線的に開く。口縁内外面にヨコナデを施し、胴部外面に粗い刷毛目、胴部内面にはヘラ削りを施している。口縁部の破片が多いが、比較的残りの良いものでは、352～354、370がある。352～354は、頸部から胴部にかけ直線的に開くものである。復元した口径は、352が28.9cm、353が29.2cm、354が24.0cmである。370は、口縁がやや開き、頸部から胴部にかけて丸味を持っている。復元した口径は、27.3cmである。第44図358～360は、壺の破片である。358は、口縁が短くやや開き気味で、口径11.6cm測る。359も口縁がやや開き、口径9.7cmを測る。360は、体部に丸味がある。335は、口縁が外反し、長く伸びており、頸部から直線的に体部に至る。384、385は、瓶の底部と思われる。385は、底部近くに、径0.6mmの孔が穿ってある。第44図362～367、第45図372～382は、甕もしくは瓶の把手部分である。形態、大きさにバラエティがあり、どの形態の甕、瓶に付くものかは不明である。366は把手が体部に付いており、上方へ湾曲し、断面は附円形を呈している。外面には指頭圧痕が残っている。

甕（第45図386、46図388～391）は、破片で全形を復元することは不可能である。387は、焚口の上部から側部の軒庇の部分と、口径部の破片である。軒庇は、幅4.5cmを測る。388は、焚口の上部から側部にかけての破片である。庇は、幅5.5cmを測り、指頭圧痕が残っている。390は、焚口下部の破片である。指頭によるナデの痕が残っている。386も脚端部で、外面に縱方向の刷毛目を施している。391も脚端部の破片で、直径22.5cmである。外面に縱方向の刷毛目を施し、内面には、粘土滑を積んだ痕跡が残る。色調は黄褐色で、砂粒を多く混入している。

## 土製支脚（第46図392～397、47図398～407、48図408～413）

土製支脚は、比較的大形のものと小形のものに分けられる。三又突起の2本は大きく、その反対方向の突起1本は小形で短いものである。脚部は、中実で端部が大きく開き、底部は上げ底となっている。突起の上面、側面は、ヘラ削りの後をナデしており、表面は整っている。下面は、指頭圧痕が残っており、かなり凹凸がみられる。脚部外面は、縱方向のヘラ削りの後をナデしている。胎土中には、砂粒が多く混入している。第47図401は、唯一の完形で、高さ17.6cm、脚径7.0cm、脚端径13.0cmである。脚部は、やや傾斜して立ち上がっている。底部外面は、ヘラ削りにより上げ底状になっている。第48図411は、突起部分のみの破片であるが極めて大形のものである。突起部分の径でも5.0cmを測る。408～410も大形の部類に含まれるもので、突起は斜上方にのびている。403、405、407、412は小形の部類に含まれるものである。

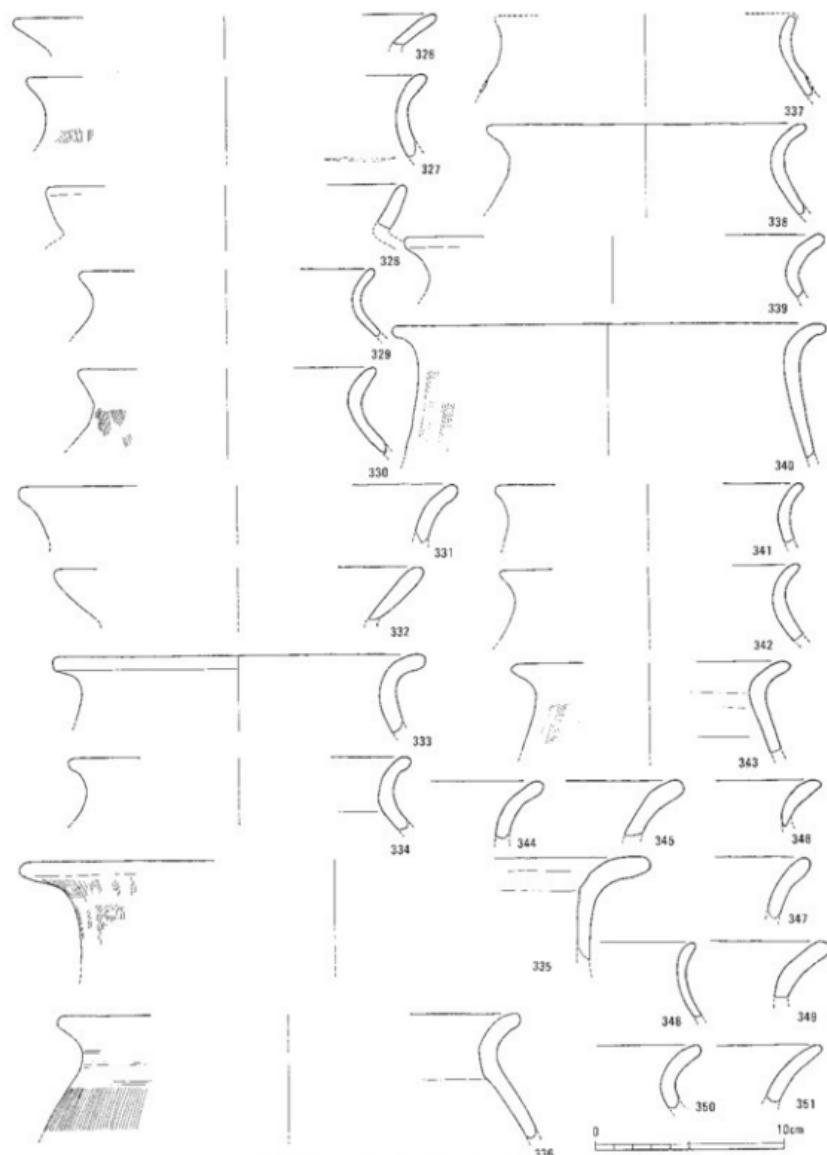
上器の時期は、III区において須恵器と併出しているが、須恵器も7世紀～8世紀末の時期にかかるものが混在しており、明確に時期は判断し難い。土師器甕の形態からも具体的な時期は判断できず、7世紀末～8世紀後半という幅が考えられる。土師器、甕、土製支脚の共伴する例としては、<sup>(1)</sup>鳥取県米子市青木遺跡、<sup>(2)</sup>広島県三次市松ヶ迫遺跡等がある。

(広江耕史)

註1 鳥取県教育委員会『青木遺跡発掘調査報告書』I・II・III、(昭和51、52、53年)

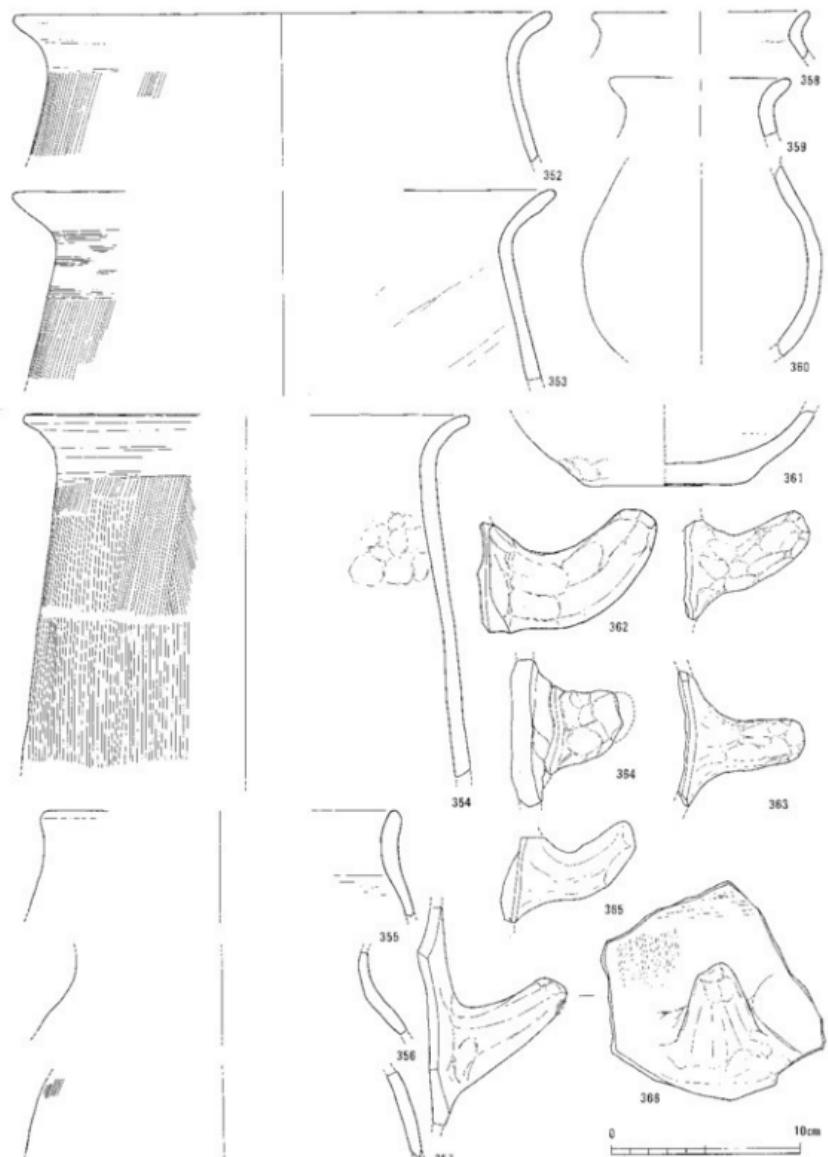
註2 広島県教育委員会『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告書』(昭和56年)

才ノ峰遺跡



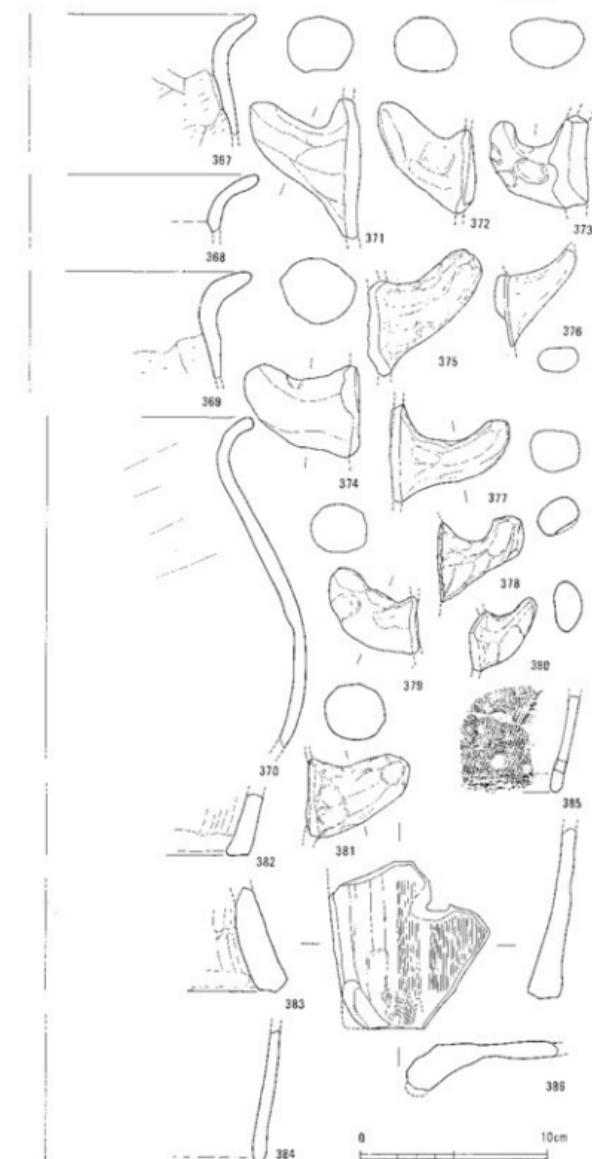
第43図 土師器実測図(1)

才ノ峰遺跡



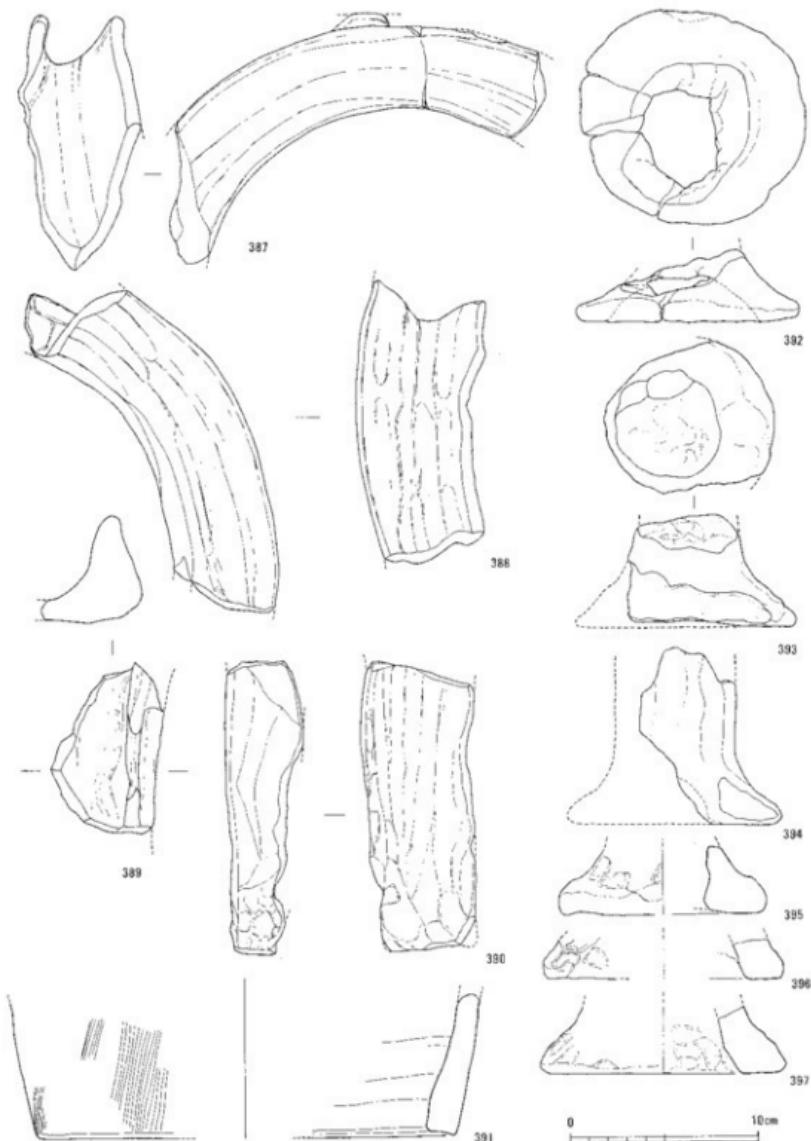
第44図 土師器実測図(2)

才ノ郎遺跡

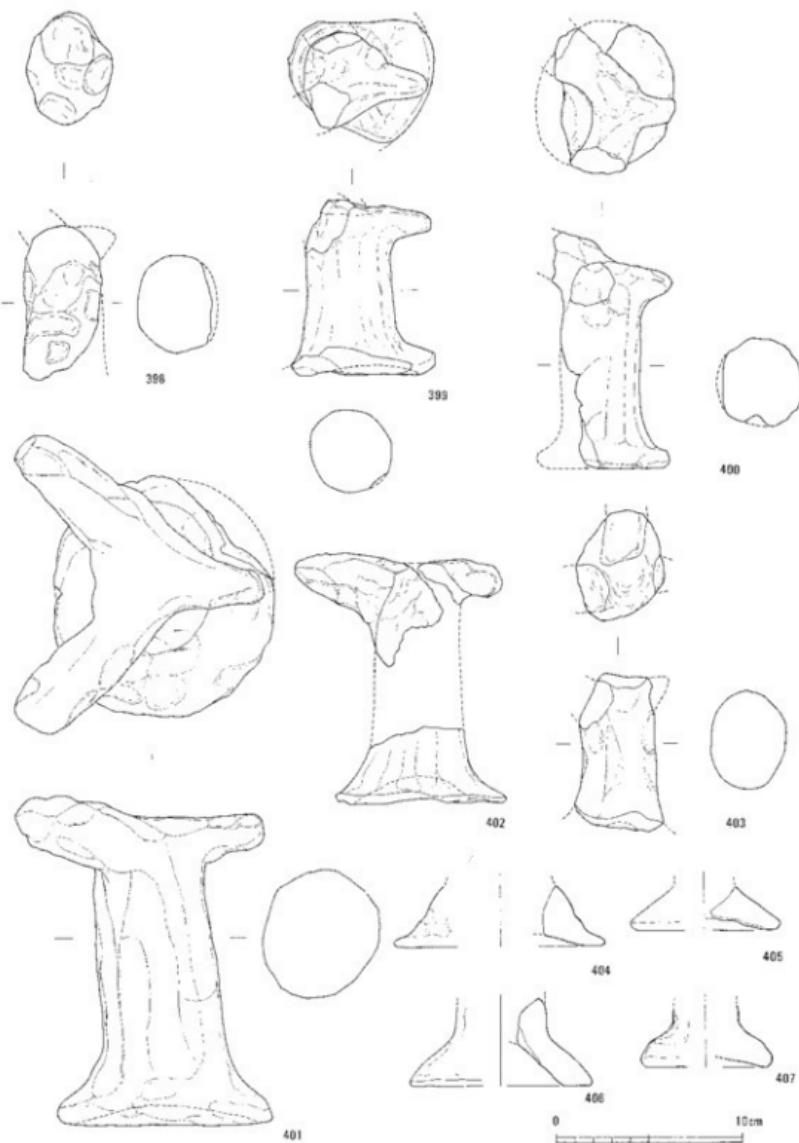


第45図 土師器実測図(3)

才ノ岬遺跡

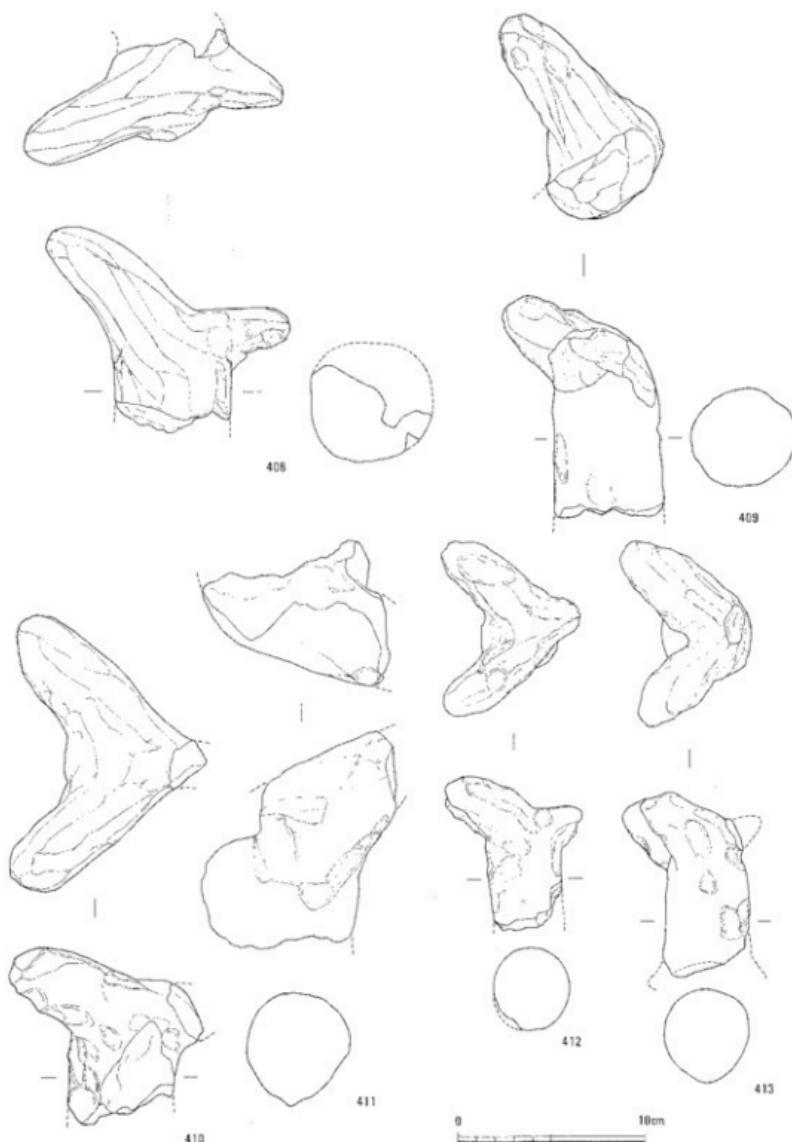


第46図 土師器実測図(4)



第47図 土師器実測図(5)

才ノ峰遺跡



第48図 土師器実測図(6)

## 瓦塊（第49図～56図）

軒丸瓦は2点ある（第49図414、415）。いずれも、瓦当部の小破片で丸瓦部は失っている。第49図414は中房を囲む花弁、その他側にめぐる唐草文、外区の珠文の一部が残る。第49図415は外区の珠文と周縁のみである。これらは、出雲國分寺出土軒丸瓦のうち創建期の一群と同範のものである。414は須恵質、415は二次焼成を受け胎土は軟弱になっている。

軒平瓦は6点ある（第49図416、417、418、419、420、421）。いずれも小破片であるが軒丸瓦とともに出雲國分寺創建期の一群と同範関係にあるものである。416、417、418、420は須恵質419、420は淡黄褐色を呈し、土師質に近い焼成である。420以外は、瓦当面に近い凸面、凹面ともヘラ削り、またはナデによる調整を施す。420のみは腹部に平行叩が残り未調整である。頸部の形は、深さ1cm前後の浅いものに417、418があり、418は小形である。421、416はほとんど頸がなく直線的である。419は頸を意識した曲線頸であろう。420は瓦当面に1mm以下の白色砂粒が表面にみられ、文様も薄くはっきりしない部分が多く、離れ砂使用の可能性がある。瓦当文様の中で注意されるのは417、421である。これらは同範関係にあるもので、唐草文の左下隅に範の傷がみられる。前島己基氏の出雲國分寺出土軒平瓦分類（前島己基「古代寺院跡」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』昭和50年3月）では第二類に相当するであろうが、氏はこの範の傷を「この種の軒平瓦は共通して瓦当文様の左第二単位唐草文の左下隅に支葉状の突線がみられる」として文様と考えられているようである。前島己基氏が資料として使用された出雲國分寺出土軒丸瓦を実見しても範の傷であることは明らかである。

道具瓦は1点ある（第49図422）。14.0×8.0cm、厚さ2.0cmの隅切瓦である。凹面は比較的細かな布目痕、凸面は繩目叩き痕で、両面とも未調整である。

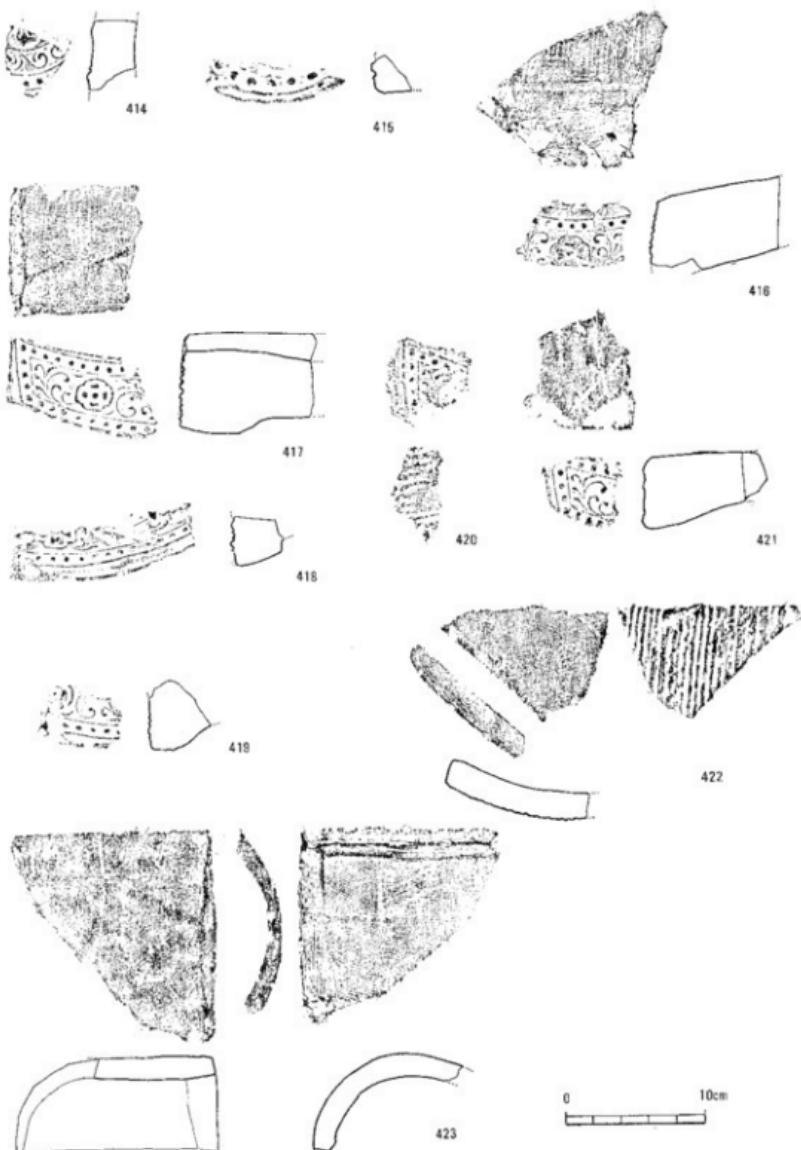
丸瓦は行基式（（第49図423、第50図426、427、428、429、430）と、玉締式（第424、425）がある。第50図427、第51図431、432、433は破片の為特徴が不明なものである。いずれも、凹面は布目痕が残り未調整で、第49図423、425、426、430のように糸切痕を残すものもある。凸面は皆、きれいにナデ調整が施され、叩き痕が残るものはない。側面はヘラ削りによる、二面、または三面取り化粧が施される。厚さにおいて、薄手のもの（423、424～429）と、厚手のもの（431、432、340）がある。

平瓦は凸面に残る叩き痕から4種に大別を試みた。繩目叩き痕を残すもの（第51図434～437、第52図438～443、第53図444～450、第54図451、452）、格子叩き痕のもの（第54図452、453、第55図458、460、461）、斜格子叩き痕のもの（第54図455、第55図456、457、459、第56図462、464、465）、平行叩き痕（第54図454）を残すものである。いずれも両面とも未調整で糸切痕を残すものが多い。447、449、452、458の4点には凸面に叩き痕とともに糸切痕も部分的に観察される。一枚作り、または桶巻き作りかについては、明確にその特徴を示すものは、図示したものの中にはなかった。

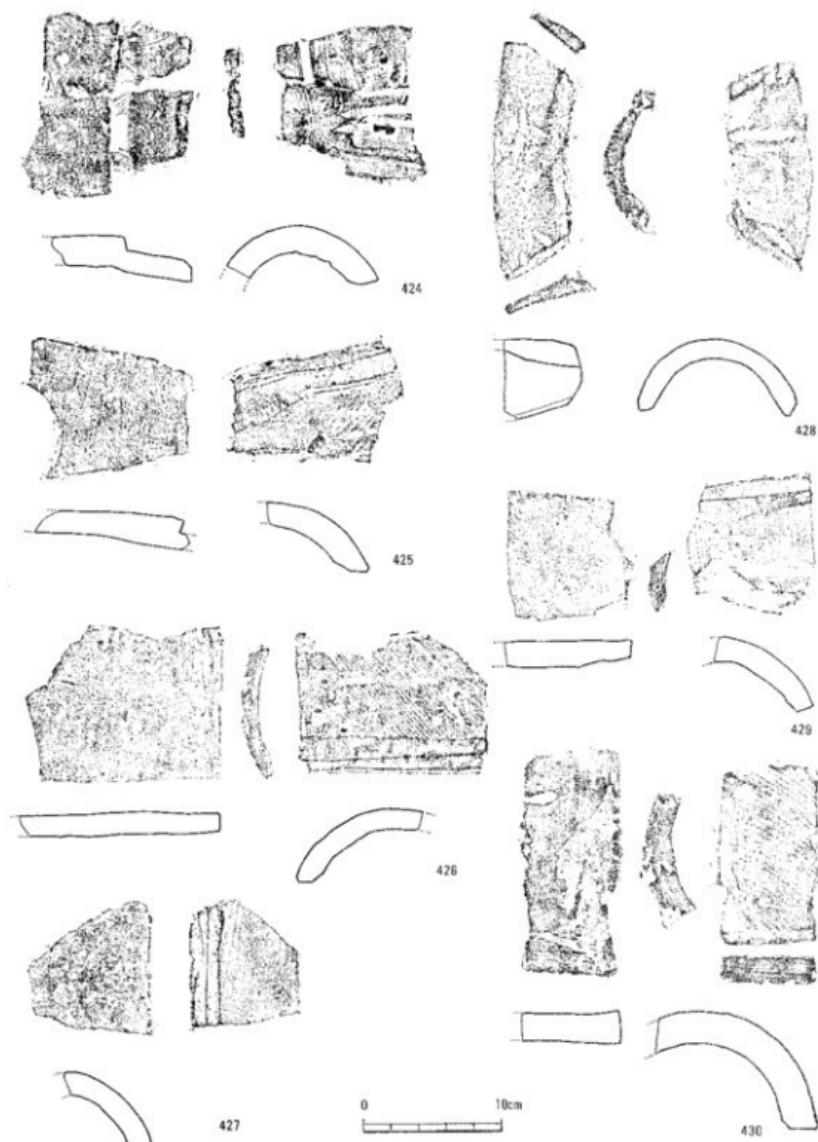
第56図466は現存16.0×13.0cmの壇の破片である。厚さは不明、文様はみられず、ヘラ削りによる調整が施される。

（内田律雄）

才ノ岬遺跡

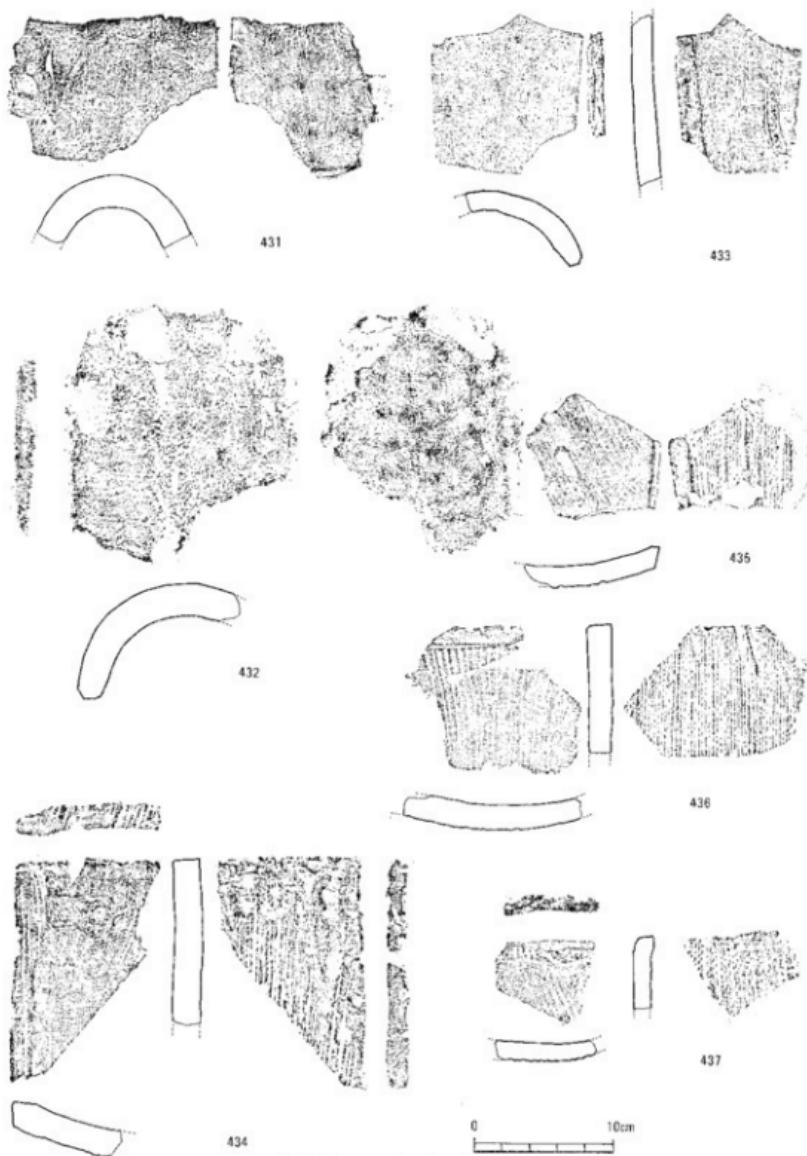


第49図 瓦実測図(1)

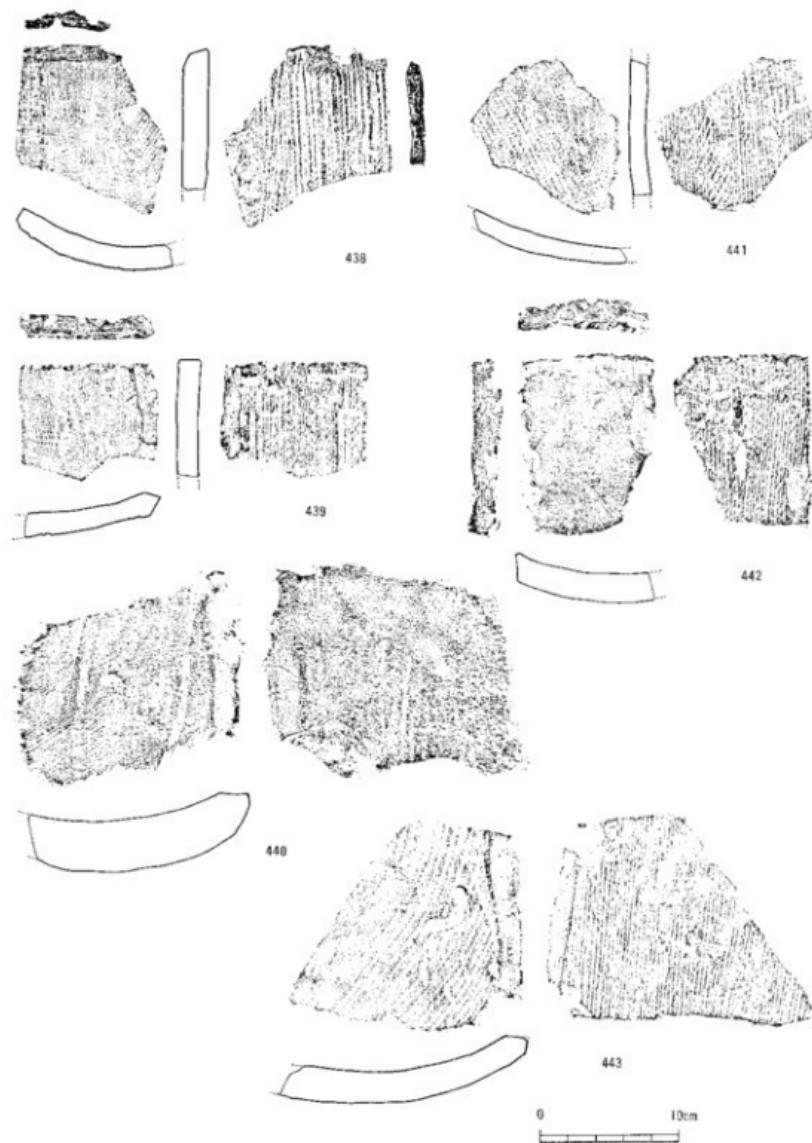


第 60 圖 瓦 実 洋 図 (2)

才ノ跡遺跡

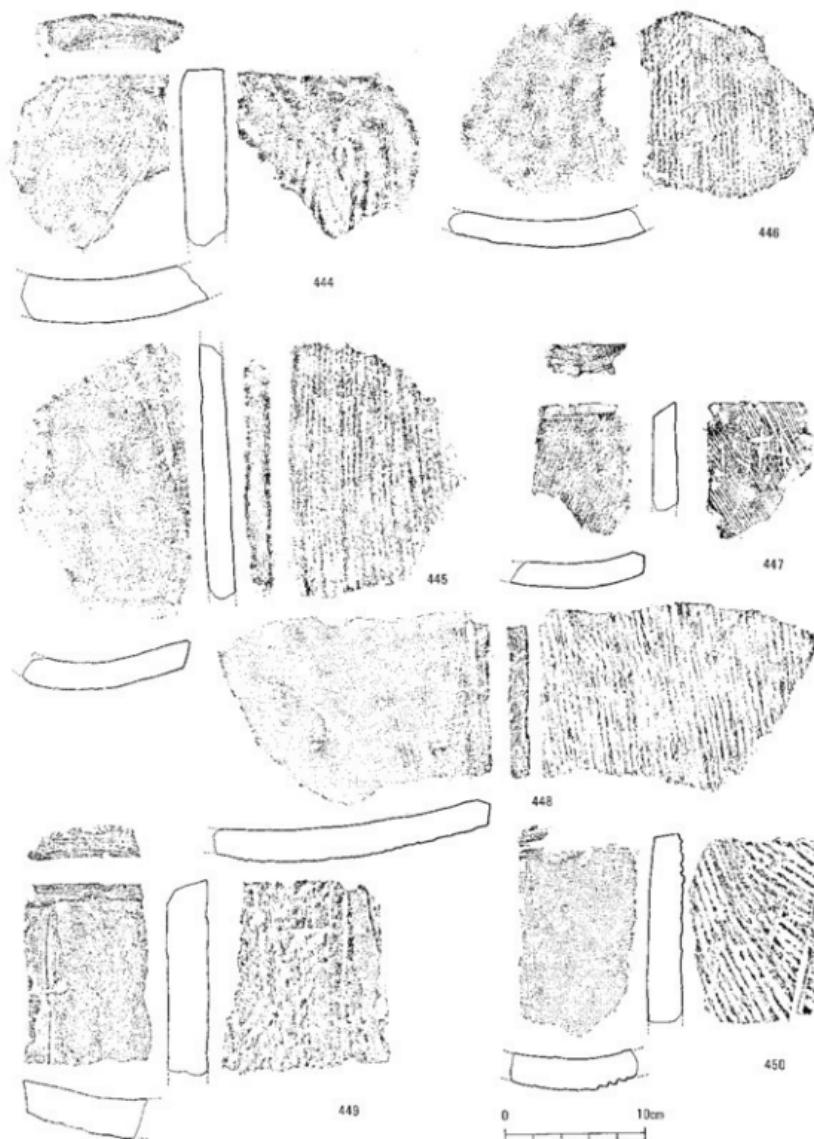


第51図 瓦実測図(8)

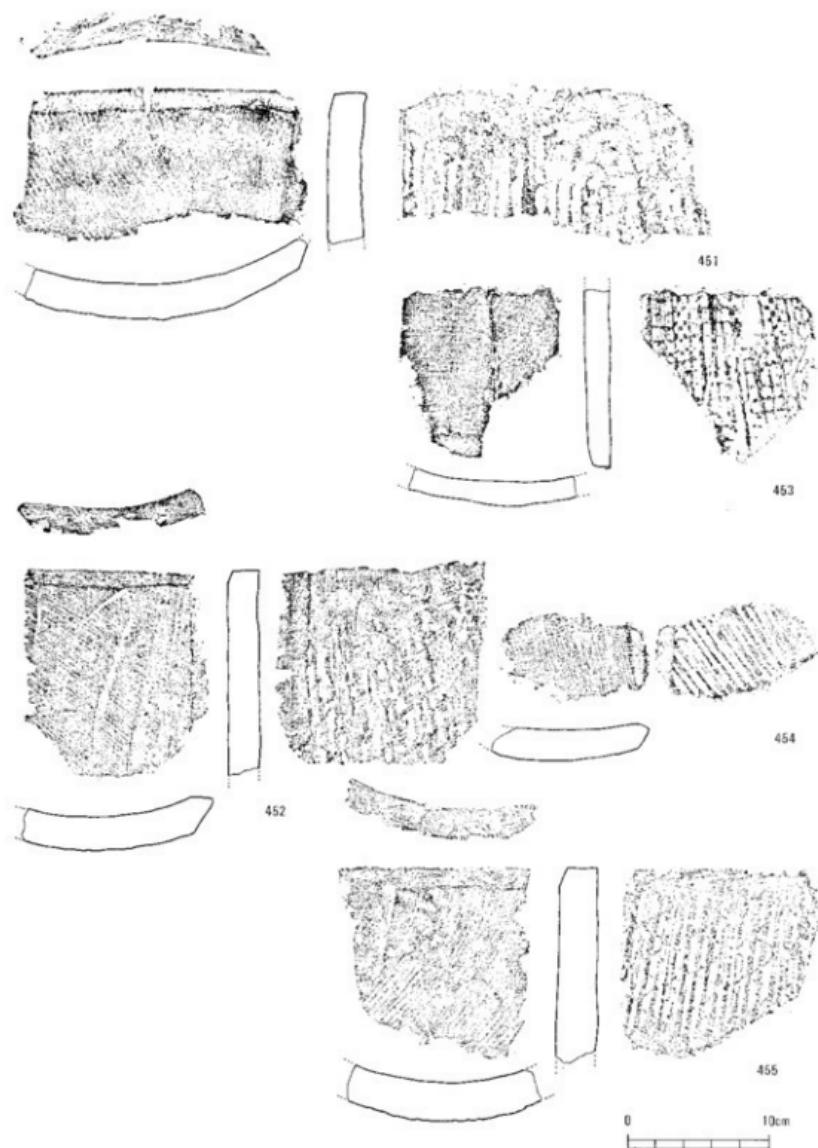


第52図 瓦実測図(4)

才ノ跡遺跡

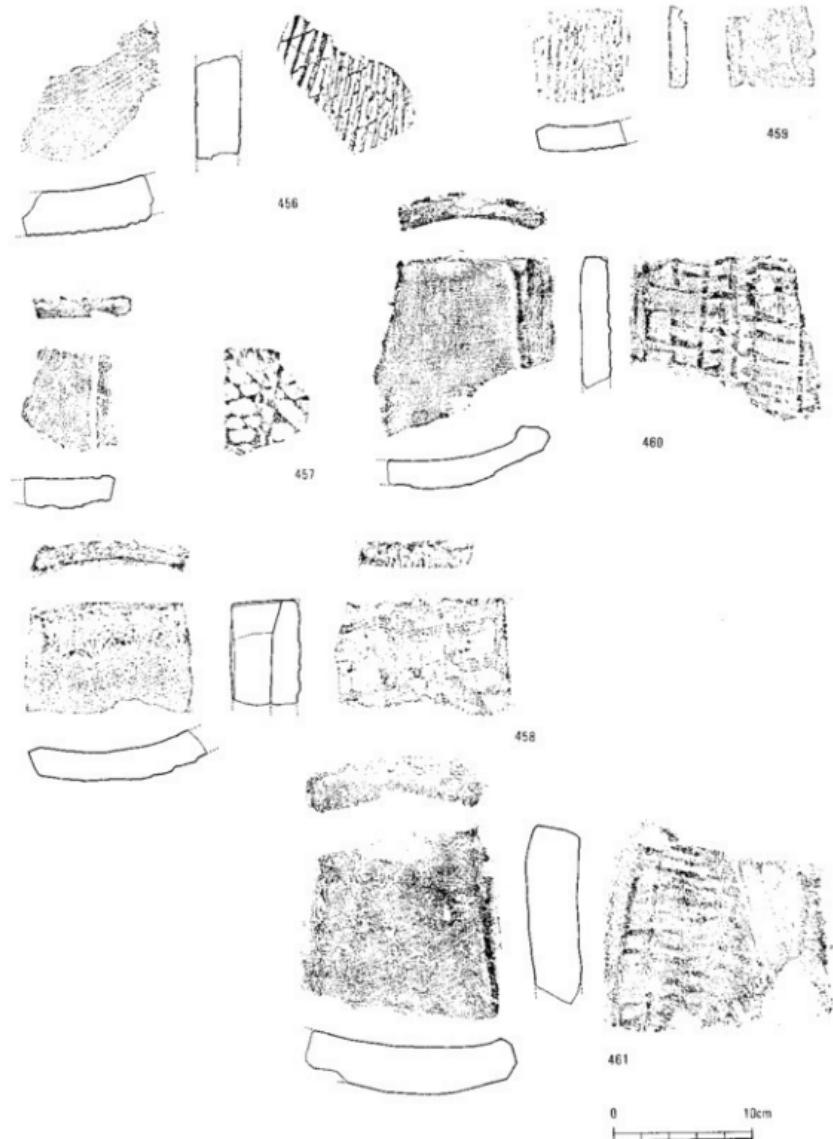


第53図 瓦実測図(5)



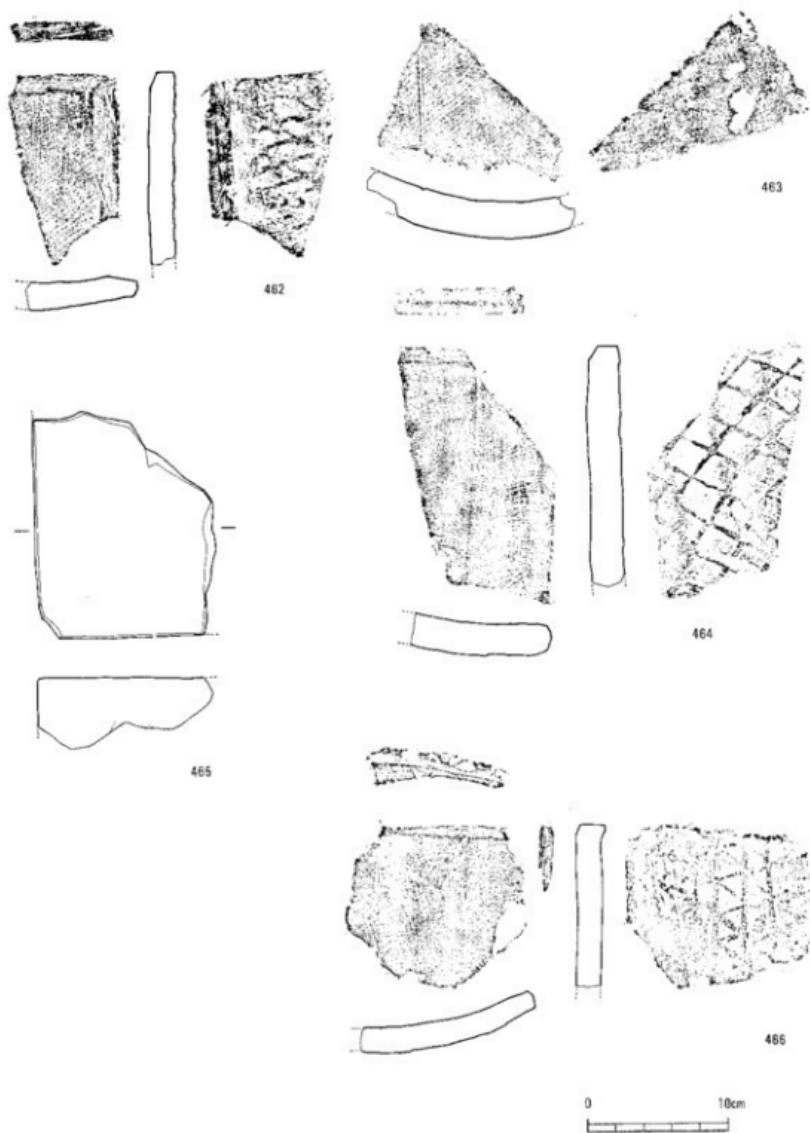
第54図 瓦実測図(6)

才ノ峰遺跡



第55図 瓦実測図(?)

才ノ跡遺跡



第 56 圖 瓦 実 測 図 (8)

## 才ノ峰遺跡

### 祭祀遺物（第57図、58図）

土馬は、脚も1個体に数えると総数5個体出土している。全て須恵質である。第57図466は、首・四肢が破損しており、前肢を1本欠損している。復元した高さは12cm、長さ18.6cmである。耳は欠けており、口は笠で削り表現し、尻尾は垂れ下るように貼り付けている。目は竹管の刺突により表現し、同様に手網、尻蓋も表現している。背中には、粘土を貼り付けた痕跡が残っており元は紐を付けていたものと思われる。胴部断面は、隋円形である。色調は灰白色でやや歯い焼きである。468は、耳の先端を欠くもので、高さ6.6cm、体長12.2cmである。成形時には、足・首・尻尾を貼り付けており、頭部に立髪をつまみ出すように表現し、全体に指頭痕がみられる。目、鼻はヘラ状のもので刺突し、口はヘラで切り込みを入れている。馬具を表現しない裸馬である。胴部断面は隋円形である。焼成は良く、色調は暗灰色である。467は、頭部のみの破片である。極めて小形のもので目、鼻は細い竹管の刺突で表現し、耳は欠損している。現存高3.0cmを測る。469～473は、土馬の足の破片でいずれも須恵質で前後肢の判断はできない。469は、長く、内湾し、断面は円形である。現存長7.1cm、幅2.4cmを測る。470は、端部が平坦で湾曲している。現存長3.8cm、巾2.1cmを測る。471と472は、先端に向け細くなり、端部は丸い。473は、端部が平坦で断面は五角形に削られている。現存長2.2cm、幅1.8cmである。474は、土玉で径3.3cmである。球形の一部に直線的に沈線が入っており、紐を欠くものの鉢の模造品の可能性がある。486と487は土鉢である。486は、鋲から体部上半の破片で扁平な鉢に孔を穿っている。体部内面には、ナデた痕跡が残り、中空にしていたことがうかがえる。現存高3.1cm、鉢の高さ1.7cmを測る。487は、完形の土鉢で、高さ7.1cm、幅4.1cm、鉢の高さ3.4cm、厚さ1.7cm、孔の径0.3cmである。体部側面に7個、下部に1個の計8個の孔を穿っている。全体に指頭痕が残っている。475は、土玉で断面六角形で端部は丸くナデしており、穿孔等は施していない。長さ2.8cm、幅2.3cmである。476は、長さ4.0cm、幅1.8cmである。477～480は、土製支脚のミニチュアと思われる。突起部分を欠損しており全体は不明である。480は、特に小形のもので現存長3.1cmあるが、脚台部分、突起の根元が残っている。それぞれ、指頭圧痕が残る。481と482は、鏡の模造品と思われる。481は、鉢の部分がかなり高くなっている。径は5.5cm、高さ4.0cmである。482は大形品で復元径は9.0cm、厚さ1.5cmで鉢の部分を欠き、全体の1/4しか残っていない。483は、石製劫錐車で、径5.2cm、厚さ2.8cmである。上面を除く外面に鋸齒文を施している。石に細く浅い線を刻んでおり、下面はかなり摩滅し一部文様が消えている。488、485は、水晶玉の未製品と思われる。径1.5cm～1.7cmあり、一部に自然面を残しており、表面に凹凸があるため加工の途中と思われる。488は、石器の未製品と思われる。厚さは1.4cmあり、外面には削りの擦痕が残っている。489は、石鉢である。石を加工し鉢の形を模倣したもので、上部に紐を通すように鉢を作っている。外面には、縦に細かく研いた痕が残っている。高さ4.1cm、径3.2cm～3.3cm、鉢の高さ0.8cmである。

### 土玉、土鉢（第61図～65図）

土玉、土鉢は、形態から3類に分けている。球形をA類、円筒形をB類、砲弾形をC類に分類した。A類とした球状のものは、径は3～4cmで重量13.7g～62.4gのものである。シリコン樹脂に

より孔内の観察では、形を整えてから、2方向より棒状のもので穿孔するものと、心に粘土を巻き付けたものがある。第61図575、580、584は、2方向から穿孔したと思われる。572、579、581、582、585、587は孔の内面が直線的で整っている。B類としたものの大きさは長さ4~5cm、径3cm前後のものである。孔はA類と同様に2方向からの穿孔により孔の内部でそれらの生じるものと、孔が直線的に整っているものがある。C類としたものには、細長い管状のもので673~678のように大形で太いものも含まれる。完形で大きさの判るものは、長さ4.8~8.2cmである。622は完形であるが、極めて細長いもので長さ8.1cmを測る。孔も5mmで細く、成形は、棒状のものに粘土を巻き付けていると思われる。孔と直交するように指の痕が残るものが多い。一方からの穿孔のものには、外側に粘土が盛り上ったもの（581、585、570、572）がある。二方向からの穿孔により孔のずれたものには（588、592、595、601、602）がある。また、成形時に手で握ったため指の痕跡の残ったもの（570、582）がある。

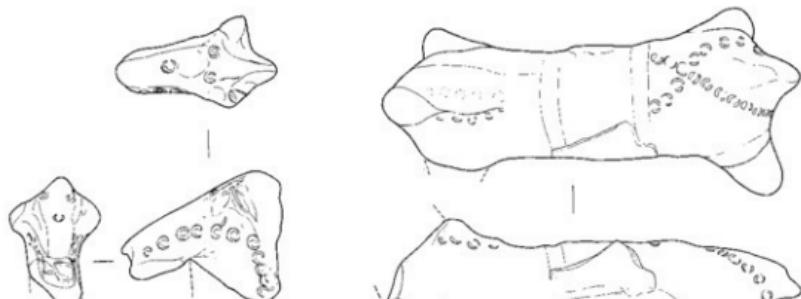
#### 手捏土器（第59図、60図）

手捏土器は、総数72個体あり、内I区から7、II区から23、III区から43出土している。III区でも第6加工段が最も多く18個出土している。第59図490~495は、内法が深く、器高も高いものである。491は、平底で器厚も均一となっている。496~542は、器厚が厚く、不均一となっている。小形（496~502）、中形（503~527）、大形（528~542）の三つに別けられる。556~559は、III区C-10から出土している。外形は直線的に成形され、胎上も粗い。III区出土の手捏土器の中でも異質なものである。555は、極めて小形のものである。高さ2.0cm、径2.7cmで、器厚も厚く作られる。560、561は手捏により成形しているが、極めて大形で器厚も均一に作られている。562、563、565は、上師器の坏と言べきものであるが、手捏により成形し、粘土の痕も良く残っている。

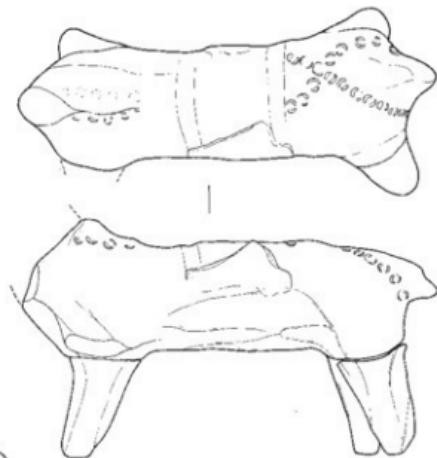
祭祀遺物は、III区において須恵器に伴って出土したものもあるが、大部分は遺構に伴わずに包含層からの出土で、所属時期の決定は困難である。包含層中出土の須恵器は、古墳時代末から、奈良時代後半にかけての時期である。祭祀遺物も概ねこの時期に含まれると思われる。

才ノ井遺跡からは、土馬が計6個体出土しているが、当地方において一遺跡から出土した数では稀有である。付近の出雲国分尼寺跡、武内神社裏山からも出土が知られている。竹管により馬具を表現した例として、松江市御所町岩沙窯址からの出土がある。土馬の足の破片が多いのは、使用により壊された可能性も考えられる。石製紡錘車（483）は、形態、文様共に太田市松田横穴出土のものに類似している。石帶は、県内では江津市波来浜遺跡において出土している。土鈴は、本県出土例は無く、大阪府羽曳野市茶山遺跡から出土している。孔の穿孔、形態等が異っているが、時期的には近いと思われる。また、一遺跡からの手捏土器出土数としては、多い方と思われる。本県において集中して出土した遺跡では、邑智郡石見町落子遺跡、同弥ヶ遺跡等が知られる。本遺跡においては、多量の手捏土器に伴い、土馬等の祭祀遺物が多く出土する点が注目されよう。

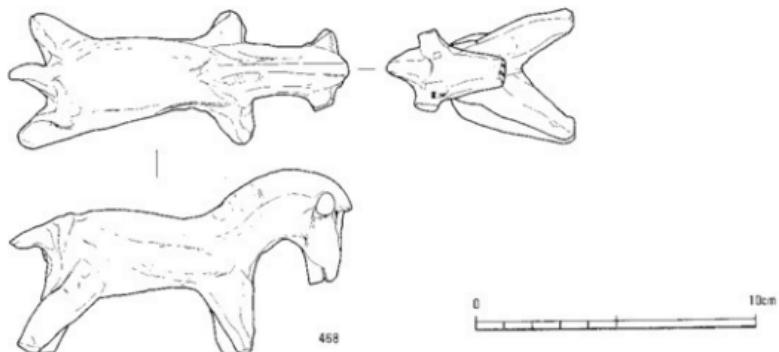
（広江耕史）



467



468

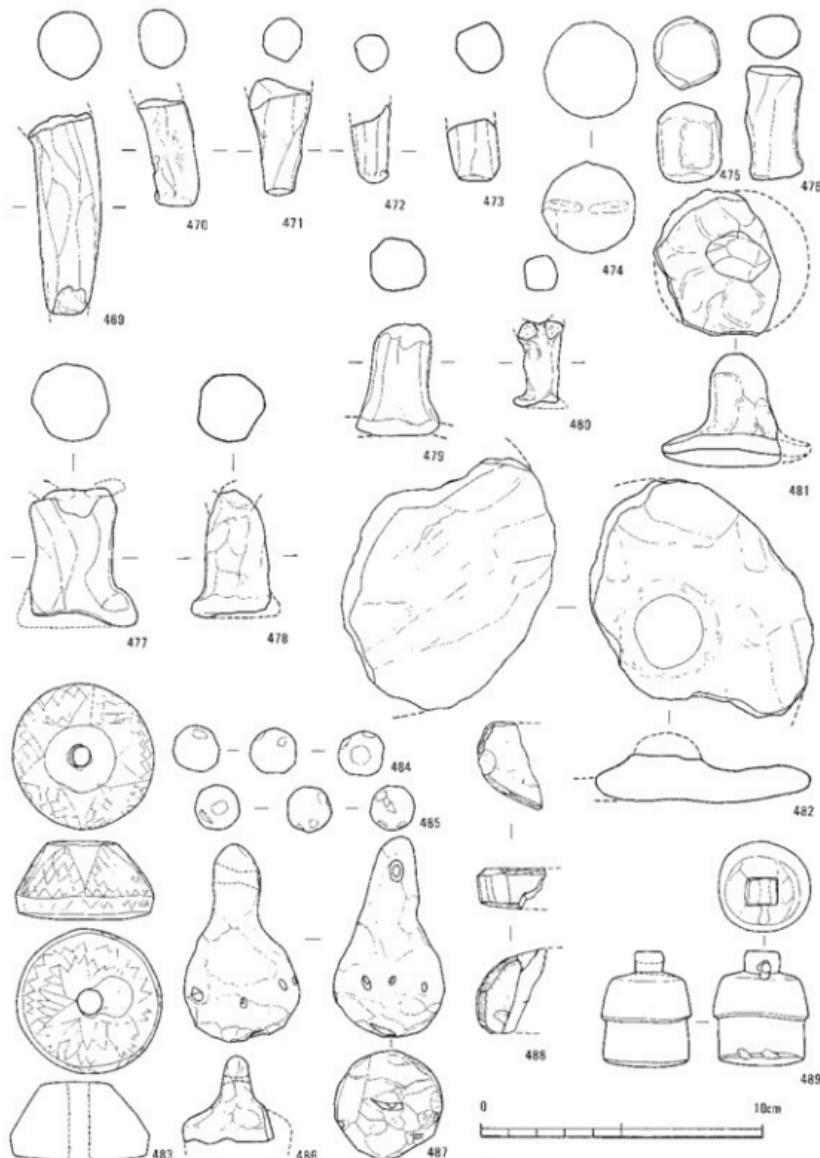


469



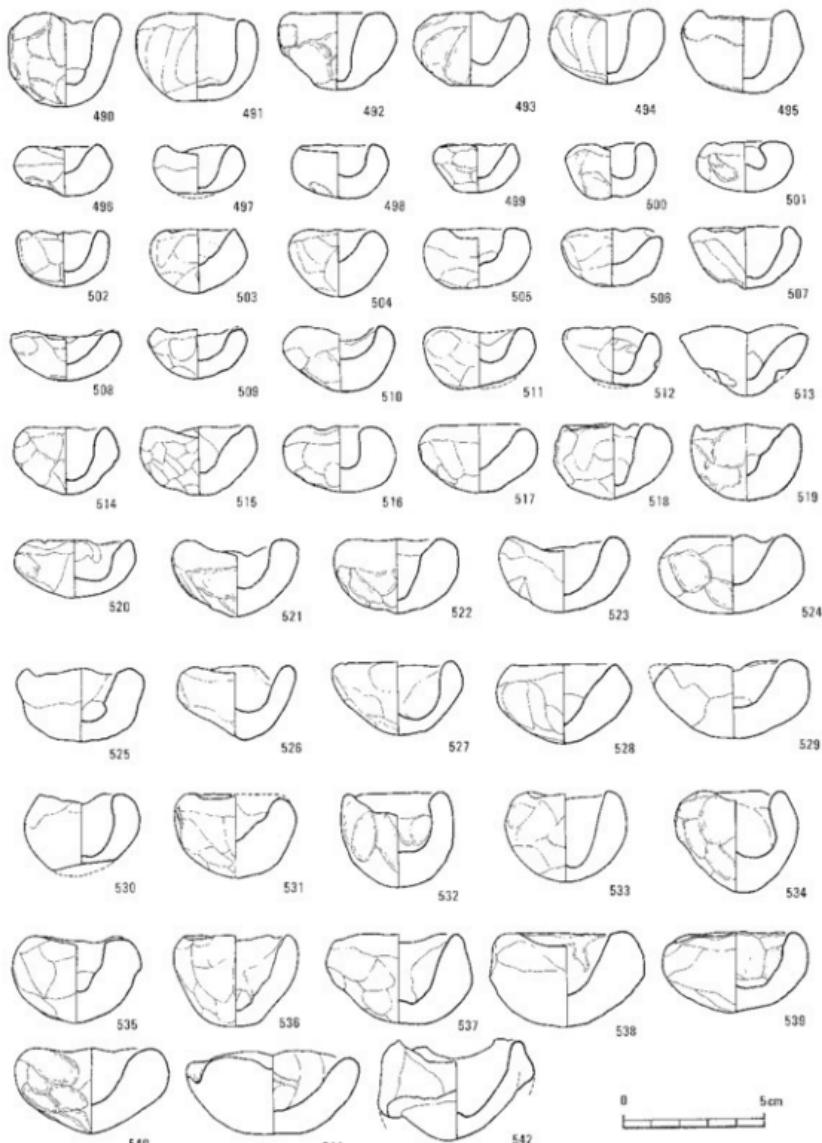
第57圖 祭祀遺物実測図(1)

才ノ岬遺跡



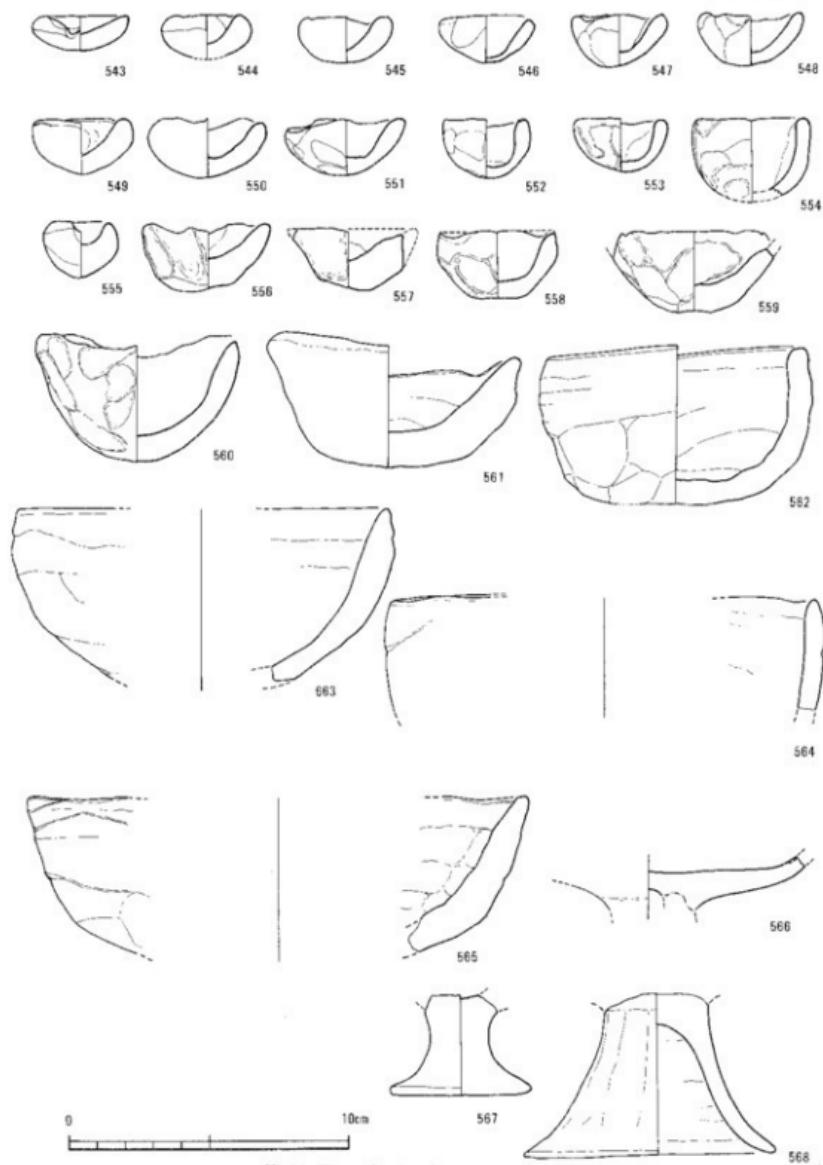
第 58 圖 祭祀遺物実測図 (2)

才ノ跡遺跡



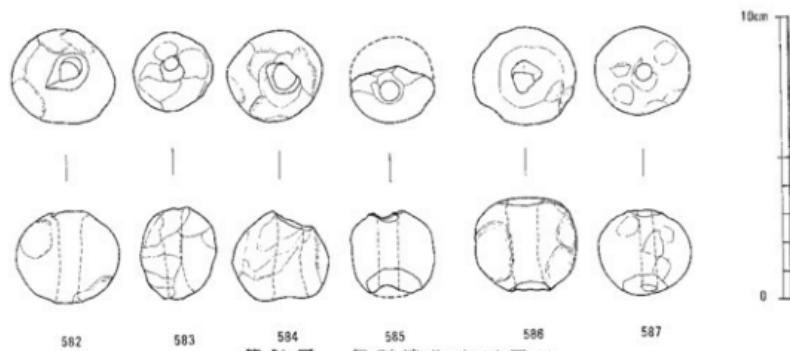
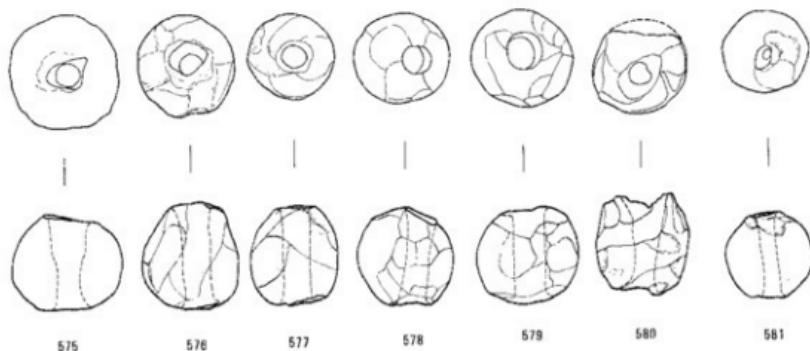
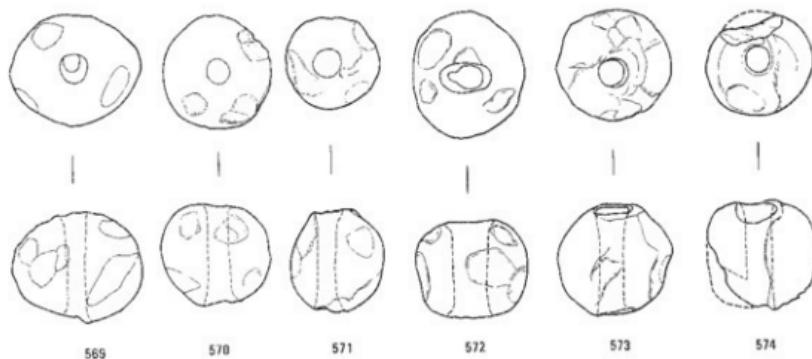
第59図 祭祀遺物実測図(3)

才ノ峰遺跡



第60図 祭祀遺物実測図(4)

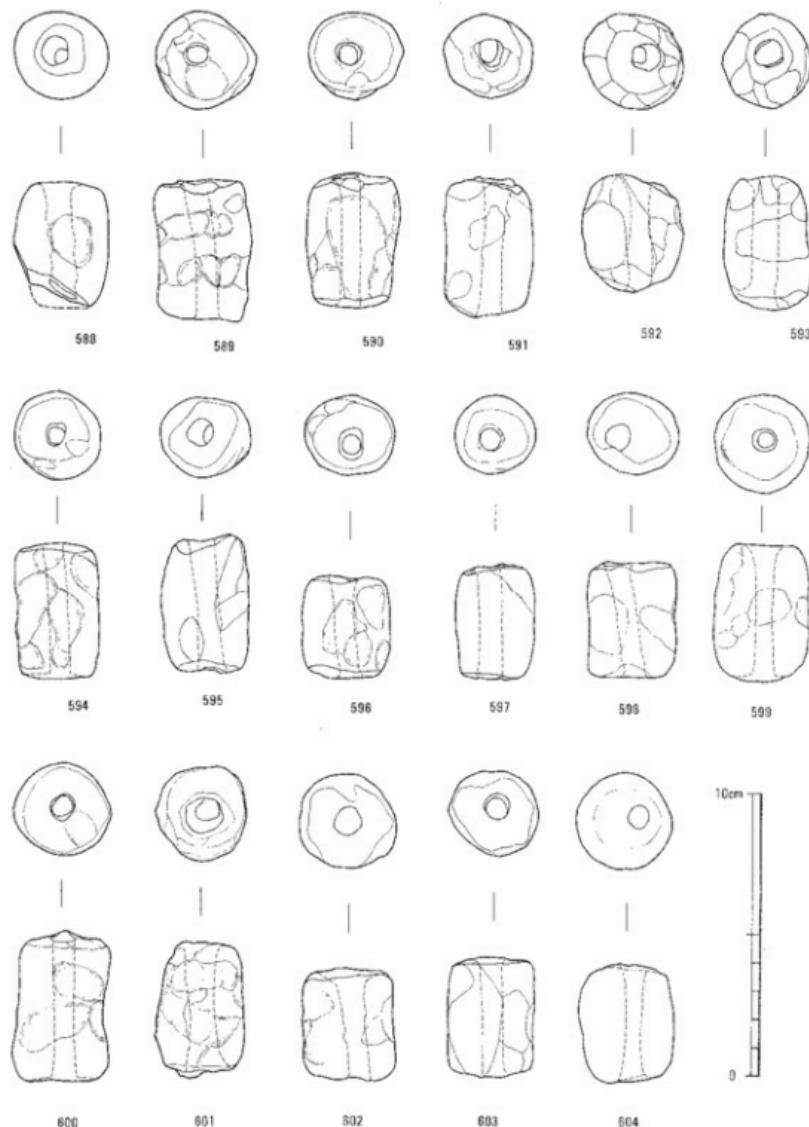
才ノ跡遺物



第 61 圖 祭祀遺物実測図(5)

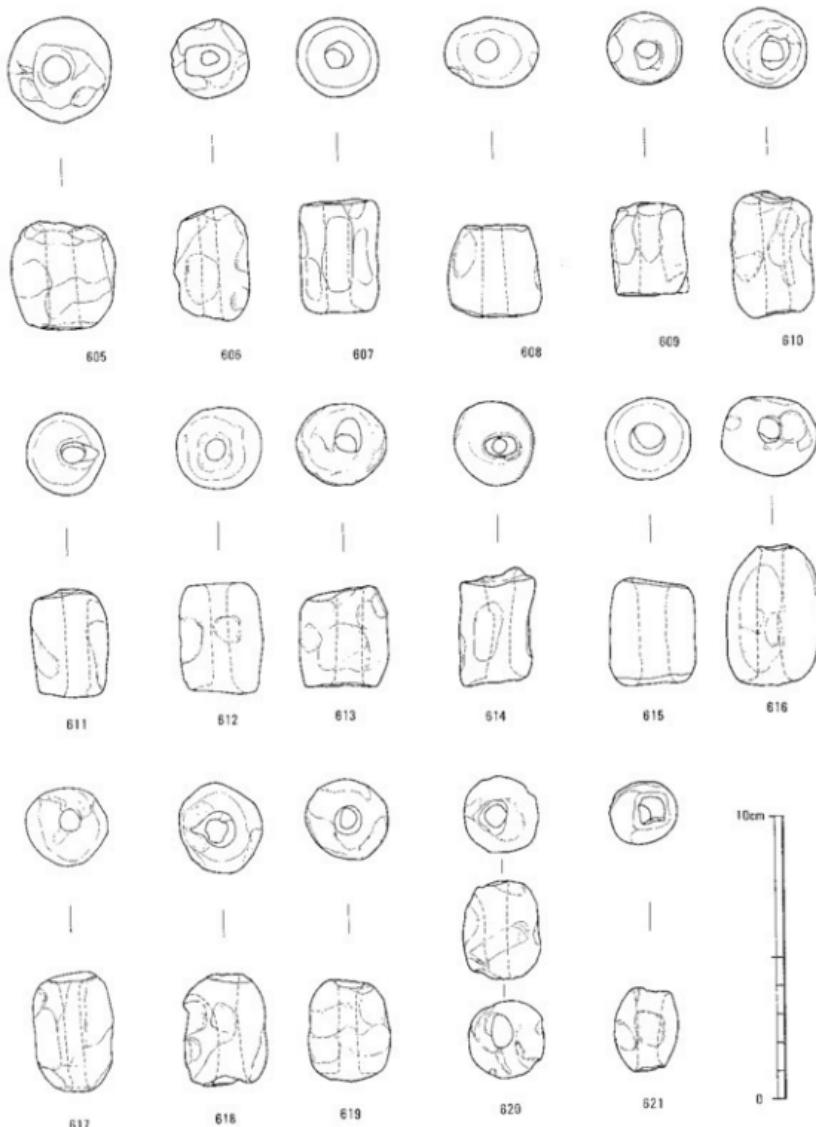
10mm  
0

才ノ岬遺跡



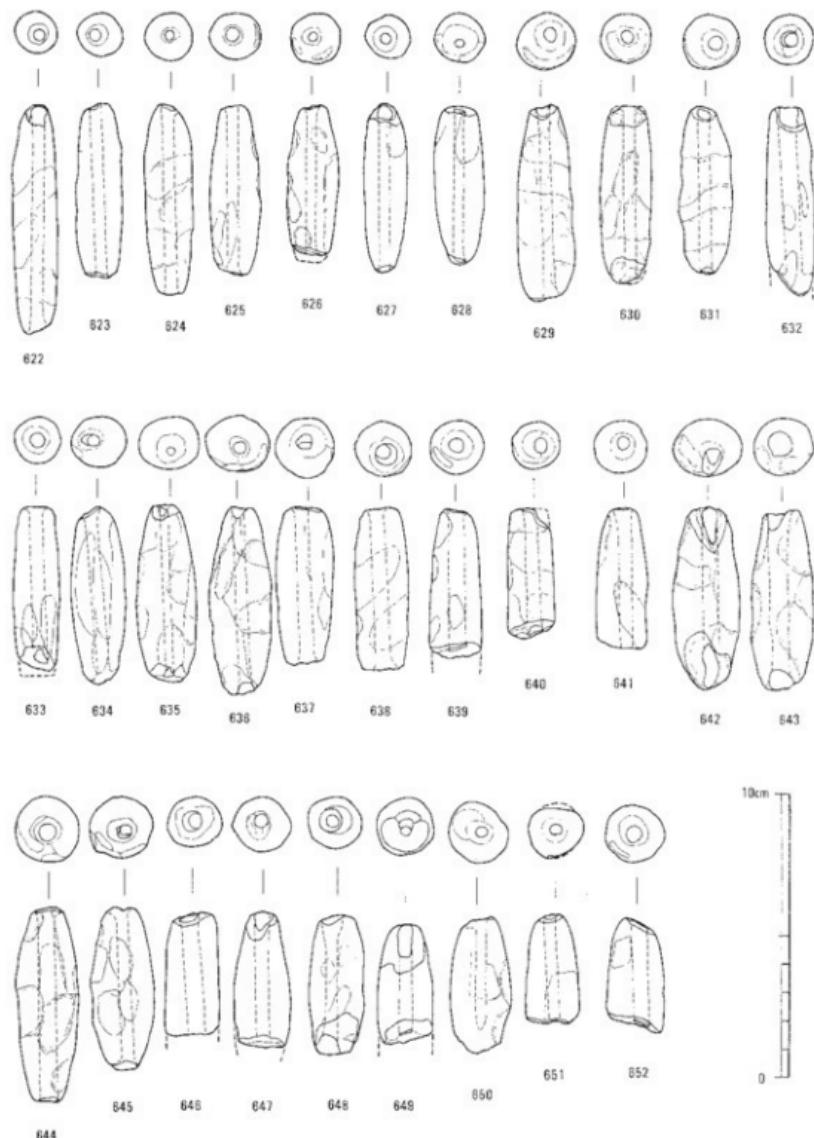
第 62 図 祭和遺物火照図(6)

才ノ井遺跡



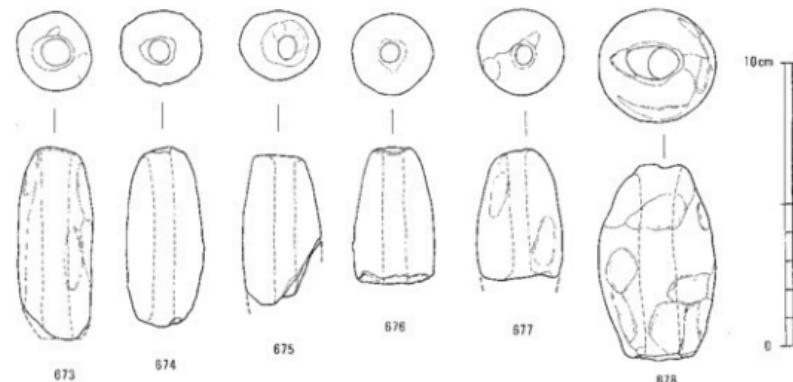
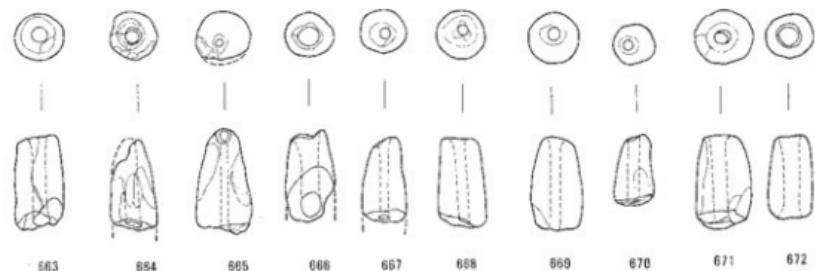
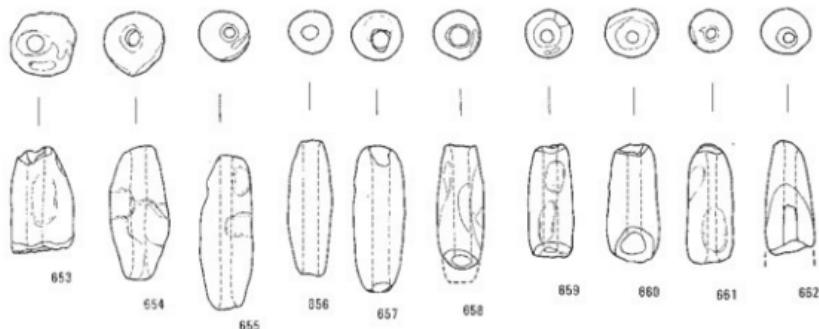
第63図 祭祀遺物実測図(7)

才ノ岬遺跡



第 64 図 祭祀遺物実測図 (8)

才ノ跡遺跡



第 65 図 祭祀遺物実測図(9)

## 木製品

琴柱（第66図1、2）1は長さ4.9cm、高さ2.3cm、幅1.2cm、2は長さ4.6cm、高さ2.5cm、幅1.2cmで、ヒノキ板目材を使用している。両者とも頂部は弦をかけるためにV字状に切り欠いている。1は2に比べると裾中央部の抉りも浅く、全体的に雰囲気つくりである。2は裾部はゆるやかな広がりをもつ三角形を呈し、中央部を抉ることにより両脚とする。ヒノキ材を使用。

漆塗木製品（第66図3）長さ8.2cm、厚さ0.5cm、幅1.6cmの容器の側板の一部である。片面に黒漆を塗布し、両端には側板をとりつけるためのL字形の切り込みを施す。柾目材使用。

柾状木製品（第67図）長さ32.1cm、幅8.8cm、厚さ3.1cmの板目材で、径3cmの柄と底部がやや丸味を帯びたコの字形を呈し、中央部を深さ約3cmに粗く削りとった身からなる。柄の先端には、突起部を削り出している。

火薙白（第68図1～4）1は長さ23.2cm、幅4.5cm、厚さ2.4cm、2は長さ22.6cm、幅3.9cm、厚さ2.5cm、3は長さ26.3cm、幅3.5cm、厚さ1.6cmの先端の欠けた角棒状のもの、いずれも木端面に切り込みを入れ、直徑0.7cm～1.1cmの焼け焦げた使用痕を残す。4は長さ42.3cm、幅3.0cm、厚さ1.6cmの未使用のもの。木端面にU字状の切り込みが16ヶ所残る。1～4ともスギ柾目材で、加工材を使用。

下駄（第68図5）長さ18.1cm、復原幅10.3cm、厚さ2.1cmのヒノキ柾目材より歯を削り出している。孔部は下部の歯近くに一ヶ所残る。歯は使用したためにすりへっている。

木簡様木製品（第68図6）復原長13.5cm、幅1.9cm、厚さ0.5cmの板目材、身は薄く、両面とも丁寧に削られており、下部にはわずかだが墨跡らしきものが残る。アスナロ材使用。

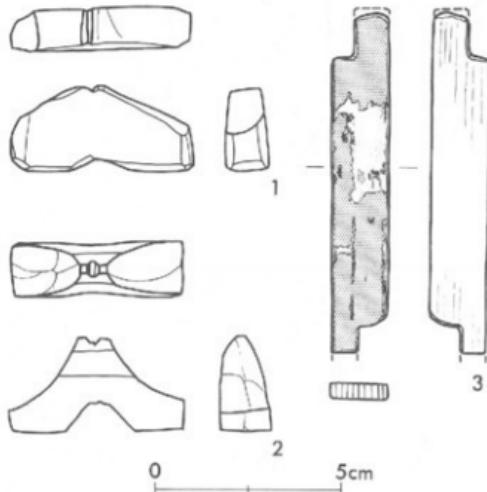
容器（第69図1、2、5、6、7、10、12、13、17）曲物容器の蓋板。

いずれも両面が丁寧に削られている。縁辺に側板をとめる一对の縫合孔がみられ、1、2、5、13には縫皮の一部も残る。又、12、13には縦横に刻線がみられる。推定直径は10.1cmから18cmまでと様々である。6、12、13は柾目材で、その他は板目材。

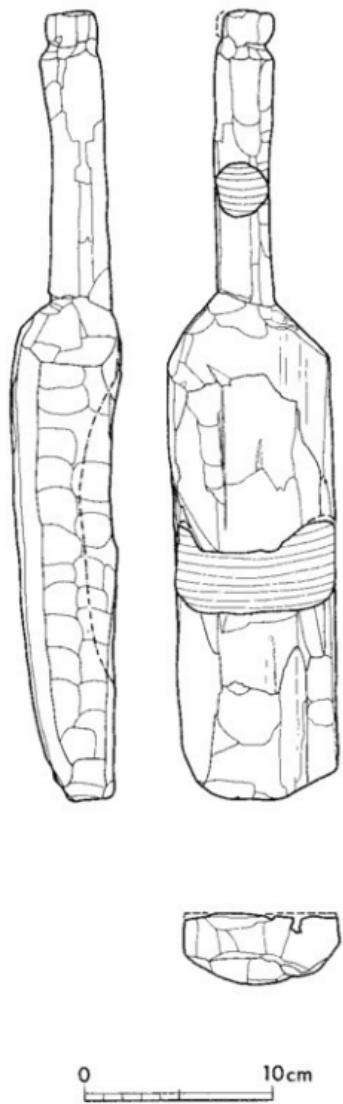
容器（第69図3）かなり腐食しており、側板を固定するための木釘孔は一ヶ所しか確認できないが、曲物容器底板の断片であろう。板目材使用。

容器（第69図4、8、14、15、16）

長円形、又は梢円形容器の断片。



第66図 才ノ岬遺跡木製品実測図(1)



第67図 才ノ井遺跡木製品実測図(2)

8、14、16には縦孔が残る。4の側面には粗い加工痕が残る。8は柾目材。その他は板目材。

容器(第69図9、10、第70図1) 9、10も曲物容器の断片である。前者は柾目材、後者は板目材使用。第70図1は容器の一部と考えられる推定直径17cmの円板の断片。側縁部を斜めに削り出し、中央部を円形に造り出す。わずかだが、焼け焦げの痕もみられる。板目材使用。

用途不明品(第70図2~16) 2~5は有孔板材。特に4は、薄板から身と茎を削り出し、茎は先端部にかけてやや細めにつくる。身の右縁近部より一ヶ所、側縁部に4ヶ所、茎下部に一ヶ所穿孔痕が残る。7~16は板材、10、11には刻線が残る。1、5、6、7、10、13は柾目材、その他は板目材。

用途不明品(第71図1~4) 1、2は短冊状板材。3、4は小札状板材。上部中央に小さな穿孔がある。いずれも下半部欠損。板目材使用。

用途不明品(第71図5) 断面が凸レンズに近い形をとる。表面は丁寧に削られており、裏面は腐食が著しいが、上部には突起部をつくり出す。

用途不明品(第71図6) 本の葉状木製品の頭先端部に二ヶ所ずつ穿孔が認められる。表面は平坦で丁寧に削られている。裏面は腐食が著しい。

用途不明品(第71図7、8、9) 8、9は、ほぼ方形の $1 \times 1$ cmの穿孔が認められる。長方形の先端の一部を斜めに加工する。7はスパナ状木製品、先端部を鉗穴状に削りとる。いずれも組合せ部材として使用されたと考えられる。板目材。

用途不明品(第72図1~5) 比較的丁寧に削られている棒状木製品の一部。1、2には深さ約0.8cmの孔を穿つ。5は中央部にややふくらみをもたせ両端部にかけて細めに削っている。柄として使われたものか。4は板目材。その他は柾目材使用。

用途不明品(第72図6、7) 芯持材使用のいちじく状木製品で、先端部を欠く。全面に粗い削り痕を残す。

用途不明品(第72図8~12) 3~11は断面が円形又

は四角形に近い細棒の一部。9は頭部が炭化している。12は両先端部に削りを残す。8、9は柾目材、10、11は板目材、12は芯持材使用。

用途不明品（第73図1、3、4、8）組合せ部材として使用したものか。残存状態が悪いため詳細不明だが、中央部に柄孔があったと考えられる。又、8には縦横に刻線がある。いずれも板目材使用。

用途不明品（第73図2、7）2は柾目材。直方体の一角を切り欠いてL字形につくった部材、7はこぶし大で立方体に近く、一面に削り痕が残る。芯持材。

用途不明品（第73図5、6）板目材使用の身の厚い台形状木製品。6には小孔が3ヶ所に見られる。

用途不明品（第73図9、10、11）断面が方形、又は不整円形の棒材の一端を切り欠き、頭部を削り出す。

用途不明品（第73図12）板目板材の先端部を両端からゆるやかなV字状に削り出し、もう一端は尖らせている。両面とも丁寧に削られている。

（片岡 誠子）

#### 陶磁器（第74図、図版160、161）

才ノ岬遺跡の陶磁器類は、I、II区の水田部のI、II層からの出土である。輸入陶磁器は中国製品13点（第74図1～13）、李朝白磁1点（16）、国产製品14点（15、17～29）、不明のもの1点（14）で合計29点あり、皆破片である。

1は玉縁の白磁碗の口縁部で、2はその胴部、5は高台部である。12～13世紀頃のものと考えられる。3は青磁の碗で高台部に近い破片である。青磁釉は1mm以上の厚さにかかりオリーブグリーン色を呈し、質入はない。良質の青磁である。4は腹のある碗で高台部に近い14世紀頃であろう。6、7、8、9は青磁碗の口縁及びそれに近い部分である。このうち、6は慣文のくずれた線刻を施している。15～16世紀頃と考えられる。12、13は白磁の小皿、10、11は染付碗である。いずれも16世紀代と考えられる。23は天目茶碗である。

16は李朝白磁で底部のみ残っている。胎土は磁器化していて、やや灰色を帯びた白磁釉を内面及び高台内部までかけている。内面底部と高台部に三ヶ所砂目痕が残っている。

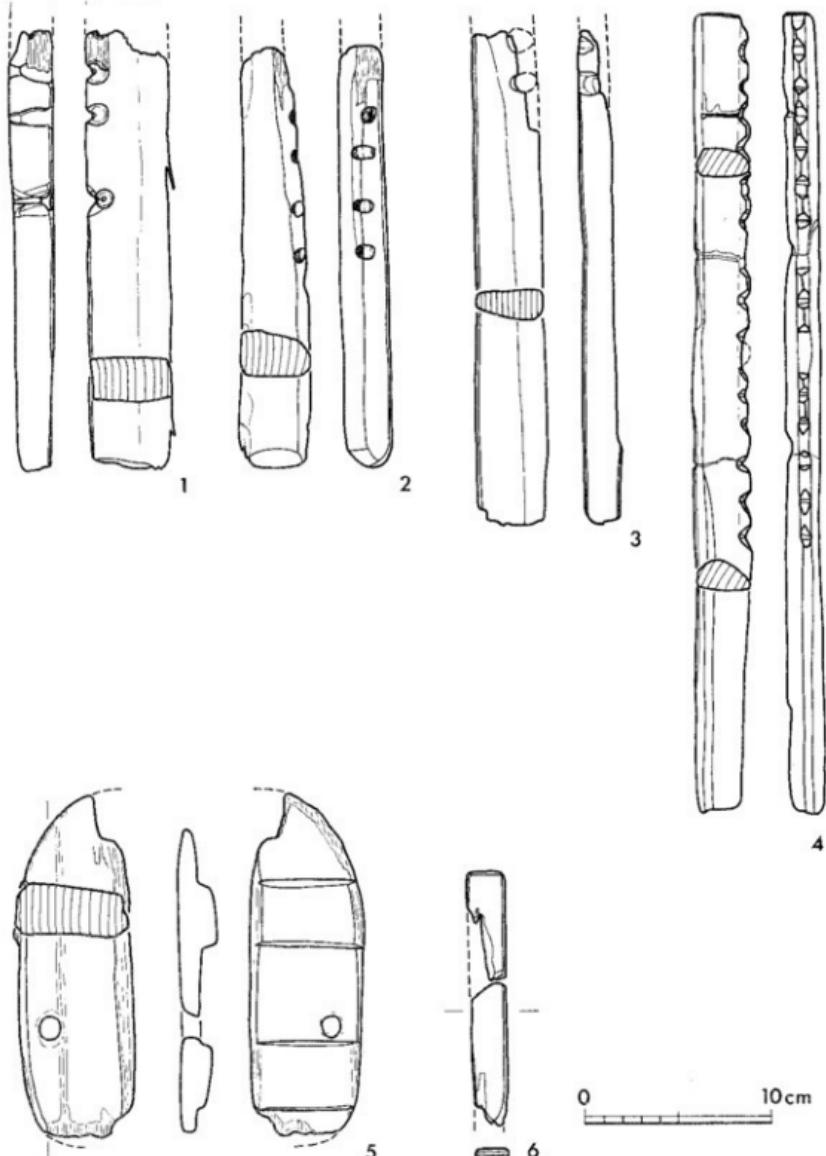
15は青灰色で須恵質に焼成された中近陶器で、外面は格子状叩き痕、内面はハケナデが施されている。斐の破片である。

17～22は唐津焼で、25もその系統のものであろう。19は碗、18、20は皿で18、19は胎土目を使用20は内外面重ね焼の痕跡はみられない。17、21は砂目痕が残る。22は口縁が外返する。いずれも高台とその周辺は無釉でロクロで削り出している。釉の色は薬灰による白濁したもの21、19、その上に深緑がかったもの18、20があり、20は発色が悪く乳白色を呈している。

24、27は美濃、瀬戸系陶器である。24は天目茶碗の口縁部で復元口径は11.7cmを測る。27は外面に黄釉、内面は無釉である。香炉状のものである。26、28、29は伊万里系染付である。

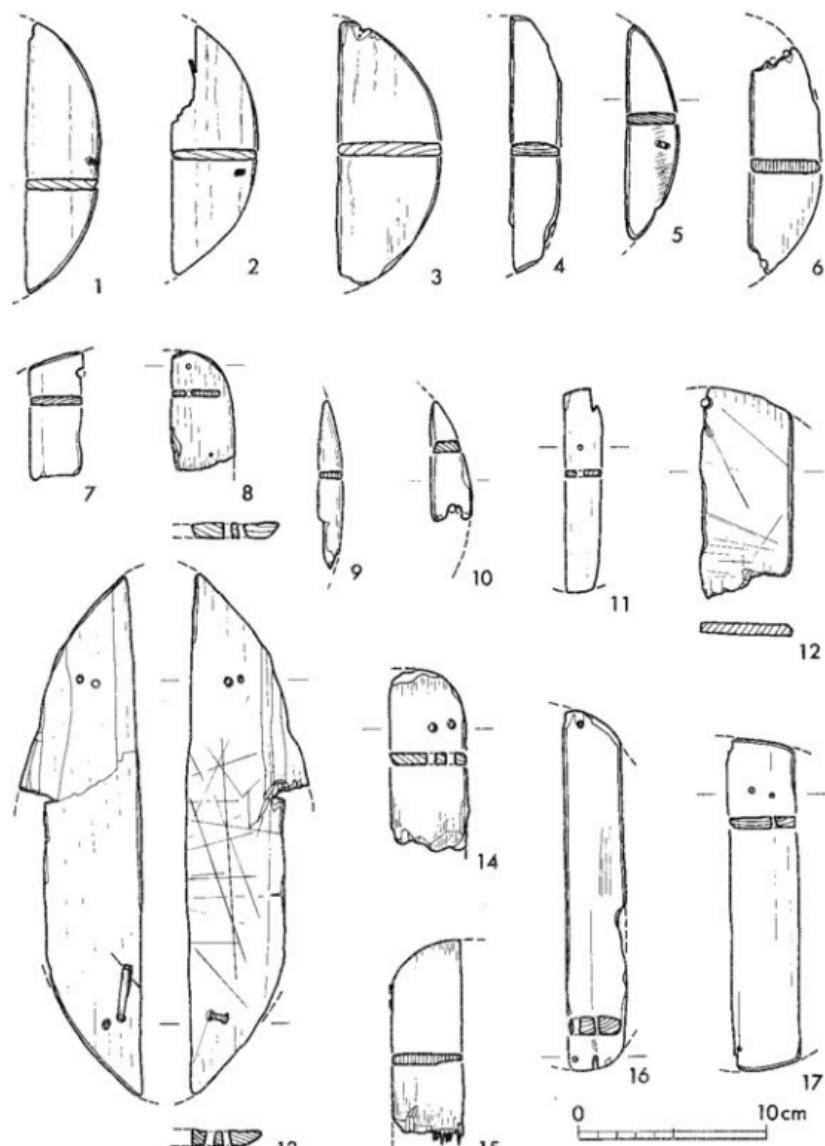
（内田 律雄）

才ノ咲遺跡



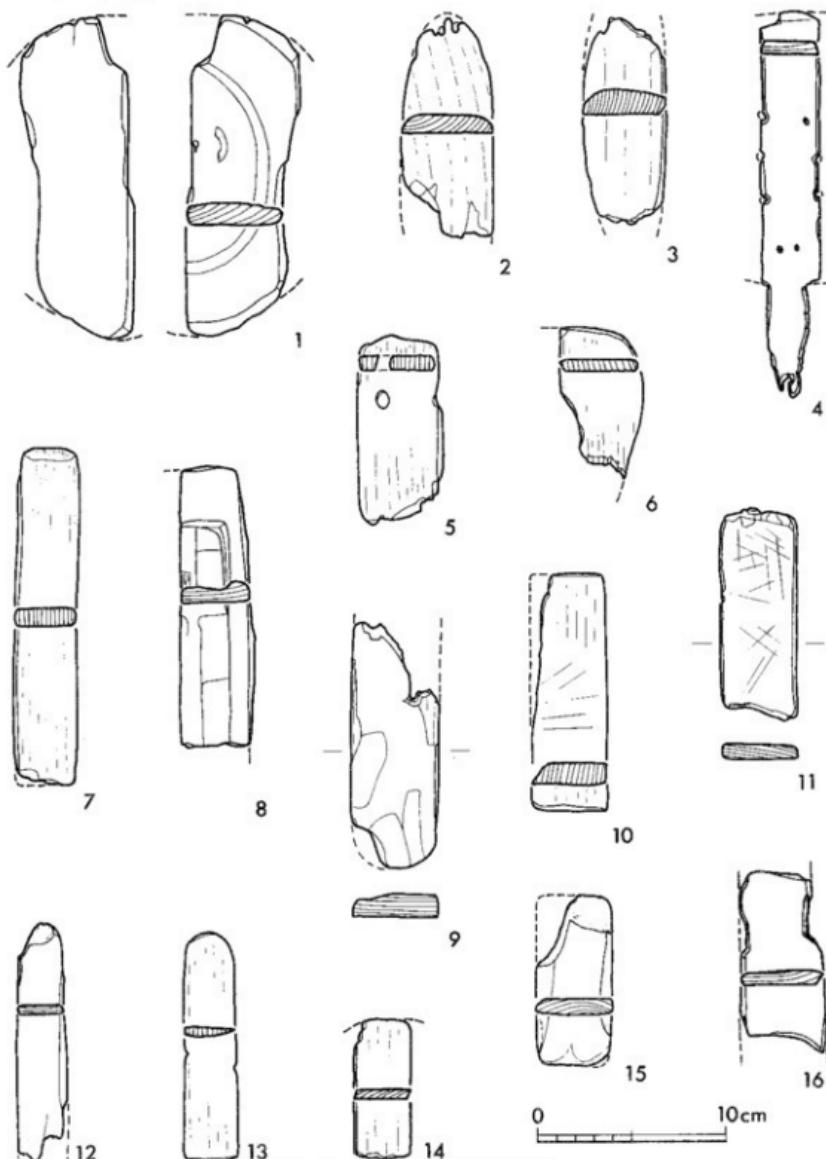
第68図 才ノ咲遺跡木製品実測図（3）

才ノ岬遺跡



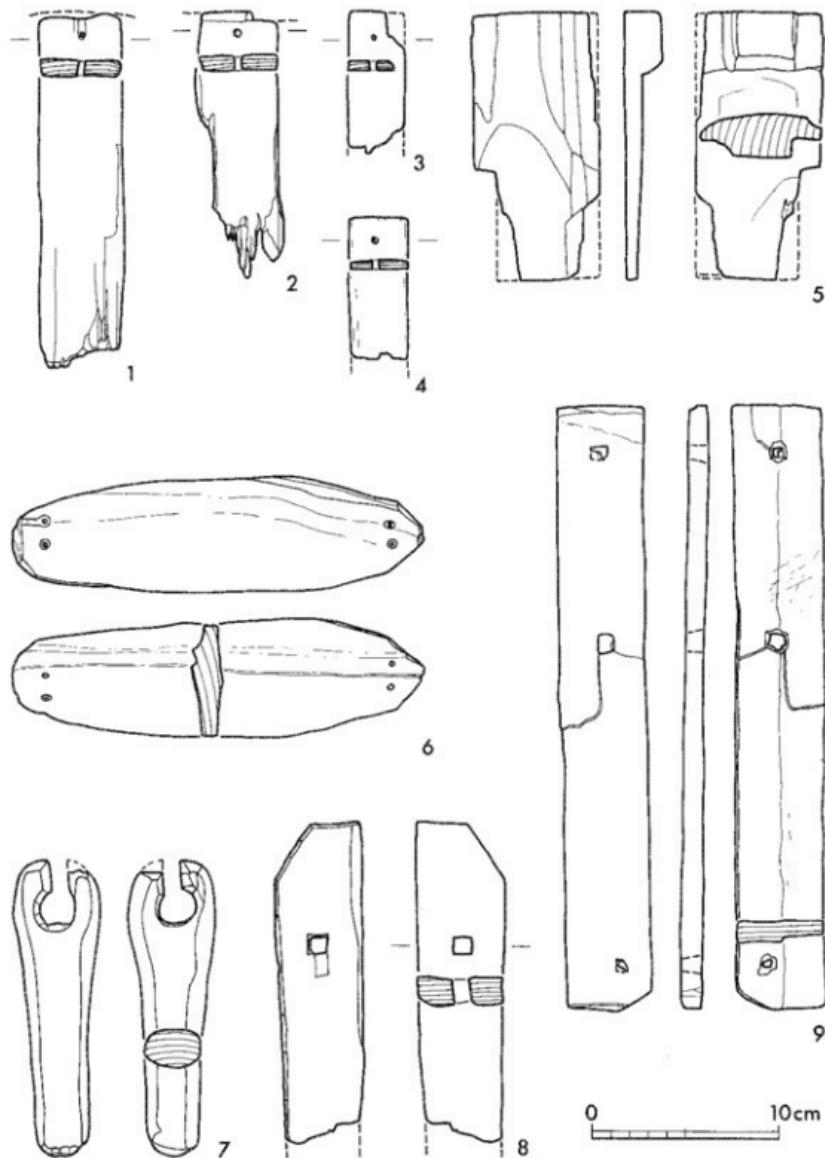
第69図 才ノ岬遺跡木製品実測図(4)

才ノ峠遺跡



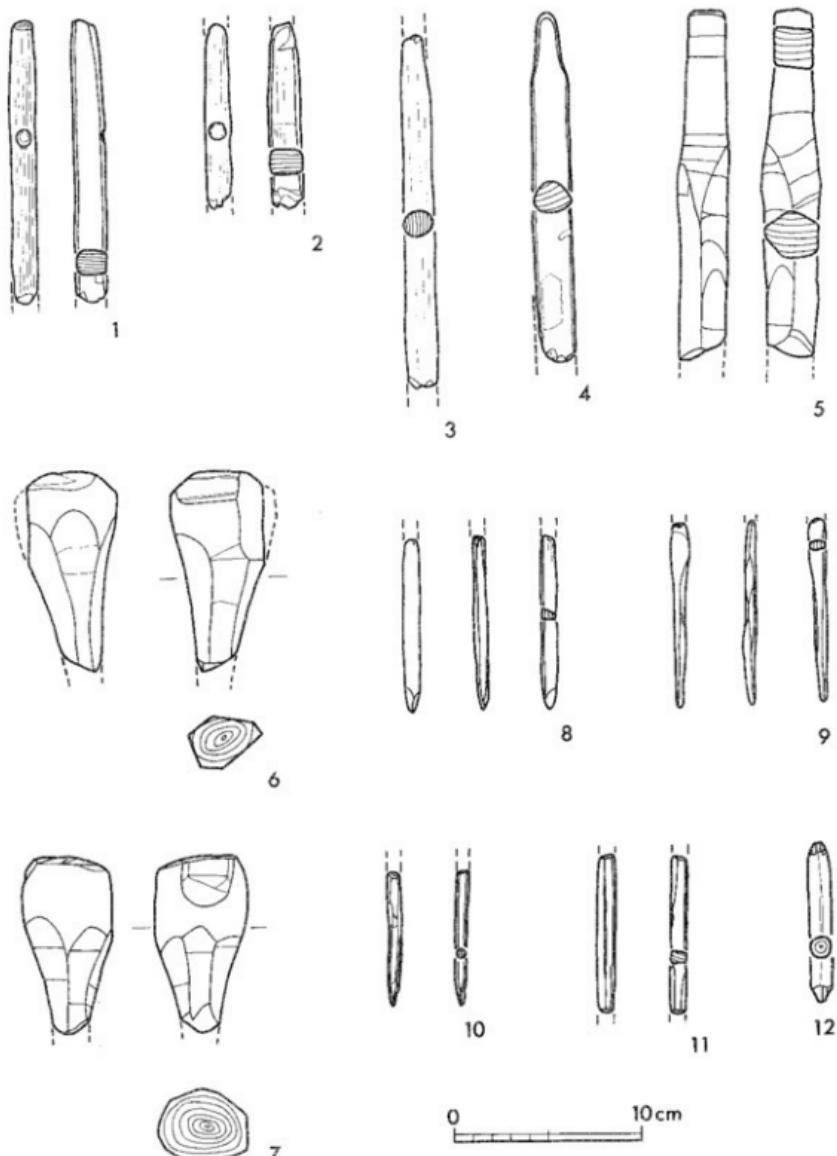
第70図 才ノ峠遺跡木製品実測図(5)

才ノ峰遺跡



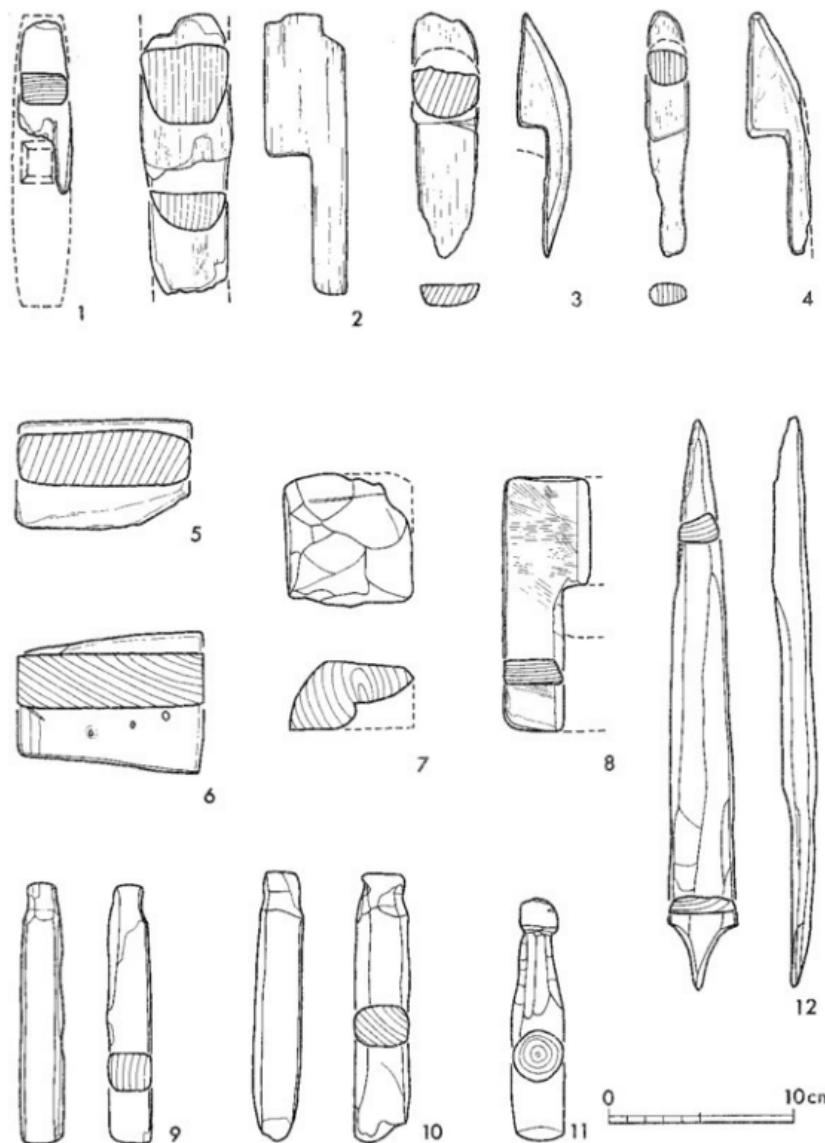
第71図 才ノ峰遺跡木製品実測図(6)

才ノ崎遺跡



第72図 才ノ崎遺跡木製品実測図(7)

才ノ跡 遺跡



第73図 才ノ跡 遺跡木製品実測図 (8)

## 才ノ峠遺跡

### 石器（67図）

2～4はI区西端で第3洞中から瓦や自然土とともに出土している。また、1・5 II区層褐色土層から出土する。1は砂岩製の打製石斧である。扁平な自然石を利用し、体部中央には自然に剥離した面がその残る。基部はやや尖っており、両側縁および刃部にやや細かな倒錐調整を加える。刃部中央にはやや突出したところがあり、一部には使用による剥離も含まれるかもしれない。全長14.7cm、最大幅7.5cm、重さ304gを測る。2・3は磨製石斧片でそれぞれ凝灰質砂岩と泥岩製である。2は全面に丁寧な研磨を施すが一部に敲打痕も残る。使用によって刃の一端がつぶれている。現存長10.5cm、最大幅4.9cm、厚さ3.5cmで現重量287gを測る。3はやや小型の石斧である。風化によって表面がほとんど剥脱しており、研磨部分が一部しか残っていないが、もともと全面に丁寧な研磨が施されていたと思われる。断面レンズ状を呈し、現存長7.3cm、最大幅5.2cm、厚さ2.4cmを測る。現重量133.6gである。4は礫石錐と思われる。泥岩製で扁平な自然石の両端に数回の打撃を加える。その凹部には磨滅痕が認められる。重さ、157gである。5は石英質砂岩製の砥石である。両端を欠損する。全面を使用しており、9つの低ぎ面が確認された。低ぎの方向は一定でない。

5の砥石は他の当遺跡出土遺物とほぼ同じ時期に、その他の石器は縄文時代から弥生時代に相当すると思われるが、正確には限定できない。いずれも流れ込みの資料である。

### 縄文土器（同図6～9）

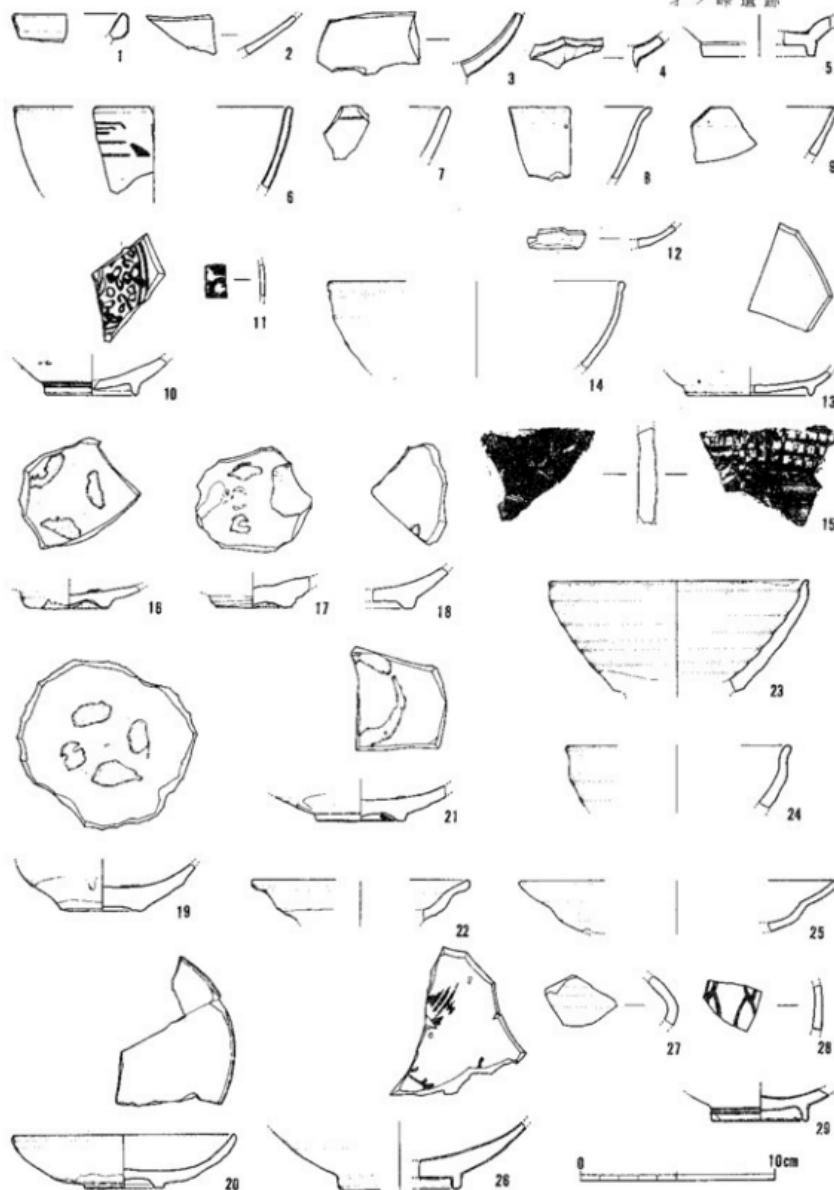
I区西端の砂層から多量の流木とともに出土した。総数は10点にもみたず、風化が著しいため、図示できたのはわずかに4点である。6・7は条痕土器である。6は内面に二枚貝条痕を施し、口縁内面および外面にはナデ調整を施す。一方、7は外面に二枚貝条痕を施し、内面にはナデのちに板目状の条痕が施されている。条痕が深く明確なところから早期末から前期頃のものと思われる。8は斜縄文を施した深鉢形土器の胴部片である。遺存状態が悪く明確ではないが、縄文はL<sup>1</sup>R<sup>1</sup>で横位に回している。胴部の最も張った部分から下半にかけて粘土紐を貼り付け、その上に半截竹管で押引文を施す。これらの諸特徴および器形から考えて、瀬戸内地方の前期後葉の墨木I式土器に併行するものである。これと同型式の土器は、島根県では仁多郡仁多町の下鶴倉遺跡から好資料を得ているが、類例は極めて少ない。最近鳥取県米子市の陰田遺跡でも同式の併行の土器の出土が報告され、山陰の海岸部における前廟後葉の土器の様相が徐々にわかりかけてきている。9は直Lの深鉢形土器の口縁部である。L縁下に竹管様工具で幅広の平行沈線文と波状文を施す。内外面ともに二枚貝条痕のちナデ調整を施すが、外面には二枚貝条痕が多く残る。中期末から後期初頭にかけて中国地方にみられる沈線文を主体とした土器群の範疇に含まれるものと思われる。特に幅広の沈線を多用する土器は山陰地方の沿岸部に類例がいくつか認められる。

（尾立克己）

註1 間嶋忠彦、間壁惠子「墨木貝塚」『鳥取考古学研究集報』11 昭和46年)

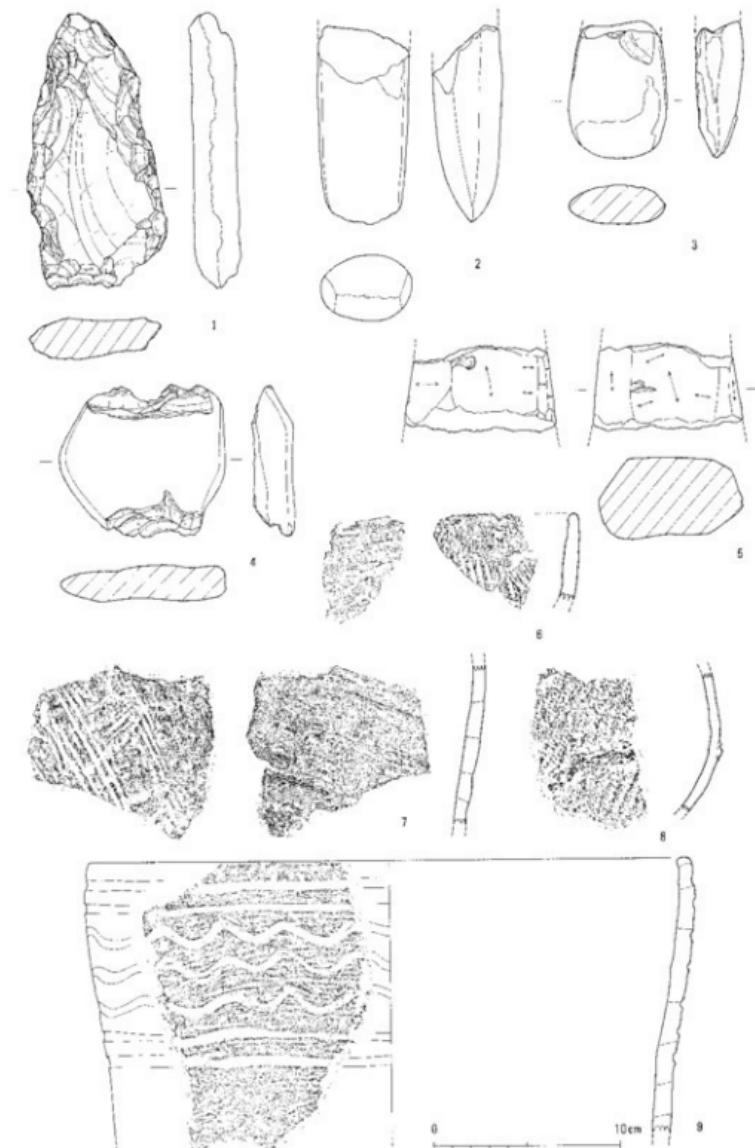
註2 仁多町教育委員会「下鶴倉遺跡緊急発掘調査報告」昭和59年

才ノ崎遺跡



第74図 才ノ崎遺跡陶器片測図

才ノ峰遺跡



第75図 才ノ峰遺跡出土石器、縄文式土器実測図

## 小 結

才ノ峰遺跡では、標高約27mの丘陵部とその南側水田部から以上のような遺構、遺物が検出された。水田部との比高差は15mある。

丘陵部は南側斜面に6つの加工段と16棟の堀立柱建物跡、住居跡状遺構、土壙等が検出され、遺跡は集落跡の形態を呈している。堀立柱建物跡は概ね主軸を北方にむけているが、必ずしも一様でなく丘陵地形やそこに作られた加工段に規制されていると思われる。いずれも、縦列の可能性もある第2加工段で検出されたSB10を除くと大小をとわず皆2×3間と考えられる。従って建物の構造にはあまり違いはなかったであろう。しかし、第1加工段上で検出されたSB01はその中でもひときわ大きなもので、柱穴の掘り方もしっかりしており、根石を入れたものが多かった。第1加工段の西にある才ノ峰1号墳との間に何ら遺構が発見されなかつたこと、建物跡周辺に、他の遺構と比して伴う遺物が少なかったこと等を考えあわせると、この堀立柱建物群の中では性格の違う特殊な建物であったようである。

発掘調査で検出した加工段は、調査区の西と東にさらに続き、また、その上に残された堀立柱建物跡も拡がっていると予想される。この加工段は発掘以前の測量図に丘陵の南側から西側にかけてみられる段状のものとほぼ符合する。加工段の南側は流失している部分も多いが、このことから遺跡の存在するこの丘陵は比較的保存状態が良く、集落廃絶後の状態を保っていたものと考えられる。

各加工段に残された堀立柱建物跡の様子をみると、第1加工段にはSB01以外の遺構は検出されず、SB01の特殊な性格と関係しながらこの集落の広場のような機能を課していたことが考えられる。また、第5加工段、第7加工段はそれぞれの加工段の端にあたる部分で、堀立柱建物跡は調査範囲内では検出できなかつた。これらの加工段はさらに西側に続くと思われる。第2、第3、第4、第6加工段には多くの柱穴が検出されたが、とりわけ、第3加工段は、SI02、SI03とした溝をめぐらした住居跡状遺構、SK01、SK02といった土壙等、他の加工段の遺構が堀立柱建物跡のみであるのに対し、異っていると云えよう。SI02、SI03には、他の堀立柱建物跡にはみられない円形、又は不整形な土塙が伴なう。特にSI03の不整形土壙から出土した石鉗を重くみれば、集落内での祭祀の中心的加工段の一つであったことも考えられる。

加工段と堀立柱建物跡の関係については、丘陵の南斜面を削り出し、あるいは盛土して広い平坦面を構築し、そこに数棟の堀立柱建物を建てていることが知られる。そして、この地方の同時代の集落跡である八束郡穴道町荻田園地遺跡、福岡郡尼寺原遺跡、安来市高広遺跡、あるいは米子市青木遺跡<sup>注1</sup>等に見られるように1棟の堀立柱建物を建てるのに必要な面積のみの加工段が構築されている諸例と比べると、そこに集落のありかたに一定の違いが認められる。才ノ峰遺跡の場合ばかり計画性がうかがえるのである。このことは、才ノ峰遺跡が、出雲國分寺や国府に近く、前述のこの地方における同時代の諸例が比較的当時の政治的中枢部から離れているという單なる都鄙の差なのかもしれない。あるいは、才ノ峰遺跡の特殊な性格によるものであろうか。

さて、才ノ峰遺跡から出土した遺物にもいくつかの特徴がみられた。特に多量の祭祀関係遺物が

## 才ノ峰遺跡

含まれることである。祭祀遺物も他のそれと同様に、I・II・III区全域にわたり出土したが、特に多く出土したのは、丘陵部のIII区とその下のII区の水田部中であった。祭祀関係の遺物と考えられるものを列記すると次の如くである。

### A 土製模造品

- ① 小形手捏土器73個（I・II・III区）
- ② 土鈴2（II区）
- ③ 鏡2（II区）
- ④ 土馬4個体以上（I・II区）
- ⑤ 土玉各種53個（I・II・III区）
- ⑥ 土錐57個（I・II・III区）
- ⑦ 小形土製支脚4個（II・III区）
- ⑧ 小形高環2（II区）

### B 石製（模造）品

- ⑨ 石鈴1（III区）
- ⑩ 紡錘車1（II区）
- ⑪ 丸瓶1（II区）
- ⑫ 水晶製丸玉2（II区）

### C 木製（模造）品

- ⑬ 舟形木製品1（II区）
- ⑭ やじり形木製品1（I区）
- ⑮ 琴柱2（II区）
- ⑯ 火鏡臼<sup>火鏡臼</sup>3（II区）

以上の祭祀遺物のうち火鏡臼を加えたのは形態等からみて、実用品なのか、祭祀にかかる儀礼のものなのかもちらとも判断し難かったからである。同時代の遺物からこれだけ多量の祭祀遺物が出土した例は、少なくともこの地方には他に例をみないものである。これらの祭祀遺物の出土を検討すると、祭祀のとりおこなわれた場所は、やはり、III区丘陵部加工段であり、I-II区出土資料は祭祀終了後廃棄されたか、廃棄そのものも祭祀の重要な所作であったと考えられよう。さらに今一つ注目されるのは、I・II区から出土した多量の桃の種子である。約300個出土した。というのも桃の種子以外の植物の種子はあまり出土しなく、これら桃はそのほとんどが栽培種であったからである。この類の種子が湿地において保存されやすい条件を備えていることも考慮されなければならないが、才ノ峰遺跡に近い同様な低湿地の中竹矢遺跡I区、布田遺跡においてさえ、また、この地方の他遺跡でも現在のところこれほどの量の桃の種子は発見されてはいない。才ノ峰遺跡の祭祀の中で、桃はかかせない役割を果していたのではなかろうか。

次に出土した須恵器のうち、皿・盤・高環といった当時「食器」として使用されたと考えられるものには、ほとんど例外なく内面底部にその使用痕が観察されたことが注意される。この使用痕は、

才ノ峰遺跡の中心となった時期を示す7世紀後半から9世紀代の須恵器にみられた。I・II・III区とも同様である。すなわち、この遺跡は祭祀的な色彩が強いといつても、ある祭祀のたびごとに臨時に使用されるのではなく、須恵器の使用痕が示すごとく、この場所に恒常的に、遺物が維持され人の居住したことが考えられるのである。このように才ノ峰遺跡は集落遺跡と祭祀遺跡と両方の性格をもちあわせていると云えるのである。

ところが、集落遺跡や祭祀遺跡以外に関係する遺物も含まれている。一つは、窯跡である。スサ入りの須恵質である。付近に須恵器窯、あるいは、瓦陶兼用窯の存在が推定されるが窯跡は発見されていない。今一つは祭祀遺物として列挙した④水晶製丸玉である。この丸玉が宋製品とも考えられるからである。水晶の原石が表採されていることを考えると、玉作工房跡も付近に存在する可能性もあるが、遺構は検出できず、チップ類も発見できなかった。

また、判読不明の木簡、墨井須恵器、陶器、出雲國分寺と同文の軒平・軒丸瓦等のI・II区からの出土は、遺跡が出雲國分寺に極めて近いところから、その廃棄物処理場の要素もある。耕作土から中世陶磁器がI・II区から出土していることは出雲國分寺出土遺物の下限を示すそれと同じである。逆にIII区丘陵部から中世以降の遺物は出土していない。才ノ峰遺跡は、7世紀後半にはじまるので、國分寺建立後は、I・II区が出雲國分寺の廃棄物処理の場所にも使用されたのであろう。とすれば、才ノ峰遺跡は、その位置が出雲國分寺の北約400mの近距離にあっても、祭祀遺物やIII区については、出雲國分寺との関係を一応切りはなして考える必要がある。

このように、才ノ峰遺跡は、遺構のありかたや、出土遺物にはこの地方で現在発見されている同時代の集落遺跡の中では、やはり、特異な存在と云わなければならない。これは、才ノ峰遺跡の存在する丘陵がその地名の示すごとく、松江市竹矢町と馬渕町の境であることにも関係するかもしれない。才ノ峰という字名はこのIII区丘陵をちょうど東西に割ったかたちで、その竹矢町と馬渕町の両方に残っているからである。同様な例は、大場盤雄氏の研究に詳しいが、今後こうした側面からの考察をすすめる必要があろう。

かようにみれば、才ノ峰遺跡については

- ④ 集落跡であること。
- ⑤ 祭祀遺跡であること。
- ⑥ 窯跡が付近に存在する可能性があること。
- ⑦ 玉作工房跡が付近に存在する可能性があること。
- ⑧ 出雲國分寺に関連する遺跡であること。

の5つの要素が上げられる。このうち④と⑤が中心であり、この遺跡の性格を示すものである。

(内田律雄)

註1 鳥取県教育委員会『青木遺跡発掘調査報告書』I・II・III(昭和51、52、53年)

註2 岩城正夫『原始人の技術にいどむ』(昭和55年)

註3 大場盤雄『祭祀遺跡』昭和34年。

## 才ノ岬遺跡

探査番号	区	遺構	器種	法面 (cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第26回 1-1	III 区 SB03	口 瓶 受部径 高 厚	杯(身)	10.5 12.4 5.1 0.5	たちあがりは内傾して立ち上がる。頭部は頭部がわずかに膨らむ。受部底部は小さく。	胎土 1mm以下の砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面から受部にかけてへら削り。その他は内外面とも回転ナゲ。	SAR354
第27回 2-2	II 区 黒色 有機質土	口 瓶 小形壺 器	器	7.1 0.4	口縁部は逆八の字形に開く。頭部のくの字形。	胎土 1mm前後の砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナゲ。	SAR278
第27回 2-3	II 区 黒色 有機質土	口 瓶 壺 器	器	厚 1.5	体部は丸味を有し、内縮しながら底部へつづく。底部は丸底。	胎土 砂粒はほとんど含まず。 色調 青灰色 焼成 良好	体部は内外面とも回転ナゲ。底部外面はへら削り。	SAR257
第27回 2-4	III 区 第VI 加工段	口 径 高 厚	壺	8.6 9.0	口頭は短かく、外唇気味に上方にのび、口部に至る。頭部は丸い。体部は丸味を有し、内縮しながら底部に至る。底部はやや平らで、中位に円孔を穿つ。	胎土 砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部は回転へら削り。その他は内外面とも回転ナゲ。	SAR 8
第27回 2-5	III 区 第VI 加工段	器 厚	壺	0.8	体部は丸味を有し、内縮気味に底部に至る。底部は平底で、中位に内孔を穿つ。	胎土 砂粒はほとんど含まず。 色調 濃い青灰色 焼成 不良	不明	SAR 16
第27回 2-6	III 区 G-13	器 厚	壺	0.8	体部は丸味を有す。	胎土 砂粒はほとんど含まず。 色調 青灰色 焼成 良好	体部は外面向下部はへら削り。その他は内外面とも回転ナゲ。	SAR104
第27回 2-7		器 厚	壺	1.2	底部は平底	胎土 0.5mm以下の砂粒を含む。 色調 濃い青灰色 焼成 良好	底部外面は回転系切り痕を残す。内面は回転ナゲ。体部外面下半部はへら削りの後ハケ目ナゲ。	SAR258
第27回 2-8	II 区 黑色 土層下部	器 厚	壺	1.4	底部は平底で中位に内孔を穿つ。	胎土 1mm以下の砂粒を含む。 色調 底部の外面は青灰色、その他の内外面とも薄茶褐色 焼成 良好	底部外面は回転系切り痕を残す。内面は回転ナゲ。体部外面下半部は回転へら削り、内面は回転ナゲ。	SAR213
第27回 2-9	III 区 第3 加工段	器 厚	壺	0.7	体部は丸味を有す。	胎土 まばらに1mm程の砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	体部外面は回転へら削りの後、回転ナゲ、内面は回転ナゲ。	SAR374
第27回 2-10	III 区 F-13	器 厚	壺	1.2	底部は平底。	胎土 まばらに砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	体部外面下半部は回転へら削り、内面は回転ナゲ。	SAR 55
第27回 2-11	II 区 黑色 土層下部	小形壺 器	器	厚 1.0	底部は平底。	胎土 0.1mm程の砂粒を多く含む。 色調 やや薄い青灰	底部外面は回転系切り痕を残す。その他は内外面とも回転ナゲ。	SAR238
第27回 2-12	II 区 J-K-17	小形壺 器	器	厚 1.1	底部は平底。	胎土 1mm程の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転系切り痕を残す。その他は内外面とも回転ナゲ。	SAR267
第27回 2-13	III 区 F-14	小形壺 器	器	厚 0.7	底部は平底で、体部との境に低い高台を付ける。	胎土 砂粒はほとんど含まず。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は静止系切り痕を残す。その他は内外面とも回転ナゲ。高台は貼り付けによる。	SAR262

種類 番号	遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第27回 2-14	III 区 F-14	把手付 変形土器			胎土 砂粒をほとん ど含まず。 色調 青灰色 焼成 良好	内面は青海波紋	SAR159
第27回 2-15	III 区	把手付 變形土器			胎土 1mm前後の砂 粒を含む。 色調 外面 黒灰色 内面 青灰色 焼成 良好	内面はヨコナデ	SAR196
第27回 2-16	I 区	把手付 變形土器			胎土 1mm前後の砂 粒をきばらに含む 色調 青灰色 焼成 良好	内面はヨコナデ	SAR250
第27回 2-17	II 区 黒褐色 土層	提瓶		退化した把手が付く。	胎土 1mm前後の砂 粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	外面にカキ目、 内面は回転ナデ。	SAR316
第27回 2-18	M-20 第二層 褐色土	壺 器厚 1.2		底部の外縁に高台を 有し、体部は内凹氣 味に立ち上がる。	胎土 砂粒をわずか に含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部内面には青海波 紋の叩き目、底部外 面は叩きの後ナデ。 高台は貼り付けによ る。	SAR162
第27回 2-19	II 区 黒色 土層下部	壺 器厚 1.0		底部外縁に高台を有 す。	胎土 1mm以下の砂 粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部内面には青海波 紋の叩き目、底部外 面は叩きの後ナデ。 高台は貼り付けによ る。	SAR276
第27回 2-20	K-19ベ ルト墨褐 色土層	壺 器厚 0.7		底部は平底。底部外 縁に高台を有し、外 下方に張り出る。高 台端部はやや凹む。	胎土 1mm前後の砂 粒を含む。 色調 外面 黒っぽい 青灰色 内面 青灰色 焼成 良好	底部内面には青海波 紋の叩き目、底部外 面は叩きの後ナデ。 高台は貼り付けによ る。	SAR310
第27回 2-21	II 区 茶褐色 砂質土	壺 器厚 0.9			胎土 0.5mm以下の砂 粒を含む。 色調 内外面 紫っ ぽい青灰色 断面 青灰色 焼成 良好	外面はヨコナデ及び 青海波紋。 体部内面は青海波紋 の叩き目	SAR265
第27回 2-22	O-23 耕作土 第2層	壺 器厚 0.9			胎土 0.5mm以下の砂 粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも緩方向の ナデ。	SAR283
第28回 3-23	III 区 F-12	長頸壺	口径 6.0 器厚 0.6	口頸部は基部よりわ ずかに外反して立上 り、口縁部は直立し、 頸部はやや傾く。	胎土 1mm以下の小 さな砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好 内面に自然釉がかか る。	内外面とも回転ナデ	SAR118
第28回 3-24	III 区 G13-14 ベルト	反頸壺	口径 9.5 器厚 1.1	口頸部は基部より直 立した後、外唇しな がら立ち上がり、口 縁部で外方へのびる 。口縁部端部は丸 い。口縁部の中央寄 りに2条の沈線を施 す。	胎土 ほとんど砂粒 を含まず。 色調 外面 灰茶褐色 内面 青灰色 焼成 良好	口頸部接合付近はヨ コナデ。その他は内 外面とも回転ナデ。	SAR202
第28回 3-25	II 区 J-16- 17	壺 器厚 1.0		口頸部は基部より一 度内傾して立ち上 り、更に外反する。	胎土 1mm前後の砂 粒をまばらに含む。 色調 淡い青灰色 焼成 やや甘い	内外面とも回転ナデ	SAR219
第28回 3-26	II 区 茶褐色 砂質土	壺 器厚 1.5 高台径 9.2×8.9		底部は平底で体部と の境に低い高台を有 す。高台は逆くの字 形で、内間に接地す る。	胎土 大きめの砂粒 を含む。 色調 青灰色 焼成 長好 内外面の一部に自然 釉がかかる。	底部外面には回転系 切り痕を残す。その 他は内外面とも回転 ナデ。高台は貼り付 け。	SAR191

## 才ノ峰遺跡

標番	図号	遺構番種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第28回	III 区 3-27	長窓蓋 加工段	器厚 1.6 高台径 8.7	底部は平底に近く、体部との境に低い高台を有す。高台は逆くの字形で端部はやや曲む。	胎土 砂粒をまばらに含む。色調 黒っぽい青灰色。焼成 良好	胎土外面下半部は回転ヘラ削り。その他は内外面とも回転ナデ。高台は貼り付け。	SAR 18
第28回	II 区 3-28	蓋	器厚 1.5 高台径(7.7)	底部は半底で、やや外方へ開き気味の高台を有す。端部はやや曲む。	胎土 1mm以下の砂粒を含む。色調 黒っぽい青灰色。焼成 良好	胎土外面下半部は回転ヘラ削り。その他は内外面とも回転ナデ。高台は貼り付け。「水」のへ記号。	SAR 217
第28回	III 区 3-29	蓋	器厚 0.7		胎土 砂粒を含まず。色調 黒っぽい青灰色。焼成 良好	胎土外面下半部は回転ナデ。内外面とも回転ナデ。	SAR 385
第28回	III 区 3-30	蓋	胴部径 15.4 器厚 0.8	体部は肩部が張らず、やや上位に最大径をもつ。	胎土 砂粒を含む。色調 青灰色。焼成 良好。体部外面に自然釉がかかる。	胎土外面下半部はヘラ削りの後ヨコナデ、内面は回転ナデ。	SAR 95
第28回	II 区 3-31	蓋 有機質上	器厚 1.2 高台径(8.6)	底部は平底、やや外方へ開き気味の高台を有す。	胎土 0.2mm以下の砂粒を多く含む。色調 青灰色。焼成 良好。内面に自然釉がかかる。	胎土外面は特手糸切りの上から回転ナデ。体部外面下半部はヘラ削り、内面は回転ナデ。	SAR 254
第28回	II 区 3-32	蓋	胴部径 18.8 器厚 0.8	体部は肩部が張らず、やや上位に最大径をもつ。	胎土 1mmの砂粒を多く含む。色調 外面 勃い灰色 内面 灰白色 断面 晴天褐色	胎土外面ともに回転ナデ。	SAR 315
第28回	III 区 3-33	長窓蓋 加工段	胴部径 15.9 器厚 0.9 高台径 8.5	口窓部は基部よりやや内傾して立ち上がり、頭に外反する。肩部はなんだかで、体部は最大径をもつ。底部は平底で、逆くの字形の高台をもち、端部はやや曲む。体部はやや内傾しながらゆるやかに立ち上がる。	胎土 砂粒を含まず。色調 青灰色。焼成 良好。外面上に自然釉がかかる。	胎土外面は回転糸切りを残す。体部外面下半部は回転ヘラ削り。内面下半部と高台付近は回転ナデ。高台は貼り付け。	SAR 15
第28回	III 区 3-34	長窓蓋	器厚 1.0 高台径(8.0)	底部は平底で外方へ開く高台をもつ。端部は外傾し、やや曲む。	胎土 細かな砂粒をまばらに含む。色調 茶褐色。焼成 良好	胎土外面は回転糸切りを残す。体部外面下半部は回転ヘラ削り。高台は貼り付け。	SAR 34
第28回	黑褐色	蓋	器厚 0.8 高台径(7.5)	底部は平底。低い小さな高台をもつ。	胎土 ほとんど砂粒を含まず。色調 青灰色。焼成 良好。内面は自然釉	胎土外面は回転ナデ。内面は青海波紋で未調査。	SAR 150
第28回	3-36	蓋	胴部径 45.0 器厚 0.6	窓部が長く、中央より上位に最大径がある。肩はあまり張らない。	胎土 ほとんど砂粒を含む。色調 青灰色。焼成 良好	外画は叩きを 2, 3 cmごとにヨコナデ。内面は青海波紋で未調査。	
第29回	III 区 4-37	窓	口径(24.6) 器厚 1.0	口窓部は外傾して上方にのび、更に端部近くで外反し、わずかに膨厚。端部は丸い。窓部に2条の弦線とクシギ波紋を施す。	胎土 1mm前後の砂粒を含む。色調 内面 青灰色 外面 黑灰色。焼成 良好	胎土外面ともヨコナデ。	SAR 85
第29回	III 区 4-38	窓	器厚 1.2	窓部は外上方にむけてのびる。端部は丸い。窓部は2段に沈線が2条ずつ、3段に直状板が施される。	胎土 砂粒を含む。色調 内面 黄褐色 外面 青灰色。焼成 良好。内面に自然釉がかかる。	胎土外面とも回転ナデ。窓部のくびれ付近に指圧痕が残る。	SAR 250

擇委号	遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第29号 4-39	III区 E-11	甕	器厚 1.1	口縁部は外上方にむけてのびる。頸部は2段に2条が2条ずつ、3段に波状紋が施される。	胎土 砂粒をほとんど含ます。 色調 内面 灰緑色 外側 青灰色 焼成 良好 内面に自然釉がかかること。	内外面ともヨコナデ	SAR176
第29号 4-40	III区 E-11	甕	器厚 1.1	口縁部は外上方にむけてのびる。口縁部はあまり肥厚しない。頸部は3段に1条、2条、3条の波状と、波状紋が3段に施される。	胎土 砂粒をほとんど含ます。 色調 黒っぽい青灰 焼成 良好 内面に自然釉がかかること。	内外面ともヨコナデ	SAR177
第29号 4-41	III区 G-13	甕	器厚 0.8	口縁部はやや外反し、端部は丸い。1条の波状を中心2段の波状紋が施される。	胎土 1mm以下の小砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ	SAR 87
第29号 4-42	III区 第3加工段	甕	器厚 0.9		胎土 1mm程の砂粒をわずかに含む。 色調 断面は青灰色 焼成 良好 全面に自然釉がかかること。	内外面とも回転ナデ	SAR446
第29号 4-43	III区 G-14	甕	口径(19.4) 器厚 0.9	口縁部はくの字形を呈す。端部は丸い。	胎土 細かな砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良好	口縁部くびれ部分外面に叩き目、内面に青海波紋、その他の内外面とも回転ナデ。	SAR 28
第29号 4-44	III区 G-14	甕	口径(21.0) 器厚 0.6	端部は丸い。	胎土 わずかに砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ。	SAR 30
第29号 4-45	III区 G-13	甕	器厚 0.8	頸部には半瓶竹管紋を施す。	胎土 1mm以下の白い砂粒をまばらに含む。 色調 内外面は黒灰色 焼成 良好	体外部上面は叩き目、内面は青海波紋で未調整、その他は内外面ともヨコナデ。	SAR 88
第29号 4-46	III区 SD02	甕	器厚 1.4	頸部上面に2条の波状	胎土 0.5mm程の砂粒をわずかに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	頸部くびれ部外面は平行叩き目ヨコナデで消す。内面は同心円紋の叩き、一部に指頭圧痕、その他は内外面ともヨコナデ。	SAR406
第29号 4-47	III区 第II加工段	甕	器厚 0.7		胎土 1mm程の白い砂粒を含む。 色調 内面 黒っぽい青灰色 断面 外面は青灰色	外面は叩き痕、内面は青海波紋	SAR248
第29号 4-48	III区 第II加工段	甕	器厚 0.8		胎土 1mm程の白い砂粒を含む。 色調 内面 黒っぽい 断面、外側は青灰色 焼成 良好	外面は叩き痕、内面は青海波紋。	SAR249
第29号 4-49	III区 SB 10	甕	器厚 1.1		胎土 1mm前後の砂粒を含む。 色調 外面 青灰色 断面 薄い茶褐色 焼成 良好	外面は叩き痕、内面は青海波紋。	SAR424
第29号 4-50	III区 SB02	甕	器厚 0.6		胎土 まばらに白・黒の砂粒を含む。 色調 外面 青灰色 内面 濃い青灰色 断面 薄い茶褐色 焼成 やや不良	外面は叩き痕、内面は青海波紋。	SAR434

## 才ノ峰遺跡

標番	遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第29回 4-51	III 区 S B02	甕	器厚 0.6		色調 薄い青灰色 焼成 やや不良	外面は叩き痕、内面 は青海波紋。	SAR425
第29回 4-52	III 区 第6 加工段	甕	器厚 0.8		胎土 1mm程の砂粒 をまばらに含む。 色調 内面 黒っぽい青 外面と断面は青灰 色 焼成 良 好	外面は叩き痕、内面 は青海波紋。	SAR379
第29回 4-53	III 区 第3 加工段	甕	器厚 0.5		胎土 0.5mm程の砂 粒をまばらに含む。 色調 内外 面は黒灰色 断面は青灰色 焼成 良 好	外面は叩き痕、内面 は青海波紋。	SAR373
第30回 5-54	I 区 M-20	甕	器厚 0.8		胎土 1mm程の砂粒 をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	外面は叩き痕、内面 は放射状波紋。	SAR269
第30回 5-55	II 区 L-19	甕	器厚 1.0		胎土 0.3mm以下の 細かな砂粒を含 む。 色調 青灰色 焼成 良 好	外面は叩き痕、内面 は螺旋状波紋。	SAR270
第30回 5-56	III 区 S B04	甕	高(2.2) 器厚 1.2	底部はやや丸味を帯 びる。	胎土 1mm前後の砂 粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好 内面の一部に自然物 がかかる。	外面は回転 ハラ削 り、内面は回転ナ デ。 J×Jのハ ラ記号	SAR183
第30回 5-57	I 区 Q-24	甕	高 (1.9) 器厚 1.2	底部は半底。	胎土 ほんとん砂粒 を含まず。 色調 青灰色 焼成 良 好	外面は回転 ハラ削 り、内面は回転ナ デ。	SAR259
第30回 5-58	III 区 第3 加工段	蓋	器厚 0.9		胎土 1mm程の砂粒 を含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	天井部外面はハラお こし。その他は内外 面とも回転ナデ。 J×Jのハ ラ記号か?	SAR450
第30回 5-59	III 区 S B02	蓋	口 径(10.1) 器高 4.0 器厚 1.0	天井部は平底でやや 内壁しながら下り、 更に口縁部で内側に 屈曲した部に至る。 底部は使用のため磨 滅。	胎土 0.5mm以下の 砂粒を含む。 色調 内面は青灰色 焼成 外面に自然物がかか る。	天井部外面はハラお こし。その他は内外 面とも回転ナデ。	SAR436
第30回 5-60	II 区 茶褐色 砂質土	蓋	器厚 1.1	天井部は平底。	胎土 砂粒をほんと ど含まず。 色調 青灰色 焼成 良 好 外面上に自然物がかか る。	天井部外面はハラ切 りはなしの後斜行 状の痕がつく。 天井部内面は不整方 向のナデ。	SAR151
第30回 5-61	III 区 G-14	蓋	口 径(10.2) 器高 4.3 器厚 1.1	天井部は平底で、ゆ るやかに内壁しながら 下る。底部は丸い。 天井部上半部に1条 の沈線を施す。	胎土 砂粒をほんと ど含まず。 色調 外面 青灰色 断面 薄い茶褐色 焼成 やや甘い	天井部外面はハラ削 り、内面は不整方向 のナデ。 その他は内外面とも 回転ナデ。	SAR244 ヘラ記号 か。
第30回 5-62	III 区 第3 加工段	蓋	器厚 0.6	端部は使用のため磨 滅。	胎土 0.5mm以下の 砂粒をわずかに含 む。 色調 青灰色 焼成 良 好	内面は回転ナデ	SAR372
第30回 5-63	II 区 排土	蓋	器厚 0.8	天井部上半部に1条 の沈線を施す。	胎土 0.5mm以下の 砂粒を含む。 色調 やや薄い青灰 色 焼成 良 好	天井部内面は半回転 ナデの後ナデ、その 他は回転ナデ。	SAR291 ヘラ記号

採集番号	遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第30回 5-64	III 区 G-14	蓋	口径(10.4) 高さ 3.1 厚 1.0	天井部は平底で外下 方へゆるやかにのび たのち、端部付近で やや内側に屈曲する。	胎土 ほとんど砂粒 を含まず。 色調 青灰色 焼成 良好	天井部外面はヘラお こし、内面は不整方 向のナデ。その他は 内外面とも回転ナデ。	SAR 39
第30回 5-66	III 区 G-13	蓋	口径 10.7 高さ 4.1 厚 0.9	天井部は平底で、ゆ るやかに内側しなが ら下り、更に端部で わずかに内側に屈曲 する。	胎土 1mm前後の砂 粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良好	天井部外面はヘラお こし。	SAR 7
第30回 5-67	III 区 第IV 加工段	蓋	口径(9.3) 高さ 3.9 厚 0.7	天井部はやや丸味を 帯びて、外下方にゆ るやかにのびた後、 端部付近でやや内側 に屈曲する。	胎土 1mm以下の細 かな砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	天井部外面は回転へ ラ削り、その他は内 外面とも回転ナデ。	SAR 166
第30回 5-68	III 区 G-13	蓋	口径(9.7) 高さ 3.6 厚 0.7	天井部は平底で、や や内側しながら下 り、端部付近でわずかに 内側に屈曲する。	胎土 1mm前後の砂 粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	天井部外面は回転へ ラ削り、その他は内 外面とも回転ナデ。 ヘラ記号	SAR 105
第30回 5-69	III 区 第IV 加工段	蓋	口径 厚 0.8	天井部中央面がやや 平坦	胎土 1mm以下の砂 粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	天井部内面は不整方 向のナデ。その他は内 外面とも回転ナデ。	SAR 164 「×」のヘ ラ記号
第30回 5-70	I 区 M-21	蓋 器	厚 0.8		胎土 1mm以下の砂 粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	外面はヘラ削り後ナ デ、内面は不整方 向のナデ。	SAR 289 ヘラ記号
第30回 5-71	I 区 Q-23	蓋 器	厚 1.0		胎土 1mm以下の砂 粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	天井部外面はヘラお こし、内面は一方向 のナデ。その他は回 転ナデ。	SAR 307 「/」 ヘラ記号
第30回 5-72	III 区 G-14	蓋 器	厚 1.0		胎土 0.5mm以下の 砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	天井部外面はヘラお こし、内面は一方向 のナデ。その他は回 転ナデ。	SAR 302 「/」 ヘラ記号
第30回 5-73	III 区 第2 高杯 器	厚 0.4			胎土 微砂粒を含 む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ	SAR 384 2条の沈線 のヘラ記号
第30回 5-74	I 区 G-14	蓋 器	厚 0.6		胎土 0.5mm以下の 砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 やや甘い	内外面とも回転ナデ	SAR 263
第30回 5-75	III 区 SB02	蓋 器	厚 0.9	端部より低いかいえり をもつ。	胎土 0.2mm程の砂 粒をわずかに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	外面は回転ヘラ削 り、 内面はナデ。	SAR 432 ヘラ記号
第30回 5-76	III 区 第2 加工段	蓋	口径(9.9) 器 厚 0.7		胎土 1mm程の砂粒 を含む。 色調 内面、断面青灰色 外側 黒っぽい青 灰色 焼成 良好	天井部外面は回転へ ラ削り、その他は内 外面とも回転ナデ。	SAR 453
第31回 6-77	I 区 P-24	蓋	口径 11.7 器 厚 2.8 器 厚 0.9	天井部はやや平坦で、外 下方にむかってゆる やかにのびる。腹窓 部状のつまみをもつ。 かいえりはわずかに 端部より高い。	胎土 1mm前後の砂 粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良好	天井部外面は回転へ ラ削り、内面は不整方 向のナデ。その他は内 外面とも回転ナデ。 つまみは押付け。	SAR 232
第31回 6-78	III 区 F-14	蓋	口径 13.1 器 厚 3.6 器 厚 0.9	天井部は平底で、外 下方にむかってゆる やかにのびる。腹窓 部状のつまみをもち、 中央部はやや凹む。 かいえりは端部と同じ 高さ。	胎土 砂粒が少な い。 色調 やや薄い青灰 色 焼成 やや甘い。	天井部外面はヘラ削 り、その他の内外面 とも回転ナデ。	SAR 9

## 才ノ峰遺跡

括弧番号	遺構	器種	法規 (cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第31回 III 区 6-79 第2 加工段	蓋	口器	径(14.0) 厚 1.1	天井部よりゆるやかに外下方にのびる。かえりは端部よりわずかに高い。	胎土 1mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	天井部外面は回転ヘラ削り、内面は不整方向のナデ。その他は外面とも回転ナデ。	SAR170
第31回 IV 区 6-80 G-14	蓋	口器	径(19.3) 厚 1.0	天井部は平坦で、外方向へゆるやかにのびる。口縁部は直線的に広がり、端部に至る。かえりは端部よりわずかに高い。	胎土 砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	天井部外面は回転ヘラ削り、内面は不整方向のナデ。その他は外面とも回転ナデ。外面上半部の一辺にカキ目がある。	SAR 25
第31回 IV 区 6-81 G-14	蓋	口器	径(18.0) 厚 0.8	かえりは端部よりわずかに高い。	胎土 小さな砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ	SAR 35
第31回 III 区 6-82 第4 加工段	蓋	口器	径(14.0) 厚 0.6	かえりは端部と同じ高さ。	胎土 ほとんど砂粒を含みます。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ	SAR380
第31回 III 区 6-83 S D02	蓋	口器	径(18.0) 厚 1.0	かえりは端部より低い。	胎土 1mm以下の白い砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ	SAR 84
第31回 III 区 6-84 G-14	蓋	口器	径(16.1) 高(2.4) 厚 0.8	かえりは端部と同じ高さ。	胎土 まれに2~3mm前後の砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ 「×」の ヘラ記号	SAR 36
第31回 III 区 6-85 G-13	蓋	口器	径(15.9) 厚 0.9	かえりは端部より高い。	胎土 砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は内外面とも回転ナデ。	SAR106
第31回 III 区 6-86 F-13	蓋	口器	径(16.0) 厚 0.8	かえりは端部より高い。	胎土 砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ	SAR 62
第31回 III 区 6-87 F-13	蓋	口器	径(17.0) 厚 0.9	かえりは小さく、端部と同じ高さ。	胎土 1~2mmの砂粒をまばらに含む。 色調 内面 暗茶褐色 外側 青灰色 焼成 やや甘い	内外面とも回転ナデ	SAR 56
第31回 III 区 6-88 第2 加工段	蓋	口器	径(17.0) 厚 0.7	かえりは小さく、端部と同じ高さ。	胎土 砂粒をほとんど含まず。 色調 青灰色 焼成 良好 外側に自然模がかかる。	内外面とも回転ナデ	SAR171
第31回 II 区 6-89 排土	蓋	口器	径(19.1) 厚 0.9	端部がわずかに凹む。	胎土 0.5mm以下の砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ	SAR322
第31回 III 区 6-90 H-14	蓋	口器	径 18.1 高 4.6 厚 1.2	天井部は平らで、やや外方向へだらかに下る。端部は肥厚する。擬宝珠状のつまみをもつ。	胎土 2~3mmの砂粒をまばらに含む。 色調 やや薄い青灰色 焼成 やや甘い	天井部外面は回転ヘラ削り。内面は不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR158
第31回 III 区 6-91 第6 加工段	蓋	口器	径 15.1 高 2.4 厚 0.8	天井部は平らで、やや内側気味にゆるやかに下る。口縁部はほぼ平面にのび、端部は丸い。環状のつまみをもつ。	胎土 砂粒をほとんど含まず。 色調 青灰色 焼成 良好	天井部外面はヘラ削りの後回転ナデ、内面は回転ナデの後、旋方向のナデ。その他は回転ナデ。つまみは貼り付け。	SAR 5

## オノ 峠 遺跡

標 号	遺 構	器 種	法 量 (cm)	形 独 の 特 徴	胎 土・焼 成	手 法 の 特 徴	備 考
第31図 6-92	III 区 H-14	蓋	口 径 13.8 器 高 2.6 器 厚 0.9	天井部は平らで、や や内壁気味にゆるや かに下る。口縁部は わざかながら外反 し、端部は丸い。環 状のつまみをもつ。 成形時のひずみが生 じる。	胎土 2~3 mmの砂 粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良 好 内面の一部には自然 な	天井部外面は回転ヘ ラ削り、内面は回転 ナデの後一方に向か 上げナデ。その他は 外内面とも回転ナ デ。つまみ付近は參 止系切り痕の上から ナデ。つまみは貼り 付け。	SAR200
第31図 6-93	II 区 黒褐色 有機質上	蓋	口 径(14.6) 器 高 2.8 器 厚 0.8	天井部は平らでゆる やかに広がる。口縁 部は一旦内弯して垂 直に下がる。端部は丸 い。環状のつまみをもつ。	胎土 1~2 mmの砂 粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	天井部外面は回転ヘ ラ削り、その他の内 外面とも四軸ナデ。 つまみは貼り付け。	SAR324
第31図 6-94	III 区 F-13	蓋	口 径(16.0) 器 厚 0.4	口縁部はわざかに内 弯したのちほぼ垂直 に下がる。端部は丸 い。	胎土 砂粒をまばら に含む。 色調 内面 青灰色 外面 黒っぽい青 灰色 焼成 良 好	内外面とも回転ナ デ	SAR 54
第31図 6-95	II 区 K-18	蓋	口 径(18.2) 器 厚 1.0	天井部より内壁気味 に下り、口縁部は底 部に遼かくのび、端 部はやや外傾する。 端部は丸い。	胎土 1 mm前後の砂 粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	天井部外面は回転ヘ ラ削り。つまみ部分 付近はヘラ削り後四 軸ナデ。その他は回 転ナデ。	SAR268 底部内面に 使用痕
第31図 6-96	III 区 G-14	蓋	口 径(17.0) 器 高 (2.6) 器 厚 0.9	天井部は平らで内壁 しなが下り、口縁部 ではほぼ直面のび、 端部は丸い。焼成時 のひずみが生じる。	胎土 砂粒をまばら に含む。 色調 青灰色 焼成 やや甘い。	天井部外面は回転ヘ ラ削り、内面には粘 土被膜が残る。その 他の内外面とも回転 ナデ。つまみ付近は 回転ナデ。つまみは 貼り付け。	SAR 27
第31図 6-97	III 区 G-14	蓋	口 径(17.0) 器 高 3.0 器 厚 0.9	天井部より外下方に むかってなだらかに 広がる。口縁部は短 く直面に下り、端 部は丸い。環状の つまみをもつ。	胎土 砂粒をまばら に含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	天井部内面は不整方 向のナデ、その他は 内外面とも回転ナ デ。 つまみは貼り付け。	SAR 41
第31図 6-98	I 区 M-20	蓋	口 径(19.3) 器 厚 0.9	天井部より外下方に むかって広がり、口 縁部より細曲して外 方へのび、更に直面 に下がる。端部は丸 い。	胎土 まれに2~3 mmの砂粒を含む。 色調 外面 青灰色 焼成 甘い	天井部外面は回転ヘ ラ削り、内面は不整 方向のナデ、その他 は内外面とも回転ナ デ。	SAR275
第31図 6-99	II 区 JK-17	蓋	口 径(18.0) 器 厚 0.8	天井部より外下方に むかって広がり、口 縁部はわざかに外反 した後細曲する。端 部は丸い。	胎土 1 mm以下の砂 粒を含む。 色調 断面 黒い茶褐色 焼成 良好 外齒の一部に自然摺 がかかる。	天井部外面は回転ヘ ラ削り、内面は不整 方向のナデ、その他 は内外面とも回転ナ デ。	SAR274
第31図 6-100	III 区 H-14	蓋	口 径(12.9) 器 厚 0.9	口縁部は短かく垂直 に下る端部は丸い。 焼成時のひずみが生 じる。	胎土 1 mm以下の砂 粒をまばらに含む。 色調 黒っぽい青灰 色 焼成 良 好	天井部外面に同軸系 切り痕が残る。天井 部内面には不整方 向のナデ、その他は 内外面とも回転ナ デ。	SAR 77
第31図 6-101	I 区 K-20	蓋	口 径(12.9) 器 厚 0.9	天井部は平らでやや 外壁気味に外方向へ 下り、更に外方向へ短 かくのび、細曲する。 端部は丸い。	胎土 1~2 mmの砂 粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	天井部外面に同軸系 切り痕が残る。内面 は不整方向のナデ、 その他は内外面とも 回転ナデ。	SAR336
第31図 6-102	III 区 黒褐色 土層	蓋	口 径(13.4) 器 厚 0.7	天井部より外方向へ ゆるやかに下り、更に 外方向へのび細曲す る。端部は丸い。	胎土 1 mm前後の砂 粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	天井部外面は回転ヘ ラ削り、内面は不整 方向のナデ、その他 は内外面とも回転ナ デ。	SAR337

## 才ノ峰遺跡

標番	遺構	器種	法環(cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第31回 6-103	III 区 F-13	蓋	口 径(26.0) 厚 0.9	口縁部は外方向へ短 かくのび屈曲する。 端部は丸い。	胎土 砂粒を含む 色調 青灰色 焼成 不 良	1 mm前後の砂 粒を含む 内外面とも回転ナデ	SAR407
第31回 6-104	III 区 第II 加工段	蓋	器 厚 0.7	變生珠状のつまみを もつ。	胎土 砂粒を含ま ず 色調 青灰色 焼成 良 好	1 mm前後の砂 粒を含む 内外面とも回転ナデ	SAR246
第32回 7-105	III 区 G-13	底	器 厚 0.9	体部は内彎する。	胎土 砂粒を含む 色調 青灰色 焼成 やや良好	1 mm前後の砂 粒を含む 内外面とも回転ナデ	SAR174
第32回 7-106	III 区 F-12	蓋杯(身) 器 厚	口 径(10.2) 受部径(11.9) 高 3.0 厚 0.8	たちあがりは内傾し て立ち上がり、端部 は丸い。受部は短か く、やや外方にの びる。底部は平底で、 ゆるやかに広がり、 受部に至る。	胎土 砂粒をまばらに含む 色調 青灰色 焼成 良 好	底面外側はヘラ削り 及びヘラおこし、そ の他は内外面とも回 転ナデ。	SAR120 ヘラ記号 外面に使用痕
第32回 7-107	III 区 第3 加工段	蓋杯(身)	口 径 9.5 受部径 11.8 高 3.5 厚 0.9	たちあがりは内傾し て立ち上がり、端部 は丸い。受部はやや 外方にのびる。底 部は丸く、ゆるやか に立ち上がり、受部 に至る。	胎土 砂粒をほとん ど含まず 色調 青灰色 焼成 良 好	底面外側はヘラおこ し、内側は回転ナデ の後、不整方向にナ デ。その他は内外面 とも回転ナデ	SAR 6
第32回 7-108	III 区	蓋杯(身)	口 径(8.7) 受部径(10.8) 高 3.5 厚 0.9	たちあがりは内傾し て立ち上がり、端部 は丸い。受部はやや 外方にのびる。底 部は丸く、外方に 広がり、受部に至 る。	胎土 砂粒をほとん ど含まず 色調 薄い青灰色 焼成 やや青	底面外側はヘラおこ し、内側は回転ナデ の後タテ方向にナ デ。その他は内外面 とも回転ナデ。	SAR 20
第32回 7-109	III 区 第IV 加工段	杯 身	口 径 8.4 受部径 10.6 高 3.2 厚 0.7	たちあがりは内傾し て立ち上がり、端部 は丸い。受部はやや 外方にのびる。底 部は丸く、外方に 広がり、受部に至 る。	胎土 1 mm前後の砂 粒を含む 色調 青灰色 焼成 良 好	底面外側は回転ヘラ おこし、その他の内 外面とも回転ナデ。	SAR173
第32回 7-110	III 区 第V 加工段	蓋杯(身)	口 径 8.7 受部径 9.9 高 2.5 厚 0.5	たちあがりは内傾し て立ち上がり、端部 は丸い。受部はやや 外方にのびる。底 部は丸く、ゆるやか に立ち上がり、端部 に至る。	胎土 まれに砂粒を 含む 色調 青灰色 焼成 良 好	底面外側は回転ヘラ 削り、その他の内 外面とも回転ナデ。	SAR 1
第32回 7-111	II 区 黒褐色	杯 身	器 厚(2.3)	底部は丸底で、外上 方にゆるやかに広が る。	胎土 1 mm前後の砂 粒をまばらに含む 色調 青灰色 焼成 良 好 外面に自然粒がかか る。	底面外側はヘラおこ し、内側は不整方向 のナデ。	SAR131
第32回 7-112	III 区 第VI 加工段	杯 蓋 器	厚 0.7	天井部は丸底。	胎土 1 mm以下砂 粒をまばらに含む 色調 青灰色 焼成 良 好	天井部内側は不整方 向のナデ。その他は 内外面とも回転ナ デ。	SAR164 「×」のヘ ラ記号
第32回 7-113		蓋杯(身)	器 厚 0.7	底部は丸身を帯びる。	胎土 砂粒はほとん ど自立しない。 色調 青灰色 焼成 良 好	底面外側は回転ヘラ 削りはない、内側は 不整方向のナデ。そ の他の内外面とも回 転ナデ。	SAR198 底面内側に 「×」のヘ ラ記号 底部外側に 使用痕
第32回 7-114	II 区 黒褐色 土層	杯 身	器 厚 1.1	底部は平底で、外上 方にむかってゆるや かに広がる。	胎土 1 mm前後の砂 粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底面外側は回転ヘラ 削り、内側は不整方 向のナデ。	SAR195 「×」の ヘラ記号

## 才ノ井遺跡

括弧番号	造構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第32図 7-115	III区 G-14	蓋杯(身)器	厚 1.1	底部はやや丸味を帯びて、外上方にゆるやかに立ち上がる。	胎土 小さな砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面はヘラ切りはない。内面は不整方向のナデ、その他は回転ナデ。	SAR 42
第32図 7-116	I区 M-21	杯 身 器	厚 0.8	底部は平底で、短く立ち上がった後外方に広がる。	胎土 極細かな砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好 外面上に自然釉がかかること。	内外面とも回転ナデ	SAR 290 「×」の ヘラ記号
第32図 7-117	III区 G-14	杯 身 器	厚 0.9	底部は平底で、外上方にむけでゆるやかに広がる。	胎土 極細かな砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面はヘラ切りはない、その他は内外面とも回転ナデ。	SAR 44
第32図 7-118	I区 M-21	杯 身 器	厚 0.9	底部は丸底。	胎土 1mm以下の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面はヘラ削り	SAR 288
第32図 7-119	III区 F-13	杯 口 筋 高 器	径 15.5 高 5.0 厚 1.0	底部は丸底で、内唇気味に外上方に立ち上がる。	胎土 2~3mmの大砂粒をまばらに含む。 色調 黄い青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ	SAR 157
第32図 7-120	III区 G-13	杯 口 筋(13.0) 番 厚 0.8		口縁部はやや外唇し、端部に至る。	胎土 0.5mm以下の細かな砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は指、またはヘラ状工具による調整、内面は一方向へのナデ、体部外面は回転ヘラ削り。	SAR 102
第32図 7-121	II区 黒褐色	杯 器	厚 0.9	底部は平底	胎土 1mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面に回転糸切り痕を残す。一部に回転ヘラ削りを残す。他は回転ナデ。	SAR 209 底部内面に使用痕
第33図 7-122	III区 第3 加工段	杯 口 筋(11.0) 器 厚 0.9		口縁部はわずかにくびれ、端部は丸い。	胎土 1mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 やや薄い青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ	SAR 451 外面に使用痕
第33図 7-123	III区 F-13	杯 口 筋(13.6) 高 4.4 厚 0.8		やや内唇気味に立ち上がり、口縁部は外反する。端部は丸い。	胎土 1mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面はヘラ削り、内面は不整方向のナデ、その他は内外面とも回転ナデ。	SAR 61
第32図 7-124	III区 G-14	杯 器 厚 1.0			胎土 大きな砂粒を含ます。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転ヘラ削り、竹管紋を残す。内面は不整方向のナデ、その他は内外面とも回転ナデ。	SAR 38
第32図 7-125	II区 茶褐色 砂質土	口 筋(11.5) 器 高 3.8 器 厚 0.8		ゆるやかに外上方に立ち上がり、口縁部はややくびれる。端部は丸い。	胎土 まれに1mm程の砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ	SAR 206
第32図 7-126	I区 O-22	杯 口 筋(11.8) 高 4.0 器 厚 1.0		底部は丸底で、内唇気味に外上方に立ち上がる。口縁部はやや内傾した後、端部で強く外反する。焼成時のひずみを生じる。	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良好 内面の一部に自然釉がかかる。	底部外面は回転ヘラ削り、その他は内外面とも回転ナデ。	SAR 245
第32図 7-127	III区 G-13	杯 器 厚 1.0		底部は平底	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面はヘラ切りではなく後ナデ、内面は不整方向のナデ、その他は回転ヘラ削り。	SAR 103
第33図 8-128	III区 F-13	杯 器 厚 0.6		底部は平底に近い。体部は内唇しながら立ち上がる。	胎土 1mm前後の砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面に静止糸切り痕を残す。内面は不整方向のナデ、その他は回転ナデ。	SAR 63

## 才ノ崎海岸

番号	図面	規格	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第33回 8-129	III 区 G-13	杯	器 器	厚 0.7	底部は平底で、内壁 しながら立ち上がる。	胎土 1mm以下の砂 粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面に静止系切 り痕を残す。内面は 一方向への粗いナ デ。	SAR 97
第33回 8-130	II 区 L-18	杯	器 器	高 厚 0.6	底部は内壁しながら 立ち上がる。	胎土 ほとんど砂粒 を含まず。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面に静止系切 り痕を残す。その他 は内外面とも回転 ナデ。	SAR 285
第33回 8-131	III 区 第3 加工段 SK01	杯	口器 器	径(11.2) 厚 0.3	口縁部はS字状を呈 す。	胎土 微砂粒を多量 に含む。 色調 灰白色 やや不良	内外面とも回転ナデ	SAR 375
第33回 8-132	III 区 G-13	杯	口器 器	径 12.3 厚 0.7	底部は平底、体部は やや内壁し、外上方 に広がる。口縁部は くの字形に立ち上 がる。	胎土 砂粒を含む。 色調 青灰色 やや甘い。	底部外面に回転系切 り痕を残す。体部は 内外面とも回転ナ デ。	SAR 23 底部内面は 豊城
第33回 8-133	III 区 G-14	杯	口器 器	径(12.8) 高 厚 0.6	底部は平底で、内壁 しながら立ち上 がる。口縁部はくの字 形に立ち上がる。	胎土 微砂粒を含 む。 色調 青灰色 やや甘い。	底部外面に静止系切 り痕(?)、内面は不 整方向のナデ、そ の他は内外面とも回 転ナデ。	SAR 24
第33回 8-134	II 区 茶褐色 砂質土	杯	器 器	厚 1.0		胎土 微砂粒を含 む。 色調 青灰色	底部外面に回転系切 り後回転ヘラ削り か。	SAR 139 底部内面は 豊城内面は 「×」のへ ラ記号
第33回 8-135	III 区 H-14	杯	口器 器	径(11.5) 厚 0.6	底部は平底で、内壁 しながら立ち上 がる。口縁部はくの字 形に立ち上がる。	胎土 1mm前後の砂 粒をまばらに含む。 色調 青灰色	底部外面に回転系切 り痕を残す。内面は 不整方向のナデ、そ の他は内外面とも回 転ナデ。	SAR 79
第33回 8-136	III 区 F-12	杯	口器 器	径 11.6×(13.5) 高 厚 0.6	底部から体部にかけ て内壁しながら立ち 上がる。口縁部はく の字形を呈す。	胎土 砂粒をまばら に含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面に回転系切 り痕と、浅いカキ目 状の凹線を残す。内 面は不整方向のナ デ、その他は内外面 とも回転ナデ。	SAR 22
第33回 8-137	III 区 F-14	杯	口器 器	径 12.9 高 4.0 厚 0.7	底部から体部にかけ て内壁気味に立ち上 がる。口縁部はくの 字形を呈す。	胎土 まれに5mm前 後の砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面に回転系切 り痕を残す。内面は 不整方向のナデ、そ の他は内外面とも回 転ナデ。	SAR 12
第33回 8-138	III 区 第2 加工段 ピット内	杯	口器 器	径 12.6 高 3.6 厚 0.6	体部は内壁し、口縁 部はくの字形に立ち 上がる。	胎土 砂粒を多く含 む。 色調 薄い青灰色 焼成 不良	底部外面に回転系切 り痕を残す。内面は 一方向に丁寧なナ デ、その他は内外面 とも回転ナデ。	SAR 3
第33回 8-139	II 区 黑色 有機質土	杯	口器 器	径(10.6) 高 3.8 厚 0.6	体部はやや内壁し ながら立ち上がる。口 縁部はわざわざくの 字形を呈す。	胎土 1mm前後の砂 粒を多く含む。 色調 青灰色	底部外面に回転系切 り痕を残す。内面は 不整方向のナデ、そ の他は内外面とも回 転ナデ。	SAR 323
第33回 8-140	III 区 G-13	杯	口器 器	径(12.5) 高 4.0 厚 0.4	底部は平底でやや内 壁しながら立ち上 がる。口縁部はわざ くの字形を呈す。	胎土 まれに2~3 mmの砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面には回転系 切り痕を残す。内面 は不整方向のナデ、そ の他は内外面とも回 転ナデ。	SAR 96
第33回 8-141	III 区 第2 加工段	杯	口器 器	径(13.8) 高 4.2 厚 0.7	体部はやや内壁し ながら立ち上がる。口 縁部はやや内傾す る。	胎土 0.5mm以下 の砂粒をまばらに含 む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ	SAR 452
第33回 8-142	III 区 H-14	杯	口器 器	径(11.2) 高 4.2 厚 0.6	体部は内壁しながら 立ち上がり、口縁部 はやや内傾す る。	胎土 1mm前後の砂 粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転系切 り痕を残す。その他 は内外面とも回転ナ デ。	SAR 80

插図番号	遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第33図 8-143	III区 第4 加工段	杯	器 厚 0.5		胎土 砂粒をほんと ど含ます。 色調 青灰色	底部外面は回転糸切 り痕を残す。内面は 一方向のナデ。	SAR429
第33図 8-144	III区 G-13	杯	口 径(10.9) 高さ 3.9 厚 0.4	底部から体部にかけて内彎し、口縁部は直面に立ち上がる。	胎土 1mm以下の砂 粒を多量に含む。 色調 青灰色	底部外面は回転糸切 り痕を残す。その他 は内外面とも回転ナ デ。	SAR100
第33図 8-145	III区 G-14	杯	口 径(20.3) 厚 0.7	体部はやや内彎しながら立ち上がる。	胎土 砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色	底部外面は回転糸切 り痕を残す。内面は 内外面とも回転ナ デ。	SAR 37
第34図 9-146	III区 E-11	杯	口 径(14.3) 高さ 5.7 厚 0.7	底部はやや内彎し、内 彎しながら立ち上 がり、口縁部端部は尖 る。	胎土 1mm以下の砂 粒をまばらに含む。 色調 青灰色	底部外面は回転糸切 り痕を残す。内面は 一方向のナデ、その 他は内外面とも回転 ナデ。	SAR211
第34図 9-147	II区 排水	杯	口 径(16.5) 高さ 4.1 厚 0.9	底部は平底で、内彎 気味に立ち上がる。	胎土 微砂粒を多く 含む。 色調 薄い青灰色	底部外面は回転糸切 り痕を残す。その他 は内外面とも回転ナ デ。	SAR321 底部外側 記号内面に 使用痕
第34図 9-148	III区 L-19	杯	器 厚 0.9		胎土 微砂粒を多く 含む。 色調 青灰色	底部外面は回転糸切 り痕を残す。内面は 回転ナデ。	SAR287
第34図 9-149	III区 E-11	杯	器 厚 0.7	底部は平底で、やや 内彎しながら立ち上 がる。	胎土 1~2mm前後 の砂粒を含む。 色調 青灰色	底部外面は回転糸切 り痕、その他は内外 面とも回転ナデ。	SAR212
第34図 9-150	III区 E-11	杯	器 厚 0.8	底部は凹み、体部は 内彎気味に立ち上 がる。	胎土 砂粒をほんと ど含まない。 色調 青灰色	底部外面は回転糸切 り痕を残す。内面は 放射状のナデ。その 他は内外面とも回転 ナデ。	SAR114
第34図 9-151	III区 E-11	杯	器 厚 0.7		胎土 砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色	底部外面は回転糸切 り痕を残す。内面は 一方向のナデ。	SAR178
第34図 9-152	II区 L-18	杯	器 厚 0.9		胎土 1mm前後の砂 粒をまばらに含む。 色調 青灰色	底部外面は回転糸切 り痕を残す。	SAR318 内面は使 用痕
第34図 9-153	III区 G-13	杯	器 厚 0.8	底部から体部にかけて内彎気味に立ち上 がる。	胎土 1mm前後の砂 粒をまばらに含む。 色調 青灰色	底部外面は回転糸切 り痕を残す。内面は 一方向のナデ、その 他は内外面とも回転 ナデ。	SAR101
第34図 9-154	III区 F-12	杯	器 厚 0.7	底部から体部にかけて内彎気味に立ち上 がる。	胎土 1mm前後の砂 粒を多量に含む。 色調 青灰色	底部外面は回転糸切 り痕を残す。内面は 一方向のナデ。	SAR119
第34図 9-155	II区 L-19	杯	器 厚 0.7	底部は平底で、体部 は内彎気味に立ち上 がる。	胎土 微砂粒を多量 に含む。 色調 青灰色	底部外面は回転糸切 り痕を残す。内面は 一方向のナデ、その 他は内外面とも回転 ナデ。	SAR328
第34図 9-156	I区 M-21	杯	器 厚 0.5		胎土 微砂粒を多く 含む。 色調 黒茶褐色	底部外面は回転糸切 り痕を残す。内面は 一方向のナデ。	SAR228
第34図 9-157	III区 G-13	杯	器 厚 0.5	底部から体部にかけて内彎気味に立ち上 がる。	胎土 1mm前後の砂 粒を多く含む。 色調 青灰色	底部外面は回転糸切 り痕を残す。内面は 不整方向のナデ、その 他は内外面とも回 転ナデ。	SAR 98

## 才ノ峰遺跡

捕獲番号	遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第34図 9-158	II 区 黑色土層 上部	杯	器 厚 0.7	底部から体部にかけて内萼気味に立ち上がる。	胎土 砂粒はほとんど含まず。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は不整方向のナデ。	SAR235
第34図 9-159	II 区 黑色土層 下部	杯	器 厚 0.7		胎土 1mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は不整方向のナデ。	SAR224
第35図 10-160	II 区 黑色土層 下部	杯	器 厚 0.6		胎土 まれに1~2mmの砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は不整方向のナデ。	SAR207
第35図 10-161	II 区	杯	器 厚 0.8	休部は内萼しながら立ち上がる。	胎土 あまり砂粒は目立たない。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。その他の内外面とも不整方向のナデ。	SAR160 底部内面は使用痕。
第35図 10-162	II 区	杯	器 厚 0.7		胎土 黃砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。	SAR240
第35図 10-163	II 区 L-19	杯	器 厚 0.7	底部は凹む。	胎土 黃砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は不整方向のナデ、その他の内外面とともに回転ナデ。	SAR252
第35図 10-164	II 区	杯	器 厚 0.8	底部は凹む。	胎土 黃砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。その他の内外面とも回転ナデ。	SAR129
第35図 10-166	II 区 排土	杯	器 厚 0.8	底部外面は凹む。	胎土 1~2mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。その他の内外面とも回転ナデ。	SAR320 底部内面は使用痕。
第35図 10-167	III 区 第6加工段	口器 器 蓋	径 11.0 高 4.3 厚 0.5	底部は平底で、体部は逆ハの字状に直線的に立ち上がる。	胎土 砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。その他の内外面とも回転ナデ。	SAR 17
第35図 10-168	III 区 H-14	口器 器 蓋	径 11.5 高 4.2 厚 0.6	底部は平底で、休部は逆ハの字状に直線的に立ち上がる。	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。その他の内外面とも回転ナデ。	SAR 75
第35図 10-169	II 区	杯	器 厚 0.6		胎土 砂粒をほとんど含まず。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は不整方向のナデ。	SAR327 底部内面は使用痕。
第35図 10-170	III 区 I-15	杯	器 厚 0.4	底部外面はやや凹み体部はあまり開かず直線的に立ち上がる。	胎土 黄砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。その他の内外面とも回転ナデ。	SAR123
第35図 10-171	III 区 H-14	杯	口器 器 蓋	底部外面は凹み、体部はわざわざに内萼しながら立ち上がる。	胎土 黄砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は一方向へのナデ、その他の内外面とも回転ナデ。	SAR329
第35図 10-172	II 区 茶褐色 砂質上	皿	径(15.0) 高 2.8 厚 0.4	底部は平底で、体部は直線的に立ち上がる。口器部はやや外反する。	胎土 砂粒をあまり含まず。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。その他の内外面とも回転ナデ。	SAR193 底部内面は使用痕。
第35図 10-173	III 区 H-14	皿	径(14.5) 高 2.2 厚 0.6	底部は平底で、体部は逆ハの字状に立ち上がる。	胎土 黄砂粒をまばらに含む。 色調 赤褐色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は一方向へのナデ、その他の内外面とも回転ナデ。	SAR 73
第35図 10-174	II 区 L-18	皿	口器 器 蓋	休部はやや内萼しながら大きく開く。	胎土 黄砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は一方向へのナデ、その他の内外面とも回転ナデ。	SAR331 底部内面は使用痕。

標図 番号	遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第35図 10-175	II 区	皿	口径(15.3) 高さ 2.0 厚 0.7	体部は内側しながら大きく開く。	胎土 砂粒をあまり含まず。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残す。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR197 底部内面に使用底
第35図 10-176	III 区 H-14	皿	口径(14.0) 高さ 2.4 厚 0.6	体部は逆ハの字状に開き、口縁部はわずかに外反する。	胎土 微砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は一方尚へのナデ、その他は内外面とも回転ナデ。	SAR 13 底部内面に使用底
第35図 10-177	II 区 茶褐色 砂質土	皿	口径(12.6) 高さ 2.7 厚 0.5	体部は逆ハの字に開く。	胎土 微砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は一方尚へのナデ、その他は内外面とも回転ナデ。	SAR205 底部内面に使用底
第35図 10-178	II 区 茶褐色 砂質土	皿	口径(14.0) 高さ 2.0 厚 0.6	体部は逆ハの字に開く。	胎土 砂粒をほどんと立たず。 色調 茶褐色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は一方尚へのナデ、その他は内外面とも回転ナデ。	SAR194 底部内面に使用底
第36図 11-179	III 区 G-13	皿	口径(12.2) 高さ 3.1 厚 0.3	底部は平底で、体部は逆ハの字状に開く。	胎土 まれに 1 mm 前後の砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 やや甘い。	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は不整方向へのナデ、その他は内外面とも回転ナデ。	SAR 79
第36図 11-180	II 区 黒色土層 下部	皿	口径(12.9) 高さ 2.3 厚 0.6	小部は逆ハの字状に開く。	胎土 まれに 1 mm 前後の砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は内外面とも回転ナデ。	SAR186 底部内面に使用底
第36図 11-181	II 区	皿	口径(12.8) 高さ 2.4 厚 0.6	体部は逆ハの字状に開く。	胎土 まれに 2 ~ 3 mm の砂粒を含む。 色調 深い青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は内外面とも回転ナデ。	SAR313 底部内面に使用底
第36図 11-182	I 区 M-20	皿	口径(13.0) 高さ 2.0 厚 0.5	底部は凹み、体部は逆ハの字状に開く。	胎土 1 mm 以下の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は静止糸切り痕を残す。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR282
第36図 11-183	II 区 茶褐色 砂質土	皿	口径(11.0) 高さ 2.1 厚 0.5	体部はやや内側しながら逆ハの字状に開く。	胎土 砂粒はほどんと目立たない。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は内外面とも回転ナデ。	SAR150 底部内面に使用底
第36図 11-184	II 区 茶褐色 土層	皿	厚 0.3	体部は逆ハの字状に直線的に大きく開く。	胎土 砂粒をほどんと含まず。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は内外面とも回転ナデ。	SAR271 底部内面に使用底
第36図 11-185	II 区	皿	口径(10.3) 高さ 0.5	体部から口縁部にかけてくの字状を呈す。	胎土 砂粒をほどんと含まず。 色調 浅い青灰色 焼成 やや甘い。	内面とも回転ナデ。	SAR335
第36図 11-186	III 区 G-13	皿	口径(9.0) 高さ 3.2 厚 0.6	底部は平底で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。	胎土 砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は内外面とも回転ナデ。	SAR 86
第36図 11-187	III 区 G-14	皿	口径(9.3) 高さ 3.0 厚 0.6	体部はやや内側しながら立ち上がり、口縁部はくの字状を呈す。	胎土 微砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は内外面とも回転ナデ。	SAR305 縁部落葉に、黑色有機質のもの付着
第36図 11-188	II 区 茶褐色 砂質土	皿	口径(9.0) 高さ 2.3 厚 0.5	体部から口縁部にかけてくの字状に開く。	胎土 砂粒はほどんと目立たない。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は内外面とも回転ナデ。	SAR146 底部内面に使用底
第36図 11-189	III 区 第6 加工段	杯	口径(14.4) 高さ 5.9 厚 0.6 高合底 7.7	底部から全体にかけて内側しながら立ち上る。高台は高く、端部は小さくなる。	胎土 砂粒をほどんと含まず。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面はヘラ切り、木調整。内面は一方尚へのナデ、その他は内外面とも回転ナデ。高台は貼り付け。	SAR 4 底部内面に使用底

## 才ノ峰造跡

番号	図号	遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第36回	II 区	杯	器厚 0.8 高台径 8.2	高台はハの字状に外に踏んばる。	胎土 微砂粒をまぶらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底面外面は回転ヘラ削り、内面は一方同ナデ、その他は内外面ともに回転ナゲ。	SAR 136	
11-190	茶褐色 砂質土							
第36回	II 区	杯	器厚 1.1			胎土 微砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面はヘラ切りはなし、未調整。高台は貼り付け。	SAR 201
11-191	L-19							底部内面に使用痕
第36回	II 区	杯	器厚 0.7 高台径 7.2	高台はハの字状に外に向く。	胎土 砂粒をほとんど含まず。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面はヘラ切りはなし。高台は貼り付け。	SAR 137	「/」の ヘラ配号
11-192	茶褐色 砂質土							
第36回	II 区	杯	器厚 0.7 高台径 7.8	底部は丸底に近く、低い高台が付く。	胎土 1mm以下の砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底面外面はヘラ切りはなし、未調整。内面は一方同ナデ、その他は内外面ともに回転ナゲ。	SAR 214	
11-193	黒色土層 下部							
第36回	III 区	杯	器厚 0.7 高台径 7.8	底部は丸底に近く、高台はハの字状に外に踏んばる。	胎土 微砂粒を多く含む。 色調 淡い青灰色 焼成 やや青 良 好	底面外面はヘラ切りはなし。内面は不整方向のナデ、その他は内外面とも回転ナゲ。	SAR 121	
11-194								底部内面に は使用痕
第36回	III 区	杯	器厚 0.7 高台径 8.6	底部は丸底に近く、体部はやや内側しながら大きき開きながら立ち上がる。	胎土 微砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 甘く、もろい。 良 好	底部外面はヘラ切りはなし。内面は不整方向のナデ、その他は内外面とも回転ナゲ。	SAR 52	
11-195	F-13							底部内面に は使用痕
第36回	III 区	杯	器厚 0.8 高台径 8.5×7.5	高台はハの字状に外に向く。	胎土 砂粒をほとんど含まず。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面はヘラ切りはなし、未調整。その他は内外面とも回転ナゲ。	SAR 91	
11-196	G-13							底部内面に は使用痕
第36回	III 区	杯	器厚 0.8 高台径 (7.6)	底部は丸底に近く、体部は内側しながら立ち上がる。	胎土 1mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面はヘラ切りはなし、未調整。その他は内外面とも回転ナゲ。	SAR 92	
11-197	G-13							底部内面に は使用痕
第36回	III 区	杯	口 径 14.7 器高 5.1 高台径 8.3	底部は丸底に近く、体部は内側しながら立ち上がる。	胎土 砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面はヘラ切りはなし。内面は不整方向のナデ、その他は内外面とも回転ナゲ、高台は貼り付け。	SAR 11	
11-198	E-12							底部内面に は使用痕、外 面に「X」 のヘラ配号
第36回	III 区	杯	器厚 1.2 高台径 6.4	底部の器厚は厚く、体部は内側しながら立ち上がり薄くなれる。高台はハの字形に近い。	胎土 1mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面はヘラ切りはなし。内面は一方同ナデ、その他は内外面とも回転ナゲ。	SAR 72	
11-199	H-14							底部内面に は使用痕
第36回	III 区	杯	口径 (10.9) 器高 3.7 高台径 (6.0)	体部は内側しながら立ち上がる。低い高台をもつ。	胎土 砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部内面は不整方向のナデ、その他は内外面とも回転ナゲ。高台は貼り付け。	SAR 33	
11-200	G-14							
第36回	III 区	杯	口径 15.0 器高 4.4 第6 加工段 高台径 8.3	底部の器厚は厚く、体部はやや内側しながら大きき開き、浅い杯形を呈す。高台は外にハの字状に踏んばる。	胎土 1~2mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面はヘラ切りはなし、内面は不整方向のナデ、その他は内外面とも回転ナゲ。	SAR 153	
11-201								底部内面に は使用痕
第36回	II 区	杯	器厚 0.5 高台径 8.8	底部は平底で、ハの字状の高台が付く。	胎土 1mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面はヘラ切りはなし、内面は不整方向のナデ、その他は内外面とも回転ナゲ。	SAR 187	
11-202	黒褐色 土層							底部内面に は使用痕
第36回	III 区	杯	口径 13.8 器高 4.3 第6 加工段 高台径 8.8	底部は丸底に近く、休部は内側しながら立ちあがる。高台はハの字状に外に踏んばる。	胎土 砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面はヘラ切りはなし、その他の内面は外側とも回転ナゲ、高台は貼り付け。	SAR 10	
11-203	H-14							底部内面に は使用痕
第36回	III 区	杯	口径 17.7 器高 4.5 第6 加工段 高台径 9.2	底部は丸底に近く、休部は内側ながら大きく開き、口縁部は直立に近い。	胎土 砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面はヘラ切りはなし後カキ目状のナデ、その他は内外面とも回転ナゲ。	SAR 14	
11-204								底部内面に は使用痕

才人錄遺跡

標	図	造	構	器	種	法	墨(cm)	形態の特徴	胎	土・焼成	手法の特徴	備考
第36図 11-205	III 区 G-13	杯				器 厚	0.9	底部は丸底に近く、高台はハの字状に外高台径 8.4 ながら広がる。	胎土 微砂粒を含む。 色調 焼成	茶褐色 良好 好	底部外面は静止系切り後回転ナデか?	SAR 93 底部内面に使用痕
第36図 11-206	II 区 茶褐色 砂質土	杯				器 厚	0.7	底部は丸底に近い。	胎土 微砂粒を含む。 色調 焼成	青灰色 良好 好	外画は回転ナデ、底部内面は一方向へのナデ。	SAR 141 底部外面に「X」のヘラ記号
第36図 11-207	III 区 G-14	杯				器 厚	0.4	開口部は楕円、底部は平坦に近い。体部は平底しながら大きめ、高台はハの字状を呈す。	胎土 微砂粒を含む。 色調 焼成	青灰色 良好 好	底部外面は静止系切り後回転ナデ、底部内面は一方向へのナデ、その他は内外面とも回転ナデ。	SAR 31 底部内面に使用痕
第36図 11-208	III 区 SD02	杯				器 厚	0.6	底部は平底で、高台は高くハの字状を呈す。	胎土 微砂粒を多く含む。 色調 焼成	青灰色 良好 好	底部外面は静止系切り後回転ナデ	SAR 83 底部内面に使用痕
第37図 12-209	II 区 黑色有機 質土	杯				器 厚	0.6	低い高台が付き、体部は内凹しながら立ち上る。(8.9)	胎土 微砂粒を多く含む。 色調 焼成	青灰色 良好 好	底部外面は静止系切り後回転ナデ、内面は一方向へのナデ。	SAR 253 SAR 253
第37図 12-210	III 区 E-12	杯				器 厚	0.5	体部はやや内凹しながら大きく上方に向く。	胎土 微砂粒を含む。 色調 焼成	青灰色 やや青い	底部外面は静止系切り後回転ナデ、内面は一方向へのナデ、その他は内外面とも回転ナデ。	SAR 125 底部内面に使用痕
第37図 12-211	II 区 K-14	杯				器 厚	0.4	ハの字状の高台が付く、体部は内凹しながら立ち上る。	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む。 色調 焼成	青灰色 甘い	底部外面は静止系切り後回転ナデ、内面は不整方向へのナデ、高台は貼り付け。	SAR 309 SAR 309
第37図 12-212	II 区 L-19	杯				器 厚	0.7	底部は平底に近く、低い高台が付く。	胎土 微砂粒を含む。 色調 焼成	青い吉灰色 良好 好	底部外面は静止系切り後回転ナデ。	SAR 330 SAR 330
第37図 12-213	II 区 黑褐色土	杯				器 厚	1.0	焼成時のひずみが著しい。	胎土 砂粒をあまり含まず。	青灰色 良好 好	底部外面は静止系切り痕を残す。内面は一方向へのナデ。	SAR 126 SAR 126
第37図 12-214	III 区 F-13	杯				器 厚	0.7	ハの字状の高台が付く。	胎土 微砂粒を多く含む。 色調 焼成	微赤褐色 良好 好	底部外面は静止系切り痕を残す。内面は不整方向のナデ。	SAR 65 SAR 65
第37図 12-215	II 区 茶褐色 砂質土	杯				器 厚	0.5	低いハの字状の高台が付く。	胎土 微砂粒を含む。 色調 焼成	青灰色 良好 好	底部外面は静止系切り痕を残す。内面は不整方向のナデ。	SAR 140 SAR 140
第37図 12-216	III 区 G-13	杯				器 厚	0.5	ハの字状に開いた高台が付く。底部から体部にかけて内凹しながら立ち上る。	胎土 微砂粒を含む。 色調 焼成	青灰色 良好 好	底部外面はヘラ切り痕はない。	SAR 89 底部内面に「V」のヘラ記号
第37図 12-217	II 区 L-18	杯				器 厚	0.6	ハの字状の高台が付く、体部は内凹しながら大きく聞く。	胎土 微砂粒を含む。 色調 焼成	青灰色 やや薄い青灰色 良好 好	内外面とも回転ナデ。	SAR 317 底部内面に使用痕
第37図 12-218	II 区 茶褐色 砂質土	杯				器 厚	0.7	ハの字状の高台が付く。	胎土 砂粒はほとんど立たない。 色調 焼成	青灰色 良好 好	内外面とも回転ナデ。	SAR 143 底部内面に使用痕
第37図 12-219	II 区 茶褐色 砂質土	杯				器 厚	0.8	低いハの字状の高台が付く、体部は内凹しながら広がる。	胎土 1mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 焼成	青灰色 良好 好	底部外面はヘラ切り痕はない後回転ナデ、内面は不整方向のナデ。	SAR 144 底部内面に使用痕
第37図 12-220	III 区 G-13	杯				器 厚	0.5	低いハの字状の高台が付く、底部から体部にかけて内凹しながら立ち上る。	胎土 後後の砂粒を含む。 色調 焼成	青灰色 やや甘い	底部外面はヘラ切り痕はない後、回転ナデ。内面は一方向へのナデ。	SAR 90 底部内面に使用痕、外面上に「X」のヘラ記号

## 才ノ峰遺跡

探査区分	造構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第37回 12-221	II 区 溝	杯	器厚 0.8 高台径 8.0	低いハの字状の高台が付き、底部から全体にかけて内凹しながら立ち上る。	胎土 砂粒をまれに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部内面は一方向へのナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR326 底部外面に「メ」のヘラ記号
第37回 12-222	II 区	杯	器厚 0.7 高台径 8.3	ハの字状の高台が付く、体部は内凹しながら立ち上る。	胎土 砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り後、回転ナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR256 底部内面に「1」のヘラ記号
第37回 12-223	II 区 L-18, 19	杯	器厚 0.9 高台径 9.3	底部は平底で、低いハの字状の高台が付く。体部は内凹気味に立ち上る。	胎土 砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り後回転ナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR241 底面内面に使用痕
第37回 12-224	II 区 G-14	杯	器厚 0.7		胎土 砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転ナデ。	SAR303
第37回 12-225	II 区 黒色土層	杯	器厚 0.9 高台径 10.8	底部は平底で、低いハの字状の高台が付く。体部は内凹気味に立ち上る。	胎土 砂粒を含む。 色調 茶褐色 焼成 良好	底部内面は不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR312
第37回 12-226	III 区 E-12	杯	器厚 0.9 高台径 8.7	底部は平底で低いハの字状の高台が付く。体部は内凹気味に立ち上る。	胎土 砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 やや甘い	底部外面は回転糸切り痕を残す。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR124 底部内面に使用痕、 「X」のヘラ記号
第37回 12-227	III 区 黒褐色土	杯(盤)	器厚 1.1 高台径(11.7)	ハの字状の高台が付く。	胎土 砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は一方向へのナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR127
第37回 12-228	III 区 H-13	杯	器厚 0.8 高台径 9.3	底部は平底で、ハの字状の高台が付く。	胎土 砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR116
第37回 12-229	II 区 赤褐色 砂質土	杯	器厚 1.2 高台径 (9.9)	底部は平底で、ハの字状に広がる。鳥頭状の高台が付く。	胎土 砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。その他は回転ナデ。	SAR192 底部内面に使用痕
第37回 12-230	III 区 H-14	杯	器厚 1.0 高台径 10.0	底部は平底で、ほぼ垂直な高台が付く。	胎土 砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部内面は不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR 76 底部内面に使用痕
第38回 13-231	II 区 黒褐色 土層	杯	器厚 0.8 高台径 (9.5)	底部は平底で、ほぼ垂直な低い高台が付く。	胎土 砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。その他は回転ナデ。	SAR208 底部内面に使用痕
第38回 13-232	II 区 L-19 黒褐色 土層	杯	器厚 0.9 高台径(10.4)	底部は平底で、低い高台が付く。端部は尖る。	胎土 砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部内面は不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR204
第38回 13-233	III 区 H-14	杯	口径(12.0) 器高 4.8 器厚 0.7 高台径(7.9)	底部は平底で、垂直な低い高台が付く。体部は内凹気味に立ち上る。	胎土 砂粒をまばらに含む。 色調 黑色 焼成 良好内外面とも回転ナデ。	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR 81
第38回 13-234	III 区 第6 加工段	杯	口径(14.2) 器高 5.0 器厚 0.6 高台径 (9.1)	底部は平底で、垂直な高台が付く。体部は内凹気味に外上方に立ち上る。	胎土 砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 甘い	底部外面は回転糸切り痕を残す。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR155
第38回 13-235	II 区	杯	器厚 0.9 高台径(11.2)	底部は平底で、低い高台が付く。	胎土 砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	底部外面は回転糸切り痕を残す。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR300 底部内面は使用痕

標図号	遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第38図 13-236	II 区 L-18, 19	杯	口径(13.6) 器厚 0.6 高台径( 9.5)	底部は平底で、低い高台が付く。体部は外方に広がる。	胎土 粘砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残す。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR243 底部内面は使用痕
第38図 13-237	III 区 H-14	杯	口径 12.4 器厚 4.5 高台径 9.3	低い高台が付き、体部は外上方に立ち上がる。	胎土 砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面に回転糸切り痕を残す。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR 2
第38図 13-238	II 区	杯	器厚 0.7 高台径(11.2)	低い高台が付く。	胎土 1mm前後の白色砂粒をまばらに含む。 色調 薄い青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切りの後回転ナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR339
第38図 13-239	II 区 黒褐色 土層	杯	口径(15.0) 器厚 5.3 高台径(11.5)	低い高台が付き、体部は逆八の字状に立ち上る。	胎土 砂粒はほとんど含まず。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部内面は不整方向のナデ。その他は外表面とも回転ナデ。	SAR237
第38図 13-240	I 区 L-21	杯	器厚 0.6 高台径(10.8)	低い高台が付く。	胎土 1mm前後の砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り後回転ナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR113
第38図 13-241	II 区 茶褐色 砂質土	杯	器厚 0.7 高台径(11.0)	低い高台が付く。	胎土 微砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕、及び爪の痕を残し米調整。内面は不整方向のナデ。	SAR138 底部内面に使用痕
第38図 13-242	II 区 茶褐色 砂質土	杯	器厚 0.6 高台径(10.2)	低い高台が付く。	胎土 微砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残し、未調整。内面は一方へのナデ。	SAR266 底部内面に使用痕
第38図 13-243	III 区 第2 加工段	杯	口径(16.4)	体部は逆八の字状に立ち上る。	胎土 砂粒はほとんど立たない。 色調 青灰色 焼成 良 好	内外面とも回転ナデ。	SAR386
第38図 13-244	III 区 E-11	杯	口径 7.9 器厚 0.8 高台径(10.8)	底部は厚く、低い高台が付く。体部は直線的に立ち上り、中高台でやや外反する。	胎土 微砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は不整方向のナデ。	SAR210
第38図 13-245	II 区	杯	器厚 1.0 高台径(10.6)	低い高台が付く。	胎土 微砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR319
第38図 13-246	II 区 黑色土	杯	器厚 0.7		胎土 ほとんど砂粒を含ます。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残す。内面は不整方向のナデ。	SAR264 底部外面に「X」のマーク記号
第38図 13-247	III 区 第4 加工段	杯	器厚 1.0 高台径(7.7)	低い高台が付く。体部は逆八の字状に立ち上る。	胎土 1mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残す。体部外面は回転ヘラ削り。内面は回転ナデ。	SAR154
第38図 13-248	I 区 M-20	杯	器厚 0.7 高台径(7.0)	低い高台が付く。体部は逆八の字状に立ち上る。	胎土 微砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残す。その他は内外面とも回転ナデ。蓋合は防り付け。	SAR280
第38図 13-249	II 区	杯	器厚 0.8 高台径 7.5	底部は平底で低い高台が付く。	胎土 1mm前後の砂粒をまれに含む。 色調 青褐色 焼成 やや甘い	底部外面は回転糸切り痕を残す。	SAR148
第38図 13-250	II 区 L-19 黒褐色 土層	杯	器厚 0.8 高台径 7.1	底部は平底で低い高台が付く。体部は逆八の字状に立ち上る。	胎土 ほとんど砂粒を含まず。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残す。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR251 底部内面に重ね焼きの他の製品の焼付着
第38図 13-251	I 区 M-21	杯	器厚 0.4 高台径 7.8	底部は平底で、低い高台が付く。	胎土 微砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	底部外面は回転糸切り痕を残す。その他は回転ナデ。	SAR111

## 才ノ峰遺跡

標 番 号	遺 跡	器 種	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	胎 土	燒 成	手 法 の 特 徴	備 考
第39回 14-252	II 区 L-19	杯	器 厚 0.9 高台径 8.6	底部は平底で、低い 高台が付く。体部は 逆八の字状に直線的 に立ち上る。	胎土 含む。 色調 焼成	微砂粒を多く 含む。 青灰色 良 好	底部外面は回転糸切 り痕と爪痕を残す。 内面は流水文状のナ ゲ。	SAR156 底部内面に 使用痕
第39回 14-253	III 区 G-13, 14	杯	器 厚 0.5 高台径 (8.4)	低い高台が付く。	胎土 含む。 色調 焼成	微砂粒を多く 含む。 青灰色 良 好	底部外面は回転糸切 り痕と爪痕を残す。 内面は不整方向のナ ゲ。その他は外外面 とも回転ナゲ。	SAR190
第39回 14-254	III 区 G-14	杯	器 厚 0.3 高台径 (9.0)	断面三角形の低い高 台が付く。	胎土 含む。 色調 焼成	微砂粒を少し 含む。 青灰色 良 好	底部外面は回転糸切 り痕で未調査。内面 は不整方向のナゲ。	SAR 43
第39回 14-255	III 区 S B03	杯	器 厚 0.5 高台径 (7.0)	低い高台が付く。	胎土 含む。 色調 焼成	微砂粒を多く 含む。 薄い青灰色 良 好		SAR443 風化が著し く進む
第39回 14-256	III 区 S B04	杯	器 厚 0.6 高台径 (6.8)		胎土 粒を多量に含む。 色調 焼成	1~2mmの砂 粒を多量に含む。 青灰色 やや青い		SAR179 風化が著し く進む
第39回 14-257	III 区 第6 加工段	杯	器 厚 0.5		胎土 砂粒をほとん ど含む。 色調 焼成	胎土 砂粒をほとん ど含む。 青灰色 良 好	底部外面は回転糸切 り痕で未調査。	SAR378 底部内面に 使用痕
第39回 14-258	I 区 M-15 茶褐色 砂質土	杯	器 厚 0.4 高台径 (8.0)	断面は三角形の低い 高台が付く。	胎土 含む。 色調 焼成	あまり砂粒を 含まず。 薄い青灰色 甘い	底部外面は回転糸切 り痕を残す。内面は 不整方向のナゲ。	SAR142
第39回 14-259	II 区 L-18, 19 黒褐色 土層	盤	器 厚 0.5 高台径 (12.5)	底部は平底で低い高 台が付く。	胎土 含む。 色調 焼成	微砂粒を少量 含む。 薄い青灰色 やや甘い	底部外面は回転糸切 り後回転ナゲ。内面 は不整方向のナゲ。 その他は外外面とも 回転ナゲ。	SAR242 底部内面に 使用痕
第39回 14-260	II 区 黒色土層 下部	盤	器 厚 0.7 高台径 (16.2)	底部は平底で、八の 字状に並ぶ低い高 台が付く。	胎土 砂粒を含む。 色調 焼成	微砂粒を多く 含む。 青灰色 良 好	底部外面は回転糸切 り後回転ナゲ。内面 は不整方向のナゲ。 その他は外外面とも 回転ナゲ。	SAR215 底部内面に 使用痕
第39回 14-261	II 区 茶褐色 砂質土	盤	器 厚 0.7 高台径 (15.0)	底部は平底で、八の 字状の高台が付く。	胎土 砂粒を含む。 色調 焼成	砂粒はほとん ど目立たない。 青灰色 良 好	底部外面は回転糸切 り痕と爪痕を残した 後回転ナゲ。内面は 不整方向のナゲ。	SAR135 底部内面に 使用痕
第39回 14-262	II 区 黑褐色 土層	盤	器 厚 1.0 高台径 (13.6)	底部は平底で、ほぼ 垂直な低い高台が付 く。体部は大きく開 く。	胎土 含む。 色調 焼成	微砂粒を含 む。 青灰色 良 好	底部内面は一方向の ナゲ。その他は外 面とも回転ナゲ。	SAR128
第39回 14-263	II 区 L-19 黑褐色 土層	盤	器 厚 0.9 高台径 (12.3)	底部は平底で、1.2 cmの高台が付く。	胎土 砂粒を含む。 色調 焼成	ほとんどの砂粒 を含む。 青灰色 良 好	底部外面は回転糸切 り痕を残す。内面は 一方向のナゲ。	SAR286 底部内面に 使用痕
第39回 14-264	I 区 黑色土層	盤	器 厚 0.7 高台径 (15.7)	底部は平底で、垂直 な低い高台が付く。	胎土 含む。 色調 焼成	微砂粒を多く 含む。 茶褐色 やや甘い	底部外面は回転糸切 り痕を残す。内面は 不整方向のナゲ。	SAR112
第39回 14-265	II 区 黑色土層	盤	器 厚 0.7 高台径 (12.3)	底部は平底で、垂直 な低い高台が付く。	胎土 含む。 色調 焼成	微砂粒を含 む。 青灰色 良 好	底部外面は回転糸切 り痕で未調査。その 他は外外面とも回転 ナゲ。	SAR221 底部内面に 使用痕
第39回 14-266	II 区 褐色土層	盤	器 厚 0.9 高台径 (11.9)	底部は平底で、八字 状の低い高台が付 く。	胎土 含む。 色調 焼成	微砂粒を含 む。 青灰色 良 好	底部外面は回転糸切 り痕で未調査。	SAR203 底部内面に 使用痕
第39回 14-267	II 区 M-21	盤	器 厚 0.5 高台径 (10.7)	底部は平底で、垂直 な低い高台が付く。	胎土 含む。 色調 焼成	微砂粒を含 む。 青灰色 良 好	底部外面は回転糸切 り痕で未調査。	SAR110 底部内面に 使用痕

## 才ノ峰遺跡

標	國	名	遺構	器種	法	墨(cm)	形	態の特徴	胎	土・焼	成	手	法の特徴	備考
第39回	II 区		盤	器 厚 0.6 高台径(10.0)	底	部は平底で、垂直な低い高台が付く。	胎土	1mm前後の砂粒をまばらに含む。	底	部外面は回転糸切り痕と爪痕が残る。	SAR149			
14-268	茶褐色 砂質土												底部内面に使用痕	
第39回	II 区		盤	器 厚 1.1 高台径(12.2)	底	部は平底で、ハの字状の高台が付く。	胎土	砂粒をほとんど含まず。	底	部外面は回転糸切り痕を残す。内面は不整方向のナデ。	SAR189			
14-269	黒褐色 土壌												底部内面に使用痕	
第40回	II 区		盤	口 径(16.7) 器 厚 4.0 高台径(12.2)	底	部は平底で、垂直な低い高台が付く。	胎土	1mm前後の砂粒をまばらに含む。	底	部外面は回転糸切り痕で未調査。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR147			
15-270	茶褐色 砂質土												底部内面に使用痕	
第40回	III 区		盤	口 径(17.6) 器 厚 4.3 高台径(12.2)	底	低い高台が付き、体部は大きくなき開き、中厚から外反しながら立ち上る。	胎土	微砂粒を多く含む。	底	部外面は回転糸切り痕で未調査。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR 71			
15-271	H-14												底部内面に使用痕	
第40回	II 区		盤	口 径(16.3) 器 厚 2.9 高台径(10.0)	ハの字状の低い高台が付き、体部は大きくなき開き、中厚から外反しながら立ち上る。	胎土	1mm前後の砂粒を多量に含む。	底	部外面は回転糸切り痕を残す。内面は不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR311				
15-272	T-17												底部内面に使用痕	
第40回	II 区		盤	口 径(19.3) 器 厚 4.4 高台径(11.3)	ハの字状に開く低い高台が付く。体部は内厚しながら立ち上る。	胎土	1mm前後の砂粒を多量に含む。	底	部外面は回転糸切り痕を残す。	SAR314				
15-273	M-21													
第40回	III 区		盤	山 形 17.7 器 厚 3.8 高 台 径 0.4 高台径 11.3	垂直な高台が付き、体部は内厚しながら立ち上る。	胎土	砂粒をまばらに含む。	底	部外面は回転糸切り痕を残す。内面は不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR 21				
15-274	F-12												底部内面に使用痕	
第40回	II 区		盤	口 径(16.6) 器 厚 3.8 高 台 徑 1.0 高台径(11.4)	ハの字状に開く低い高台が付く。体部は内厚しながら立ち上る。	胎土	微砂粒を含む。	底	部外面は回転糸切り痕の後回転ナデ。内面は不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR 239				
15-275	黑色土層 下部												底部内面に使用痕	
第40回	III 区		盤	口 径(22.1) 器 厚 0.7	体部は内厚しながら立ち上る。	胎土	微砂粒を含む。	内	面とも回転ナ	SAR 74				
15-276	H-14												底部内面に使用痕	
第40回	II 区		蓋	口 径 12.5 器 厚 4.0 新面 0.5	腹球状のつまみが付く。口縁部は低く、断面は三角形。	胎土	砂粒を含む。	天	井内部内面は一方へのナデ。その他は内外面とも回転ナデ。組じ、外面にハフ割り部分が残る。	SAR227				
15-277	黒褐色 土壌												天井内部内面にスミ付着	
第40回	II 区		硯	口 径(11.5) 器 厚 1.0	円面観。腹部は中央にむかいつばくに低くなる。脚部は半円状の透し。	胎土	1mm前後の砂粒を含む。	全	体に回転ナデ。	SAR226				
15-278	黒色 有機質土												未使用	
第40回	III 区		硯	口 径(10.0) 器 厚 0.6	内面観。腹部は中央にむかいつばくが高くなる。脚部は長方形の透し。	胎土	微砂粒を多く含む。	内	面は不整方向のナデ。外表面は回転ナ	SAR225				
15-279	拂 土												未使用	
第41回	III 区		高 杯	胎 部 高 10.5 胎 部 径 14.8	脚部はハの字状に大きく開く。方形の透しを二段に分ち、その間を2条の沈線で区画する。	胎土	まれに1mm程の砂粒を含む。	外	面とも回転ナ	SAR122				
16-280	拂 土													
第41回	III 区		高 杯	胎 部 高 8.5 胎 部 径 12.0 1号住	脚部はハの字状に開く。外側を2条の沈線で上ト下に区画し、上区は沈線で、下区は方形の透しを穿つ。	胎土	1mm前後の砂粒をまばらに含む。	内	面とも回転ナ	SAR168				
16-281	第3 加工段												杯部にわずかに使用痕	
第41回	III 区		高 杯	G-13	体部は内厚しながら立ち上がる体部。	胎土	まれに3~4mmの砂粒を含む。	外	面とも回転ナ	SAR 94				
16-282													杯底部内面に使用痕	

## 才ノ峰遺跡

標号	通構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第41図 16-283	III 区 第4 加工段	高杯		脚部に凹形の透しを穿つ。	胎土 微砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	杯部底部内面に不整方向へのナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR167
第41図 16-284	I 区 Q-22	高杯	脚部高 5.5 脚部径 (8.8)cm	ハの字状に開く低い脚部。脚部は沈線による透しを二ヶ所穿つ。	胎土 合む。 色調 青灰色 焼成 良 好	杯部底部内面に一方向へのナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR220
第41図 16-285	II 区 黒褐色 土層	高杯		脚部はハの字状に開く。脚部に沈線による透しを穿つ。	胎土 I mm前後の砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	杯部底部内面に不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR133
第41図 16-286		高杯		脚部はハの字状に開く。脚部外面は2条の沈線で区画する。上下段とも沈線による透し、但し實透していない。	胎土 I mm前後の砂粒を多く含む。 色調 暗青灰色 焼成 良 好	内外面とも西軸ナデ。	SAR430
第41図 16-287	I 区 ベルト内	高杯		脚部はハの字状に開く。脚部に貫通しない2条の沈線の透し。	胎土 砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	杯部底部内面に不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR301
第41図 16-288	III 区 F-13	高杯		杯部は大きく開く。	胎土 砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	脚部は内外面とも回転ナデ。	SAR182
第41図 16-289	II 区 黒色 有機質土	高杯		杯部は大きく開く。杯部から脚部にかけてへうによる透し。	胎土 砂粒をまれに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	2~3mmの砂粒を内外面とも回転ナデ。	SAR338
第41図 16-290	II 区 黒色土	高杯		脚部外面はヘラによる透し。	胎土 1 mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	内外面とも回転ナデ。	SAR222
第41図 16-290	II 区 高杯			脚部外面はヘラによる透し。	胎土 砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	杯部底部内面に不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR308
第41図 16-291	III 区 F-12	高杯		脚部はハの字状に開く。	胎土 砂粒はほとんど含まず。 色調 青灰色 焼成 良 好	杯部底部内面に不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR175
第41図 16-293	II 区 黒色土層 下部	高杯	脚部径 8.0	脚部端部は垂直に近い。	胎土 微砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	内外面とも回転ナデ。	SAR223
第41図 16-294	II 区 黒色土層 下部	高杯	脚部高 7.0 脚部径 (10.3)	脚部はハの字を開き、端部は垂直に近い。脚部を2条の沈線で上下を区画する。	胎土 1 mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	杯部底部内面に不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR216
第41図 16-295	III 区 第6 加工段	高杯	脚部高 5.0 脚部径 8.9	脚部はハの字状に低く開く。端部は垂直。	胎土 2~3mmの砂粒をまれに含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	杯部底部内面に不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR152
第41図 16-296	I 区 Q-22	高杯	脚部高 5.5 脚部径 9.2	脚部はハの字状に低く開く。端部は垂直。	胎土 ほとんど砂粒は目立たない。 色調 青灰色 焼成 良 好	杯部底部内面に不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR109
第41図 16-297	I 区 Q-21	高杯	脚部高 (8.0)	脚部は逆漏斗状を呈す。	胎土 1 mm前後の砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	杯部底部内面に不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR306
第41図 16-298	I 区 N-20	高杯	脚部高 (9.5)	脚部は逆漏斗状を呈す。	胎土 微砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良 好	杯部底部内面に不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR299

番号	場所	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第41回 16-299	I 区 青灰色 粘土層	N-20 高杯	底部高 8.5 脚部径 13.5	脚部は逆漏斗状に近い形を呈す。	胎土、1mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ。	SAR298
第41回 16-300	I 区 青灰色 粘土層	M-21 高杯			胎土、微砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良好	外面は粗い回転ナデ。	SAR272 杯部底部内面に使用痕及び「×」のヘラ記号
第41回 16-301	II 区 黒褐色 土層	高杯		脚部はハの字状に大きく開く。	胎土、微砂粒を多く含む。 色調 薄い青灰色 焼成 やや甘い	杯部底部内面に不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR236 杯部底部内面に使用痕
第41回 16-302	II 区 黒褐色 土層	高杯		杯部は底部から体部にかけて内凹する。	胎土、あまり砂粒は目立たない。 色調 青灰色 焼成 良好	胎部内外面は回転ナデ。	SAR132 杯部底部内面に使用痕
第41回 16-303	II 区 L-19	高杯		脚部に方形の透しを穿つ。	胎土、砂粒をほとんど含まず。 色調 青灰色 焼成 良好 杯部内面に自然跡がかかる	杯部外面は回転ナデ。	SAR188
第41回 16-304	III 区 F-13	高杯			1mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好 外面上に自然跡がかかる	杯部底部内面は不整方向のナデ。	SAR 67 杯部底部内面に使用痕
第42回 17-305	II 区 溝	高杯	脚部高(4.0)	高杯のミニチュア。 杯部外面に棱がつく 杯部から脚部にかけて へらによる練削の透しが3ヶ所入る。	胎土、微砂粒を多く含む。 色調 青灰色 焼成 良好	杯部底部内面は不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR261
第42回 17-306	I 区 N-20 (高杯か?)	不明		径3cmの晩状を呈す。	胎土、微砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも粗いナデ。	SAR297
第42回 17-307	III 区 F-13	高杯?	口 径(10.0) 杯部高 4.0	杯部は純状を呈す。	胎土、1mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ。	SAR 57
第42回 17-308	III 区 第2 加工段	高杯?	口 径(14.0)	杯部は逆への字状に大きく開く。	胎土、微砂粒をまばらに含む。 色調 薄い青灰色 焼成 やや甘い	内外面とも回転ナデ。	SAR169
第42回 17-309	III 区 G-14 加工段	高杯	口 径(14.7)	杯部はやや内凹しながら立ち上る。 体部下半部はへらによる練削透し。	胎土、あまり砂粒を含まず。 色調 青灰色 焼成 良好	杯部底部内面に不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR 26
第42回 17-310	III 区 F-13	高杯?	口 径(16.1)	杯部は逆への字状に大きく開く。	胎土、砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 やや甘い	杯部底部内面に不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR 53
第42回 17-311	III 区 第6 加工段	高杯?	口 径(18.0)	杯部はやや内凹気味に立ち上る。	胎土、1mmほどの白色砂粒をまばらに含む。 色調 黒灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ。	SAR433
第42回 17-312	III 区 F-13	高杯	口 径(15.0)	杯部はやや内凹気味に立ち上る。	胎土、あまり砂粒を含まず。 色調 薄い青灰色 焼成 やや甘い	杯部底部内面に不整方向のナデ。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR 66
第42回 17-313	III 区 第5 加工段	高杯		?杯部は逆への字状に大きく開く。	胎土、極端な砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ。	SAR444

## 才ノ崎遺跡

標名	遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第42回 17-314	III区 第3 加工段	高杯?	口 径(17.5)		胎土 1mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 やや薄い青灰 焼成 良好	内外面とも回転ナデ。	SAR383
第42回 17-315	III区 第3 加工段	高杯?	口 径(17.4)		胎土 砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面ともヨコナデ。	SAR437
第42回 17-316	III区 SB04	高杯?	口 径(16.1) 杯部高 3.5	杯部はやや内厚気味に立ち上る。	胎土 砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ。	SAR185
第42回 17-317	I区 M-21	高 杯	口 径(12.0) 杯部高 3.5	底部から口縁にかけて内厚気味に立ち上る。	胎土 まれに砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	杯部底部内面は不整方向のナデ。その他の内外面とも回転ナデ。	SAR273 底部内面は使用痕
第42回 17-318	III区 F-13	高 杯	口 径(12.1) 杯部高 3.6	杯部は内厚気味に立ち上る。	胎土 まれに砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ。	SAR 58
第42回 17-319	III区 F-13	高 杯 口 径(18.0)		杯部は内厚気味に立ち上る。	胎土 砂粒をほとんど含まず。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面とも回転ナデ。	SAR 59
第42回 17-320	II区 黒褐色 土層	小形壺	高台径(5.8)	体部は垂直に立ち上る。	胎土 砂粒をほとんど含まず。 色調 青灰色 焼成 良好	底部に画板系切り痕を残す。その他は内外面とも回転ナデ。	SAR199
第42回 17-321	II区 黒色 有機質土	壺	高台径(9.2)	体部は逆ハの字状に側き、低い高台が付く。	胎土 砂粒をほとんど含まず。 色調 青灰色 焼成 良好	体部外面に格子状叩き目で、未調整。内面は回転ナデ。	SAR255
第42回 17-322	III区 H-14	壺	底部径(11.8)	高台の付かない平底で体部は逆ハの字状に聞く。	胎土 1mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	内面はヨコナデ。外向はヘラ削り後ナデか?	SAR 82
第42回 17-323	II区 黒色土層 下部	壺	高台径(11.5)		胎土 砂粒をほとんど含まず。 色調 薄い茶褐色 焼成 良好	底部外面は静止系切り後回転ナデ。体部外面は細かな格子状の叩き目。内面は回転ナデ。	SAR277
第42回 17-324	II区 茶褐色 砂質土	壺	高台径 12.4	断面三角形の低い高台が付く。	胎土 1mm前後の砂粒を含む。 色調 青灰色 焼成 良好	体部外面は格子状の叩き目。内面はヨコナデ。	SAR134
第42回 17-325	III区 I-15	鉢	底部径(13.2) 脚部径(25.4)	底盤は平底に近く、体部は逆ハの字状に直線的に立ち上り、脚部から頭部にかけて内厚する。	胎土 1mm前後の砂粒をまばらに含む。 色調 青灰色 焼成 良好	内外面ともヨコナデ。	SAR115
第43回 1-326	III区 第7 加工段	壺	口 径(22.7)	口縁部は短く、逆ハの字状に聞く。	胎土 1mm以下の砂粒を多量に含む。 色調 薄い茶褐色		SAR392 風化が著しい
第43回 1-327	III区 第2 加工段	壺	口 径(21.5)	底部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。	胎土 1mm以下の砂粒を多量に含む。 色調 薄い茶褐色	外面にハケ目。	SAR403 風化が著しい
第43回 1-328	III区 S B02	壺	口 径(19.3)	口縁部は短く、やや内厚しながら逆ハの字状に聞く。	胎土 1mm以下の砂粒を多量に含む。 色調 黄褐色		SAR431 風化が著しい
第43回 1-329	III区 S B09 ピット内	壺	口 径(16.0)	口縁部は短く、ぐの字状を呈す。	胎土 1mm前後の砂粒を多量に含む。 色調 茶褐色		SAR440 風化が著しい
第43回 1-330	III区 第4 加工段	壺	口 径(16.0)	口縁部は短く、ぐの字状を呈す。	胎土 1mm前後の砂粒を多量に含む。 色調 茶褐色	口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外表面はハケ目。	SAR427 内面は風化外表面は黒斑

## オノ峠遺跡

探査番号	遺構	器種	法身 (cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第43回 1-331	III 区 第2 加工段	甕	口 径(23.5)	口縁部は逆ハの字状に外反する。	胎土 1mm前後の砂粒を多量に含む。 色調 黄褐色		SAR405 風化が著しい
第43回 1-332	III 区 S B09 ピット内	甕	口 径(20.0)	口縁部は短く、逆ハの字状に聞く。	胎土 砂粒をあまり含まず。 色調 黄褐色		SAR439 風化が著しい
第43回 1-333	III 区 第3 加工段	甕	口 径(20.0)	口縁部は短く、外反する。	胎土 微砂粒を多量に含む。 色調 黄褐色		SAR382 風化が著しい
第43回 1-334	III 区 第6 加工段	甕	口 径(18.5)	口縁部は短く、外反する。	胎土 微砂粒を多量に含む。 色調 黄褐色	口縁部外面はヨコナデ。 風化が著しい	SAR395
第43回 1-335	III 区 第7 加工段	甕	口 径(34.0)	口縁部から頸部にかけてL字状を呈す。	胎土 微砂粒を多量に含む。 色調 薄い黄褐色	外面はハケ毛。内面は横方向にヘラ削り。	SAR472
第43回 1-336	II 区 S B02	甕	口 径(25.0)	口縁部は短く、外反する。	胎土 1mm前後の砂粒を多量に含む。 色調 薄茶褐色	口縁部は内外面ともヨコナデ。その他の外表面はハケ毛。内面は斜めヘラ削り。	SAR457
第43回 1-337	III 区 第3 加工段	甕	口 径(16.4)	口縁部は短く、やや外反する。	胎土 1mm前後の砂粒を多量に含む。 色調 茶褐色		SAR438 風化が著しい
第43回 1-338	III 区 第7 加工段	甕	口 径(17.0)	口縁部は短く、やや外反する。	胎土 1mm前後の砂粒を多量に含む。 色調 黄褐色		SAR388 風化が著しい
第43回 1-339	III 区 第4 加工段	甕	口 径(22.5)	口縁部は短く、外反する。	胎土 微砂粒を多く含む。 色調 黄褐色		SAR428 風化が著しい
第43回 1-340	III 区 G-14	甕	口 径(23.3)	口縁部は外反し、脇部は直線的である。	胎土 1mm以下の砂粒を多く含む。 色調 明黄褐色 焼成 良好	外面はタテハケ目、内面はヘラ削り。	SAR 70
第43回 1-341	III 区 第3 加工段 1号作ビット内	甕	口 径(16.6)	口縁部は短く、やや外反する。	胎土 微砂粒を多く含む。 色調 黄褐色		SAR449 風化が著しい
第43回 1-342	III 区 第5 加工段	甕	口 径(16.1)	口縁部は短く、外反する。	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む。 色調 黑灰色		SAR445 風化が著しい
第43回 1-343	I 区 P-24 黒灰色土	甕	口 径(15.0)	口縁部は短く、外反する。胎部はハの字状に広がる。	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む。 色調 黄褐色	口縁部は内外面ともヨコナデ。腹部外面はタテハケ目。内面は横方向にヘラ削り。	SAR408
第43回 1-344	III 区 第6 加工段	甕		口縁部は短く、外反する。	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む。 色調 黄褐色		SAR400 風化が著しい
第43回 1-345	III 区 第4 加工段	甕		口縁部は逆ハの字状に聞く。	胎土 微砂粒を多く含む。 色調 黄褐色		SAR381 風化が著しい
第43回 1-346	III 区 第6 加工段	甕		口縁部は短く、逆ハの字状に聞く。	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む。 色調 黄褐色		SAR398 風化が著しい
第43回 1-347	III 区 第2 加工段	甕		口縁部は逆ハの字状に外反する。	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む。 色調 黄褐色		SAR172 風化が著しい
第43回 1-348	III 区 S B02 ピット内	甕		口縁部は短く、外反する。	胎土 微砂粒を多く含む。 色調 黄褐色		SAR435 風化が著しい
第43回 1-349	III 区 第6 加工段	甕		口縁部は逆ハの字状に外反する。	胎土 微砂粒を多く含む。 色調 黄褐色	口縁部外面はヨコナデ。	SAR399 風化が著しい
第43回 1-350	III 区 第3 加工段 SK01	甕		口縁部は短く、外反する。	胎土 微砂粒を多く含む。 色調 黄褐色		SAR377 風化が著しい

## 才ノ峰遺跡

探査番号	遺構	器種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第43回 1-351	III区 第2 加工段	壺		口縁部は逆八の字状に開く。	胎土 磨砂粒を含む。 色調 黄褐色		SAR404 風化が著しい。
第44回 2-352	III区 第3 加工段 1号住	壺 口径(29.0)		口縁部はくの字状に外反する。	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む。 色調 黄褐色	口縁部外面はヨコナデ。腹部外面はタテハケ目。	SAR458 黒斑有り
第44回 2-353	III区 SD02	壺 口径(29.2)		口縁部はくの字状を呈す。	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む。 色調 黄褐色	口縁部外面はヨコナデ。腹部外面はタテハケ目。内面は斜めヘラ削り。	SAR456
第44回 2-354	III区 G-13	壺 口径(24.0)		口縁部はLの字状を呈す。腹部は直線的に開く。	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む。 色調 黄褐色	口縁部外面はヨコナデ。腹部外面はタテハケ目。内面は指壓痕及び斜めヘラ削り。	SAR459
第44回 2-355	III区 E-11	瓶 口径(19.5)		口縁部は直角に立ち上がる。	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む。	内面ヨコ方向にヘラ削り。	SAR413 風化が著しい。
第44回 2-356	III区 SB03 ピット内	壺 5×7cmの破片			胎土 1mm前後の砂粒を多く含む。 色調 赤褐色		SAR422 風化が著しい。
第44回 2-357	III区 SB08	壺			胎土 磨砂粒を多く含む。	外面にタテ方向にハケ目。	SAR426 風化が著しい。
第44回 2-358	III区 第6 加工段	小形壺 口径(11.7)		口縁部は低く、くの字状を呈す。	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む。 色調 黄褐色	口縁部外面はヨコナデ。内面はヨコ方向にヘラ削り。	SAR391
第44回 2-359	III区 第6 加工段	小形壺 口径(9.7)		口縁部は低く、くの字状に外反する。	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む。 色調 黄褐色	口縁部外面はヨコナデ。	SAR180 風化が著しい。
第44回 2-360	III区 第6 加工段	小形壺 腹部径(12.8)		腹部は球状に張る。	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む。 色調 薄い黄褐色	腹部外面はヨコ方向にナデ。内面はナメナラ削り。	SAR470 風化が著しい。
第44回 2-361	III区 G-14	甕		底部は平底。	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む。 色調 黄褐色	内面は指姫底。内面は一方向に指ナデ。	SAR464 風化が著しい。
第44回 2-362	III区 第2 加工段	把手 直径 4.0 ×4.0		角状を呈す。	胎土 磨砂粒を多く含む。 色調 薄い黄褐色	全体に指ナデ。	SAR247 風化が著しい。
第44回 2-363	III区 SB08 ピット内	把手 2.7 ×2.7 長さ 5.7		角状を呈す。	胎土 磨砂粒を多く含む。 色調 黄褐色	全体に指ナデ。	SAR423 風化が著しい。
第44回 2-364	III区 第7 加工段	把手 長さ 3.4 (5.5)		短い角状を呈す。	胎土 磨砂粒を多く含む。 色調 黄褐色	全体に指ナデ。	SAR389 風化が著しい。
第44回 2-365	III区 第7 加工段 1号住	把手 長さ 2.5 ×3.0 (6.0)		角状を呈す。	胎土 磨砂粒を多く含む。 色調 薄い黄褐色	全体に指ナデ。	SAR474
第44回 2-366	III区 第1 加工段 SB01 ピット内	把手 長さ 3.0 ×3.5 (6.0)		角状を呈す。	胎土 1mm前後の砂粒を多く含む。 色調 黄褐色	全体に指ナデ。	SAR468
第45回 3-367	III区 H-14	壺 口径(24.3)		口縁部はくの字状に外反する。	胎土 砂粒を多く含む。 色調 黄褐色	口縁部外面はヨコナデ。腹部外面はナメナデ。内面はヘラ削り。	SAH268
第45回 3-368	III区 SD02	壺 口径(24.6)		口縁部はくの字状に外反する。	胎土 砂粒を多く含む。 色調 黄褐色	口縁部外面はヨコナデ。腹部内面はヘラ削り。	SAH242
第45回 3-369	III区 F-13	壺 口径(24.0)		口縁部はくの字状に短く外反する。	胎土 砂粒を多く含む。 色調 黄褐色	口縁部外面はヨコナデ。腹部内面はヘラ削り。外側はハケ目。	SAH271
第45回 3-370	III区 第6 加工段	壺 口径(22.2)		口縁部は短く外反し、腹部は球状に張る。	胎土 砂粒はある程度立たない。 色調 黄褐色	腹部外面はタテハケ目。内面はナメナラ削り。	SAR475

探査番号	遺構	層種	法長(cm)	形態の特徴	胎土・焼成	手法の特徴	備考
第45回 3-371	III 区 H-14	把手	径 2.8 ×3.5 長さ 5.0	角状を呈す。	胎土 砂粒を多く含む 色調 黄褐色	把手は割り後ナデ。内面はヨコ方向のへう削り。	SAH258
第45回 3-372	III 区 F-13	把手	径 2.9 ×3.3 長さ 5.0	角状を呈す。	胎土 砂粒を多く含む 色調 黄褐色	全体に指ナデ。	SAH221
第45回 3-373	III 区 E-12	把手	径 2.6 ×4.0 長さ 4.0	短い角状を呈す。	胎土 砂粒を多く含む 色調 黄褐色	指頭圧痕を多く残す。	SAH262
第45回 3-374	III 区 F-12	把手	径 3.5 ×4.0 長さ 5.0	短い角状を呈す。	胎土 砂粒を多く含む 色調 黄褐色	全体に指ナデ。	SAH230
第45回 3-375	III 区 E-11	把手	径 2.6 ×3.1 長さ 5.0	角状を呈す。	胎土 1mm前後の砂 粒を多く含む。 色調 黄褐色	全面に指ナデ。	SAR416 風化が著しい
第45回 3-376	III 区 第7 加工段	把手	径 1.3 ×2.2 長さ (3.8)	短い角状を呈す。	胎土 1mm前後の砂 粒を多く含む。 色調 淡い茶褐色	全面に指ナデ。	SAR473
第45回 3-377	III 区 S D01	把手	径 2.3 ×2.7 長さ 5.7	角状を呈す。	胎土 まれに1mmは ど砂粒を含む。 色調 黄褐色	全面に指ナデ。	SAR469
第45回 3-378	III 区 G-14	把手	径 (1.6) ×2.3 長さ 4.3	角状を呈す。	胎土 砂粒を多く含む む。 色調 黄褐色	全面に指ナデ。	SAR 45
第45回 3-379	III 区 E-11	把手	径 2.7 ×3.0 長さ 4.3	角状を呈す。	胎土 砂粒を多く含む む。 色調 黄褐色	全面に指ナデ。	SAH220
第45回 3-380	III 区 第6 加工段	把手	径 1.5 ×2.7 長さ 2.7	短い角状を呈す。	胎土 微砂粒を多く 含む。 色調 黄褐色	全面に指ナデ。	SAR394
第45回 3-381	III 区 G-14	把手	径 3.0 ×3.0 長さ 5.0	角状を呈す。	胎土 微砂粒を多く 含む。 色調 黄褐色	全面に指ナデ。	SAR 50
第45回 3-382	竈	基部径(21.7)			胎土 1mm前後の砂 粒を含む。 色調 黄褐色	内面はタテ方向にへ ラ削り後、基部に沿 ってヨコ方向にヘラ 削りを施す。	SAR420 外見は風化 が著しい
第45回 3-383	III 区 E-11	竈	基部径(21.0)	基部のハの字型を呈 す。	胎土 1mm前後の砂 粒を含む。 色調 黄褐色	外見はタテハケ目。 内面はタテ方向に指 ナデ。基部はヘラ削 り。	SAR419
第45回 3-384	III 区 S B03	瓶	基部径(23.5)		胎土 1mm前後の砂 粒を多く含む。 色調 黄褐色		SAR441 黒斑あり
第45回 3-385	III 区 G-14	瓶	3.5×5.5の 小破片	基部近くに0.6cmの 孔を穿つ。	胎土 1mm前後の砂 粒を多く含む。 色調 赤褐色	外見はタテハケ目。 内面はヨコ方向にへ ラ削り。	SAR466
第45回 3-386	III 区 E-11	瓶		焚口部に衿をつけ る。	胎土 微砂粒を多量 に含む。 色調 くすんだ黄褐色	外見はタテハケ目。 内面はタテ方向にへ ラ削り。基部及びそ の付近はヨコ方向に ヘラ削り。	SAR421
第46回 4-387	III 区 S D02	竈		焚口部に衿をつけ る。	胎土 1mm前後の砂 粒を多く含む。 色調 黄褐色	内面はヘラ削り。 冷部はヨコナデ。	SAR455
第46回 4-388	III 区 S D02	竈		焚口部に衿をつけ る。	胎土 1mm前後の砂 粒を多く含む。 色調 黄褐色	内面はヘラ削り。	SAR454
第46回 4-389	III 区 E-11	竈		焚口部に衿をつけ る。	胎土 1mm前後の砂 粒を多く含む。 色調 黄褐色	全面に指ナデ。	SAR412
第46回 4-390	III 区 S D02	竈			胎土 1mm前後の砂 粒を多く含む。 色調 黄褐色	全面に指ナデ。内面 はヘラ削り。	SAR454 4-388と同 個体か?
第46回 4-391	III 区 第5 加工段	竈	基部径(22.5)		胎土 微砂粒を多く 含む。 色調 黄褐色	外見はタテハケ目。 内面はヨコ方向のへ ラ削り。	SAR390

## 才ノ峰遺跡

插番号	図	遺構	層	種	法基(m)	形態の特徴	胎	土・焼成	手法の特徴	備考
第46図 4-392	III 区 第4 加工段	土製支脚	基部径 12.0 ×11.3			基部はハの字状に広がり、内面は凹む。	胎土 色調	砂粒を多く含む。黄褐色	外面はナデ。底部はヘラによる抉り。	SAH219
第46図 4-393	III 区 G-14	土製支脚	基部径(11.7)			基部は末広がり。底部はわざかに凹む。	胎土 色調	砂粒を多く含む。黄褐色	外面はナデ。	SAH218
第46図 4-394	III 区 H-13	土製支脚	基部径(11.5)			基部は広がり、底部は凹む。	胎土 色調	砂粒を多く含む。桃白色外	外面は削りの後ナデ。	SAH264
第46図 4-395	III 区 E-12	土製支脚	基部径(11.2)			基部は広がり、底部はやや凹む。	胎土 色調	砂粒を多く含む。桃褐色外	外面は指頭圧痕が残る。	SAH261
第46図 4-396	III 区 E-12	土製支脚	基部径(12.5)			基部はハの字状に広がる。	胎土 色調	砂粒を多く含む。黄褐色	頭圧痕が残る。基部と内面はヘラ削り。	SAH260
第46図 4-397	III 区 H-14	土製支脚	基部径(13.0)			基部はハの字状を呈す。	胎土 色調	砂粒を多く含む。黄褐色	内面とも指頭圧痕が残る。	SAH249
第47図 5-398	III 区 H-14	土製支脚	脛部径(5.0) 高さ(12.0)			脣部(5.0)三ツ又状の突起の痕が残る。	胎土 色調	砂粒を多く含む。黄褐色	全面に指頭圧痕を残す。	SAH259
第47図 5-399	III 区 E-11	土製支脚	脣部径 4.5 ×4.2			脣部(4.5)三ツ又の突起を付けた。底部は凹み、末高さ 10.0	胎土 色調	砂粒あり。黄褐色	砂粒は全面にヘラ削り。 自立しない。	SAH415
第47図 5-400	II 区 黒褐色 土壌下部	土製支脚	脣部径(4.5) 高さ(13.0)			脣部(4.5)三ツ又の突起を付ける。底部は凹み、末高さ(13.0)	胎土 色調	砂粒を多く含む。黄褐色	全面にヘラ削り。	SAH206
第47図 5-401	III 区 E-11	土製支脚	脣部径 7.0 ×6.2			脣部(7.0)三ツ又状の突起を付ける。脣部は末広がり。試部は凹む。	胎土 色調	砂粒を多く含む。黄褐色	脣部はヘラ削り。その他は指頭圧痕が残る。	SAH229
第47図 5-402	III 区 加工段	土製支脚	基部径 9.5 ×9.5			脣部(9.5)三ツ又状の突起を付ける。脣部は末広がり。試部は凹む。	胎土 色調	砂粒を多く含む。黄褐色	脣部はヘラ削り。その他は指頭圧痕が残る。	SAH265
第47図 5-403	III 区 G-13	土製支脚	脣部径 5.2 高さ(10.0)			脣部(5.2)三ツ又状の突起を付ける。	胎土 色調	砂粒を多く含む。黄褐色	全面に指頭圧痕を残す。	SAH254
第47図 5-404	III 区 加工段	上製支脚	基部径(11.2)			基部は末広がり。底部は凹む。	胎土 色調	砂粒を多く含む。黄褐色	外面に指頭圧痕を残す。底部はヘラ削り。	SAR402
第47図 5-405	III 区 E-11	上製支脚	基部径(8.0)			基部は末広がり。底部は凹む。	胎土 色調	砂粒を多く含む。黄褐色	外面は指ナデ。底部はヘラ削り。	SAR414
第47図 5-406	III 区 E-11	土製支脚	基部径(10.0)			基部は末広がり。底部は凹む。	胎土 色調	砂粒を多く含む。黄褐色	外面は指ナデ。底部はヘラ削り。	SAR422
第47図 5-407	III 区 E-11	土製支脚	基部径(7.0)			基部は末広がり。底部は凹む。	胎土 色調	砂粒を多く含む。赤褐色	1 mm前後の砂を含む。外面はナデ。底部はヘラ削り。	SAR410
第48図 6-408	III 区 G-14	土製支脚	脣部径(6.5)			三ツ又状の突起をつける。	胎土 色調	砂粒を多く含む。赤褐色	全面にヘラ削り。	SAH227
第48図 6-409	III 区 H-14	土製支脚	脣部径 5.6 ×5.3			三ツ又状の突起をつける。	胎土 色調	砂粒を多く含む。赤褐色	全面に指ナデ。	SAH217
第48図 6-410	III 区 F-13	土製支脚	脣部径 6.0 ×5.5			三ツ又状の突起をつける。	胎土 色調	砂粒を多く含む。赤褐色	全面に指ナデと指頭圧痕。	SAH216
第48図 6-411	III 区 H-14	土製支脚				三ツ又状の突起をつける。	胎土 色調	砂粒を多く含む。赤褐色	全面に指頭圧痕を残す。	SAH266
第48図 6-412	III 区 E-11	土製支脚	脣部径 4.5 ×4.0			三ツ又状の突起をつける。	胎土 色調	砂粒を多く含む。赤褐色	全面に指ナデと指頭圧痕。	SAH214
第48図 6-413	III 区 F-12	土製支脚	脣部径 4.8 ×4.6			三ツ又状の突起をつける。	胎土 色調	砂粒を多く含む。赤褐色	全面に指ナデと指頭圧痕。	SAH212

## 手 捺 土 器 観 察 表

番号	法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	山土地点	番号	法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土地点
490	口径 器高 4.0 3.3	手捏	内外面 ナデ	II	521	口径 器高 3.5 (2.1)	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、E-13
491	口径 器高 4.4 3.1	手捏、底部平底	内外面 ナデ	II	513	口径 器高 (4.3) 2.5	手捏	内外面 ナデ	III、G-14
492	口径 器高 4.3 2.7	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	II	514	口径 器高 4.0 2.4	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、G-14
493	口径 器高 4.3 2.6	手捏	内外面 ナデ	II	515	口径 器高 4.2 2.4	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、G-14
494	口径 器高 4.2 2.6	手捏	内外面 ナデ	II	516	口径 器高 4.0 2.3	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	II
495	口径 器高 4.4 2.9	手捏	内外面 ナデ	II	517	口径 器高 (4.3) 2.4	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、G-13
496	口径 器高 3.6 1.8	手捏	内外面 ナデ	II	518	口径 器高 4.2 2.7	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、G-14
497	口径 器高 3.4 (1.7)	手捏	内外面 ナデ	II	519	口径 器高 4.0 2.7	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、第V段
498	口径 器高 3.5 1.9	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	II	520	口径 器高 4.5 2.1	手捏	内外面 ナデ	I、K-20
499	口径 器高 3.2 1.8	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III	521	口径 器高 4.7 2.7	手捏	内外面 ナデ	II
500	口径 器高 3.4 1.95	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	I、M-21	522	口径 器高 (4.4) 2.7	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、G-14
501	口径 器高 3.6 1.8	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	I、K-19	523	口径 器高 (4.8) 2.7	手捏	内外面 ナデ	I、K-20
502	口径 器高 3.6 2.0	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、G-14	524	口径 器高 5.4 2.7	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	II
503	口径 器高 3.6 2.3	手捏	内外面 ナデ	III、第VI段	525	口径 器高 4.6 2.6	手捏	内外面 ナデ	III、H-14
504	口径 (3.5) 器高 2.4	手捏	内外面 ナデ	III、G-14	526	口径 器高 4.4 2.6	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	II
505	口径 器高 4.2 2.1	手捏	内外面 ナデ	II	527	口径 器高 4.6 2.6	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、F-14
506	口径 器高 (3.6) 2.1	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、G-14	528	口径 器高 4.8 2.8	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、F-14
507	口径 器高 4.1 2.2	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、第IV段	529	口径 器高 5.6 2.7	手捏	内外面 ナデ	II
508	口径 器高 4.0 1.8	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、G-14	530	口径 器高 (2.7) 4.3	手捏	内外面 ナデ	I、L- 18、19
509	口径 器高 3.6 1.8	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、G-14	531	口径 器高 4.8 3.0	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III
510	口径 器高 4.3 2.3	手捏	内外面 ナデ	III、F-13	532	口径 器高 4.2 3.3	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	II
511	口径 器高 4.1 2.2	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、E11、 P-2	533	口径 器高 4.4 3.2	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、第VI段

## 才ノ峰遺跡

補圖 番号	法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土点	補圖 番号	法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	出土点
534	口径 4.7 器高 3.6	手捏、指頭圧痕 内外面 ナデ	III、第VII段	550	口径 4.2 器高 2.1	手捏	内外面 ナデ	III、F-14	
535	口径 4.7 器高 3.1	手捏、指頭圧痕 内外面 ナデ	I、K-20	551	口径 4.6 器高 2.0	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、第VII段	
536	口径 3.7 器高 3.2	手捏、指頭圧痕 内外面 ナデ	III、第VI段	552	口径 3.2 器高 2.1	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、G-14	
537	口径 5.4 器高 2.3	手捏、指頭圧痕 内外面 ナデ	III、第VII段	553	口径 3.4 器高 1.9	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、G- 13、14	
538	口径 5.7 器高 3.3	手捏、指頭圧痕 内外面 ナデ	II	554	口径(4.3) 器高(3.8)	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、G-14	
539	口径 5.2 器高 2.9	手捏 内外面 ナデ	II	555	口径 2.8 器高 2.0	手捏	内外面 ナデ	III、C-10	
540	口径(5.5) 器高 3.0	手捏、指頭圧痕 内外面 ナデ	III、F-14	556	口径 4.7 器高 2.4	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、C-10	
541	口径(6.2) 器高 3.0	手捏 内外面 ナデ	III、H-14	557	口径 4.2 器高 2.2	手捏	内外面 ナデ	III、C-10	
542	口径 5.7 器高(3.6)	手捏 内外面 ナデ	II	558	口径(4.3) 器高 2.4	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、C-10	
543	口径 3.5 器高 1.2	手捏 内外面 ナデ	II	559	口径 5.8 器高 2.9	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、C-10	
544	口径 3.3 器高(1.5)	手捏 内外面 ナデ	II	560	口径 7.5 器高 4.5	手捏、指頭圧痕	内外面 ナデ	III、第VII段	
545	口径 3.7 器高 1.7	手捏 内外面 ナデ	II	561	口径 器高	手捏	内外面 ナデ	III	
546	口径 3.8 器高 1.7	手捏 内外面 ナデ	I、K- 18、19	562	口径 器高	手捏	内外面 ナデ	III	
547	口径 3.7 器高 1.9	手捏 内外面 ナデ	III、F-12	563	口径 器高	手捏	内外面 ナデ	III	
548	口径 3.9 器高 1.9	手捏 内外面 ナデ	I、K-20	564	口径 器高	手捏	内外面 ナデ	III	
549	口径 器高	手捏 内外面 ナデ	III、14	565	口径 器高	手捏	内外面 ナデ	III	

## 土、王、土、錘

標本番号	長さ		径		口徑	重量	型体	標本番号	長さ		径		口徑	重量	型体
	cm	mm	cm	mm					cm	mm	cm	mm			
569	3.9	3.9~4.8	0.6	62.4	A	602	4.0	3.6~3.9	0.7~1.0	42.8	B				
570	3.7	4.0	0.7	45.6	A	603	4.3	3.0~3.2	0.8	45.8	B				
571	3.6	3.3	0.6	33.4	A	604	4.3	3.4	0.5~1.0	49.7	B				
572	3.4	4.0~4.9	1.2	57.5	A	605	3.9	3.7	1.0	51.2	B				
573	4.0	4.0~4.1	0.8	54	A	606	4.1	2.8	0.6	28.9	B				
574	3.9	3.9	0.9	41.3	A	607	4.0	2.8~3.0	0.8	36.3	B				
575	3.9	4.0~4.2	0.8~1.2	46.3	A	608	3.1	2.5~3.4	0.7~0.9	29.9	B				
576	3.8	3.4~3.5	1.0	42	A	609	3.1	2.5~2.7	0.7~1.0	24.6	B				
577	3.5	3.0	1.0	27.7	A	610	4.5	2.6~3.0	0.7~1.1	36.1	B				
578	3.5	3.2~3.5	0.8	36.2	A	611	3.9	2.8~2.9	0.8~0.9	33.5	B				
579	3.5	3.4~3.6	1.1	38	A	612	3.9	3.0	0.6~0.8	38.6	B				
580	3.6	3.5	0.7~1.0	31.9	A	613	3.6	2.9~3.2	0.9~1.0	34.6	B				
581	3.1	2.9~3.1	0.5	25.7	A	614	4.2	2.7~3.0	0.6~1.1	31.2	B				
582	3.3	3.3~3.5	0.7~0.8	34.7	A	615	3.8	1.9~3.1	0.9~1.0	34.9	B				
583	3.2	2.8	0.6~0.8	22.4	A	616	5.0	2.7~3.4	0.7~0.9	46.6	C				
584	3.2	3.1~3.4	0.8~1.1	26	A	617	4.2	2.8~2.9	0.5~0.7	31.8	C				
585	2.9	3.1	0.7	13.7	A	618	4.0	2.9~3.2	0.8~1.1	33.4	C				
586	3.3	3.4~3.6	0.9~1.1	41.2	A	619	3.6	2.8~3.0	0.6~0.7	27.3	C				
587	3.0	3.0~3.4	0.5	27.9	A	620	3.5	2.7	0.7~1.1	24.4	C				
588	4.4	3.0~3.4	0.7~0.9	42.3	B	621	3.0	2.2~2.4	0.7~1.0	13.1	C				
589	5.0	3.5~3.65	0.7~0.8	61.8	B	622	8.15	1.4~1.5	0.4~0.5	2.08	D				
590	4.3	2.9~3.4	0.7	52.2	B	623	5.8	2.2	0.4	26.3	D				
591	5.0	3.1~2.3	0.7	47.9	B	624	6.8	1.7	0.4	19.8	D				
592	4.2	3.1~3.3	0.7~0.9	47.5	B	625	6.0	1.7~1.8	0.4	17.2	D				
593	4.7	2.9~3.2	0.9	46.2	B	626	5.3	1.8	0.3~0.4	16.7	D				
594	4.8	2.8~3.5	0.7	48.9	B	627	6.0	1.5~1.6	0.4	14.1	D				
595	4.9	2.8~3.2	0.8~0.9	44.3	B	628	5.6	1.8	0.3~0.4	18	D				
596	3.1	2.8~2.9	0.7	32	B	629	7.0	2.0	0.4	24.9	D				
597	4.1	2.8~3.3	0.8	34.7	B	630	1.3	1.8	0.4	19.8	D				
598	4.2	3.4~3.5	0.7	40.7	B	631	6.0	1.9~2.0	0.4	19.8	D				
599	4.9	3.3~3.5	0.6~0.7	63.1	B	632	6.7	1.8	0.6	19.9	D				
600	5.4	3.3~3.5	0.7~0.8	60.9	B	633	5.8	1.7	0.5	15.8	D				
601	4.9	3.3~3.4	0.9~1.1	48.2	B	634	6.3	1.8~2.0	0.4	20.8	D				

## 才ノ峰遺跡

種別 番号	長さ cm	径 cm	口径 cm	重量 g	型体	標本番号	長さ cm	径 cm	口径 cm	重量 g	型体
635	6.2	1.9~2.1	0.3	25.4	D	668	3.2	1.7	0.4	9.7	D
636	6.7	2.0~2.3	0.4	28.2	D	669	3.35	1.8	0.35	10.3	D
637	5.6	2.1	0.5	22.8	D	670	2.5	1.4~1.5	0.4	4.4	D
638	5.8	2.0~2.1	0.5	22.6	D	671	3.3	1.9~2.0	0.5	12.3	D
639	5.3	1.9	0.6	17.5	D	672	3.0	1.6~1.7	0.5~0.6	6.3	D
640	4.6	1.6	0.5	12.7	D	673	6.8	2.6~2.9	0.9~1.0	43.4	D
641	5.0	1.8~1.9	0.4~0.5	16.8	D	674	6.4	2.6~2.9	0.7~0.8	40.4	D
642	6.5	2.0~2.5	0.6	26.3	D	675	5.3	2.4~2.9	0.7~0.8	31.3	D
643	6.1	2.0~2.2	0.6~0.7	24.5	D	676	4.8	2.8~2.9	0.7~0.8	35.6	D
644	6.9	2.3	0.6	32.9	D	677	4.7	3.1	0.6	40.1	D
645	5.8	2.2	0.4	26.3	D	678	7.0	4.0~4.1	1.1~1.4	100.5	D
646	4.4	1.8~1.9	0.6	15.9	D						
647	4.9	2.0~2.1	0.5	17.8	D						
648	4.9	1.8~1.9	0.4	17	D						
649	4.25	2.0	0.5	14.7	D						
650	6.8	2.6~2.9	0.4	16.5	D						
651	3.9	1.8~2.0	0.4	12.2	D						
652	4.1	2.0~2.1	0.6	15.5	D						
653	3.8	2.2~2.5	0.5~0.6	16.3	D						
654	4.8	2.1~2.2	0.5~0.6	18.3	D						
655	5.5	1.8	0.4	17.8	D						
656	4.8	1.5~1.6	0.5	9.6	D						
657	5.2	1.8	0.6	15.4	D						
658	4.4	1.7	0.6	11.5	D						
659	4.1	1.7	0.5	11.4	D						
660	4.2	1.7~1.9	0.5	10.8	D						
661	4.2	1.5	0.3	11	D						
662	4.0	1.8	0.5	8.4	D						
663	3.3	1.6~1.8	0.5	9.5	D						
664	3.2	1.7	0.5	7.1	D						
665	3.8	2.0	0.25	10.2	D						
666	3.3	1.55~1.75	0.6	6.3	D						
667	3.1	1.6	0.3	6.9	D						

## VI 勝 負 遺 跡

— 松 江 市 東 津 田 町 —

1. 調査の経過 .....	459
2. 遺跡の概要 .....	460
3. 検出遺構と遺物 .....	463
4. 小 結 .....	501



## 挿 図 目 次

第 1 図 調 査 区 配 置 図	460
第 2 図 I 区 遺 構 配 置 図	461
第 3 図 盛 土 遺 構 実 測 図	463
第 4 図 盛 土 遺 構 出 土 器 実 測 図	464
第 5 図 盛 土 遺 構 土 層 図	465
第 6 図 S I 01・02 実 測 図	467
第 7 図 S I 01 土 器 出 土 状 態 図	468
第 8 図 S I 01 出 土 土 器 実 測 図	468
第 9 図 S I 02 土 器 出 土 状 態 図	469
第 10 図 S I 02 出 土 土 器 実 測 図	470
第 11 図 S I 03・S D 04 実 測 図	472
第 12 図 S I 03 土 層 図	473
第 13 図 S I 03 出 土 土 器 実 測 図	474
第 14 図 S I 03 出 土 鉄 器 実 測 図	474
第 15 図 S D 04 出 土 遺 物 実 測 図	475
第 16 図 S I 04・S D 06・07 実 測 図	477
第 17 図 S I 04 土 器 出 土 状 態 図	478
第 18 図 S I 04 中央 ピット・床面 出 土 土 器 実 測 図	478
第 19 図 S I 04 出 土 土 器 実 測 図	479
第 20 図 S I 04 出 土 土 器 実 測 図	480
第 21 図 S I 04 出 土 石 瓦 実 測 図	480
第 22 図 S D 06・07 出 土 土 器 実 測 図	481
第 23 図 S D 07 出 土 遺 物 実 測 図	482
第 24 図 S B 01・02 実 測 図	483
第 25 図 S B 03 実 測 図	484
第 26 図 S D 01 実 測 図	485
第 27 図 S D 01 出 土 土 器 実 測 図	485
第 28 図 S D 02 実 測 図	486
第 29 図 S D 02 出 土 土 器 実 測 図	487
第 30 図 S D 03・05・08 実 測 図	488
第 31 図 S D 09・10 実 測 図	489
第 32 図 S D 11・12 壁 穴 状 遺 構 出 土 土 器 実 測 図	490
第 33 図 壁 穴 状 遺 構 出 土 土 器 実 測 図	491

第 34 図 堪穴状遺構土器出土状態	492
第 35 図 SK01~03 実測図	493
第 36 図 SK04~07 実測図	494
第 37 図 SK06 出土土器実測図	495
第 38 図 西斜面ピット群出土土器実測図	496
第 39 図 西斜面ピット群出土石器実測図	496
第 40 図 西斜面ピット群出土石器実測図	497
第 41 図 出土土器実測図	498
第 42 図 出土石器実測図	499

## 1 調査の経過

- 4月13日 調査開始。勝負1号墳の測量を行う。
- 4月22日 同古墳の伐開を行う。全面に石が認められる。
- 4月23日 同古墳の表土を除去すると同時に石の実測を行う。
- 5月19日 石の実測終了。
- 5月20日 同古墳の南側で溝状遺構のプランを確認。古墳の下に入り込んでいるようだ。
- 5月22日 本丘陵をI区とし、重機により表土を除去する。遺物は出土していない。
- 5月25日 同古墳の周囲に溝状遺構を確認する。古墳の切削溝にしては幅が狭いようだ。
- 5月27日 表土除去完了。土師器片、陶器片かわずかに出土している。また本丘陵の西丘陵をII区とし、重機により表土を除去。古墳の築石下から近世のものと思われる瓦出土。この石は古墳と関係ないかもしれない。
- 6月2日 I区古墳の主体部を検出するため頂部を少しづつ削って精査する。
- 6月9日 II区の精査終了。遺構は検出できなかった。また、I区とII区の小谷は埋土によって掩地したことがわかった。
- 6月19日 I区西南隅（S I-E 8 グリッド）で竪穴住居跡を検出（S I 02）。
- 6月22日 I区勝負1号墳の北（N I-E 9 グリッド）で竪穴住居跡を検出（S I 03）。平面形は隅丸方形プランである。
- 7月4日 I区S I 01の南に重複して溝状遺構を検出。竪穴住居跡の側溝と思われる（S I 01）。また、N I-E 8 グリッド付近ではピット、溝状遺構を検出。これらの遺構は丘陵頂部付近にのみ分布すると思われる。
- 7月17日 I区の東側の丘陵をIII区とし、調査開始。
- 7月29日 I区勝負1号墳の表土下約1mから瓦出土。このことからこの遺構は古墳ではないと判断した。
- 8月6日 I区勝負1号墳の下で、竪穴住居跡のプラン検出。
- 8月20日 I区の丘陵東斜面で溝状遺構、ピットを検出。
- 8月25日 I区東斜面の溝状遺構（S D 10）は竪穴状遺構と重複し、床面から土師質土器出土。西斜面の遺構と時期が違うことがわかった。
- 9月1日 III区調査終了。遺構、遺物は検出されなかった。
- 6月3日 勝負1号墳の下からは竪穴住居跡の他に、ピット、土壤、溝などを検出。ピットは特に多い。
- 9月11日 I区を西に拡張する。この部分は谷になっており、かなり深い。遺構はみられないが遺物の出土が多い。
- 9月21日 I区S I 04は、他の竪穴住居跡と違い遺物の多くは土器だが、石器片も一片出土。
- 10月3日 鳥取大学名誉教授山本清先生調査指導。

## 勝負遺跡

10月9日 国学院大学講師吉田恵二先生調査指導。

10月12日 東光台団地方面から遠景写真撮影。

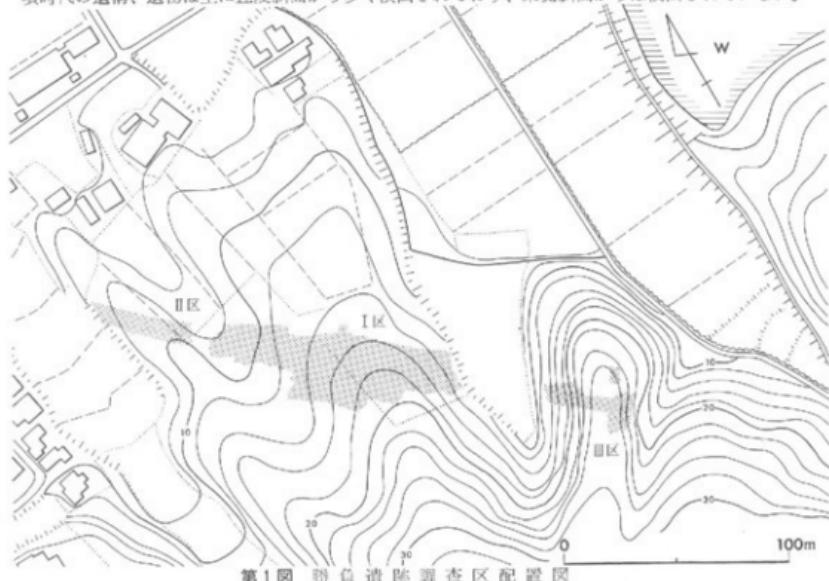
10月14日 補測を行い、調査終了。

## 2 遺跡の概要

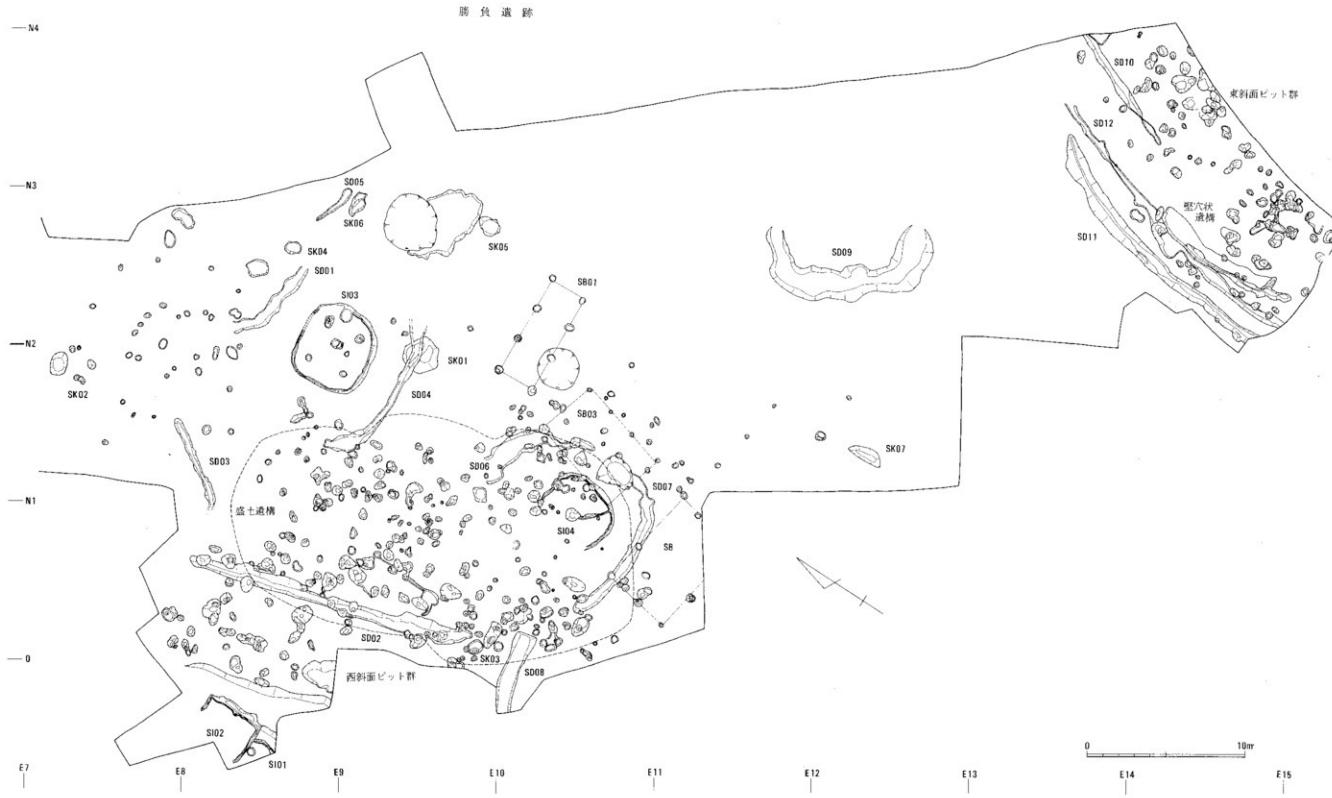
勝負遺跡は、茶臼山から北に派生する標高約20mの低丘陵上に立地し、北には馬橋川によって形成された比較的狭い低地を臨む。調査は、勝負1号墳のある丘陵をI区、I区の西側の丘陵をII区、I区の東側の丘陵をIII区として設定し、I区から行った（第1図）。

調査に当っては、建設道路の進行方向と平行する線を基準として $10 \times 10m$ の方眼を組みグリッドの単位とした。グリッドの設定は、北東に向かって $10m$ おきに0、N1、N2…。南西側に向って0、S1、S2…。東南側に向って0、E1、E2…、西北側に向って0、W1、W2…とし、西南コーナーの交点をもってグリッド名とした。

調査の結果II、III区では遺構・遺物は検出できなかったが、I区では堅穴住居跡など多くの遺構が検出できた。ここでは当初古墳としていた勝負1号墳の盛土内から瓦、唐津焼きの茶碗などが出土し古墳ではないことが判明した（以下、盛土遺構と呼ぶ）。この盛土遺構の周辺では、堅穴住居跡4、掘立柱建物3、土壙、溝状遺構ピット群が検出され、遺物も多く出土した。またI区西端の谷間からは弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多く出土している。以上のような弥生時代から古墳時代の遺構、遺物は主に丘陵斜面から多く検出されており、東側斜面からは検出されていない。



第1図 勝負遺跡調査区配置図



第2図 勝負遺跡 I 区 遺構配置図

東斜面では、堅穴状遺構1、溝状遺構3、ピット群が検出されている。堅穴状遺構内から土師質上器が出土していることから、東斜面の遺構は概ね中世頃のものと思われる。以下、検出遺構と出土遺物について列記することにする。

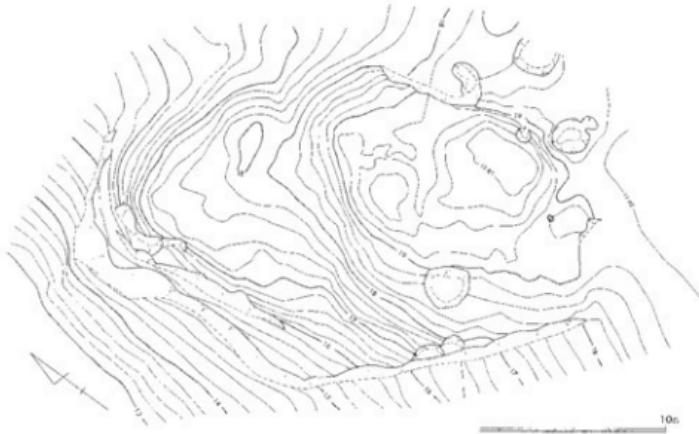
### 3 検出遺構と遺物

#### 盛土遺構（第3図）

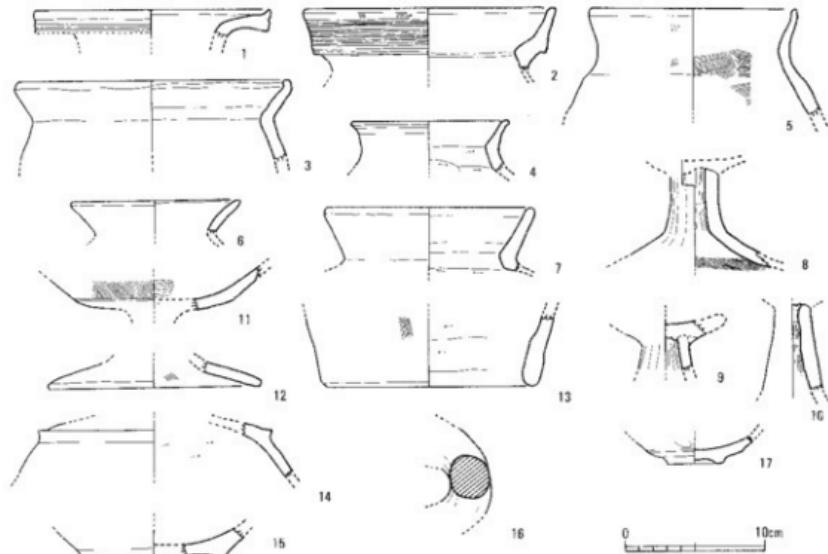
丘陵頂部西よりの緩斜面に位置する。発掘前の原状では周辺部や頂部は掘削されていたが、盛土はかなり残り古墳状の高まりが明瞭に観察できた。平面形は不整形の前方後円形を呈し、盛土は南部を高く、北部をやや低く盛っていた。また、表面は全面大小の石で覆われていた。その規模は全長約26m、幅西部で11.5m、東部で15.5m、高さ西部で1.4m、東部で2mを測る。土層の観察によると北部と南部に1個所ずつ核となる土塊を作り、それらを中心にして盛って築造したように思えた（第5図）。なお、最下層には自然堆積したとみられる黄色土と黄灰色土の2層があることから、整地は表土層を除去した程度と思われる。

遺物（第4図） 盛土内からは、壺、甕、高杯、器台、把手、蓋または甕の底部、陶器が出土している。第4図1は口径16.4cmの壺である。口縁部が大きく開き、端部は肥厚して凹線文が2条入っている。胎土には砂粒が含まれ、焼成は良好で黄褐色を呈している。

同図2～7は甕である。2は頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁部が複合口縁の甕である。口径は17.8cmを測る。口縁端部は外傾し、外面にはクシ状工具による10条の平行沈線文が入っている。3～7も甕であるが、口縁部は単純口縁である。3、5、7は口径15～19.2cmを測る中型のものである。いずれも頸部が「く」の字形に屈曲し口縁部は内側に屈曲している。4は口径11cmの小型のもので、口縁端部は肥厚して外側に屈曲している。6も口径12cmの小型であるが口縁端部は丸く納



第3図 勝負遺跡 盛土遺構実測図



第4図 勝負遺跡盛土遺構出土土器実測図

まっている。いずれも外面及び口縁部内面にはヨコナデ調整が施される。脇部内面は5にハケ目調整が施されているが、他はすべてヘラ削り調整が施されている。3の胎土には砂粒がほとんど含まれないが、他には砂粒が多く含まれる。焼成はいずれも良好で黄褐色を呈している。

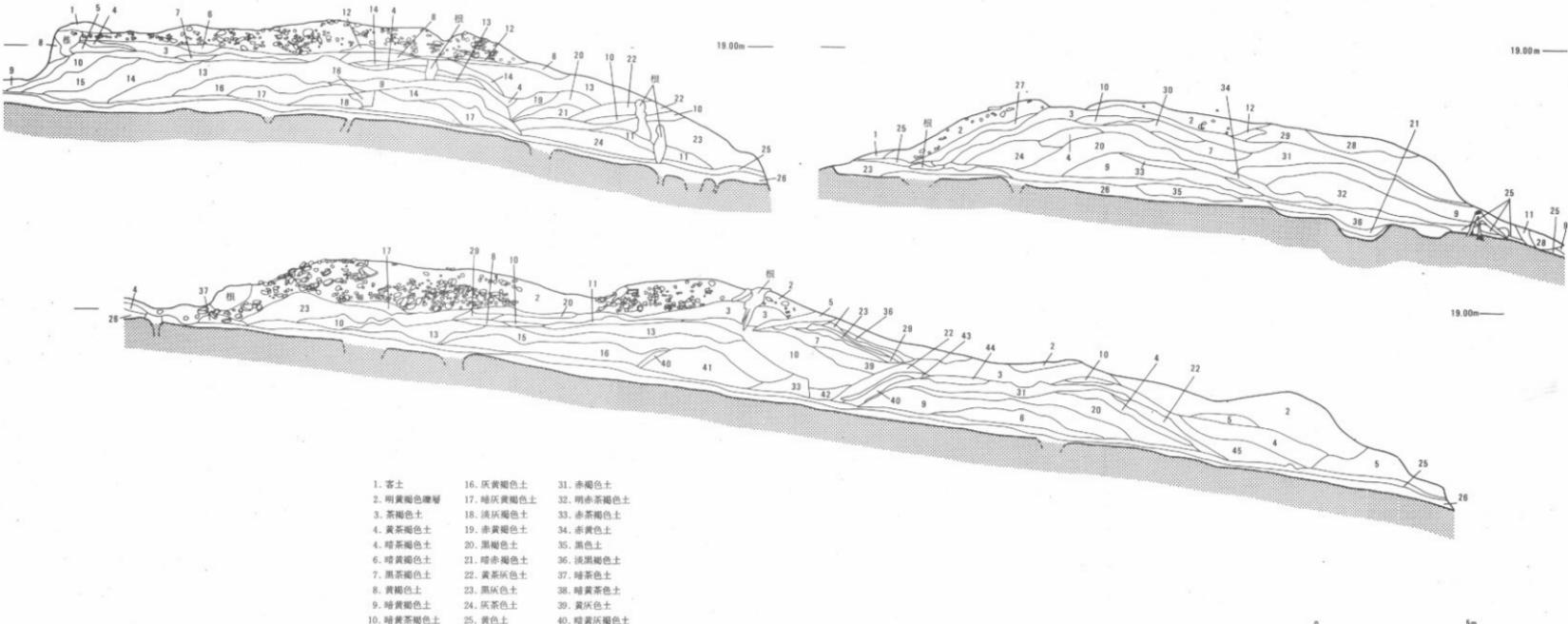
同図8～12は高環である。11は休部中程に段がつき、口縁部は外反するものと思われる。外面はハケ目調整、内面はヘラ磨き調整が施されている。8～10は筒部で、8は裾部が「ハ」の字形に大きく開いている。同図8、10の上端は腰口縁が明瞭に残っている。いずれも外面は削り痕が残っている。また、9の环部内面にはヘラ磨き調整が施され、8の裾部内面にはハケ目調整が施されている。12は、脚端径15cmを測る裾部である。「ハ」の字形に大きく開き、端部は面をなす。外面はヘラ磨き調整、内面はハケ目調整の後にナデ調整が施されている。胎土には10以外はほとんど砂粒が含まれず、焼成は11が不良の他は良好である。色調は黄灰色(11)、赤褐色(8～10・12)を呈している。同図13は器種不明の円筒形を呈す土器である。底径は15.6cmを測り調整は外面にハケ目調整、内面にヘラ削り調整が施されている。胎土に砂粒が含まれ、焼成は良好で色調は黄褐色を呈す。

同図14は鼓形器台の脚部である。端部は「ハ」の字形に大きく開くものと思われる。調整は外面にヨコナデ調整、内面にヘラ削り調整が施されている。胎土には砂粒が多く含まれ、焼成は良好で黄褐色を呈している。

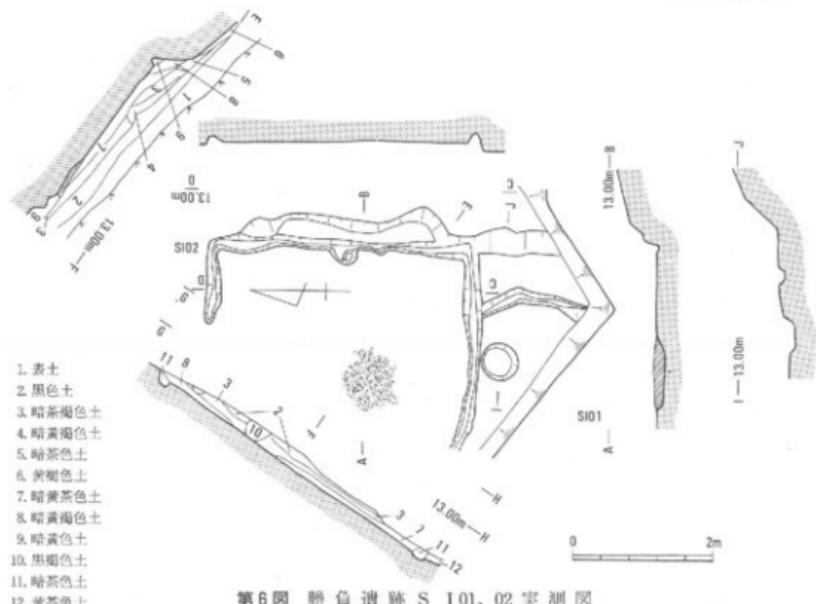
同図15は壺または甌の底部で底径10cmの安定した平底である。胎土には大粒の砂粒が含まれ、焼成は良好で黄褐色を呈している。

同図16は把手である。上端は下端を結ぶ線は6.4cmを測り、断面は円形を呈している。胎土には

勝負遺跡



第5図 勝負遺跡盛土遺構土層図



第6図 勝負遺跡 S 101、02 実測図

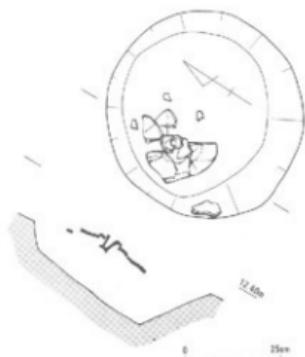
砂粒が多く含まれ、焼成は良好で暗黄褐色を呈す。

同図17は陶器碗である。底径4cmを測る。高台は削り出しで断面が台形を呈す。体部は内湾して伸び、内面および体部外面の上端に暗緑色の釉がかかっている。胎土にはほとんど砂粒が含まれず焼成は良好で無釉の部分は暗赤褐色を呈している。

以上の土器は、形態などから、同図1が弥生時代中期後葉、同図2、14、16が古墳時代前期、同図5～13が古墳時代中期から後期、同図17が江戸時代のものと思われる。同図15は詳細な時期は不明であるが、安定した平底であることから弥生時代のものと考えられる。本遺構では、弥生土器から江戸時代陶器まで出土しているが、第5図17が最下層から出土したことから、この盛土遺構は江戸時代に作られたものと思われる。

#### S 101 (第6図)

調査区西南端に位置する。丘陵西斜面の傾斜変換点に立地する。遺構の大部分が調査区外にあることや、S 102によって覆されていることから、側構、柱穴など一部分を検出したにとどまった。検出し得た範囲では側構は平面形が弧状を呈していることから、本住居跡の平面形は隅丸方形であると考えられる。確認し得た側構の規模は、北端と南端を結ぶ距離が約1.56m、幅約0.2m、深さ約0.1mである。床面はほぼ水平で、上縁幅約0.5×0.54m、深さ約0.18mの柱穴が1個検出されている。なお側構の西側には幅約0.46mのテラスと高さ約0.44mの加工段が検出された。これはS 101の付属施設と考えられる。



第7図 勝負遺跡S 101土器出土状態

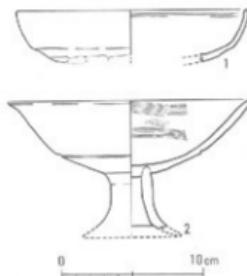
大きく聞くと思われる。筒部と环部の接合部は、両者を接合した後に环部中央の穴を埋めているように観察できた。調整は环部内面にハケ目調整の後にヘラ磨き調整、同外面にヨコナデ調整が施されている。脚部は、筒部内面がヘラ削り調整、内面底部から外面にかけてはヨコナデ調整が施されている。胎土にはわずかに小砂粒が含まれ、焼成は良好で赤褐色を呈している。

これらの遺物は概ね古墳時代中頃のものと思われることから、S 101もほぼこの時期のものと考えてよかろう。

#### S 102 (第6図)

S 101の北に接しており、S 101を壊して作られている。西側3分の2が流失し、東壁および北壁の一部と南側側構の一部が遺存するだけである。残存部から推定すると、平面形は方形と思われ、その規模は南北約3.9m、東西約2.8m以上である。壁は約50度の角度で割り込まれており、確認しき得た壁高は北壁で0.04~0.06m、東壁で0.15~0.5mである。

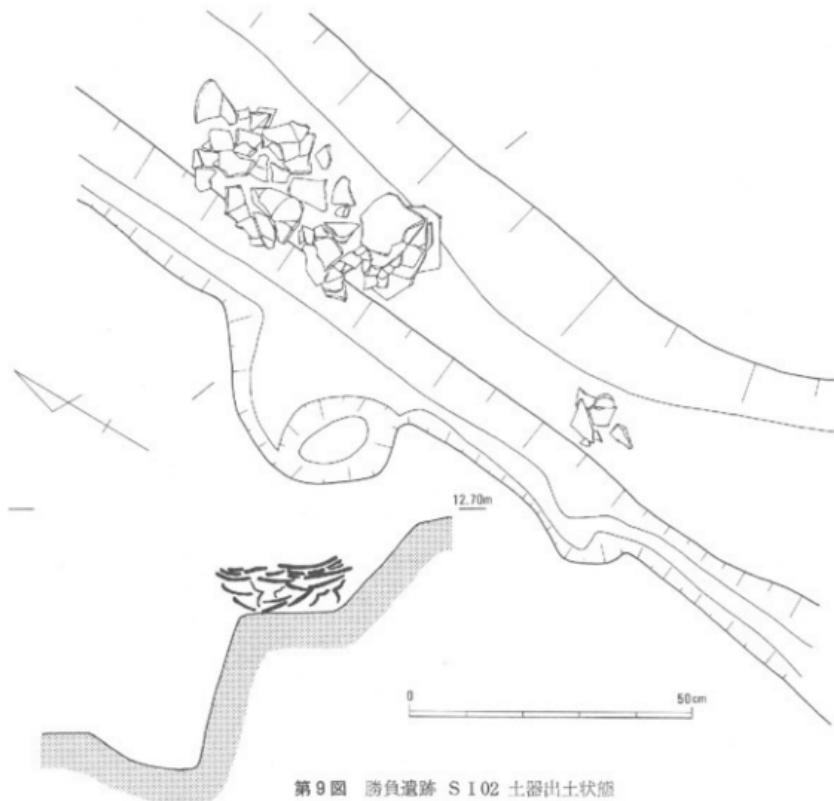
東壁には幅約0.1~0.26mのテラスが設けられている。床面の壁際には幅0.09~0.22m、深さ約0.1mの側溝が廻っている。床面はほぼ水平で、中央には約0.86×0.73mの範囲で焼土が検出された。主柱穴および中央ピットは検出されなかった。



第8図 勝負遺跡S 101出土土器実測図

遺物（第8図） ピットの上面から土器環（第8図1）と同高环（同図2）が出土している。（第7図）1は口径16.4cm、高さ3.8cmの环で、体部は内湾して伸び、口縁端部は肥厚している。調整は底部外面がヘラ削り調整で仕上げられている。胎土には、小砂粒がわずかに含まれ、焼成は良好で黄褐色を呈している。2は口径17.6cm、环部高5.2cm、現存長8.8cmの高环である。环部は体部が内湾気味に伸び、口縁部近くで外反している。体部中程の段はかなり退化しており、沈線状に凹むだけである。脚部は筒部が円筒状で瓶部は「ハ」の字形に

遺物（第10図） 東壁テラス上から壺、壺、高环がまとまって出土しており、S 102に伴うものと考えられる（第9図）。第10図1は口径19.2cm、3は口径16.2cmの壺である。ともに頭部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁だが、かなり退化している。口縁端部は短く外傾し、屈曲部の稜も丸く明瞭ではない。全体に器壁は厚く口唇部は平緩而

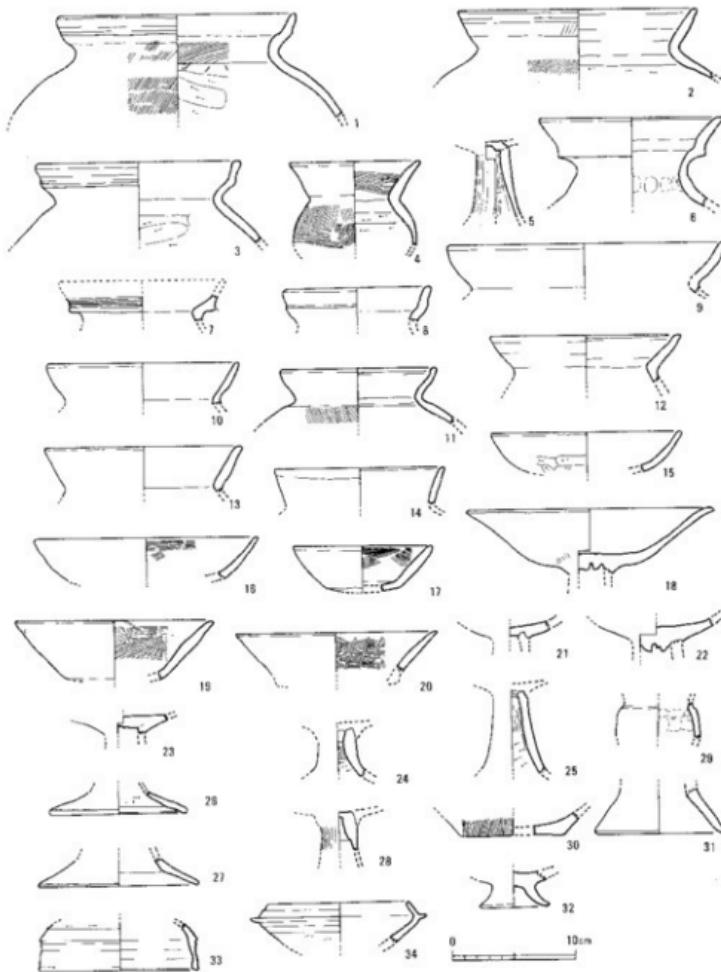


第9図 勝負遺跡 S 102 土器出土状態

をなす。調整は内面の頸部以下はヘラ削り調整、3の内面頭部から口縁部にはヨコナデ調整が施されるが、1の頭部内面にはハケ目調整が施される。口縁部外面にはとともにヨコナデ調整、1の頭部には粗いハケ目調整の後にヨコナデ調整、肩部には粗いハケ目調整が施されている。2も口径16cmの甌であるが、口縁部は逆「ハ」の字形にわずかに内湾して開く。口唇部はわずかに平坦面をなす。調整は内面頭部以下ヘラ削り調整、口縁部内外面ともヨコナデ調整、肩部はハケ目調整が施されている。胎土にはいずれも砂粒が含まれ、焼成は良好である。調整は1が黒灰色、2、3が黄褐色を呈している。

同図4は口径10.6cmの小型丸底甌である。口縁部はやや長く外反し、胴部は球形をなす。調整は肩部内面にヘラ削り調整、口縁部内面にヨコナデ調整、胴部外面にハケ目調整が施されている。胎土には砂粒が含まれ、焼成は良好で黄褐色を呈している。

同図5には高环筒部である。調整は外面に縦方向のヘラ削き、内面にヘラ削り調整が施されてい



第10図 勝負遺跡 S102 出土土器実測図

る。胎土には砂粒が含まれ、焼成は良好で暗赤褐色を呈している。

同図6～34は覆土中から出土している。6は口径14.6cmの壺である。頸部は長く伸び、口縁部は複合口縁である。内外面ともヨコナデ調整が施され、頸部内面には指頭痕が残っている。胎土には砂

粒が含まれ、焼成は良好で黄褐色を呈している。7～14は甌で口径12.2～21cmを測る。7、8は口縁部が複合口縁だが、8はかなり退化した複合口縁である。9～14は単純口縁であるが、口縁部が内湾するもの（9～11）、直線状に伸びるもの（12～14）がある。口縁部はかなり傾斜するものがほとんどであるが、14は直口気味である。口唇部の形態は平坦面をなすもの（8、12～14）、丸いもの（9、10）、肥厚し段がつくもの（11）がある。文様があるのは7のみで、他は無文である。7は口縁部外面に6条以上のクシ状工具による平行沈線文を施している。調整はいずれも口縁部内外面ともヨコナデ調整が施され、11の胴部には粗いハケ目調整が施されている。胎土にはほとんど砂粒が含まれないもの（8、10）と、含まれるもの（7、9、12～14）とがある。焼成は7、10、12が不良の他は良好で、黄褐色（7、10～12）、赤褐色（8、4）暗褐色（9）、白灰色（13）を呈している。

同図15～17は坏と思われる。口径11.2～18cmを測る。15、16は体部が内湾しながら伸びる。17は底部と体部の境に明瞭な稜がつき、体部は逆「ハ」の字形に開くもので、高坏の坏部に似る。調整は16・17の内面にヨコナデ調整、16、17の外面にハケ目調整、15の上半にヨコナデ調整、下半にヘラ削り調整が施されている。17以外は胎土には砂粒がほとんど含まれず、焼成は15、16が良好、17が不良である。色調は赤褐色または、黄褐色を呈している。

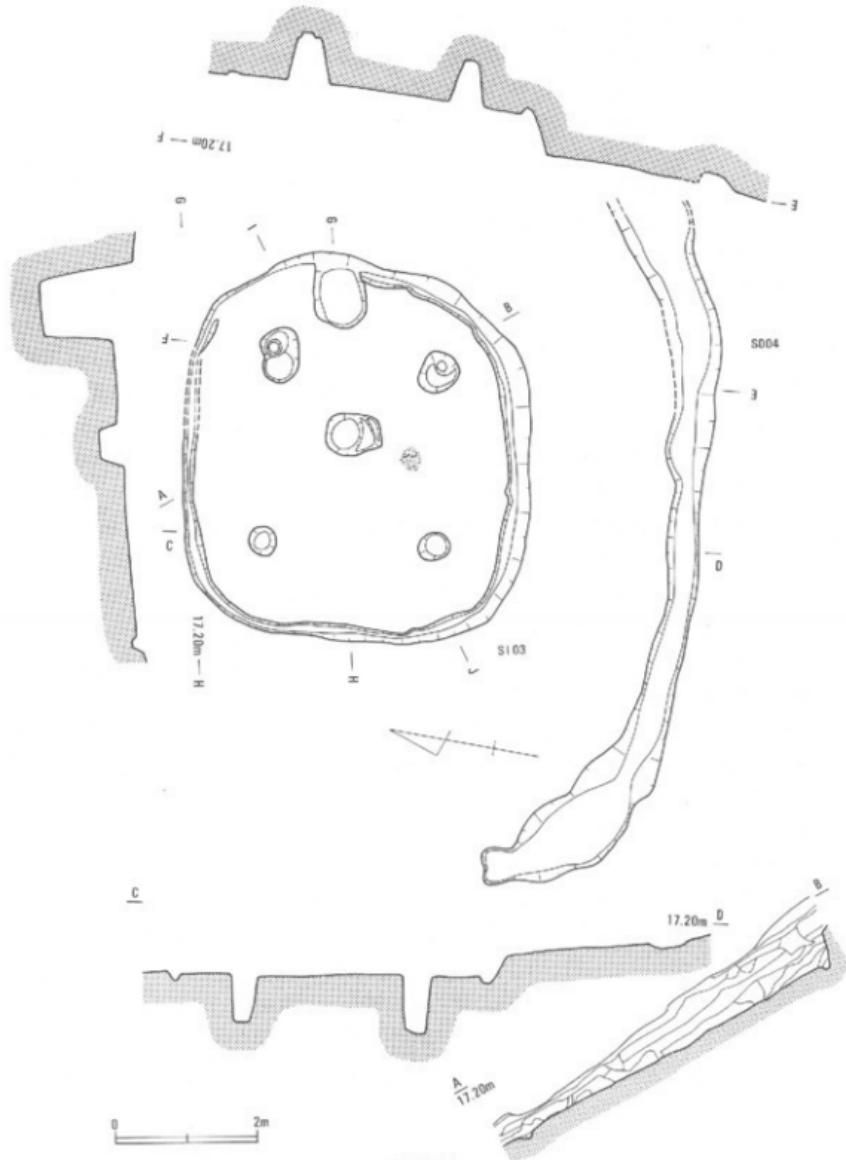
同図18は口径19.6cmの高坏坏部である。体部は内湾しながら伸び、口縁部近くで外反する。19、20も高坏坏部であるが、体部中程で大きく屈曲し口縁部は大きく逆「ハ」の字形に開く。調整は19、20は、内面にハケ目調整、外面にヨコナデ調整が施される。20の内面にはさらに暗文状のヘラ磨き調整が施されている。21～23、28は坏部と筒部の接合部分である。24、25は筒部である。ともに上端には凝口様が明瞭に残っている。26、27は「ハ」の字形に開き、端部は平坦面をなす。脚端径は26が11cm、27は13cmを測る。内面上半にヘラ削り調整、内面下半および外面にはヨコナデ調整が施されている。18、20、21、24、27の胎土には砂粒がほとんど含まれない。焼成は8、23以外は良好で色調は黄褐色（18、22、24、25）、赤褐色（21、27）、灰褐色（28）を呈している。

同図30は甌また甌の底部で底径8cmを測る。底は平坦で調整は内面にヘラ削り調整、胴部外面にハケ目調整、底部外面にヨコナデ調整が施されている。

同図31、32は器蓋不明だが底部である。「ハ」の字形に開き、底径は31が10cm、32が15.6cmを測る、調整は31にヨコナデ調整が施されているが、32は調整不明である。ともに胎土にはほとんど砂粒が含まれず、焼成は31は不良だが、32は良好である。色調は31が赤褐色、32が黄褐色を呈している。

同図33、34は須恵器蓋坏である。33は口径12.8cmの蓋で、口縁部は「ハ」の字形を呈し口唇部は平坦面をなす。調整は外面天井部に近くまで回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整が施されている。34は口径11cmの坏身で、たちあがりは短く内傾する。調整は外面底部を回転ヘラ削り調整の他は回転ナデ調整が施されている。ともに小砂粒がわずかに含まれ、焼成は良好で青灰色を呈している。

勝負遺跡

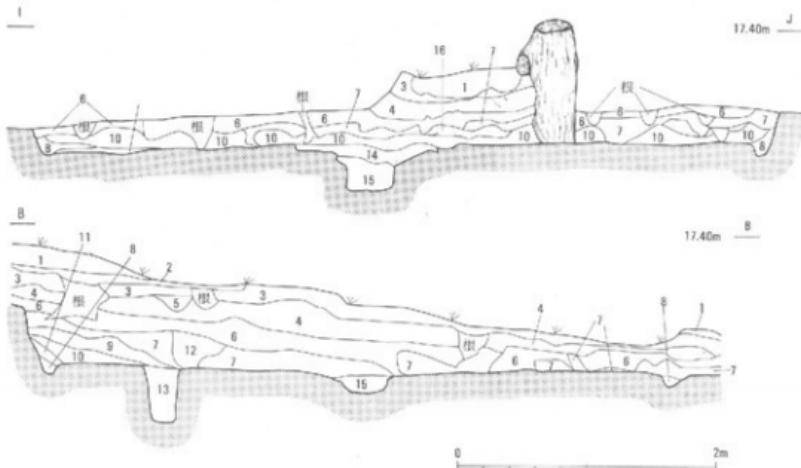


第11図 勝負遺跡 S103、SD04 実測図

東壁テラスから出土した土器は、大東式土器の特徴をもつ。前述の通り、これらの土器がS I 02に伴うと考えられることから、本住居跡は概ね古墳時代中頃のものと思われる。

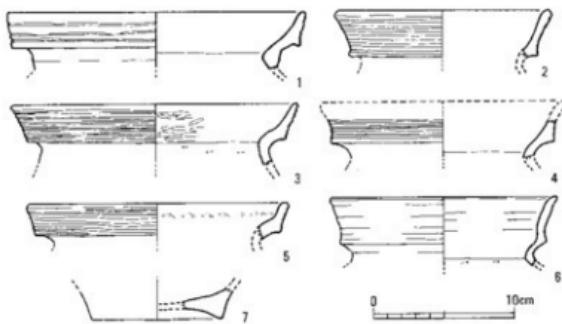
## S I 03 (第11、12図)

丘陵頂部やや西よりの緩斜面に位置する。斜面に築かれているため、北側の壁は流失していたが、側溝の遺存状況などから大略は把握できた。即ち、平面形は円形に近い卵丸方形で、その規模は東西約5.40m、南北約4.92mである。壁は表上下約0.5mで検出され、壁面は約60度～70度の角度で掘り込まれていた(第12図)。確認し得た壁高は南壁で約0.3～0.46m、北壁で約0.08m、東壁で約0.3m、西壁で約0.1～0.2mである。北および北東で一部検出できなかったが、床面の壁際には幅約0.08m、深さ約0.06mの断面「U」字形の側溝が掘っている。床面はほぼ水平で、中央やや南よりには約32×28cmの範囲で焼土が検出された。ピットは5個検出されたが、そのうち主柱穴はP 1からP 4と思われる。主柱穴は平面形円形で、上縁径約0.4～0.6m、深さ約0.64～0.84mである。柱間はP 1～P 2が約2.5m、P 2～P 3が約2.5m、P 3～P 4が約2.7m、P 4～P 1が約2.4mで、ほぼ等間隔に配されている。床面はほぼ中央に位置するP 5は深さ約0.05mのテラスを有するピットで、規模は上縁径約0.6×0.42m(テラス部分を除く)、深さ0.32mである。内には小粒ながらも炭化物をやや多く含んでいたことからも、このピットは柱穴とは考えにくい。東端には壁に接して平面形がだ円形で東西約1.04m、南北約0.72m、深さ約0.96mの土壙が穿たれている。この土壙は貯蔵穴と考えられる。



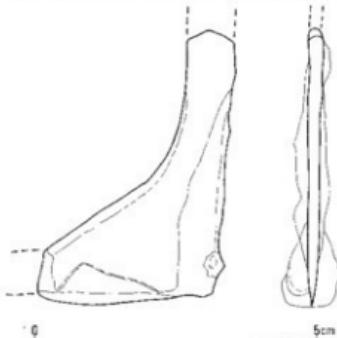
1. 黒土
2. 腐食土
3. 表土
4. 茶色土
5. 暗茶色土
6. 暗茶褐色土
7. 黑茶褐色土
8. 明褐色粘質土
9. 褐色粘質土
10. 暗茶色土
11. 暗褐色土
12. 茶褐色土
13. 黄茶褐色土
14. 灰黃褐色土
15. 黄茶褐色土

第12図 勝負遺跡 S I 03 土壙図



第13図 勝負遺跡S I 03出土土器実測図

部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁で端部は外傾している。口縁部外面にはヘラ状工具による3条の平行沈線文が施されている。調整は内面口縁部がヨコナデ調整、同頸部以下がヘラ削り調整、外面がヨコナデ調整が施されている。胎土には砂粒が含まれ、焼成は良好で茶褐色を呈している。他の土器は腹土内から出土している。同図2～6は口径15.2～20cmを測る甌で、口縁部は複合口縁である。端部は5が外傾する他は、長く外反している。6は口唇部がやや肥厚し面をなす。11縁部外面には2～5にケシ状工具による平行沈線文(2に11条、3に6条、4に7条以上、5に7条)が施されるが、6は無文である。調整は内面の頸部以下からヘラ削り調整、他はヨコナデ調整が施されている。また5の口縁部内面には指による押圧痕が残っている。7は甌または甌の底部で、底径9.2cmを測り、周辺が厚く凹み底風である。内面はヘラ削り調整、腹部外面はヨコナデ調整が施されている。これらの土器は、2以外の胎土に砂粒が含まれる。焼成は4、6は不良だが他は良好で、色調は黄褐色(1、4、6)、赤褐色(2、5、7)、灰褐色(3)を呈している。



第14図 勝負遺跡S I 03出土鉄器実測図

なおS I 03の南約2.4mに、本跡をとり囲むようにS D04が廻っており、住居跡にともなう付属施設と考えられる。

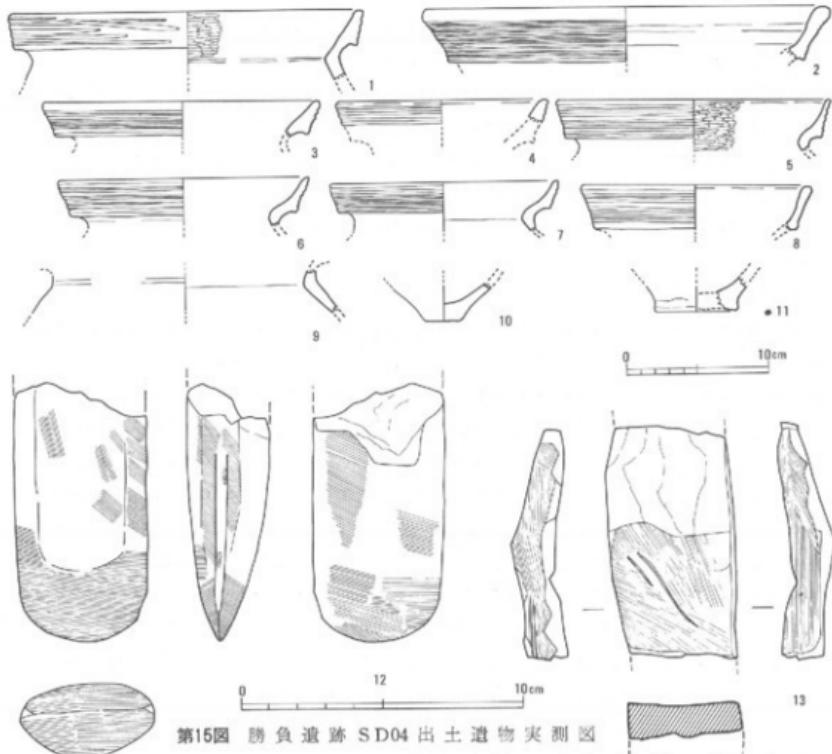
遺物(13、14図)甌、壺または甌の底部、鉄器が出土地している。第13図1はS I 03南端の側溝内から出土しており、本住居跡廃絶期に近い時期のものと考えられる。口径21.4cmの甌で頸

第14図は鉄器小片である。住居跡南部の床面直上から出土しており、本住居跡が廃絶した時期に近いものと思われる。破片がごく小さいため全形を窺うことはできないが、端部が尖っていることから刃部をもつものと考えられる。

側溝内から出土した第13図1が弥生時代後期末から古墳時代初頭のものと考えられることから、本住居跡も概ねこの頃のものと思われる。

#### S D04(第11図)

S D04の南約2mに、S I 03をとり囲むように位置する。S I 04南壁に沿って東西方向に伸び、平面形弧状、断面「U」字形を呈する。東端と西端を結ぶ直線の距離



第15図 勝負遺跡 SD04 出土遺物実測図

は約9.25mで、幅0.44~0.19mである。溝底は東端が最も高く、西に向かうに従って低くなり、その高低差は約0.64mである。

遺物（第15図）甕、壺または甕の底部、石器がある。第15図1~8は甕で、口径が24.8~27.8cmの大型のもの（1、2）、17.8~19cmの中型のもの（3、5、6）、15~16.2cmの小型のもの（4、7、8）がある。いずれも頭部は「く」の字形に屈曲し口縁部は複合口縁である。1、3は口縁部は外傾し、内面には段がつかず緩やかな凹面をなす。2~5~8は口縁部がわずかながら外反し、内面はやや明瞭に段がつく。口唇部はいずれも丸く納めるが、2、8の口唇部は肥厚している。口縁部外面には2、3が5条、5~7が6条、8が9条、2が10条、4が4条以上の平行沈線文が施されている。1がヘラ状工具、2~8はクシ状工具によるものと思われる。調整は1、5の内面が横方向の細かなヘラ磨き調整を施す他はヨコナデ調整が施されている。7は頭部以下にヘラ削り調整が施される。いずれも胎土には砂粒が含まれ、焼成は1、2、5は良好で3、4、7、8は不良である。色調は赤褐色（1、3、7、8）、暗灰色（2、5、6）を呈している。

同図10、11は甕または甕の底部である。ともに平底だが、10は底径2.5cmの小型で脛部は比較的

## 勝負遺跡

急にたちあがる。11は底径6cmで安定した平底である。11の内面はヘラ削り調整、底部外面はヨコナデ調整が施されている。胎土にはともに砂粒が含まれ、焼成は良好で黄褐色を呈す。

石器は砥石、磨製石斧が出土している（第15図）。第15図13は長さ8.1cm、幅4.5cm、厚さ1.6cmの扁平な砥石である。3面に使用痕が観察できる。石材は砂岩質と思われる。同図12は磨製蛤刃石斧である。基部は欠損し2分の1程度残っている。刃部の角度は約50度で、刃先幅4.5cm、幅4.6cm、厚さ2.9cm、残存長9.1cmを測る。石材は砂岩質と思われる。

出土土器が弥生時代後期末から古墳時代初頭の特徴をもつことから、本跡も概ねこの頃のものと思われる。

### S I 04（第16図）

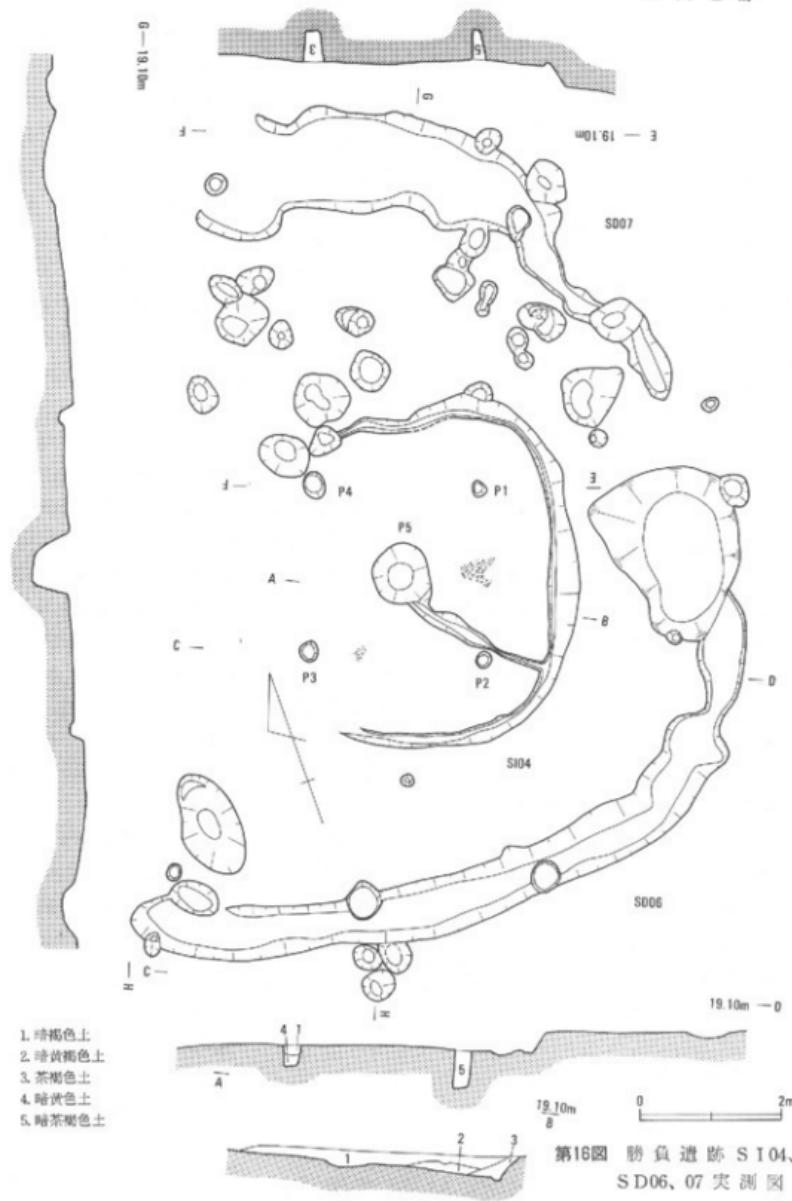
盛土遺構の直下にあり、S I 02の南に位置する。丘陵頂部や西よりの緩斜面に立地しているため、西壁は流失していた。床面の遺存状況などから推定すると、平面形は隅丸方形を呈していると思われ、その規模は南北約5.0m、東西約3.7m（側溝残存部から推定）である。壁は約57~70度の角度で掘り込まれ、壁高は東壁で0.24~0.35m、北壁で約0.05~0.2m、南壁で約0.1~0.23mであった。西側では検出できなかったが、床面の壁際には幅約0.06~0.14m、深さ約0.01mの断面「U」字形の側溝が廻っている。床面はほぼ水平で、中央やや東により約0.5×0.5m、西南隅に約0.2×0.2mの範囲で焼土が検出された。ピットは5個検出されたが、主柱穴と思われるものはP 1からP 4の4個である。主柱穴は平面形が円形またはだ円形でその規模は上縁径約0.24~0.36×0.22~0.32m、深さ0.29~0.55mである。柱間はP 1~P 2が約2.4m、P 2~P 3が約2.52m、P 3~P 4が約2.4m、P 4~P 1は約2.4mではば等間隔に配されている。床面のはば中央に位置するP 5は、上縁径約0.88×0.84m、深さ約0.56mのピットである。これもS I 03~P 5同様、主柱穴とは考えにくい。P 5の東南から本柱跡東南隅に向って幅約0.08~0.22m、深さ約0.08mの浅い溝が伸びている。溝底は標高が最も高くP 5に近づくに従って次第に低くなり、その高低差は約0.1mである。

なお、S I 04の北側約2.3mにはSD 06が、東および南側約2mにはSD 07が、本跡をとり囲むように廻っている。

遺物（第18~21図）　壺、甕、高壺、把手、蓋または壺の底部および石器が出土している。第18図2、3は床面中央のピット内から、1、4は床面直上から出土していることから、SD 04の廃絶期に近い時期のものと考えられる。1~3はいずれも壺で、頸部は「く」の字形に崩出し口縁部は複合口縁である。口径は1が23cmの大型、3が14.4cmの中型である。2は口縁部の上部が欠損するが、頸部径11.4cmの小型である。口縁端部はいずれも外傾しており、内面には明瞭な段がつかない。口縁部外面には1と3に8条、2に4条以上のクシ工具による平行沈線文が施されている。調整は頸部以下にヘラ削り調整、外面にヨコナデ調整が施されている。いずれも胎土に砂粒が含まれ、焼成は3以外は良好である。色調は1、2が茶褐色を呈している。

同図4は高壺頸部である。壺部接合後中央の穴を埋めたと思われる。風化が著しく調整は不明である。胎土には砂粒が含まれ、焼成は不良で赤褐色を呈している。

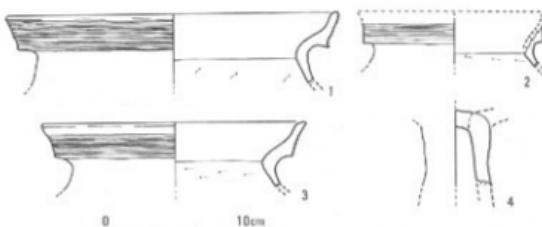
勝負遺跡





第17図 勝負遺跡 S 104土器出土状態

20、23.、25~27)、口径11~14.8cmの小型のもの(3、4、5、9、11、13、14、15、21、22、24、28、30、33)がある。1、2の頭部の屈曲は比較的緩やかであるが、他は頭部の屈曲が強い。口縁端部は10、13が短く外傾する以外は長く外反し、口唇部もやや肥厚するものが多い。内面の段が明瞭なものはなく、緩やかな傾斜をなすものもある(10、13)。29は無文であるが、他は口唇部外面にクシ状工具による平行沈線文が入っている。施文は外面全面にわたるもの(2、4、9、12~14、20、22、25、27、30~34)、下半のみに入っているもの(16、17、21)、上端と下端に分かれているもの(3、28)とがある。沈線文の数は3~15条だが、8条以上のものが多い。工具は3が4本単位、10が6本単位、28が5本単位のクシ状工具を利用したことがわかる。調整は風化のため不明なものが多いため、基本的に内面頭部以下にヘラ削り調整、他にはヨコナデ調整が施されていると思われる。内面の頭部から口縁部下半にかけてヘラ磨き調整を整すもの(1、2、3)、口縁部全面にヘラ磨き調整が施されるもの(4、11、14、21、24、27、28、30、31)もある。胎土には砂粒がほとんど含まれないが、9、11、13、18~20、26には砂粒が含まれている。焼成は良好なものがほとんどで、不良のものは、2、18、25、26、29、33、34の7個にすぎない。



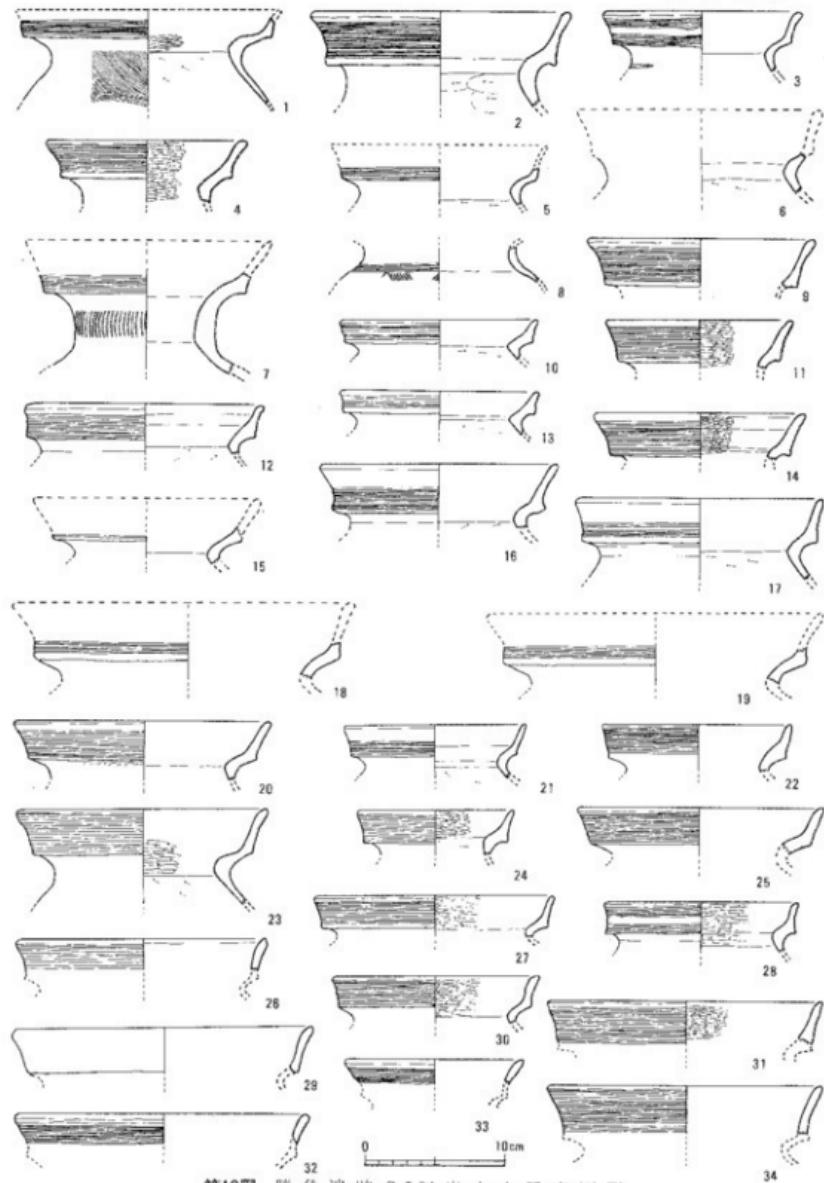
第18図 勝負遺跡 S 104中央ピット、床面出土土器実測図

第19図および第20図の土器は覆土中から出土している。第19図7、8は蓋である。頭部は長く外反している。7は口縁部に5条以上のクシ状工具による平行沈線文、頸部に貝殻覆縁による刺突文が施されている。8は頭部から肩部にかけての部分でクシ状工具による5条の平行沈線文と、その直下に貝殻覆縁の刺突による鋸齒文が施されている。8の調整は外面にヨコナデ調整、内面頭部にヨコナデ調整、内面腹部にヘラ削り調整が施されている。ともに胎土には砂粒が含まれるが、焼成は7が不良、8が良好である。色調は7が赤褐色、8が灰褐色を呈している。

同図1~6、9~34は頭部が「く」の字形に屈曲する複合口縁の甕である。口径19.2~21.2cmの大型のもの(1、2、18、19、29、31、32、34)、口径16.6~17.8cmの中型のもの(6、12、16、17、20、23.、25~27)、口径11~14.8cmの小型のもの(3、4、5、9、11、13、14、15、21、22、24、28、30、33)がある。1、2の頭部の屈曲は比較的緩やかであるが、他は頭部の屈曲が強い。口縁端部は10、13が短く外傾する以外は長く外反し、口唇部もやや肥厚するものが多い。内面の段が明瞭なものはなく、緩やかな傾斜をなすものもある(10、13)。29は無文であるが、他は口唇部外面にクシ状工具による平行沈線文が入っている。施文は外面全面にわたるもの(2、4、9、12~14、20、22、25、27、30~34)、下半のみに入っているもの(16、17、21)、上端と下端に分かれているもの(3、28)とがある。沈線文の数は3~15条だが、8条以上のものが多い。工具は3が4本単位、10が6本単位、28が5本単位のクシ状工具を利用したことがわかる。調整は風化のため不明なものが多いため、基本的に内面頭部以下にヘラ削り調整、他にはヨコナデ調整が施されていると思われる。内面の頭部から口縁部下半にかけてヘラ磨き調整を整すもの(1、2、3)、口縁部全面にヘラ磨き調整が施されるもの(4、11、14、21、24、27、28、30、31)もある。胎土には砂粒がほとんど含まれないが、9、11、13、18~20、26には砂粒が含まれている。焼成は良好なものがほとんどで、不良のものは、2、18、25、26、29、33、34の7個にすぎない。

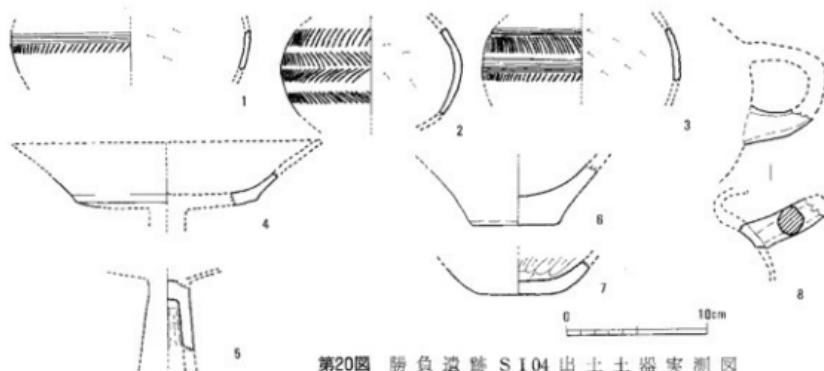
第20図 1~3は蓋または甕

勝負遺跡



第19図 勝負遺跡 S104 出土土器実測図

## 勝負遺跡



第20図 勝負遺跡 S I 04 出土土器実測図

の胸部である。いずれもほぼ球形を呈している。1は2条の平行沈線文の直下に貝殻腹縁による刺突文を配している。3は最大径を測る部分に4～5条の平行沈線文がありその上下に貝殻による刺突文を羽状に配している。2は貝殻による刺突文を向きを変えて4段に配している。いずれも内面にヘラ削り調整が施されている。胎土には2に砂粒が含まれるが、1、3には含まれない。焼成はいずれも良好で黄褐色を呈している。

同図6、7は壺または甕の底部である。底部は6が6.4cm、7が6.2cmを測る。6は底部と同部との境が明瞭で胎部は外反氣味に伸びる。7は底部の焼は丸く不明瞭で、胴部は内湾氣味に伸びる。7の内面にヘラ削り調整が施されている。ともに胎土には砂粒が含まれ、焼成は良好で黄褐色を呈している。

同図4、5は高杯の筒部である。筒部内面にはヘラ削り調整が施されるが、絞り痕がよく残っている。4の胎土には砂粒が含まれるが、5にはほとんど含まれない。焼成は4が不良、5は良好とともに茶褐色を呈す。

同図8は把手で注口土器につくものと思われる。断面径2cmを測る。胎土には砂粒がほとんど含まれず、焼成は良好で黄褐色を呈している。

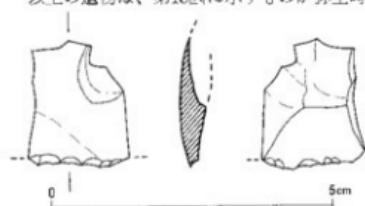
第21図は石器刃部の破片である。小片のため器種は不明である。残存部は長さ2.3cm、幅1.8cm、厚さ0.5cmを測り、刃部の角度は約28度である。石材は玉髓質と思われる。

以上の遺物は、第18図に示すものが弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてのものと思われる

ことから、本跡も概ねこの頃のものと思われる。

### S D06 (第16図)

S I 04の東壁および南壁に沿って作られている。平面形は弧状で断面「U」字形を呈している。北端と西端を結ぶ距離は約9.64mで幅約0.64～0.8m、深さ約0.05～0.2mである。溝底は北端が最も高く、西に向って次第に低くなる。両端の高低差は約0.64



第21図 勝負遺跡 S I 04出土石器実測図

である。

遺物（第22図） 麢、壺または甕の底部がある。第22図2は甕で口径22cmを測る。頭部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁である。口縁端部はほぼ直立し、外面にはクシ状工具による平行沈線文が7条入っている。調整は内面頭部以下はヘラ削り調整、口縁部はヨコナデ調整、外面はヨコナデ調整が施されている。4は壺または甕の底部で、底径4.5cmを測る。底部は厚くベタ高台状を呈し、肩部は内凹して伸び球形をするとと思われる。ともに胎土に砂粒が含まれ、焼成は4が良好、2が不良で黄褐色を呈している。

出土土器が弥生時代後期末から古墳時代初頭のものと思われることから、本跡も概ねこの頃のものと思われる。

#### SD07（第17図）

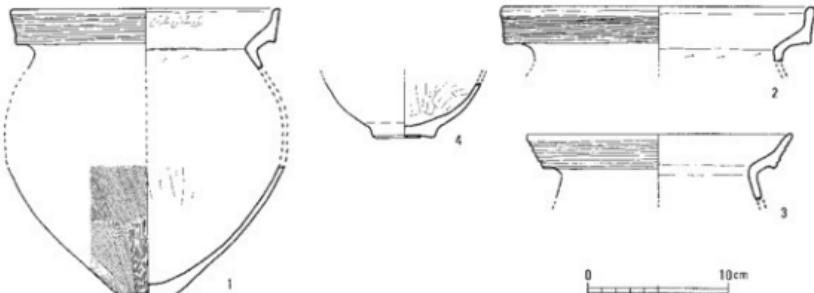
S I 04の北側約2mに、S I 04をとり囲むように位置し、S I 04と何らかの関係があると思われる。平面形弧状断面「U」字形を呈し、溝幅は東端が狭く西に向うに従って広くなる。東端と西端を結ぶ距離は約0.7mで、幅0.44~1.8m、深さ約0.05~0.17mである。溝底は東端が最も高く西に向うに従って低くなり、高低差は約0.78mである。

遺物（第22、23図） 麦鉄器、石器が出土している。第22図1は口径19cm、底径4cmの甕である。肩部、肩部が接合できず器高は不明である。頭部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁を呈す。口縁端部はわずかに外傾するがほぼ直立しクシ状工具による11条の平行沈線文が施されている。底部は平坦で肩部は大きく開いて伸び、肩部はかなり張るとと思われる。調整は内面の頭部以下がヘラ削り調整、外面肩部がハケ目調整、その他部分はヨコナデ調整が施されている。また口縁部内面には指頭による押圧痕が残っている。同図3も甕で、口径18.8cmである。1同様口縁部は複合口縁だが、端部は大きく外傾し、口縁部外面にはヘラ状工具による平行沈線文が5条入っている。

1、3ともに胎土には砂粒が含まれ、焼成は良好で黄褐色を呈している。

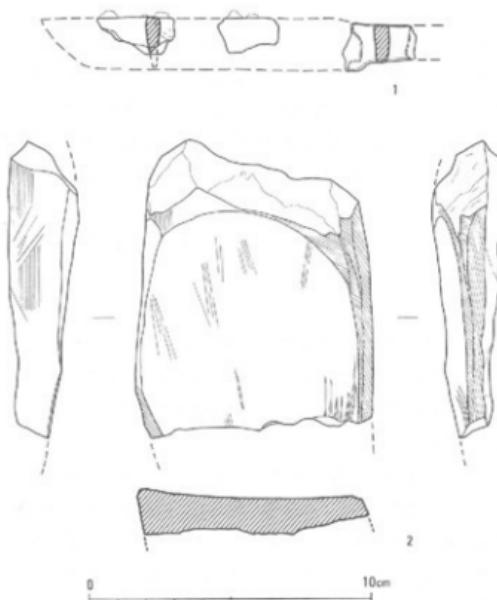
第23図1は鉄器小片で、刀子と思われる。茎幅は1.3cm、刃幅約1.8cmを測る。

同図2は砥石である。3面を使用しているが、特に上面は使い込んでおり凹面をなす。3面とも縦横に擦痕が観察でき、中には粗く深い擦痕もある。粒子は粗く砂岩質と思われる。



第22図 勝負遺跡 SD06、07 出土土器実測図

## 勝負遺跡



第23図 勝負遺跡 S D07出土遺物実測図

### S B02 (第24図)

丘陵頂部やや西よりに位置し、西北端は S D05 と重複している。調査区外のため東南端は未検出であるが、2間×3間、または2間×2間の建物と思われる。建物の方向はN-12°-Eを指し、その規模は北の桁行約7m、西の梁行約4.8mである。柱間は桁が西第1間のP3～P4、P6～P7が約2.6m、P7～P1が約4.4mである。梁は西のP4～P5、P5～P6が各々約2.4mでほぼ等しいが、東のP1～P2は約1.6mと狭い。柱穴は平面形円形で、径約0.4～0.6m、深さ約0.16～0.5mである。床面は西側が高く、緩斜面となっている。

遺物が検出されていないため時期は不明である。

### S B03 (第25図)

丘陵頂部やや西よりの緩斜面に位置し、西南部はS I04、S D06と重複している。そのため東南端の柱穴は未検出である。建物の方向はN-14°-Eを指し、その規模は桁行約6.4m、梁行約4mである。柱間は、桁の南第1間のP5～P6が約2.4mでP3～P4、P4～P5、P8～P9、P9～P1が約2.0mである。梁は北のP1～P2、P2～P3が約1.8mでほぼ等しいが、南のP6～P7は約2.5mで間隔は広い。柱穴の平面形は円形で、径約0.25～0.65mで、深さ約0.3mである。床面は中央がわずかに高く、東北端、西南端に向かって低くなっている。

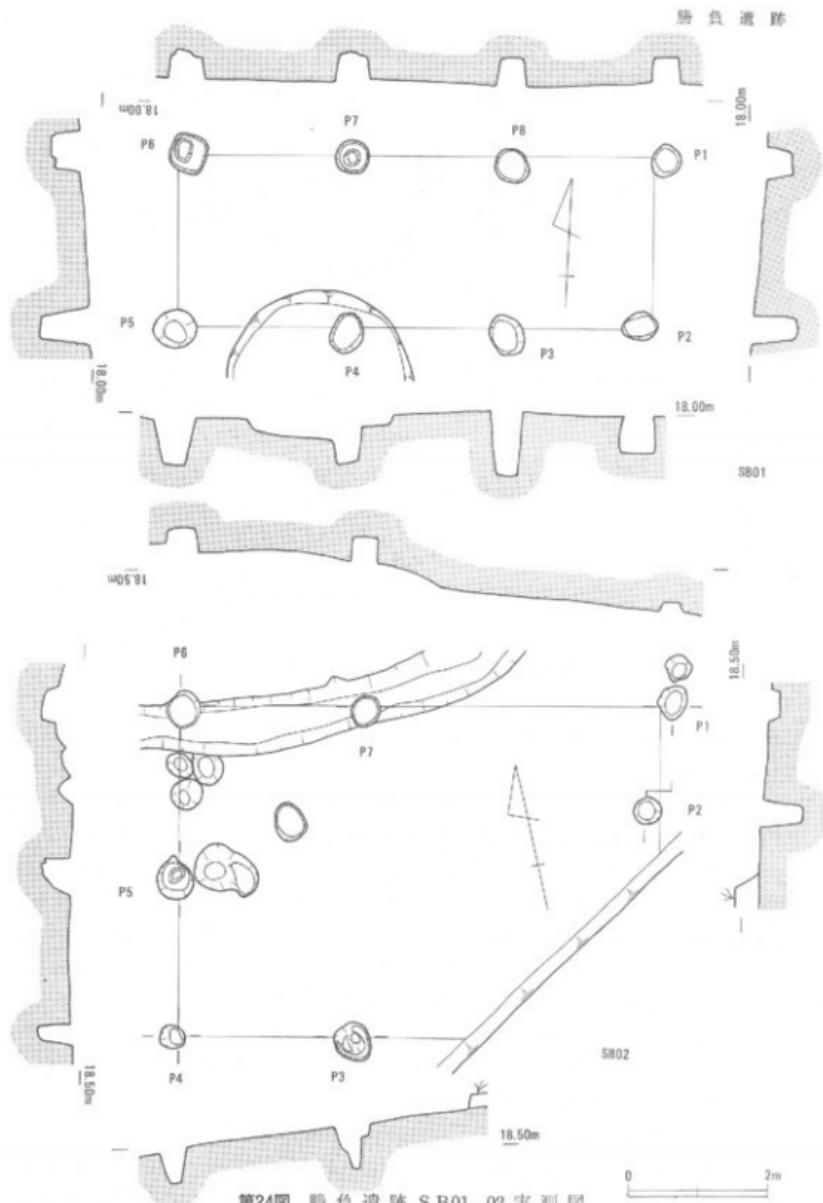
遺物は出土していないが、P1、P8がS D06、S I04の覆土を掘り込んで作られていることか

出土土器が弥生時代後期から古墳時代初頭のものと思われることから、本跡も概ねの頃のものと思われる。

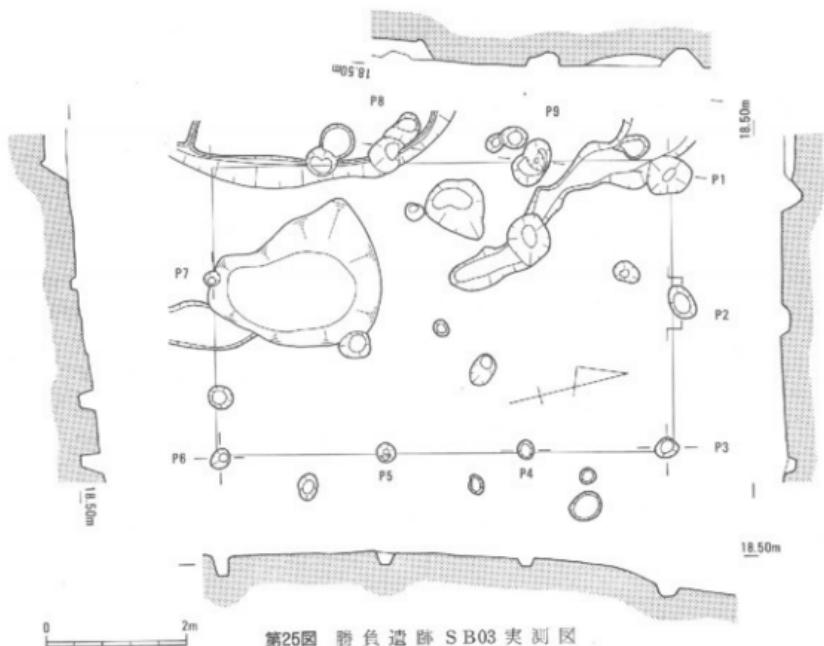
### S B01 (第24図)

丘陵尾根上の緩斜面に位置する1間×3間の建物である。建物の方向はN-2°-Wを指し、その規模は桁行約6.8m、梁行約2.6mで、柱間は約2.0～2.4mである。柱穴は、平面形円形またはだ円形で、径0.48～0.6m、深さ0.36～0.92mとかなり深く掘り込まれている。床面は南側が高く、緩斜面となっている。

出土遺物はP5から土師器細片が出土している。土師器片の器壁が比較的薄いこと、本遺跡から奈良時代以降の遺物がほとんど出土していないことなどから、S B01は古墳時代のものと思われる。



第24図 勝負遺跡 SB01、02 実測図



第25図 勝負遺跡 SB03 実測図

ら、SB03はSD06、SI04より後出であることがわかる。

#### S D01（第26図）

丘陵頂部やや西よりの緩斜面に立地しSI03の北に位置する。平面形は弧状、断面は浅い「U」字形を呈す。その規模は東端と西端を結ぶ距離で約6.24m、幅約0.5~0.8m、深さ約0.05~0.15mである。溝底は東端が最も高く、西に向うに従って次第に低くなり、その高低差は約0.2mである。

遺物（第27図） 壺、甕および壺または甕の底部がある。第27図1は口径13cmの壺の口縁部と思われる。頸部は「く」の字形に屈曲し口縁部は逆「ハ」の字形に大きく開く。口縁端部近くでわずかにくびれ、端部は内傾する凹面をなす。調整は内面にヘラ磨き調整、外面にヨコナデ調整が施されている。胎土には砂粒が多く含まれ、焼成は良好で赤褐色を呈している。

同図2は頸部が長く外反して伸びる複合口縁の壺で口径は12.6cmを測る。口縁部外面には9条のクシ状工具による平行沈線文が入っている。調整は内外面ともヨコナデ調整が施されている。胎土には砂粒が含まれ、焼成は良好で黄褐色を呈している。

同図3~7は口径12.2~14cmの壺である。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は複合口縁である。口縁部外面には3に7条、4に10条、6、7に8条のクシ状工具による平行沈線文が施されている。3、7は口縁部全面に文様があるが、4、6は口縁部下半に施文されている。5は口縁部外

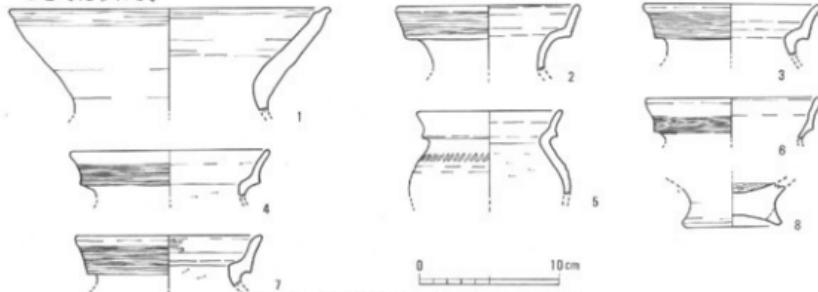


第26図 勝負遺跡 SD01 実測図

面は無文であるが、肩部にクシ状工具による刺突文が施されている。調整は内面の頸部以下にヘラ割り調整、7の口縁部内面にヘラ磨き調整、他はヨコナデ調整が施される。4、7の胎土には砂粒がほとんど含まれないが、他には含まれる。焼成は3、5、6は不良、4、7は良好で、色調は黄褐色（3、4、5、6）、赤褐色（7）を呈している。

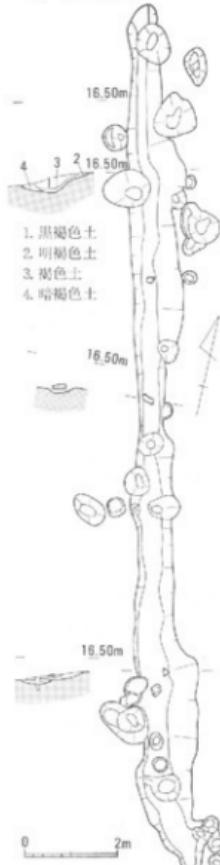
同図8は器種不明の底部である。底径6.5cmで底部は厚く高台状を呈す凹み底である。内面はヘラ磨き調整、外面はヨコナデ調整が施されている。胎土には砂粒が含まれ焼成は良好で赤褐色を呈している。

出土土器が弥生時代後期末から古墳時代初頭のものと思われることから、本跡も概ねこの頃のものと考えられる。



第27図 勝負遺跡 SD01出土土器実測図

## 勝負遺跡



第28図 勝負遺跡 S D02  
実測図

### S D02 (第28図)

丘陵西斜面の中腹に位置し、南北に伸びる。平面形はほぼ直線状、断面は「U」字形を呈す。その規模は長さ約16.8m、幅約0.56~1.32m、深さ約0.1~0.43mである。溝底は南端が最も高く、北に向かうに従って次第に低くなり、その高低差は約1.13mである。

遺物（第29図） 須恵器小片が出土しているが、図示できたのは第29図に示す3個のみである。壺の肩部（1）および底部（2、3）と思われる。いずれも最大径13.7~14.4cmを測る。2、3の底部には回転ヘラ削り調整が施され、その他は回転ナデ調整が施されている。いずれも胎土には小砂粒がわずかに含まれ、焼成は良好で青灰色を呈す。これらの遺物は小片のため詳細な時期は不明であるが、概ね古墳時代後期のものと思われる。

### S D03 (第30図)

丘陵西側の中腹に位置し、南北に伸びる。平面形は直線状、断面は「U」字形を呈す。その規模は長さ約6.2m、幅約0.3m~0.58m、深さ約0.15mである。溝底は北端が最も高く南に向かうに従ってわずかに底となり、高低差は約0.06mである。

遺物は小破片が数片出土したが、図示できるものはない。そのためS D03の時期は断定しかねるが、概ね弥生時代末~古墳時代前半のものと考えてよからう。

### S D05 (第30図)

丘陵頂部のやや西よりの緩斜面に立地する。平面形はほぼ直線状、断面は浅い「U」字形を呈す。その規模は長さ約2.98mで、幅は東端で約0.54mで、西端で約0.2mである。深さは約0.05mで、溝底は東端が高く西端に向かうに従ってわずかに低くなる。その高低差は約0.04mである。

遺物は検出されていないため本跡の時期は不明である。

### S D08 (第30図)

盛土状造構の直下から東西に細長く伸びる構造である。構造の東端は確認できだが、西端は調査区外に伸びるために確認できなかった。平面形は、確認し得た範囲では直線状を呈すが、東端がわずかに弧状を呈していることから全体の平面形は弧状を呈しているとも考えられる。断面形は台形である。また、東端部の平面形は「コ」の字形にていねいに掘り込まれている。その規模は、確認し得た範囲では、長さ約5m、幅約1.4~1m、深さ約1.38~1.54mで、壁は約73度~79度の急角度で掘り込まれている。土層は黄褐色土と暗茶褐色土が交互に堆積し、人工的に突き固めながら埋めたように思われた。

土層堆積状況が、盛土遺構とよく似ていることから、盛土状遺構に関係あるものと考えられるが、その機能などは不明である。また、遺物が出土していないため時期は不明である。

#### S D09 (第31図)

丘陵のほぼ頂部に位置する。平面形は弧状、断面「U」字形を呈す。その規模は北端と南端を結ぶ距離で約9.8mで、幅約1.08~2.32m、深さ約0.1~0.4mである。溝底は中央部が最も高く両端に向うに従って次第に低くなる。その高低差は、中央部と北端部で約0.4m、中央部と南端部で約0.5mである。

遺物は検出されていないため、本跡の時期は不明である。しかし、溝内の覆土が黒色土で柔かく S D01などと違うことから西斜面の遺構より新しいと思われる。

#### S D10 (第31図)

丘陵東斜面の中腹 S D11の東に位置し、等高線に平行して伸びる。南端は確認できたが、北端は調査区外に伸びたため確認できなかった。平面形はほぼ直線状で断面は「U」字形を呈す。その規模は確認し得た範囲では、北端と南端を結ぶ距離で約8.5m、幅約0.26~0.76m、深さ約0.2mである。溝底は南端が最も高く、北に向うに従って次第に低くなり、その高低差は約0.32mである。

遺物が出土していないため、本跡の時期は不明である。

#### S D11 (第32図)

丘陵東斜面の中腹に位置し、等高線に平行して南北に伸びている。遺構の北端は確認できたが、南端は調査区外に伸びたため確認できなかった。平面形はわずかに弧状、断面は「V」字形を呈す。斜面のため下方に当る東壁はわずかに残るのみである。その規模は確認し得た範囲では、北端と南端を結ぶ距離で約17.9m、幅約0.6~1.36m、深さは約0.32m（西壁上縁との比高）である。

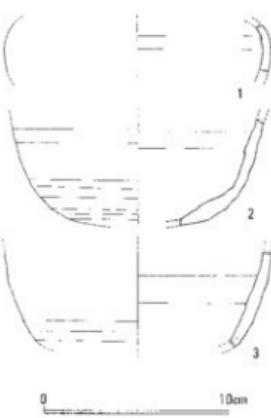
溝底は南側が高く、北に向うに従って次第に低くなり、その高低差は0.89mである。

遺物が全く出土していないため、S D09の時期は不明である。

#### S D12 (第32図)

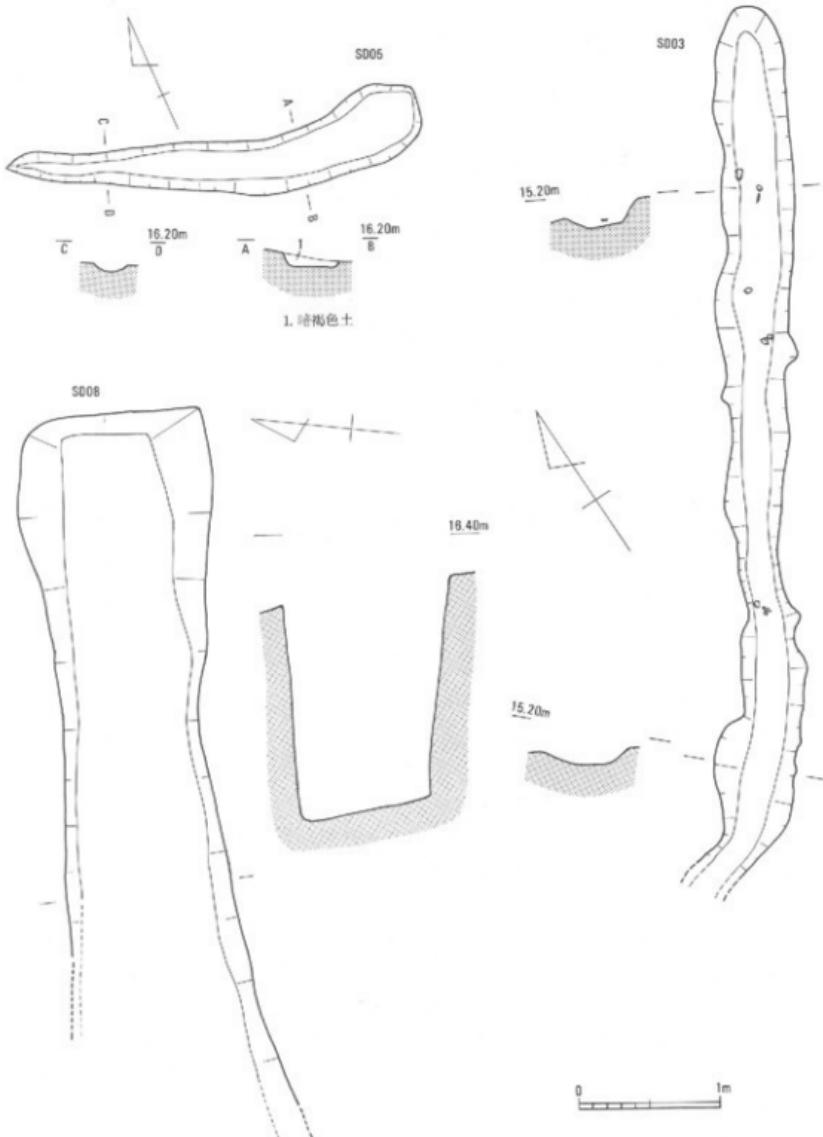
丘陵東側斜面の中腹に、等高線に平行して南北に伸びる溝状遺構である。西側には S D09が隣接し、東側には堅穴状遺構が重複している。上肩の堆積状況から堅穴状遺構（古）→ S D10（新）という順で作られたことがわかる。遺構の北端は確認できたが、南端は調査区外に伸びたため確認できなかった。平面形はわずかに弧状、断面は「U」字形を呈す。斜面のため下方に当る東壁はわずかに残るのみである。その規模は、確認し得た範囲では南端と北端を結ぶ距離で約20m、幅約0.24~0.88m、深さ約0.15m（西壁上縁との比高）である。溝底は南が高く西に向うに従って低くなり、高低差は約0.73mである。

遺物が出土していないため、S D10の時期は不明である。



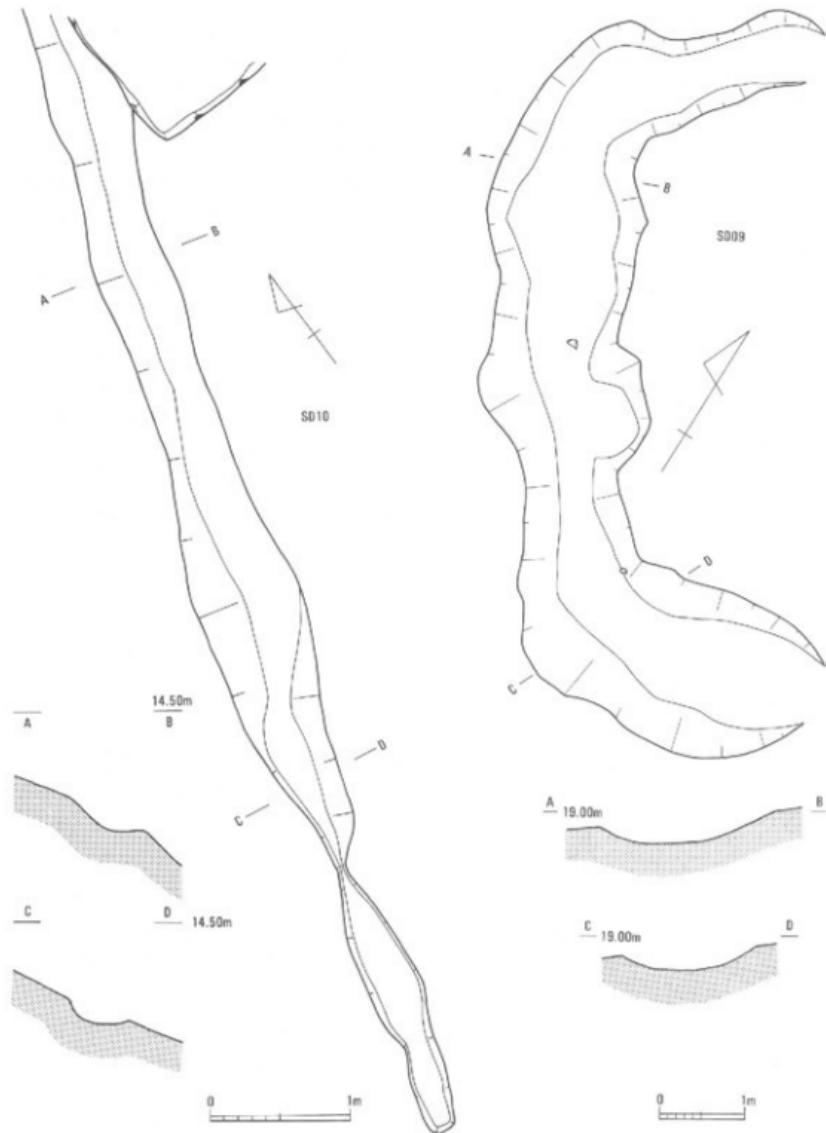
第29図 勝負遺跡 S D02  
出土土器実測図

勝負遺跡



第30図 勝負遺跡 S D03、05、08実測図

勝負遺跡



第31図 勝負遺跡 SD09、10 実測図

## 勝負遺跡

### 堅穴状遺構（第32図）

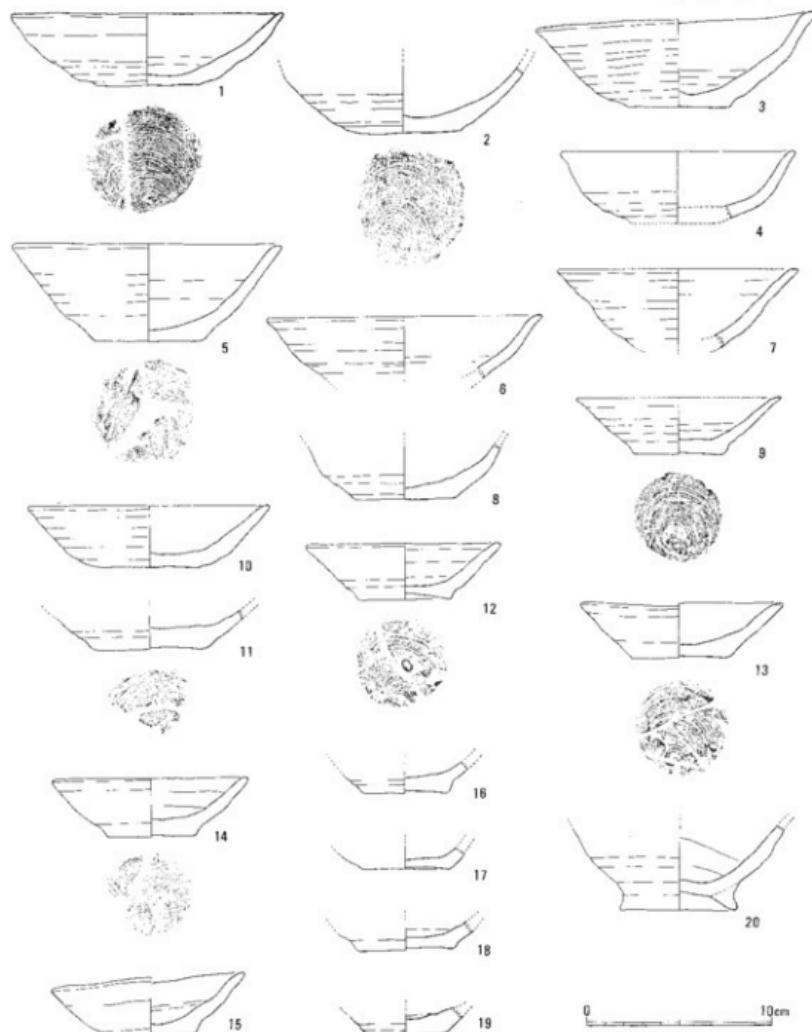
丘陵東側の中腹に位置する。急な斜面に作られているため、山側にあたる西壁および南壁の一部が残るのみで他は流失している。そのため確認し得た規模は南北8.2m、東西0.96~1.45mであった。残存部から推定すると平面形は方形と思われる。西壁の一部はSD09と重複しており、土層の観察によれば、堅穴状遺構（古）→SD09（新）という関係であった。壁は西壁、南壁が約75度の傾斜をもって掘り込まれ、壁高は最も残りの良い西壁で0.22~0.42m、北壁で0.21m、南壁で

0.32mである。床面はやや凹凸があるがほぼ水平である。床面には南壁と西壁に沿って断面「U」字形で幅0.1~0.3m、深さ0.03~0.1mの浅い溝がみられる。また床面のほぼ中央には約0.68×0.44mの範囲で炭化物の集積がみられた。

**遺物（第33図）** 床中央のやや北よりから土師質土器がまとまって出土している。これらは床に貼りついた状態で出土しており、本跡に伴うと考えてよからう（第34図）。これらは底部が平坦で無高台のものがほとんどだが、20は高台が付いている。無高台のものは口径12.6~15.1cm、底径5.5~6.2cm、高さ3.3~5.2cmの大型のもの（1~8、10~11）と、口径10.5~11cm、底径4~5.3cm、器高2.9~3.1cmの小型のものがある。大型のものは体部が内湾して伸び、口縁部はわずかに外反している。小型のものは体部がほぼ直線的に伸び、そのまま口縁部に至る。20は高台が「ハ」の字形にふんばり、高台径6.4cmを測る。体部は内湾して伸びる。1~19の

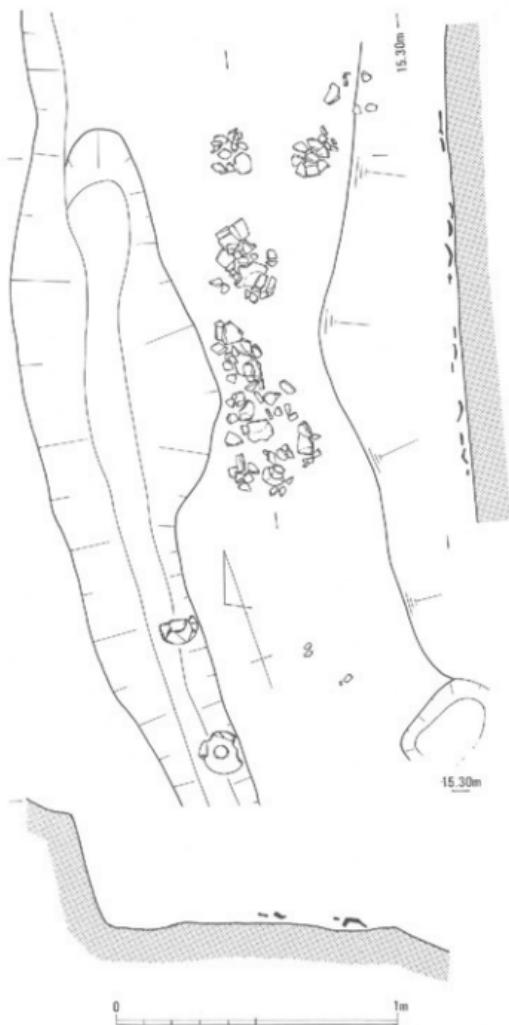


第32図 勝負遺跡SD11、12堅穴状遺構



第33図 勝負遺跡堅穴状遺構出土土器実測図

調整は口縁部、体部に回転ナデ調整が施され、底部外面は回転糸切手法で切り離したままである。20は高台を接着した後に回転ナデ調整が施され底部外面にまで及んでいる。切り離しは回転糸切りによると思われるが、調整のために痕跡は残っていない。いずれも胎上には砂粒が含まれ、焼成は比較的良好で黄褐色を呈している。



第34図 勝負遺跡堅穴状遺構土器出土状態

の角度で掘り込まれ、底面はほぼ水平である。遺物は検出されていない。

#### S K04 (第36図)

丘陵頂部のやや西よりの斜面に位置し、S D05の西端に隣接する。平面形は長方形で底面中央に

出土した土師質土器は詳細な時期は不明であるが概ね中世のものと思われる。

#### S K01 (第35図)

丘陵頂部やや西よりの緩斜面にあり、S D04と重複している。平面形は不整円形で、その規模は上縁で $2.44 \times 2.24\text{m}$ 、下縁で $1.20 \times 0.64\text{m}$ である。北側には約 $1.66 \times 0.76\text{m}$ のテラスがある。底面は凹凸が著しい。

遺物は出土していないが、切り合いから、SK01(古)→SD04(新)という関係がわかる。

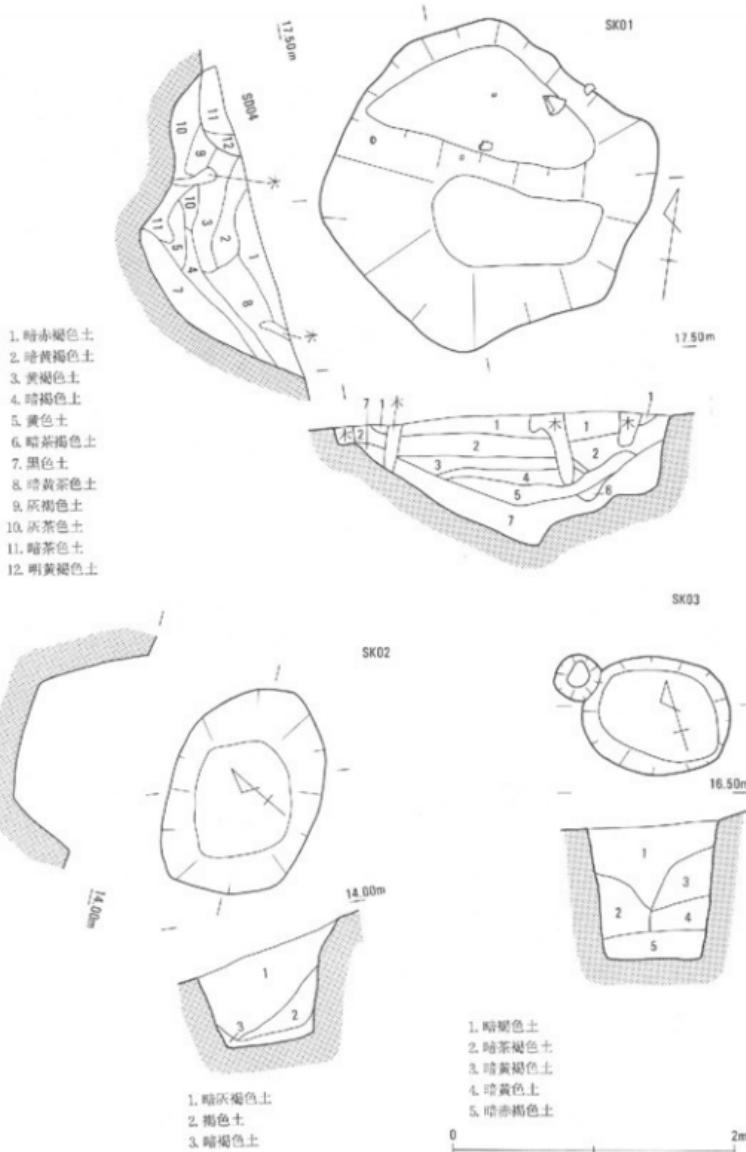
#### S K02 (第35図)

調査区の最も北にあり、丘陵西斜面の中腹に位置する。平面形はだ円形で、上縁径約 $1.49 \times 1.06\text{m}$ 、下縁径 $0.84 \times 0.7\text{m}$ 、深さ約 $0.8\text{m}$ である。壁は約73度～78度で掘り込まれ、底面はほぼ水平である。遺物は検出されていない。

#### S K03 (第35図)

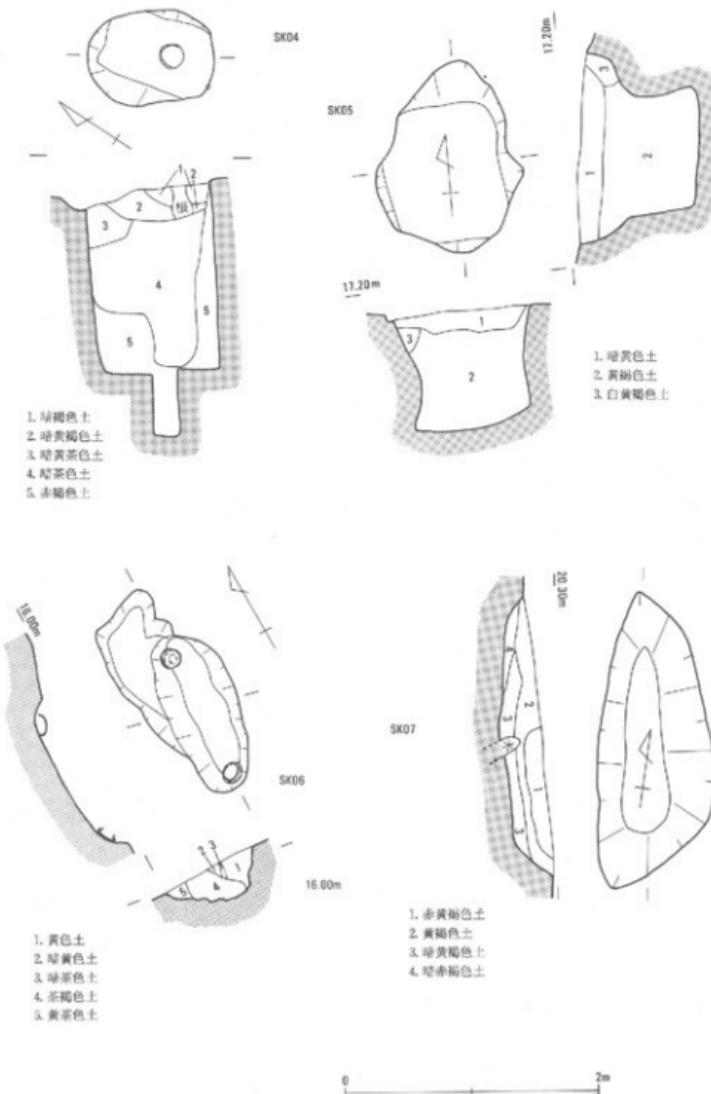
丘陵西斜面の中腹にあり、SD02の南端に隣接する。平面形はだ円形で、上縁径約 $1.06 \times 0.82\text{m}$ 、深さ約 $0.96\text{m}$ である。壁は約83度

勝負遺跡



第35図 勝負遺跡 SK01~03 実測図

勝負遺跡



第36図 勝負遺跡 SK04~07 実測図

は円形のピットが1個検出された。その規模は約 $1m \times 0.8m$ で、深さ約1.5mである。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。底面のピットは径約0.2m、深さ約0.5mである。遺物は検出されていないため、時期は不明である。

#### SK05(第36図)

丘陵のほぼ頂部に位置する。平面形は不整だ円形で、その規模は上縁径で $1.52 \times 1.18m$ 、下縁径で $0.92 \times 0.94m$ 、深さ0.9mである。壁は凹凸が著しく、中程で傾斜が変わっている。底面はやや凹凸があるがほぼ水平である。遺物は検出されていない。

#### SK06(第36図)

丘陵頂部やや西よりの緩斜面に位置し、SD05が隣接する。平面形はだ円形、断面「U」字形で西北部には約 $1.4 \times 0.6m$ 、深さ約0.1mの浅いテラスが付属している。テラスを除いた部分の規模は、約 $1.3 \times 0.6m$ 、深さ0.25mである。壁は緩やかな傾斜をもって掘り込まれ、床面は指針状を呈す。

**遺物(第37図)** 土壇北端から須恵器蓋、南端から同环が各1個出土されている。第35図1は口径13.9cm、高さ5cmを測るやや大型の蓋である。天井部は丸いが、全体的にやや扁平な感じを受ける。口縁部は「ハ」の字形を呈し、内湾気味に下がる。口唇部には明瞭な段がついている。腹は2条の沈線を引くことによって強調されている。同図2は口径12.4cm、高さ5.4cmのやや大型の环である。底部は丸いが、蓋同様やや扁平な感じを受ける。たちあがりはやや長く、わずかに内傾している。口唇部はわずかに段の痕跡があるが、明瞭ではない。受部は上方方にやや長く伸びている。1、2とも天井部、底部は回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整が施されている。また、ともに、内面に粘土の継ぎ足しと思われる痕跡がある。ともに砂粒をわずかに含み、焼成は良好で灰色を呈す。

出土した須恵器が山本清氏の須恵器編年で第II期に該当すると思われることから、SK01は古墳時代後期のものと思われる。

#### SK07(第36図)

丘陵のほぼ頂部に位置する。平面形は不整だ円形で上縁径約 $2.36 \times 0.92m$ 、下縁径約 $1.48 \times 0.32m$ 、深さ約0.3mである。壁は緩やかな傾斜をもって掘り込まれ、底面にはやや凹凸がみられる。

遺物は土師器細片が出土しているが、時期を判別し得るものはない。

#### 西斜面ピット群

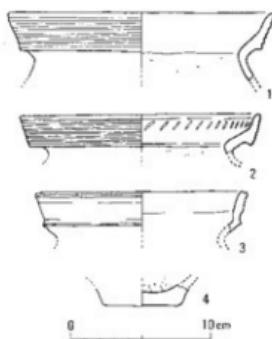
丘陵西斜面にはSI04、SD05、06、07の他に、約350個の大小のピット群が検出された。平面形は不整形なものがほとんどで、底面は擂鉢状である。底面が凹凸の著しいものがある。

**遺物(第38、39図)** 第38図1～4は、甕、壺または甕の底部である。1～3は甕で、口縁部は複合口縁を呈し、口径は14.8～18.6cmを測る。いずれも口縁端部は外傾しているが、口唇部は1、2が丸く、3は凹面をなしている。口縁部外面には1が6条、2が9条のクシ状工具による平行沈



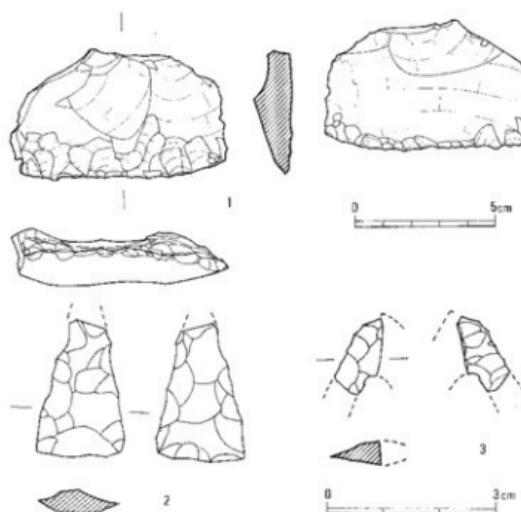
第37図 勝負遺跡 SK06  
出土土器実測図

## 勝負遺跡



第38図 勝負遺跡西斜面  
ピット群出土上器実測図  
うことはできない。2は長さ2.4cm、基部幅1.5cm、厚さ、0.4cm、重さ1.3g、3は残存長1.3cm、  
残存幅0.8cm、重さ0.3gを測る。石材は2が硬砂岩製、3が黒曜石製と思われる。

第40図1は打製石斧で長さ14.2cm、基部幅1.7cm、刃部幅8.7cm、厚さ1.3~2.3cmを測る。刃部の幅が広くなるが左右は非対称の形態を呈す。基部と一面に自然面が残り、側縁刃部は粗く、片面のみ打ち欠いて作っており、刃部の角度は約28度である。刃部はやや摩滅している。石材は硬砂岩質である。2はほぼ円形を呈する磨石である。径11.3cm、厚さ3.4cmを測る全面非常に平滑でかなり使用したものと思われる。粒子は粗く全面に小孔を有し、石英質砂岩と思われる。



第39図 勝負遺跡西斜面ピット群出土石器実測図

これらの土器は弥生時代後期から古墳時代前期の特徴を持つことから、斜面ピット群は概ねこの時期のものと思われる。

— 496 —

## 東斜面ピット群

丘陵東斜面のS D12以東からは、大小のピットが約70個検出されている。これらはほとんどが不整形のプランを呈し、底面は掘鉢状を呈している。

ピット内から良好な遺物が出土していないため時期は不明である。しかし埋土が竪穴状遺構、S D11などと同じであること、ピット内から土師質土器の小片が出土していることから、竪穴状遺構などとほぼ同時期のものと思われる。

## 遺構に伴わない遺物（第41、42図）

遺構には伴わないが、N 1—E 5を中心にして土器、石器が出土している。

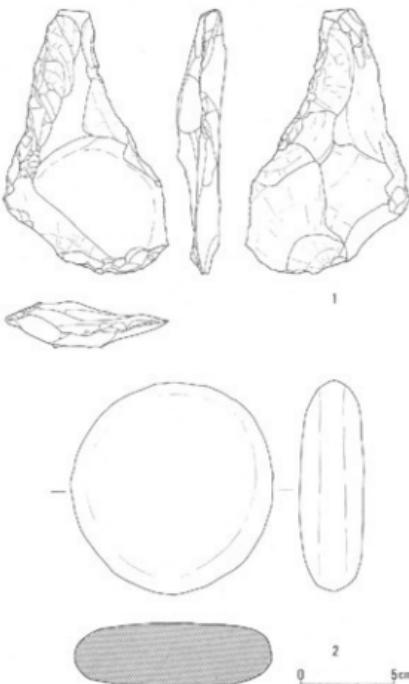
第41図1は口径22.2cmの壺と思われる。口縁部は大きく外反し、喉部は面をなす。上端は壺状にわずかにつまみ上げられている。調整はハケ目調整の後、ヨコナデ調整が施されている。胎土には小砂粒が含まれ、焼成はやや不良で灰褐色を呈している。

同図2～9は甌である。2、8、9以外は典型的な複合口縁である。4は口径26cmを測

る大型のもの、3、5～7は口径13.4～18cmの中、小型のものである。口縁端部は3～5は丸く納まるが、6、7はやや肥厚し上端は平坦面をなす。口縁部外面には4に11条、5に8条のクシ条工具による平行沈線文が施されている。また3の頸部には2個の小孔が穿たれている。2、8は複合口縁の痕跡があるものの、外面にわずかに段がつく程度である。口径は2が11.2cm、8が12cmを測る。口縁端部は2が丸く、8が肥厚して上端は平坦面をなす。9は口縁部が逆「ハ」の字形に外反するもので、口径13cmを測る。調整は不明のものが多いが、口縁部にはヨコナデ調整が施されるものが多いようである。また2の頸部外面にはハケ目調整、2、6の頸部内面にはヘラ削り調整が施されている。9以外の胎土には砂粒が多く含まれている。焼成は7が良好である他は不良である。色調は2が黒色、3～5、8、9は黄灰色または白灰色、6、7が黄褐色を呈している。

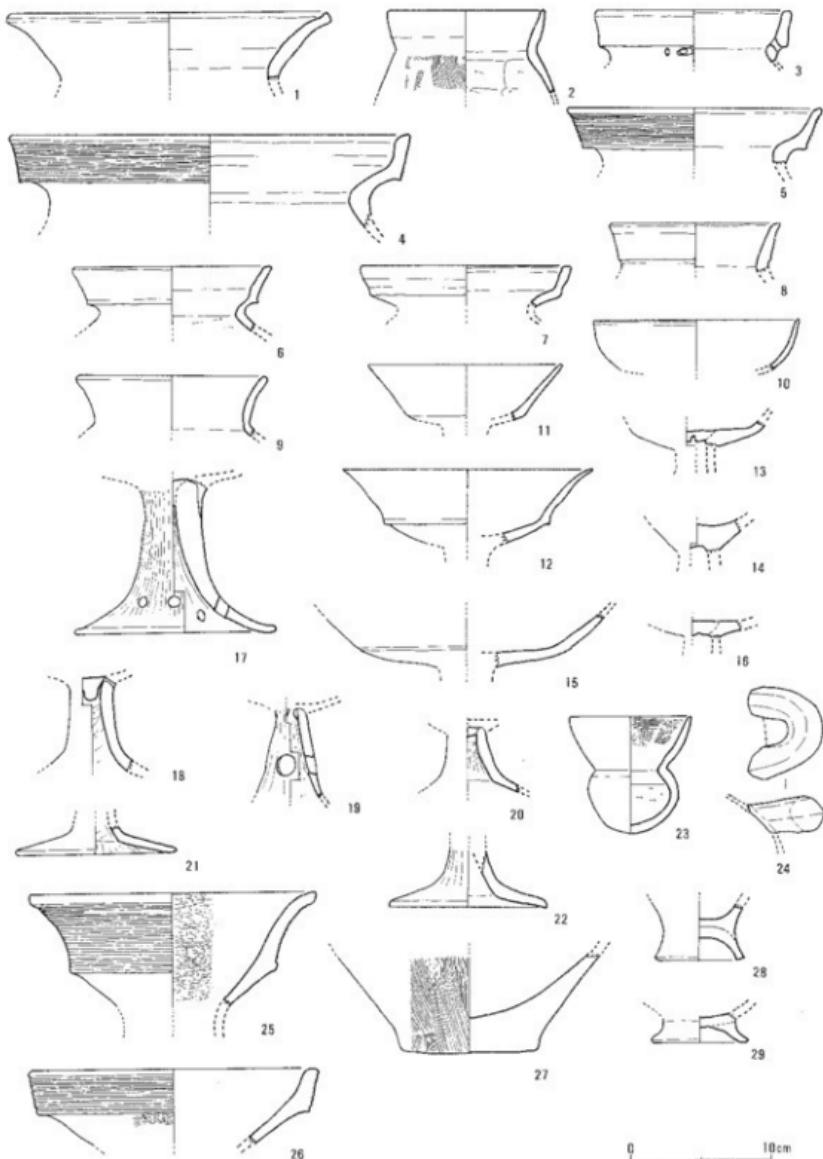
同図10は壺で口径14.6cmを測る。体部は内凹して伸び、口縁部はわずかに外反する。外面体部下半にヘラ削り調整が施される他はヨコナデ調整が施されている。胎土には砂粒がほとんど含まれず、焼成は良好で赤褐色を呈している。

同図11～22は高環であるが、すべて小片で全形を窺えるものはない。11、12、15が壺部、13、14、



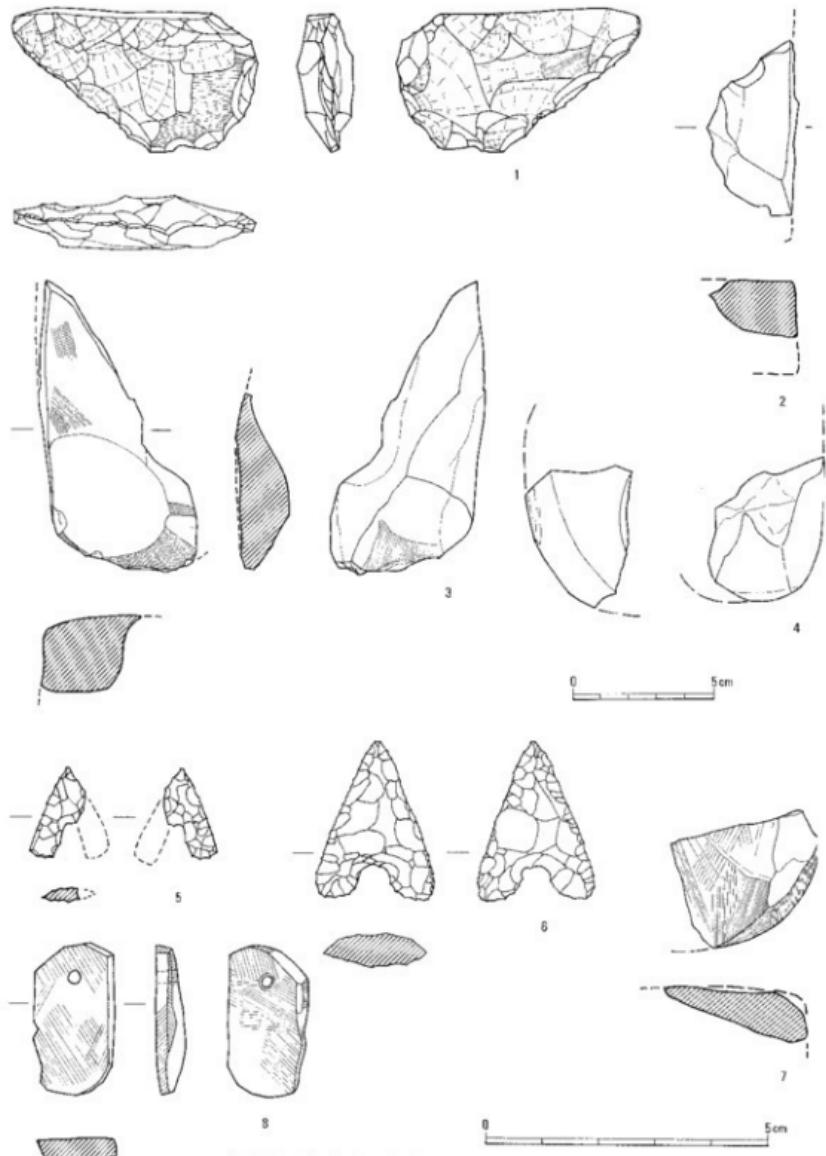
第40図 勝負遺跡西斜面ピット群  
出土石器実測図

勝負遺跡



第41図 勝負遺跡出土土器実測図

勝負遺跡



第42図 勝負遺跡出土石器実測図

## 勝 負 遺 跡

16が环部、脚部の接合部、17～22が脚部である。环部はいずれも体部中程に破がつくもので、口縁部は大きく外反している。口径は11が13.6cm、12が17.4cmを測る。脚部は17がラッパ状に大きく開く大型のものであるが、他は筒部と裾部の境が明瞭に屈曲するやや小型のものである。脚端径は17が19cm、21、22が11.2cmを測る。また17には2個一組の円形透孔が3方向に、19には1個の円形透孔が穿たれている。环部と脚部の接合は、いずれも両者の接合後口环部の孔を埋める方法をとっていると思われる。また13、16の接合部内面には約4mmの小孔がみられる。調整は筒部外面はヘラ磨き調整(17、19、22)、裾部はヨコナデ調整(17)が施されている。また、筒部内面にはヘラ削り調整が施されるものがある(18、19、21、22)が、絞り痕が残るものが多い。胎土には18、19以外は砂粒が多く含まれ、焼成は17、19、21が良好である他は不良である。色調は赤褐色(11、12、15、16、19、21、22)、黄褐色(13、14、20)、黄灰色(17、18)を呈している。

同図23は小型丸底壺である。口径8.6cm、高さ8.2cmを測る。腹部はほぼ球形を呈し、口縁部は内窓気味に大きく開き、口径は胸部最大径を凌いでいる。調整は口縁部内面にハケ目調整、胴部内面の上下にヘラ削り調整、下半にナデ調整が施されている。胎土にはわずかに砂粒が含まれ焼成は良好で赤褐色を呈している。

同図24は把手である。平面形が「U」字形、断面円形を呈している。両端を結ぶ距離は6.6cm、断面径2.4cmを測る。手捏ねによって成形され、調整はナデ調整が施されている。胎土には砂粒が含まれ、焼成は良好で黄褐色を呈している。

同図25、26は鼓形器台の口縁部で口径はともに20.2cmを測る。両者とも複合口縁であるが、25は上半が長く外反し、26は上半が短く直立している。ともに外面にはクシ状工具による平行沈線文が施されている(25が24条、26が8条)。調整は25の内面、26の外面にヘラ磨き調整が施される他はヨコナデ調整が施されている。いずれも胎土には砂粒が含まれ、焼成は良好で黄褐色を呈している。同図27～29は底部である。27は底径9.9cmの安定した平底で、腹部は大きく開いて伸びる。28、29は高台状の脚を有するもので底径は28が6.2cm、29が6.8cmを測る。調整は27の胴部外面にハケ目調整、28、29の内面にヘラ削り調整、28、29の脚部にヨコナデ調整が施されている。いずれも胎土には砂粒が多く含まれ、焼成は良好である。色調は27が黒色、28が黄褐色、29が黒灰色を呈している。

第42図1は打製石盤である。長さ8.8cm、最大幅4.9cm、厚さ2cmを測る。背部は平坦面をなすが、他の側縁は打ち欠いて整形している。両面ともていねいに加工してあり、一部に研磨痕がみられる。石材は硬質砂岩と思われる。

同図3は磨製石斧である。残存長10.3cm、刃部幅4.7cm、厚さ2.7cmを測る。欠損部分が多いが断面は方形を呈するものと思われる。一部に研磨痕が残っている。石材は硬質砂岩と思われる。

同図2は砾石の破片である。残存長6.2cm、幅3.1cmを測る。擦痕は認められないが一面が平滑で使用していることがわかる。石材は砂岩質と思われる。

同図4は磨石の破片と思われる。風化が著しく使用痕はみられないが、一部平坦になっているところがある。石材は流紋岩質と思われる。

同図5、6は石錐である。5は凹基式の石錐で長さ1.6cm、重さ0.6gを測る。6は錐形錐で長さ2.7cm、幅2.1cm、重さ1.7gを測る。石材は5が黒曜石質、6が黒色頁岩質と思われる。

同図7は磨製石器の破片だが、小片のため器種は不明である。2面に擦痕が残っている。石材は硬質砂岩質と思われる。

同図8は板状の石製品である。平面形は長方形を呈し、長さ2.7cm、幅1.5cm、厚さ0.3~0.5cmを測る。上方には0.2cmの凸形の孔が空いている。全面に擦痕がみられ、石材は結晶片岩質と思われる。

以上の遺物は、形態などから、第40図26・27が弥生時代後期後半、同図3~7、17、23~25が古墳時代前期、同図11~16、18~22が同中期のものと思われる。他の遺物は類例が少なく判断しがたいが、概ね弥生時代後期から古墳時代のものと考えられる。

#### IV 小 結

調査の結果、検出された遺構は竪穴住居跡4、溝状遺構12、掘立柱建物3、上塙7、竪穴状遺構1、盛土遺構1である。そのうち、盛土遺構、竪穴状遺構を除いた各遺構は、出土した土器をみると、弥生時代後期から古墳時代後期にかけて営まれたものであることがわかる。しかし、須恵器の出土が極めて少ないと本遺構跡出土の土器は大まかにS I 03、04の時期のものとS I 01、02の時期のものの2時期に分けられそうである。S I 03、04およびそれらの遺構に付属すると思われるSD 04、05、06の出土土器をみるとほぼ同様な形態、文様を有しており、両遺構はほぼ同時期のものと考えられる。また両遺構に確実に伴うと思われる土器は少ないが、覆土中から出土した土器は第13図6以外は大きな違いがないことから両者とも同期のものと考えられる。各遺構から出土した土器のうち、壺、甕は次のような特徴がある。

- ①外傾する複合口縁を有し、口唇部は丸く納まっている。口縁部は比較的短い。
- ②肩部は比較的張ると思われる。
- ③底部は安定した平底で、丸底のものはない。
- ④口縁部外面にはクシ状工具による平行沈線文が施されるものが多い。（ヘラ描き平行沈線文が施されるものもある。）
- ⑤脇部、肩部に貝殻模様による刺突文が羽状に施されるものがある。
- ⑥口縁部内部の調整はヘラ磨き調整が施されるものとヨコナデ調整が施されるものがある。

鳥取県では弥生時代末から古墳時代前期にかけての土器編年は、九重式→鍵尾I式→鍵尾II式→<sup>註1</sup>小谷式→大東式という位置づけがされている。この編年は細かな点では異論もあるが、大略は首肯できよう。この観点からS I 03、04、SD 03、04、05出土の土器をみると、①、③、④、⑥などの特徴から鍵尾II式より古いと思われ、それ以前の九重式または鍵尾I式に当ると考えられる。  
ここで九重式土器についてみると、次のような特徴を有すと言われる。<sup>註2</sup>

## 勝 負 遺 踪

- 各器種にわたって複合口縁が展開する。口縁は内頬気味のものから外反気味のものへと移行して行く。
- 四線文が多いが、一般に備描文への変化が起り、施文帯の拡大と共に多条化する。
- 壺、甕形土器の底部は器の大小を問わず平底である。但し、しっかりした界線を持つものは少なくなる。
- 器台形土器盛行の徵がある。
- 小形丸底壺はみられない。
- 器の表面は刷毛、箒などによる仕上げ、頭部内面、器台、高坏形土器の脚部以下は箒による削り放しの手法をとる。
- 高坏、甕形土器の一部は丹塗りで特別に丁寧な仕上げである。
- 胎土中にかなりの砂粒を含み大形品において著しい。
- 器壁は甕形土器を除いて、あまり薄い仕上げとはなっていない。
- 焼成は良好、堅密なものが一般的で色調は褐色乃至朱褐色を呈する。  
また、鍵尾I式の壺、壺の特徴は次のようにまとめることができる。<sup>註3</sup>

  - 口縁部は複合口縁で脇部は肩がよく張って、以下底に向ってほぼ直線的に下降する。
  - 底部は一種の平底に終るが、小型品についてはほとんど丸底に近いものとなる。
  - 文様は口縁部外面および脇部の両者または肩部に櫛あるいは貝殻等による多条化した平行沈線や波状文、斜行刺突文列などをめぐらす。
  - 器面の調整は脇部外面に刷毛目を施したのちヘラ磨きを行ってこれを消すものが大半を占め、口縁部内面もヘラ磨きで仕上げられている。頭部以下の内面は各器種を通じヘラ削りで調整されるが、器壁はなお全体に厚い。

以上のような九重式と鍵尾I式の特徴をみた上でS I 03、04、SD 04、05、06の土器を考えると、九重式と鍵尾I式の両者の特徴が認められる。すなわち、九重式の特徴としては複合口縁の上部が長く伸びず短く外傾すること、底部に丸底が認められず出土した底部はすべて平底であること、などである。また鍵尾I式の特徴としては、脇部に貝殻刺突文が施されているものがあること、口縁部内面にヘラ磨き調整が施されること、口縁部内面にヘラ磨き調整が施されるものがあること、などである。このようにS I 03、04、SD 04~06出土の土器は、九重式的な様相を残しながら鍵尾I式的な様相を持つという、両者の中間的な特徴を有すものと言えよう。しかしながらその編年的位置については、この時期の土器編年に関する研究がまとまっていない現状ではにわかには決しがたく、今後の資料の増加と研究を期待したい。

S I 01の土器はピット内出土の土器が確実に遺構に伴うと考えられる(第7図)。前述の編年に当てると、高坏の体部中程の縫がかなり退化していることなどから、大まかに大東式の範疇に入ると思われる。

S I 02の土器は東壁テラス出土の土器が確実に遺構に伴うと考えられる(第10図1~6)。これらの土器の特徴は次のとおりである。

- 壺は口縁部がかなり退化した複合口縁のものと、単純口縁のものとがある。

2. 小型丸底壺は口縁部が大きく外反し、口径は腹部最大径とほぼ同じである。
3. いずれも器壁がかなり厚い。

このうち退化した複合口縁は大東式にみられるが、図上でみる限りでは木造跡出土のもののほうが大東高校校庭遺跡出土の土器よりさらに退化しているようである。また小型丸底壺も合わせて考えると青木遺跡の編年で青木IX期に当たることができよう。しかし、この期の資料は島根県では出土例が少なく、現段階では細別することはできない。そのため、ここでは大まかに「大東式」としておき詳細な編年は将来の課題としたい。以上、大まかに土器の年代について検討してきた。それによって今一度構造の時期についてまとめるところ、S I 03、04、SD 04、05、06が九重～鍵尾I式期、S I 01、02が大東式期に位置づけることができる。また、S I 01と02は切り合いからS I 01(古)→S I 02(新)の順で作られている。これらのことから大まかにS I 03、04→S I 01→S I 02の関係がわかる。一般に堅穴住居跡の平面形は隅丸方形→方形と変遷するとされているが、本遺跡でもこの変化が認められる。すなわち、S I 01、03、04が隅丸方形、S I 02が方形を呈し前述のとおり前者が後者より古い。方形プランの堅穴住居跡は、本遺跡ではS I 02からであるが、出土土器をみるとS I 01とほとんどで時期差がないようと思われる。これはS I 01が廃絶した直後にS I 02が作られたことを示し、本遺跡では方形プランの堅穴住居跡は大東式の時期に出現したものと考えられる。

ところで、本遺跡の東南約1km離れた平所遺跡でも堅穴住居跡が検出されている。平所遺跡で検出された堅穴住居跡は、2、3号住居跡、玉作工房跡が鍵尾I式期、1号住居跡が鍵尾II式期のものである。いずれも隅丸方形プランを呈しており、方形プランのものは検出されていない。また、本遺跡の南約1.2kmに位置する史跡出雲岡行跡下層で検出された堅穴住居跡は、隅丸方形プランを呈し須恵器を伴わない5世紀の土師器が出土しているという。

このように茶臼山を中心とした一帯では隅丸方形プランの堅穴住居は小谷式の時期までは存続し方形プランのものは大東式期に出現するものと思われる。

しかしこの状況は他の地域と比較した場合、やや様相を異にしたものと言える。すなわち本遺跡の北約4.6kmに位置する、松江市西川津町の柴II遺跡では鍵尾II式期には既に方形プランの堅穴住居跡が出現している。また鳥取県米子市青木遺跡では鍵尾II式に当たる青木V、VI期の頃には隅丸方形および多角形プランの堅穴住居跡は消滅し、方形プランのものが出現するという。

また、八束郡玉湯町史跡出雲玉作跡で検出された69A 1号、69B III号、71B I号の各堅穴住居跡はいずれも方形プランを呈し、山陰第II期の須恵器が出土している。

以上をまとめると、当地方において堅穴住居のプランがある時期に一斉に方形になったのではなく、各地域で時期を異にして方形プランが導入されたと思われる。資料の少ない現状では想像にすぎないが、当地方ではまず青木遺跡のある米子市周辺、柴遺跡のある松江市西川津町周辺で方形プランが導入され（鍵尾II式期）やや遅れて勝負遺跡、平所遺跡のある茶臼山の周辺で導入されたものと思われる（大東式期）。そしてさらに遅れて須恵器第II期の時期に史跡出雲玉作跡のある八束郡玉湯町周辺で方形プランが導入されたのではなかろうか。

## 跡 負 遺 跡

次に集落のあり方についてみると、本遺跡では集落の規模が極めて小さいことが注意される。本遺跡で検出された堅穴住居4棟のうち、ほぼ同時期に存在したと思われるはS103、04の2棟だけである。未調査の部分に堅穴住居が存在する可能性もあるが、分布の密度は極めて薄いと考えられる。これは米子市青木遺跡、鹿足郡六日市町前立山遺跡など比較してかなり小規模な集落といえる。さらに、出土土器を見ると存続期間がかなり短いことも前述の2遺跡と違う。以上の2点から考えると本遺跡でみられる集落は定住的なものではなく、比較的短期間のうちに移動したのではなかろうか。

以上、本遺跡で検出された堅穴住居跡を中心に述べてきた。しかしながら島根県では集落跡の調査例は極めて少なくまた点的な調査にとどまるものがほとんどである。そのため集落論を論ずるには資料不足は否めず、本遺跡との比較検討には適切とは言えない。今後面的な調査を待つことによって、本稿で述べた小集落が当地での一般的な形態であるのか青木遺跡でみられるような大集落の衛星的なものか、何らかの結論ができるものと思われる。また方形プランの堅穴住居跡の出現時期についても、将来の資料の増加によってさらに具体化するのではなかろうか。いずれにしても、島根県においては集落跡の研究は緒をついたばかりといえ、今後の検討課題も多いと言えよう。

註1 前島己基・松本岩雄「島根県神原神社古墳出土の土器一土器型式にみるその編年的位置について」『考古学雑誌』第62巻第3号 昭和51年

註2 東森市良「九重式土器について」山陰における弥生式土器から土師器への移行『考古学雑誌』第57巻第1号 昭和48年

註3 島根県教育委員会『平所遺跡』『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書II』昭和52年

註4 註1

註5 青木遺跡調査団「青木遺跡発掘調査報告書III」昭和53年

註6 小野山節編「古代史発掘6」昭和50年

註7 註3

註8 松江市教育委員会「出雲国庁跡発掘調査概報」昭和46年

註9 島根県文化財保護協会「主要地方道松江一境線バイパス関係埋蔵文化財調査報告I」昭和51年

註10 註5

註11 玉島町教育委員会「史跡出雲玉作跡」昭和47年

註12 註5

註13 島根県教育委員会『前立山遺跡』『中國縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』昭和55年

## VII 石台遺跡

— 松江市東津田町 —

1 調査の経過	505
2 遺跡の概要	506
3 遺構と遺物	507
4 小結	533

## 挿 図 目 次

第 1 図	位 置 図	.....	505
第 2 図	III区調査区設定図	.....	506
第 3 図	II区出土遺物	.....	507
第 4 図	III A区遺構配図	.....	509
第 5 図	III A区掘立柱建物跡実測図	.....	511
第 6 図	III A区土壤実測図	.....	511
第 7 図	III A区 S D01~03実測図	.....	512
第 8 図	III A区土壤、S D01出土土器（1のみ土壤）	.....	512
第 9 図	III A区 S D01出土石器	.....	513
第 10 図	III A区遺物包含層出土遺物（1）	.....	515
第 11 図	III A区遺物包含層出土遺物（2）	.....	516
第 12 図	III A区遺物包含層出土遺物（3）	.....	517
第 13 図	III A区遺物包含層出土遺物（4）	.....	518
第 14 図	III A区遺物包含層出土遺物（5）	.....	519
第 15 図	III A区遺物包含層出土遺物（6）	.....	521
第 16 図	III A区遺物包含層出土遺物（7）	.....	522
第 17 図	III A区遺物包含層出土遺物（8）	.....	523
第 18 図	III A区遺物包含層出土遺物（9）	.....	524
第 19 図	III A区遺物包含層出土遺物（10）	.....	525
第 20 図	III C区黒褐色土出土遺物（1）	.....	526
第 21 図	III C区黒褐色土出土遺物（2）	.....	526
第 22 図	III C区黒褐色土出土遺物（3）	.....	526
第 23 図	III C区住居跡状遺構実測図	.....	527
第 24 図	III C区土壤実測図	.....	527
第 25 図	III D区北壁土層図	.....	528
第 26 図	III D区褐色土出土遺物（1）	.....	529
第 27 図	III D区褐色土出土遺物（2）	.....	529
第 28 図	III D区褐色土出土遺物（3）	.....	530
第 29 図	III D区褐色土出土遺物（4）	.....	531
第 30 図	III D区褐色土出土遺物（5）	.....	531

## 1 調査の経過

石台遺跡は松江市東津田町1,796番地外に所在し、馬橋川流域の沖積地に立地している。バイパス予定地内では、馬橋川の橋台部から東方の勝負遺跡までの約360mの間で調査を実施した。(第1図) 調査区は便宜上3区に分け、I区は西側からA~Cの3ヶ所についてトレンチ掘りを実施し、III区については、さらに東からA~Eの5区に調査区を細分した。(第2図) 調査は昭和55年度にI・II区を行い、III区については昭和56年度に実施した。

## 昭和55年度

5月6日 I区A・B・Cトレンチを設定し、重機によって掘り下げる。Aでは白色粘土層まで達したが遺物は出土しなかった。各トレンチともに表土層に遺物が含まれるのみである。

5月24日 トレンチの平板測量および土層の実測を行う。6月上旬に埋め戻しを行ってI区の調査を終了する。

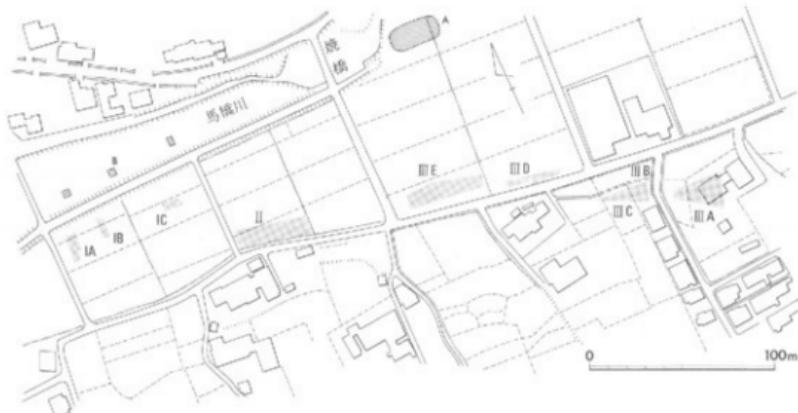
1月25日~29日 II区、III E区で表土掘削を行う。II区では遺構・包含層は確認できなかったが、須恵器、石斧等を採集する。

## 昭和56年度

4月13~15日 III区の地形測量を行ったのちIII A~D区の調査区を設定する。III A区より調査を開始し、28日までに東端部で溝2本と掘立柱建物跡一棟を検出する。

5月7日 III C区で黒褐色の遺物包含層とその下の住居跡状遺構を検出する。

5月22日 III D区遺物包含層の掘り下げを開始し、29日土層図と写真撮影を行って調査を終了する。



第1図 石台遺跡位置図 1/3000

## 石台遺跡

6月3日 IIIA区遺物包含層の調査を開始する。厚い堆積層の中に多量の遺物が含まれていたため、7月16日までかかる。その間III C区の遺構実測等も行う。

7月17・18日 III E区の地形測量の補足を行い、全調査を終了する。

## 2. 遺跡の概要

石台遺跡は松江市市街地の東部、松江市東津田町舟津田字石台に所在し、佐草の丘陵部に源を発する馬橋川の河床およびその沿岸の沖積地に立地している。昭和51年2月、馬橋川局部改良工事中に、地表下1~1.5mの砂疊層から多数の土器片が出土したことから遺跡であることが判明した。（第1図A）出土遺物には繩文土器をはじめ、劣生土器、土師器、須恵器、石器等があり、特に繩文晩期の模痕のある土器片や大形打製石斧、三角形石庖丁などの発見は<sup>註1</sup>当時大きな注目をあびている。その後、昭和53年にも馬橋川改良工事に遇進して鳥取県教育委員会が上流部分を試掘調査したが、この時には遺物は出土していない（同図B）。さらに、本調査の整理期間中、昭和57年2月にも下流部分で試掘調査が実施され、その時には鎌倉時代初期を中心に中世陶器や土師質土器が多量に出土している。これらはいずれも馬橋川の河床部分を調査したもので、周辺の沖積地については調査の手が及んでいなかった。

今回は、バイパス予定地内の約360mの部分について調査を実施した訳であるが、本来の石台遺跡とはやや地点が異なるものである。調査報告書の図でも報告したように、I区では植物で構成される黒色有機質土と青灰色粘土層が厚く堆積し、遺構、遺物はほとんど確認されなかった。しかも



第2図 石台遺跡III区調査区設定図 1/1200

今回の調査で遺構・遺物が集中して発見されたのはⅢ区の櫛岡地区であり、このことから、これらの遺構・遺物はすぐ東側に位置する勝負遺跡と関係が強いものかも知れない。(足立克己)

### 3. 遺構と遺物

今回の調査では、遺構・遺物はⅢ区に集中して検出された。I・II区に関しては遺物が表土層から採集されるのみである。I区についてはすでに報告済みであり、遺物も図示できるものがなかったため、ここではⅡ・Ⅲ区の遺構・遺物について報告する。

#### (1) II区の出土遺物

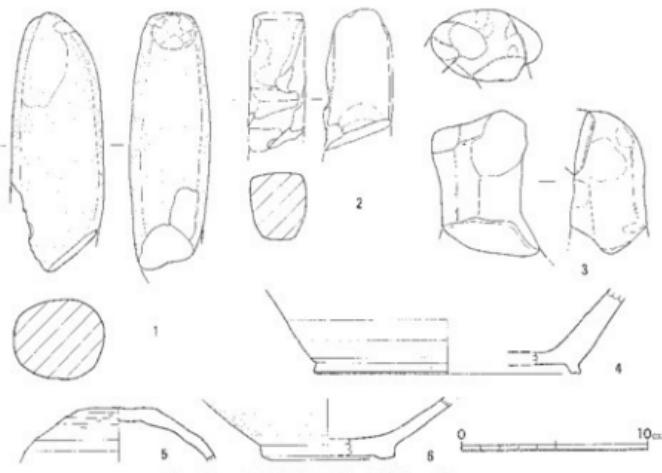
耕作土を除去した際に同層中から遺物が少量採集された。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、石器、土製品、メノウ片などがあるが図示できたのはごくわずかであった。

石斧(第3図1・2、図版191-5・6)2点出土している。1は断面楕円形の太型鉈刃石斧である。全面に敲打を加え、頭部はやや斜めに成形する。風化が著しく研磨痕は明確でない。2は断面台形に近い形を呈する。敲打によって形を整え、背部に幅広の抉りを二個所入れる。抉りのひとつは二条の溝からなる。抉り反対側の面および頭部には研磨を施す。両側面は敲打だけで研磨は施されていない。どちらも流紋岩製で刃部を欠失する。抉入柱状片刃石斧は、昭和51年の護岸工事の際にも1点出土しており、今回の資料で2点目である。また島根県内では、浜田市鷲石遺跡<sup>註4</sup>、八束郡東出雲町寺床遺跡<sup>註5</sup>について4例目である。

土製品(同  
図3、図版

191-4) 土  
製支脚が一点  
出土している。  
脚柱部のみで  
突起と底部を  
欠損する。現  
存長7.8cmで、  
脚柱部の断面  
は楕円形を呈  
し、最大径4.  
2cmである。

磨滅が著しく、



第3図 石台遺跡II区出土遺物 1/3

## 石 古 遺 物

突起は2本と思われる。脚部は空洞になつてない。

須恵器（同図4・5、図版191—1・2） 小片が数点出土する。4は壺の底部片である。平らな底部の周縁に低い高台がつく、体部は厚く直線的に立ちあがる。内面回転ナデ、外面は笠削りのままである。奈良時代以降のものと思われる。5は壺蓋片である。内外面ともに回転ナデを施し、天井部はへら切り後ナデを施す。体部が直線的なところから壺あるいは壺の底部ということも考えられる。蓋片の上下が逆転する頃のものと思われる。

白磁（同図6・図版191—3） 底部片であるが中国製の白磁碗である。低い削り出しの高台がつく。内面および外面にやや緑色がかった釉がかかる。高台には施釉しない。胎土は灰白色を呈し、小さな空気孔が観察される。口縁は鉢状に大きく開くものと思われる。13世紀頃と思われる。

（片岡詩子・足立克己）

### (a) III区の遺構と遺物

III A区で溝状遺構、掘立柱建物跡、土壙を検出した。またIII C区でも住居跡状遺構が検出された。その他にIII A区の西半およびIII D区に遺物包含層が確認され、多数の遺物が出土した。

#### (a) III A区の遺構

調査区の東端にかたまって検出された。この東側はかつて南の山塊から低丘陵が伸びていたところであるが、宅地造成の際に地山が削られており、検出された遺構はその斜面の部分に位置している。（第4図）

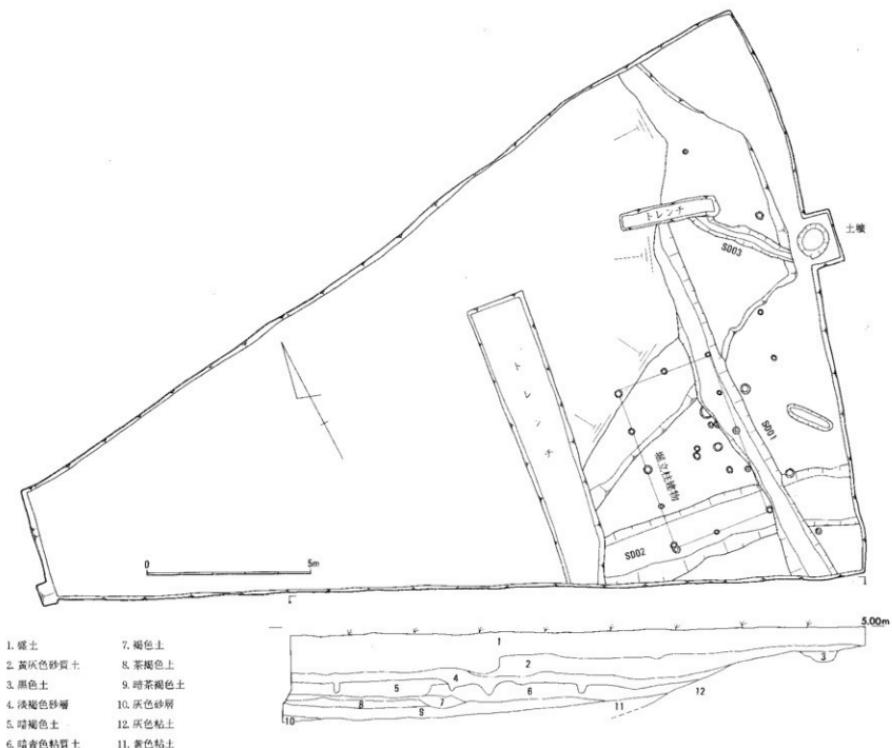
#### 掘立柱建物跡（第5図、図版187—3）

2本の溝と重なった状態で検出されたが、溝の下面で柱穴を確認したことから、少なくとも溝よりは古いと思われる。建物跡は2間×4間で、柱間寸法が桁行125cm、梁間150cmの小形のものである。掘形円形で直径20cm前後、深さも約20cmと浅い。四隅と桁中央の柱穴が他に比べてやや大きくつくられている。また建物中央にも柱穴が認められ、これも梁柱になるかもしれない。柱穴内には淡褐色土が堆積し、遺物は出土していない。

#### 土壙（第6図、図版188—2）

調査区の東際で検出した。範囲を括げて調査した結果、地山面に掘り込まれた、直徑約1mの半球状の土壙であることが判明した。深さは約40cmあり、底面付近から径15cm程度の不定形の自然礫数個とその間に須恵器片1点が出土した。

須恵器（第8図1）は外面平行叩き、内面同心円の叩き目文を残す壺の破片である。遺物が少なく時期の決め手に欠けるが、少くとも古墳時代以降のものである。



第4図 石台遺跡III-A区遺構配置図 1/20

溝状造構（第  
7図、図版  
188—1）

東南隅で3本の溝を検出した。

SD01・02

2本の溝がほぼ直角に交叉している。SD01は黄褐色の地山に掘り込まれており、斜面に対し平行に走る。幅約70~120cm、深さ約50cmを測り、断面U字状で、内部には黒

褐色砂質土と灰褐色粘土が堆積している。SD02によつて切られている。SD02はSD01を切って斜面を下るように掘り込まれている。東端部は地山を切り込んでいるが、西側は地山上の堆積層に掘り込まれている。幅約180cmと大きいが、深さは約40cmと、SD01よりも浅い。黒色土と灰色粘土層が堆積する。SD01黒褐色土から遺物が少量出土している。

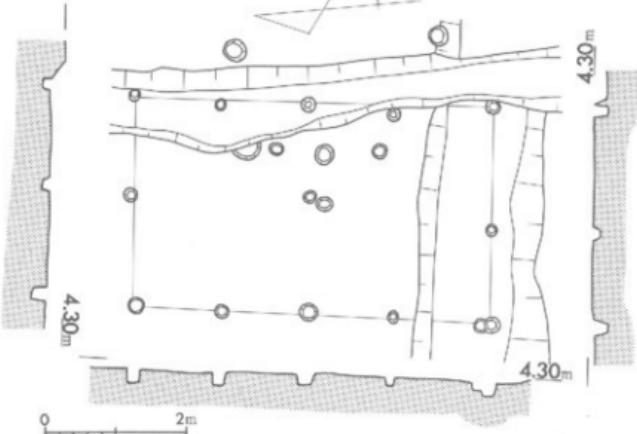
遺物（第8図2~7、第9図、図版191~7~31）  
2~4・7は弥生土器である。2は脚鉢が大きく広がる高壺の脚柱部で、壺底部は円盤を充填する。4は中腹頸の壺形上器片と思われる。胴の肩部に平行沈線文と斜行沈線文を施し、その下に柄による刺突文を回らせる。7は中期後葉の壺形土器口縁部である。口縁上面に凹線が3条ある。5・6は須恵器片である。5は底部片で底面に回転糸切り痕が残る。环と思われる。6は裏の胴部片で外面平行叩き目文、内面同心円叩き目文が残る。第9図は細長の敲石である。両端にかなりの使用痕が残る。

SD03 土礫付近から北西に向けて伸びる。全長3.5mしか確認できず、上半はのちに削り取られている。幅40~50cmで深さは約15cmである。

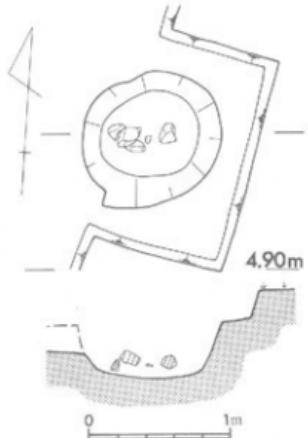
4.30m

4.30m

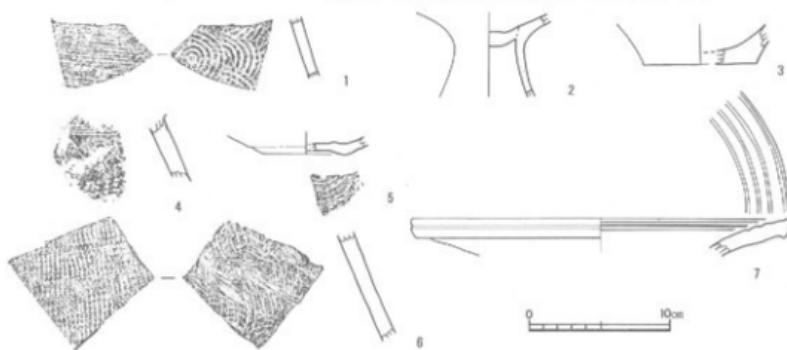
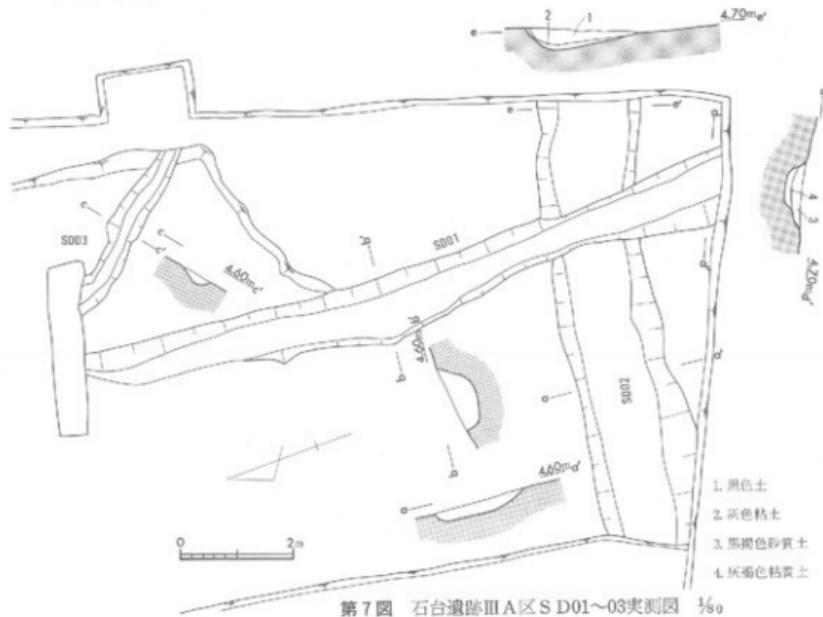
4.30m



第5図 石台遺跡III A区掘立柱建物跡実測図 1/80



第6図 石台遺跡III A区土壙実測図 1/80



S D01の堆積土中に須恵器や弥生土器が伴って出土することから、これらの溝は奈良時代よりも新しい時期につくられたものと思われるが、特に時代は限定できない。同様に据立柱建物もさほど古いものではなさそうである。

#### (b) III A区の遺物包含層

遺構検出部分の西側に厚い遺物包含層が確認された。この部分は東西の両低丘陵に挟まれた小さ

な谷間に相当し、地山がなだらかに落ち込んでいる。遺物包含層はこの谷間に堆積したもので、最も厚い部分で、約80cmにも達する。上から、褐色土、茶褐色土、暗茶褐色土の3層に分けることができる。(第4図)また斜面のやや高いところでは暗青色粘質土からも遺物の出土が認められる。包含層各層は互いに入り混じりながら堆積しており、遺物は各層にまとまりなく出土し、時期も層位的に把握できない。遺物包含層が異常に厚いこと、各層に乱れが多いこと、各時期の遺物が層位に関係なく出土することなどの点から、この遺物包含層はこの付近で二次堆積したものが、何らかの原因でさらに動かされ、このIII A区の谷間に堆積したものと考えられる。その可能性のひとつとしてIII A区東側および南側の宅地造成があげられる。遺物の出土状態では資料価値は低いが、遺物それ自体に関しては貴重な資料であるといえる。褐色土および暗青色粘質土から須恵器、土師器が少量出土するが、大半は弥生時代のものであった。出土遺物はかなりの点数にのぼるが遺存状態が悪く、図示できたものはその半分にも満たなかった。

#### 弥生土器

前期から中期にかけての土器が出土している。

##### 前期の土器 (第10図1、第11図1・2、図版191-27)

壺形土器と甕形土器があるが、出土点数は極めて少ない。壺形土器は口縁部で短く外反する口縁を持つ。内外面とともに丁寧なナデ調整を施す。甕形土器はどちらも小形で、胴部は張らず、短く外反した口縁からやや直線的に底部につづく。外面刷毛目、内面はナデ調整である。1には胴部下半に範磨きが施されている。

#### 中期の土器

壺形土器、甕形土器、高环形土器、鉢形土器が出土するが、大半は甕形土器である。

##### 甕形土器 (第10図2~17、第13図3、図版191-14~26)

口縁部の形態および文様から5類に分類できる。

**壺A (3)** 内傾しながら立ちあがる頸部に短く外反する口縁のつくものである。形態的には前期の壺形土器と変わらないが、頸部に櫛描きの平行沈線文が18条回る。内外面ともにナデ調整である。

**壺B (2・4)** 朝顔状に大きく開く口縁で、口縁上面あるいは端部に文様を施す。2は櫛描きの鉢文、4は断面三角形の突帯を貼付け、その間に刷毛のようなもので刺突文を回らせる。凹線は施さない。

**壺C (5・6)** 漏斗状に開く口縁である。頸部に断面三角形の貼付け突帯を施し、口縁端部外面には小さな刻目を施す。



第9図 石台遺跡III A区

S D01出土土器 5枚

**臺D** (7~12・14・16・17、第13図3) やや長めの頭部に大きく開く口縁を有し、口縁端あるいは口縁上面に凹線文を施す土器群である。器形的には壺Cと同一のもの (8・9)、口縁端部が繰り上げ口縁になるもの (16・17)、直線的な頭部に口縁が短く外反するもの (7、10~12・14)などがある。頭部にも凹線文や櫛搔波状文を施すものがある。8・11は頭部に強い凹線を入れ、その間を突帯状につくり出すものである。

**臺E** (13) 無頭の壺形土器である。口縁外面に凹線、その下に櫛搔波状文を回らす。

**壺形土器** (第11図3~17、第12図、第13図1~13、図版191~28、192、193~1)

最も多く出土する。形態から3類に分けることができる。

**壺A** (第11図3~5) 脚部はさほど張らず、口縁が短く外反するものである。内外面ともにナデ調整を施すが、外面に刷毛目調整を行うものもある。3には櫛搔きの平行沈線文と波状文が回り、口縁端には刻日も施されている。

**壺B** (同図6~12) いわゆるくの字形口縁をもつものである。口縁端部を四角くつくるもの (6・7・9) と肥厚させるもの (7・8・11) がある。内面ナデまたは刷毛目調整、外面は刷毛目調整のうち脚部下半に範囲を施す場合が多い。

**壺C** (同図13~17、第12図、第13図1~13) 頭部の字状に鋸く彎曲し、口縁端部が繰り上げ口縁を呈するものである。口縁外面に数条の凹線を回らせる。脚部は上半が大きく張り、卵形に近い形状を呈す。脚部上半に櫛あるいは範状工具で刺突文を数段回らせる。口縁外面に刻日を施したり (第13図4~7・9)、頭部に指頭圧痕を持つ突帯を回らせたり (同図9・11~13) するものもある。

**鉢形土器** (第13図14・15、図版193~2・3)

出土点数は少ない。2種類の形態がある。14は直口ぎみの口縁端を突帯状に肥厚させて口縁をつくる。上面に平坦面ができる。15は口縁が内傾するものである。口縁外面に凹線状の溝が回り、脚部には貝殻腹縁状の刺突文を施す。

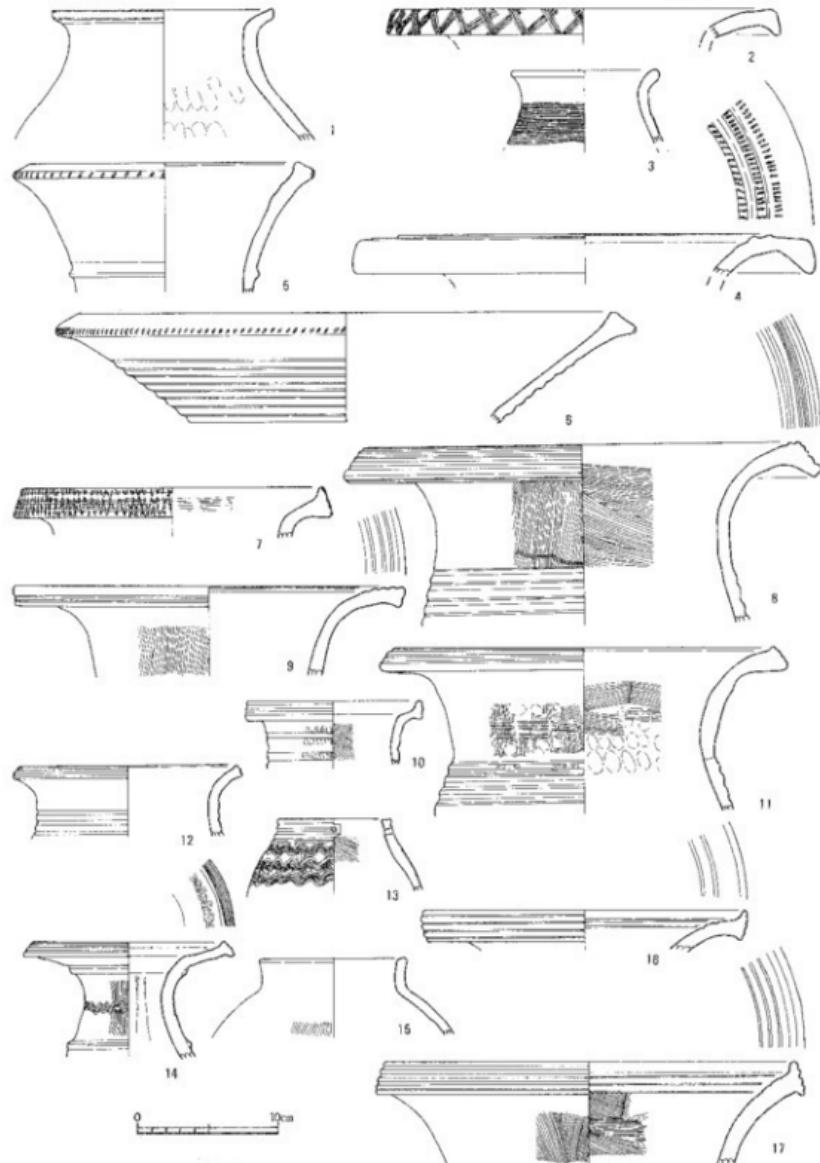
**高坏形土器** (第13図16~21、第14図1~18、図版193~4~27)

出土点数は多いが完形になるものはない。坏部の形態から大きく2類に分けることができる。

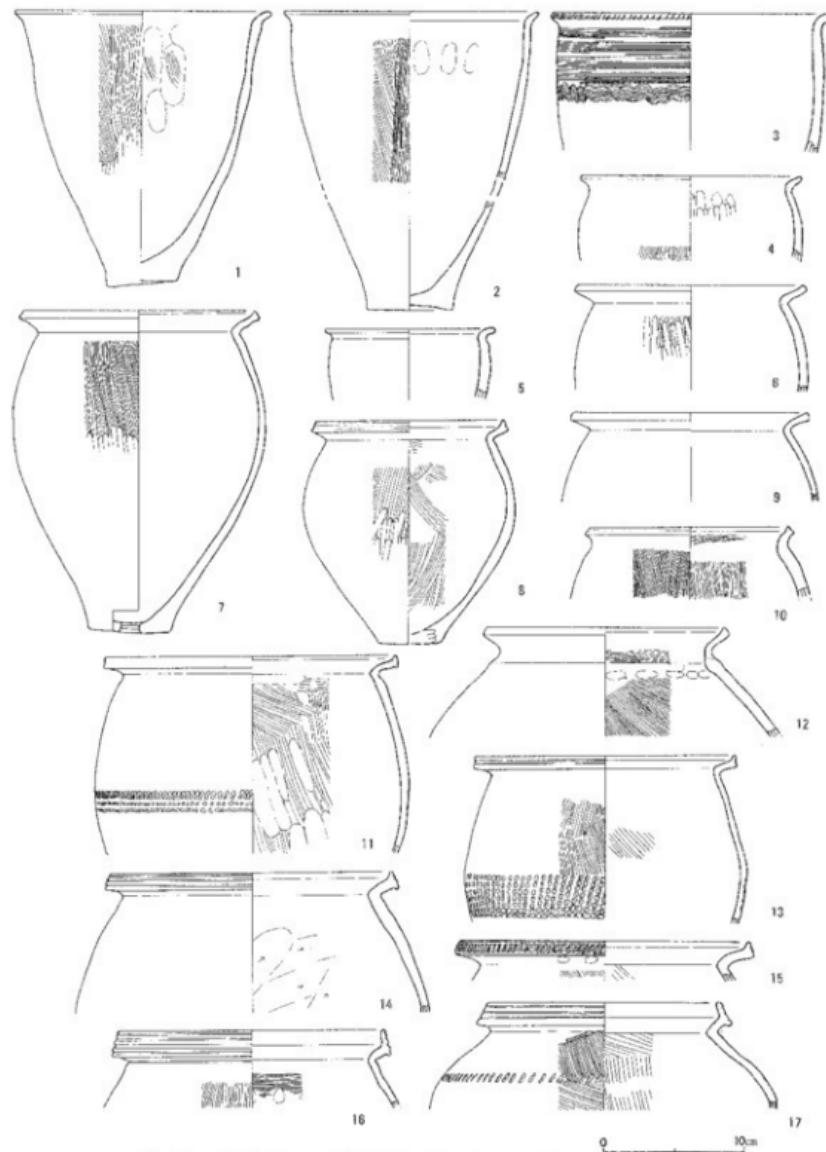
**高坏A** (第13図18・20・21) 坏部口縁に凹線文をもたないものである。坏部の浅いものは口縁端内面がやや突出して、上面に平坦面をつくる (18, 20)。21は坏部の深いもので脚柱部に沈線が回る。内外面ともに刷毛目調整のうち範囲を施す。

**高坏B** (第13図16・17・19、第4図1~9) 浅い坏部に、直口または内傾する口縁を持ち、口縁外面に4~5条の凹線を回らすものである。口縁端にも凹線を回す場合が多い。内外面ともに刷毛目調整のうち範囲を施す。

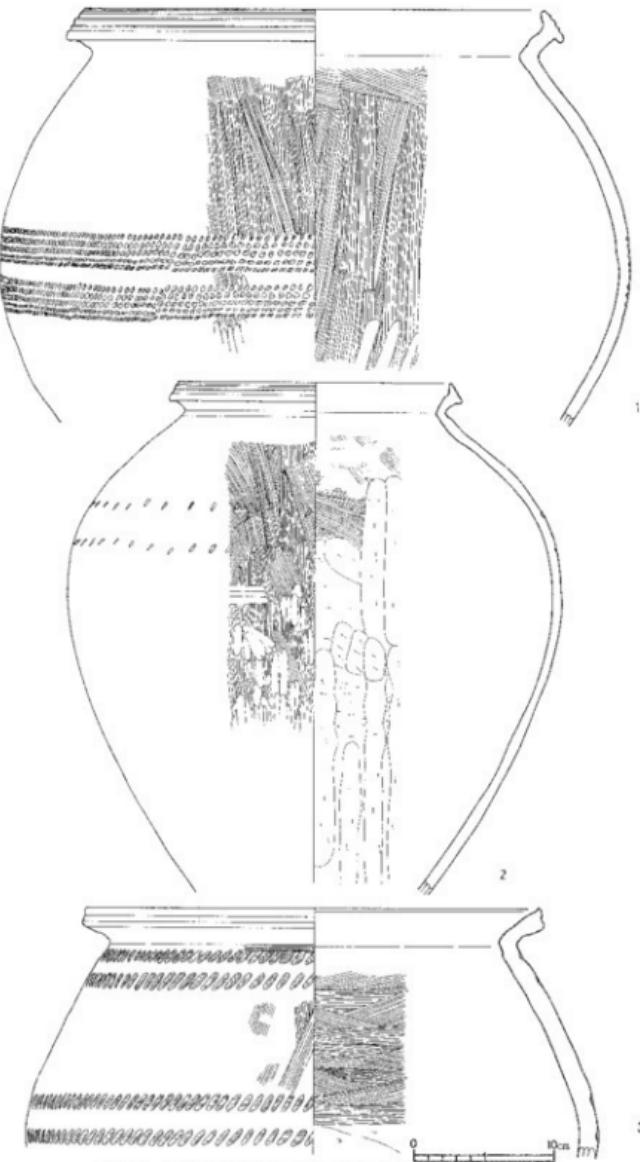
脚部も多数出土するが坏部との対応関係は明確でない (第14図10~18)。無文のもの (11・12) や平行沈線文と斜行短沈線で飾る土器 (13・14) は高坏Aに、それ以外の凹線文の施された土器は高坏Bにつながるものと思われる。脚柱部に円形または三角形の透しのはいるものもある。



第10圖 石台遺跡III A區遺物包含層出土遺物(1) 1/4

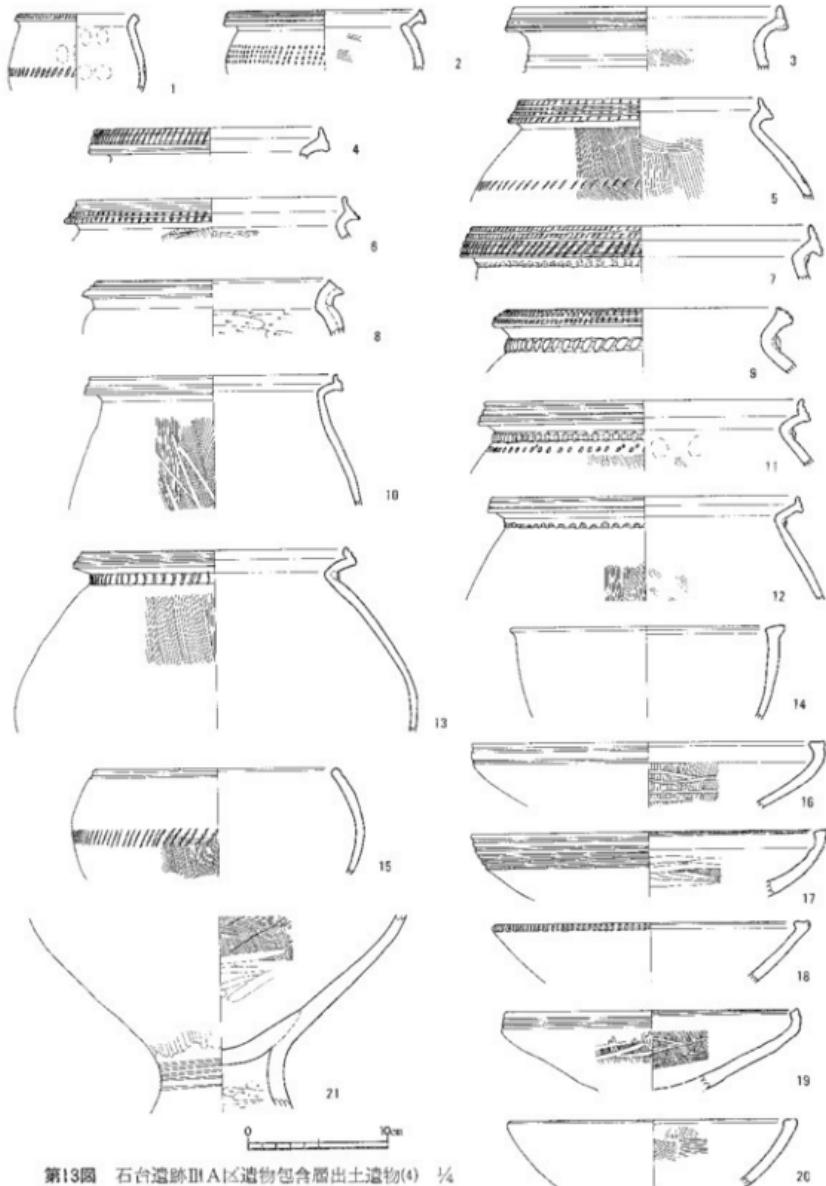


第11圖 石台遺跡III A区遺物包含層出土遺物(2) 1/4



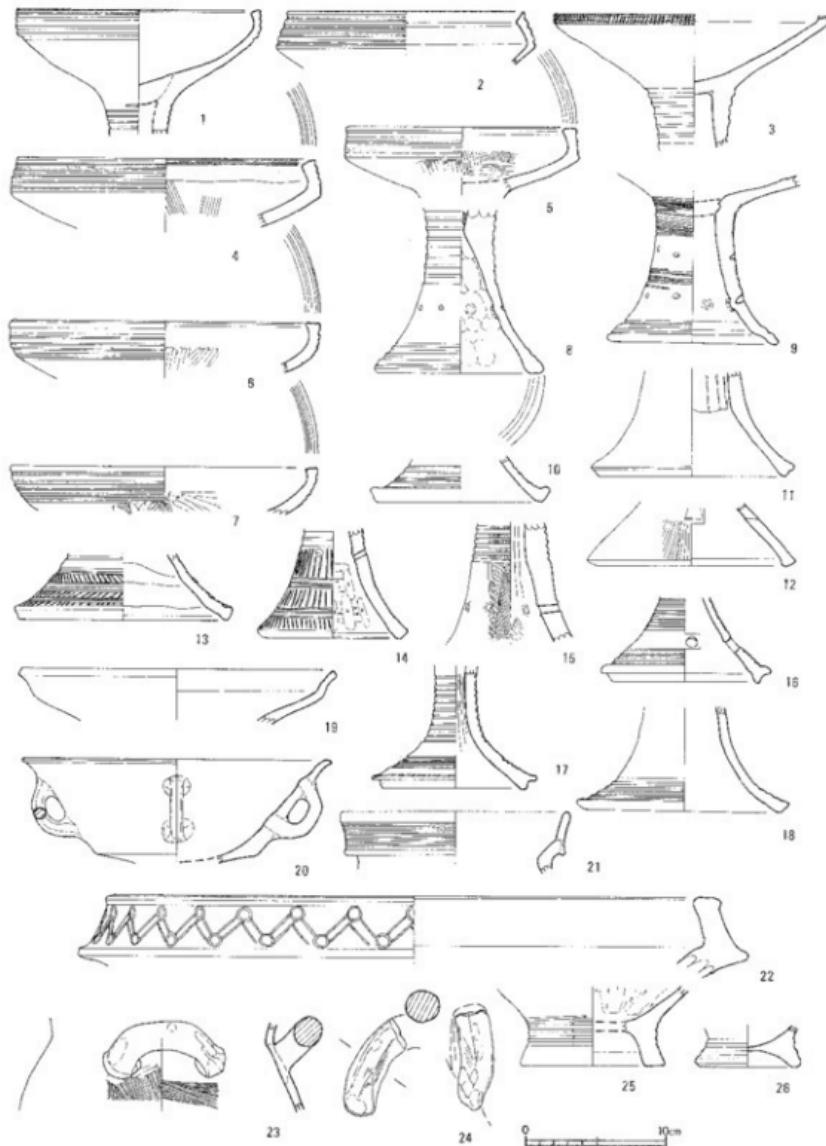
第12圖 石台遺跡III A区遺物包含層出土遺物(s) 1/4

石台遺跡



第13圖 石台遺跡III A區遺物包含層出土遺物(4) 1/4

石台遺跡



第14図 石台遺跡III A区遺物包含層出土遺物(s) 1/4

包含層中には、以上のように中期の土器が大半を占めている。中期の土器は從来から3期に分けられるが<sup>註6</sup>、それに従うと壺A、甕Aは中期前葉に属するものである。壺B・C、甕B・高環A・鉢形土器は中葉の時期に相当し、後葉には壺D・E、甕C、高環Bを充てることができる。その中で特に注目される点は、中期中葉～後葉の高環形土器が多数発見されたことで、これによって同時期の高環の形態や文様のヴァリエーションをある程度知ることができたと思われる。また、中期と後期の甕形土器の違いとして、從来から脇部内面のケズリの有無が基準にされてきたが、今回の包含層出土遺物中には、形態的に明らかに中期後葉と思われる甕形七器に内面窓ケズリを施すもの（第11図14、第12図2・3）が発見され、内面窓ケズリの手法が中期後葉の段階まで遡ることが判明した<sup>註7</sup>。ただし、中期の窓ケズリは脇部上半から行われており、後期のように頸部の屈曲部分からケズリ取ることはないようである。その他に低脚付きの底部片が出土している。外面に3～5条の凹線を回らしている。壺または甕の底部である。

#### 後期の土器（第10図15、第14図23・24、図版193-28・29）

後期と思われる土器がごく少量出土する。15は直口壺の口縁部で、球形の脇部に垂直に立ちあがる口縁をもつ。口縁外面および内面に丁寧なナデを施し、脇部外面は削毛目調整のちナデを加えている。23・24は把手の部分である。壺形土器の脇部に直径2cm程度の粘土紐を弧状につける。後期頃と思われる。

#### 古式土師器

壺形土器、甕形土器、高環形土器が出土している。（第14図19～22、図版193-32～34）21はやや外反ぎみの複合口縁を呈する甕形土器で、口縁外面に7条の備溝平行沈線文を施す。内外面ともにナデ調整である。山陰の古式土師器編年でいう鶴尾I式に相当するものである。22は大形の甕形土器の口縁である。肉厚でやや内傾する複合口縁を呈するが、立ち上がりがやや短い。外面に半載竹管による鋸齒文とその尖端部に円形刺突文を施す。飯石郡三刀屋町松本1号墳出土甕形土器の口縁に形態が近似するところから、それとほぼ同じ頃のものと思われる。19・20は高環形土器である。20はやや小さい环底部に直線的に開く環口縁が付く。外延の対称的な二ヶ所に2個の孔をあけ、粘土紐を通して一对の把手をつける。その形態から小谷式併行と思われる。19は浅い环底部に二度屈曲する口縁がつづく。類例がなく、時期は不明である。

（足立克巳）

#### 石器（第9図、第15図～第18図、図版194、195-1～7）

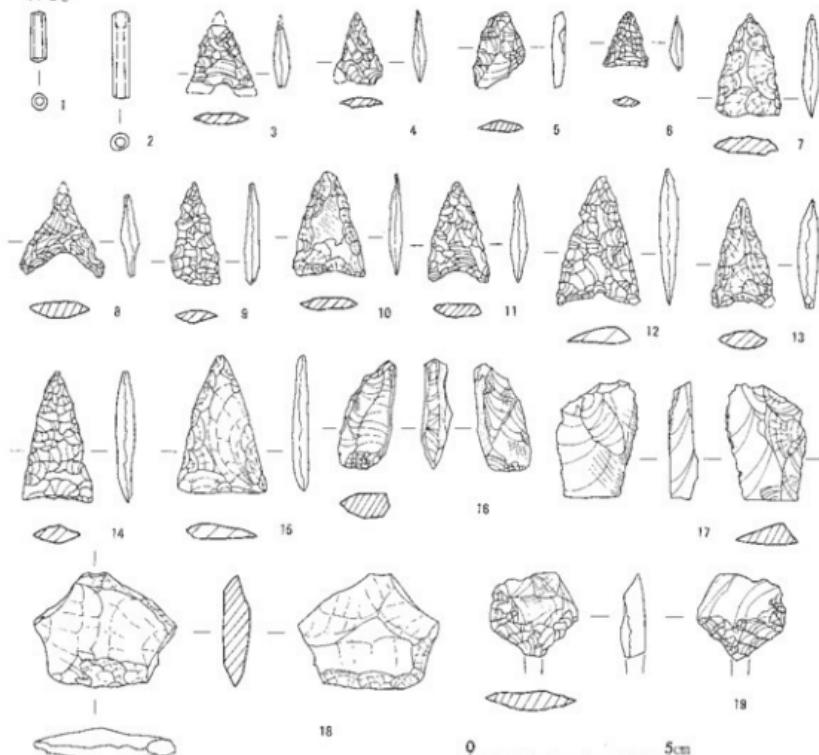
石鍬、石斧類、石庖丁、石鎌、石錐、砥石、刃器、磨石、敲石など各種にわたる石器が出土する。

石鎌（第15図3～15） 7・10・13・15・18が硬質砂岩製の他は黒曜石製である。いずれも両側緣が二等辺を呈する。4・7・15は半基式で、その他は凹基式である。このうち3・8は比較的わたりが深い。なお、5は未完成品、9は欠損品である。全体的に二次調整は細いが、6・11・12・14は削離調整が細かく丁寧なつくりである。また、12・14・15は3cmを越える大形品である。10は両面の中央部に研磨を施した局部磨製石鍬で、長さ2.6cmを測る完形品である。

スクレイバー（同16～18） 16・17が黒曜石、18が硬質砂岩製である。16・17は縦長の剥片を使用し、16はやや小形で、先端の薄い部分に二次調整を加えて刃部をつくり出す。一部に自然面が残っている。17はバルブを取り去る以外には調整を加えておらず、両側縁部には細かな擦痕、刃こぼれが認められる。18には多方向からの剥離面がそのまま残り、一部に調整を加えて刃部をつくり出すのみである。

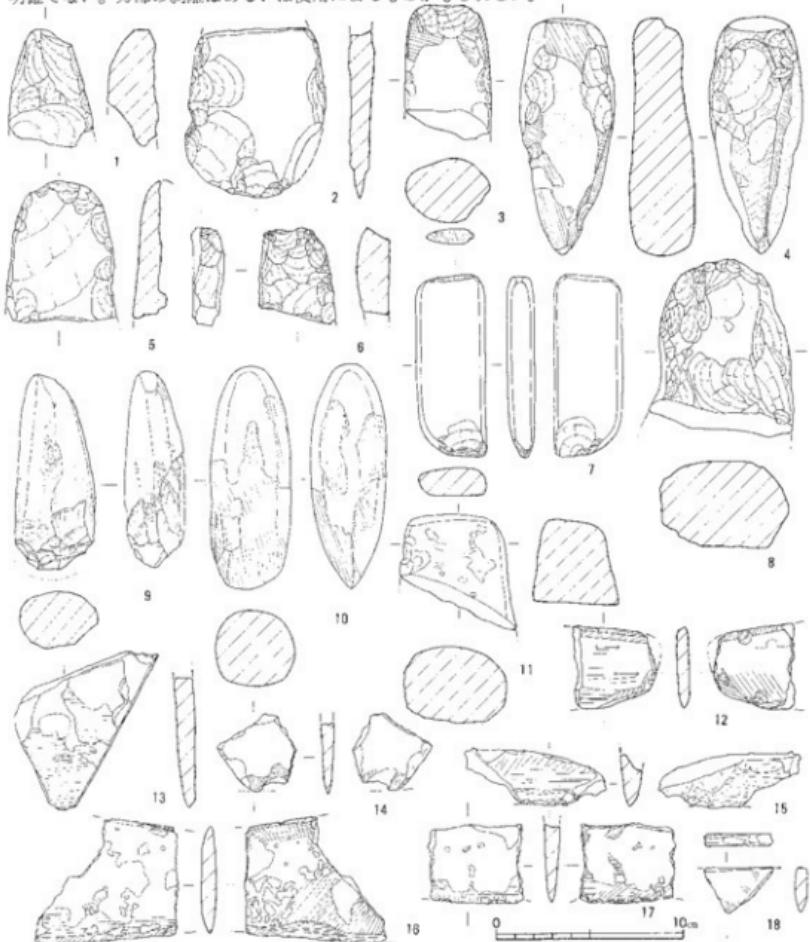
石錐（同19） 黒曜石製の小形の剥片を使用する。刃部を欠損しているが、両側縁部からの調整剝離によって、突出した刃部を作り出していたと考えられる。

打製石斧（第16図1・2・5・6） いずれも欠損品である。2・5は扁平な石材を利用し、大まかに第一次加工ののち側縁部に調整剝離を加える。特に2は端部を両面から階段状に剥離し、鋭い刃部をつくる。1は厚手で小形の石斧になると思われる。全体に粗い剥離を施す。緑色凝灰岩製。6は一方の側縁には比較的細かな二次剝離が施されているが、他方は未調整であり、未成品と思われる。

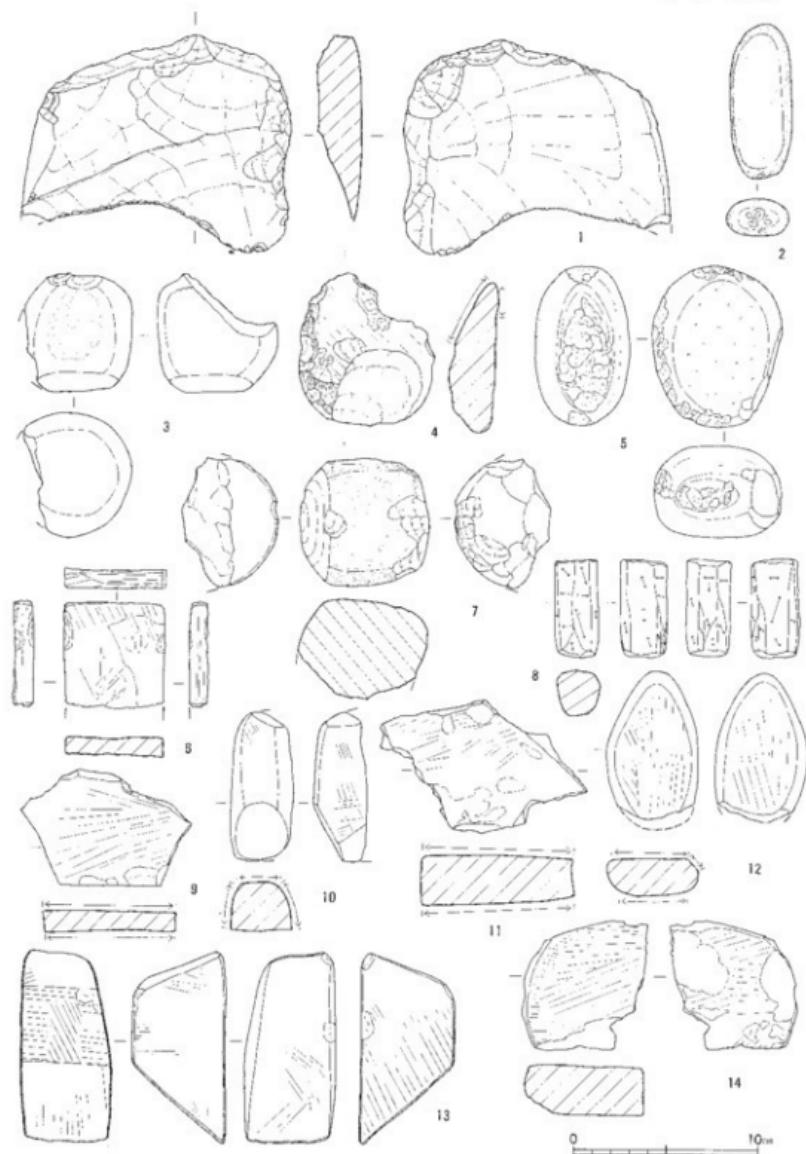


第16図 石台遺跡田A区遺物包含層出土遺物(6) 1/10

局部磨製石斧（同図3・4・7～9） 4・7はそれぞれ凝灰質砂岩、黒色頁岩の河原石に調整剝離および研磨を施して石斧にしたものである。4はやや厚みがあるが柱状片刃石斧に近いものである。7は扁平で基部および刃部に加工が認められるのみである。3は円柱状の基部で、端部に調整剝離を残し、他の部分には研磨が認められる。8はいわゆる大形の打製石斧の形態を持つものであり、基部の中央部を研磨している。機能的にも大形打製石斧と同一の要素を持つと考えられる。9は刃部のところに粗い剝離が残り、基部側は部分的に敲打痕が残る。風化が著しいため研磨痕は明確でない。刃部の剝離はあるいは使用によるものかもしれない。

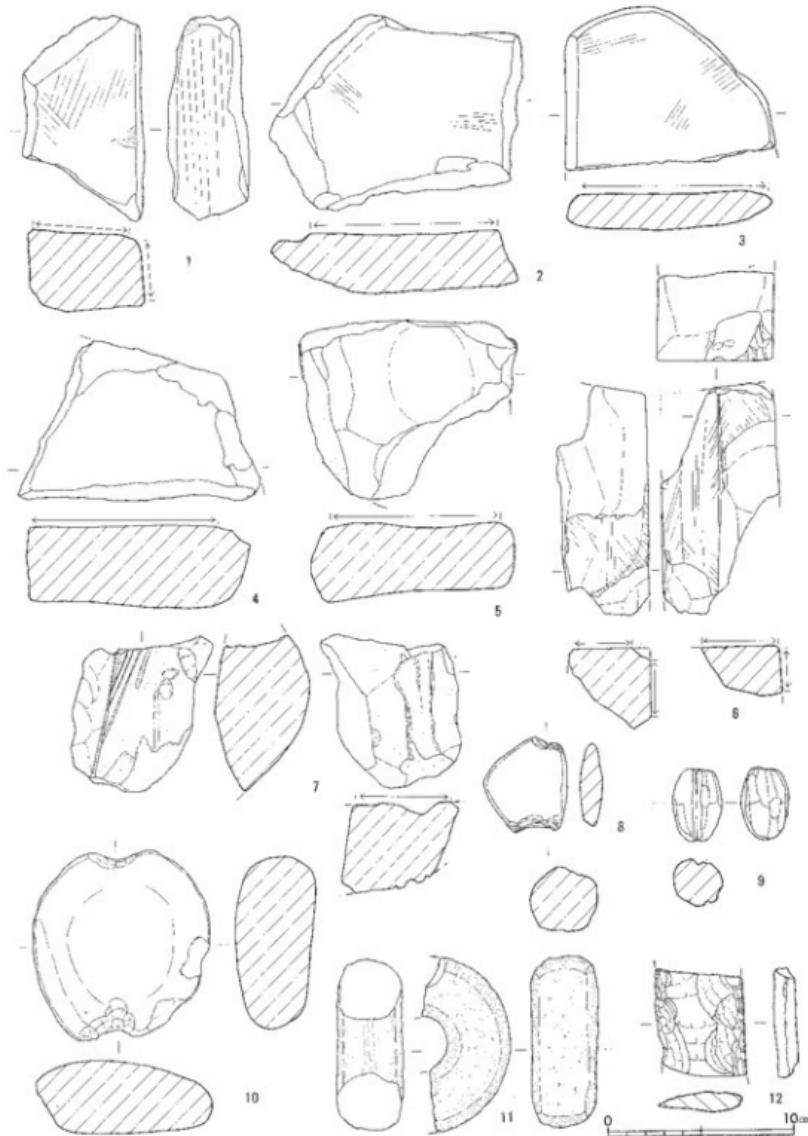


第16図 石台遺跡III A区遺物包含層出土上遺物(?) 1/3

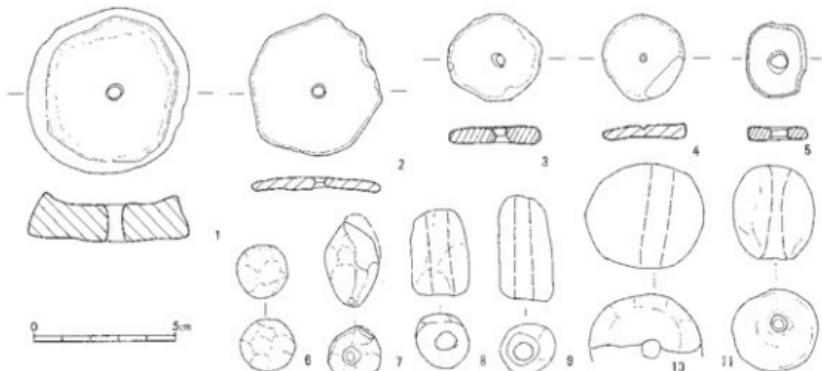


第17圖 石台遺跡III A區遺物包含層出土遺物(a) 3/5

石台遺跡



第18圖 石台遺跡III A区遺物包含層出土遺物(9) 1/3



第19図 石古遺跡III A区遺物包含層出土遺物群 1/2

**磨製石斧**（同図10・11） 10は風化が著しいがほぼ全面に研磨痕が残る。断面円形に近く、刃部には研磨による明瞭な後線が認められる。11は角閃石安山岩製である。基部端は敲打により平坦面をつくる。その他の面には研磨が施されている。

**石庵丁**（同図12~18） いずれも欠損品。扁平な石材を利用して、刃部を中心に研磨を施している。13は片面から、その他は両面から刃を研ぎ出す。12・16は背部側にも刃をつける。12の刃部縁はゆるやかな曲線を描くが、刃はやや磨滅して丸くなる。硬質砂岩製。16の刃部は直線的で刃こぼれもみられる。17も直線的な刃部を形成する。また、使用痕かと思われる擦痕が刃部に対し直角あるいは斜めに残る。14・15・18は残存部がわずかな破片である。18の背部には研磨が施されて平坦になっている。13は所々風化のため剥落しているが、ほぼ全面に研磨を施す。13・15・16は大形の石庵丁になると想われる。石材は黒色頁岩、硬質砂岩、流紋岩などを使用している。

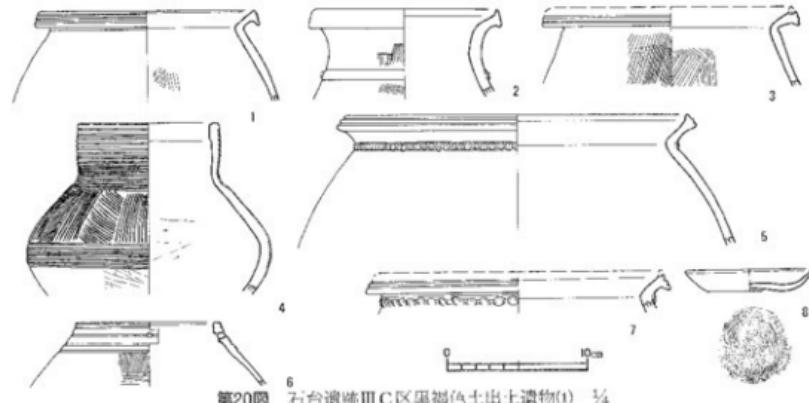
**石鎌**（第17図1） 玄武岩製で、大形の剣片に粗い加工を施す。刃部はゆるやかな弧を描きながら鶴仙し、更に細かい調査剝離を施す。中には刃こぼれもあるかもしれない。刃部には光沢があり、使用の際に植物の樹脂が付着したためではないかと思われる。

**敲石**（同2・5） 両者とも手頃な自然石を利用する。2は一端に、5は周縁に敲打痕が残る。どちらも砂岩製である。

**磨石**（同3・7） 両者とも掌中に納まり易い大きさのものである。3は自然石の平坦面を使用する。磨耗が顕著である。7は一部に剝離を施す。両側面を使用面としており、磨耗痕が残る。石材に硬質の玄武岩や硬質砂岩を使用する。

**砥石**（同6・8~14 第18図1~4・6・7） 6は扁平な流紋岩を利用する。断面長方形で割れ面以外の3面を使用する。擦痕が鮮明に残る。8は4面全てを使用する。各面には微妙な研磨方向の違いにより後線ができる。石英質砂岩製の小形品である。9は流紋岩製の破片で画面を使用する。10~12・14は凝灰岩製で一部自然面を残す。10は3面を使用するが、裏面は破損している。11・14は平坦な2面を使用し縁辺に自然面を残す。12は梢円形を呈し、画面と側縁の一部を使用す

石台遺跡



第20図 石台遺跡III C区黒褐色土出土遺物(1) 1/4

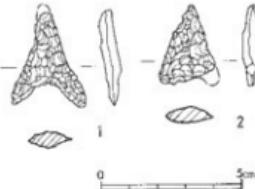
る。研磨痕が明瞭に残る。13は台形状の低石。6面全剖を使用する。いずれの面も平滑である。第18図の砥石はいずれも大形品である。1～4は自然石を利用し、1は2面を使用する。研磨痕がはっきり残る。2～4は片面のみ使用する。磨耗が著しい。6・7は有溝砾石である。6は残存部分が少ないが全剖を使用する。V字状の細く深い溝が2筋確認できる。表面は滑らかである。7は表面に溝状のものが4本みられる。そのうちの2本は磨滅が著しく形状をほとんど残さない。裏面にはやや幅広で、ゆるやかなV字状の溝が認められる。

**石皿**（第18図5） 灰岩質砂岩製の破損品である。画面を使用し、中央部が凹み、周縁が高くなる。凹み部分はわずかに磨耗する。

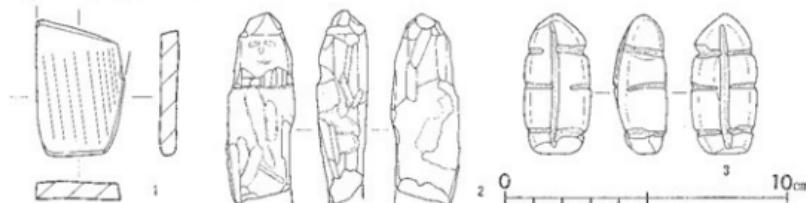
**石製品**（第15図1・2、第18図8～12、図版193～46・47、194～18、195～8～12）

III A区表上層から管瓦が採集された。その他は包含層からの出土である。

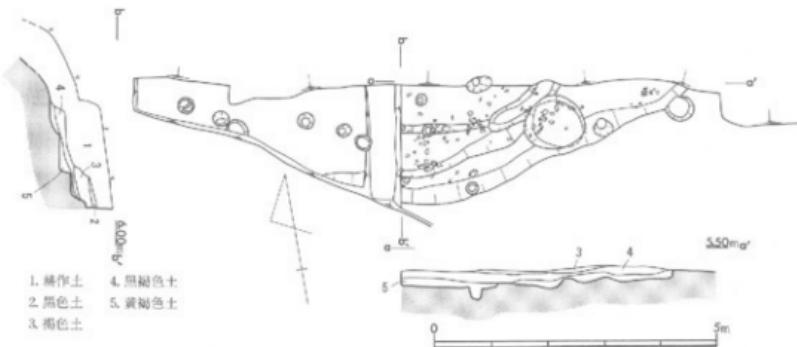
**管玉**（第15図1・2） どちらも完形品である。1は全長11.69mm、直徑3.72mm、孔径1.57mmの小形品。材質は風化が著しく不明。2は全長21.37mm、直徑4.18mm、孔径1.70mmを測り、碧玉製である。穿孔は両端から行う。いずれも丁寧な研磨が施され



第21図 石台遺跡III C区  
黒褐色土出土遺物(2) 1/10



第22図 石台遺跡III C区黒褐色土出土遺物(3) 1/2



第23図 石台遺跡III-C区住居跡状遺構実測図 1/100

ているが、2は磨耗が著しく両端がかなり丸みを帯びている。

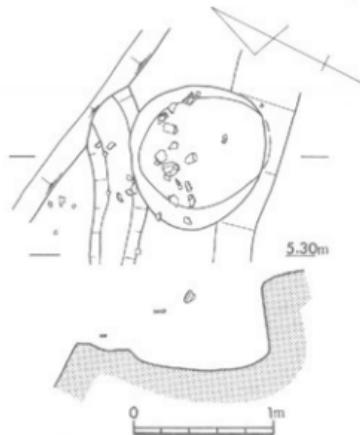
石錘（第18図8～10） 8は全長4.4cm、10は10.0cmを割り、どちらも自然礫の両端を打ち欠いた礫石錘である。8は砂岩製で重さ28.4g、10は泥岩製で383.2gの大形品である。9は全長3.85cmの凝灰岩製有溝石錘である。各面を研磨した六角形に近い断面をつくり出す。幅0.5cm、深さ0.2cmの溝を長軸に向らす。

環状石製品（同11）約2分の1が残存し、直径9.6cm程度の環状のものになると思われる。全面に粗い敲打痕を残す。内面中央に稜がたち、断面は五角形を呈する。

石剣（同12）扁平な硬質砂岩を使用する。両端を折半するが、両面ともに大きく自然面を残す。両側縁部に剝離を加えて直線的に作り出し、一方には細かな刃つぶしがはいっている。石剣ではないかと思われる。

#### 土製品（第19図、図版193-35～45）

1～5は土器片を転用した紡錘車である。1は底部の周縁を加工して作ったもので、重さ54.5gである。2～5はそれぞれ重さ8.7g、5.5g、6.4g、3.2gで、特に3は穿孔途中のものである。6・7は土玉である。6はほぼ球形で直径約1.9cmを計る。7は圓形を呈し、一端から孔を穿ちかけているが深さ3mm程度で終っている。8・9は円筒形の、10・11は球形の土錘である。8・9は欠損品で重さ各々9.5g、9.6gを計り、10は半分以上を欠損するが重さ32.5gである。11は完形品で、二方向から穿孔を行う。重さ27.0gである。（片岡詩子）



第24図 石台遺跡III-C区土壤実測図 1/40

## 石 古 遺 跡

### (3) III C 区の遺構と遺物

III B・C 区は丘陵先端部に位置する（第2図）が、III B 区は松江市の市営住宅跡地で、遺構は検出できなかった。III C 区はもと畠地として利用された丘陵先端のごく一部が調査対象となった。黒褐色土上の遺物包含層とその下に住居跡状遺構および土壤を検出した。

#### (a) 黒褐色土出土遺物（第20～22図、図版195—13～25）

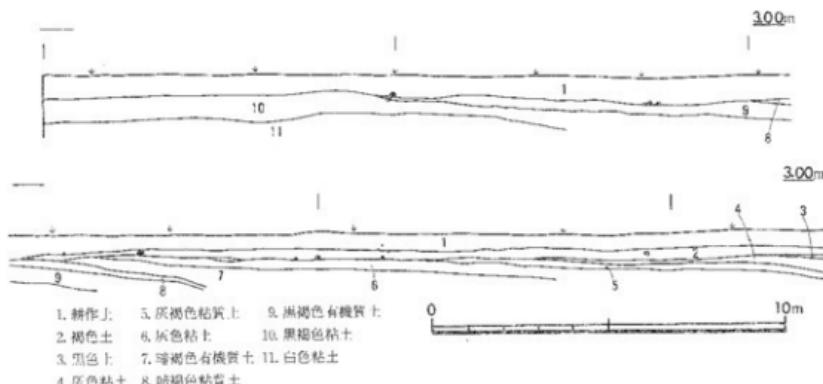
厚さ10～15cm程度の黒褐色土に遺物が包含されているが、この包含層は下の住居跡状遺構の凹みに流れ込んだものである。（図版189—2）弥生土器、土師質土器、石器、石製品が出土する。

**弥生土器**（第20図1～7） 1・3・5・7は縦り上げ口縁の外側に数条の凹線を回らせる蝶形上器である。5・7には頭部に指頭圧痕を有する突唇を貼り付けている。2は口縁が短く外反し、縦り上げ口縁を呈する壺形土器である。頭部下端に突唇を回らせる。4は直口壺で、算盤玉に近い頸部を持ち、内面に範ヶ絞りを施す。口縁から頸部上半にかけて模描による平行沈線文、有輪綴衫文を施す。6は無頸壺で、外面に範ヶ絞りの平行沈線文を回らす。4は後期、その他は中期後葉に相当すると思われる。

**土師質土器**（同図8） 小皿が1点出土する。底部回転糸切りで内外面に渋が付着し、スヌ状の炭火物の付着も著しい。平安時代以降のものと思われる。

**石器**（第21図・22図1） 石鏃と砥石である。石鏃はどちらも黒曜石製で、1はわたりぐりが深く丁寧なつくりである。砥石は扁平な流紋岩を利用する。片面と側面の一方を砥面として使用する。

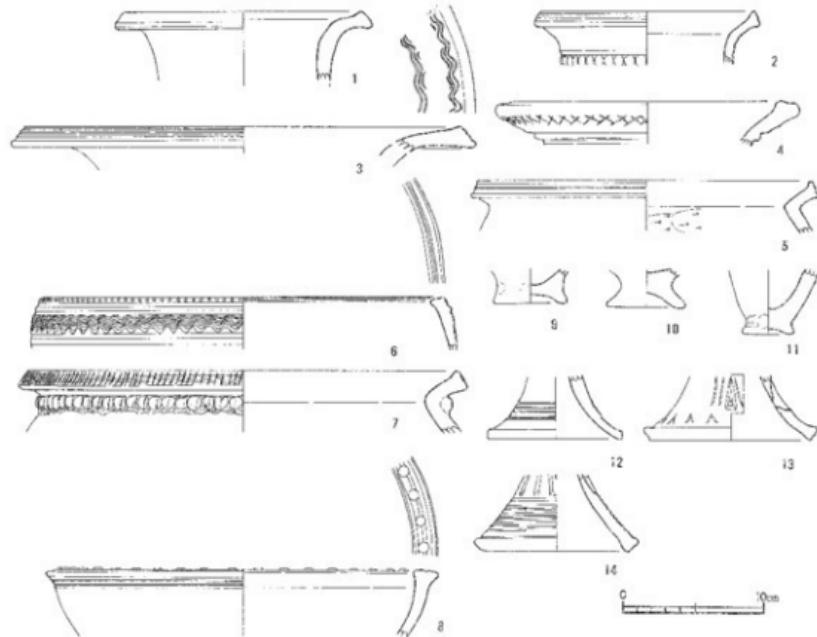
**石製品**（第22図2・3） 2は人形石製品である。凝灰質砂岩製で一部欠損しているが、現存長6.7cmを測る。頭部は四方から削って尖らせる。頭面は平坦にしたのち目と鼻と口を刻む。目尻が下がって、口許には笑みをたたえている。頭と体部の間には二条の浅い線刻を横位に施して首とする。そこにはさらに首を強調するため縱方向に9面ほどの割りがはいる。体部には幅0.5cmの浅い溝を斜めに交叉させており、奥掛けを思わせる。裏面も削って平坦面をつくり出す。3は線刻裏である。全長4.9cmを測り、凝灰岩を使用する。長楕円形を呈し、断面も楕円形に近い。両面の長袖



第26図 石古遺跡III D区北壁七層図 1/80



第26図 石台遺跡III D区褐色土出土遺物(1) 1/2

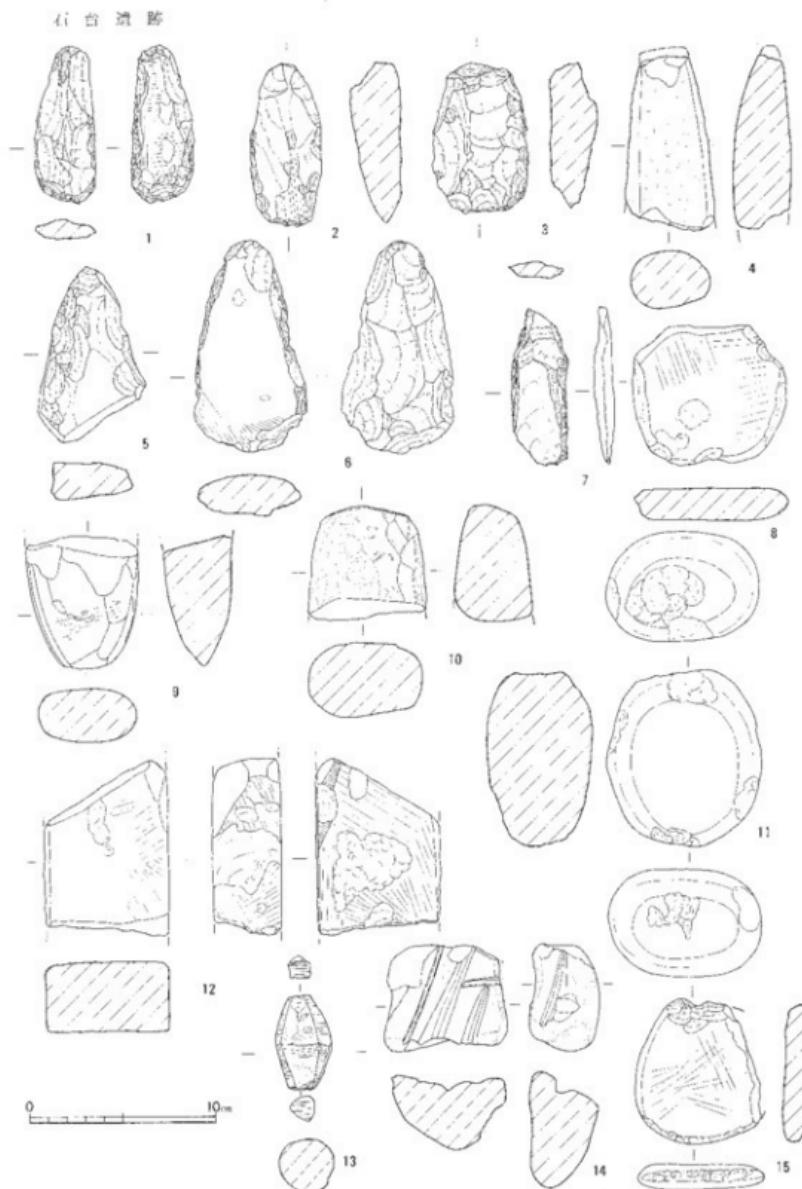


第27図 石台遺跡III D区褐色土出土遺物(2) 1/4

に一条ずつの溝を入れ、それと直交するように短側に3条の溝を回らせる。溝はいざれも刃物のようなもので切り込んでおり、断面V字形を呈する。これに類似したものが、仁多郡仁多町下鶴鳥遺跡<sup>8</sup>で出土している。

(b) 住居跡状遺構（第23図、図版189—3）

遺物包含層の下に3段の落ち込みを検出した。上の1段は長さ6.5mにわたって確認され、東側では土壤がのちに掘り込まれている。中・下段はトレンチ西方では確認できなかったが東側でその境に弧状に溝が掘り込まれていた。各段およびその壁面付近には柱穴と思われるピットがあり、伴



第28圖 石台遺跡III-D區褐色土出土遺物(3) 1/3

出する遺物はないが、これらの点から円形に近い住居跡状の遺構と思われる。

#### (e) 土壙 (第24図)

検出面で直径約1mの上壙である。住居跡状遺構の上から掘り込まれているため、斜面下方では、壁がわずかに残るのみである。やや袋状を呈する。遺物は出土していないが、III A区の土壙と船似しており、それとほぼ同時期のものと思われる。

#### (4) III D区の出土遺物

丘陵先端の水田部分でも遺物包含層を確認した。調査区北壁での土層観察の結果、耕作土以外はどの層も東に向って傾斜しており、西端部では炭土下65cmで地山と思われる白色粘土に達することが判明した。遺物は東半、耕作土下の褐色土から出土し、その下は黒褐色の植物を大量に含む有機質土と粘土が互層をなして堆積するようである。(第25図)このことから、この褐色土上の遺物包含層は丘陵部分からの流れ込みと考えられ、III D区からIII A区の方へ伸びているものと思われる。遺物は縄文時代から古墳時代にかけてのものが出土している。

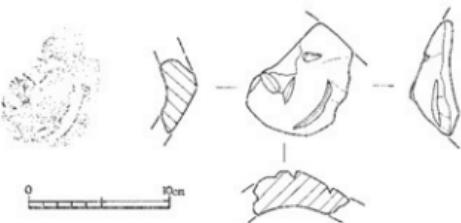
#### 縄文土器 (第26図、図版195-26~34)

すべて深鉢形の条痕上器である。外面に二枚貝による条痕調整を施し、内面はナデ調整を行う。1は口縁部で端部が細くつまみ出されている。5は内面にもわずかに二枚貝条痕が認められ、9の内面には板目状の条痕が残る。前期頃のものと思われる。

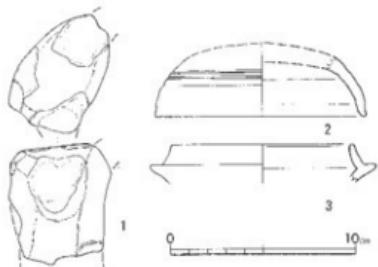
#### 弥生土器 (第27図、図版196-1~14)

中期後葉の土器が出土する。1~4は壺形上器で、1~3には口縁外周に凹線が数条回る。口縁上面あるいは頸部を櫛模波文状、篦模網格子目文、貼付突帯、指頭圧痕付突帯などで飾る。6は鉢形土器と見られるもので口縁端に凹線文、外面に凹線文と波状文、円形刺突文が施されている。5・7は壺形土器で5は胴部内面に篦ヶ目を施している。5の口縁外周に凹線文、7には斜行短沈線文と頸部に押圧文付突帯を施す。8・12~14は高环形土器片で、8の坏部口縁にはやや肥厚した口縁の上面に凹線文と円形浮文が回る。脚部片はいずれも脚窪部が断面一角形状になり、端部に平坦面を持つ。14には透し状の切り込みがはいるが、貫通していない。9~11は底部片で低脚状を呈するものである。

#### 石器 (第28図、図版196-17~30)



第29図 石台遺跡III D区褐色土出土遺物(4) 1/2



第30図 石台遺跡III D区褐色土出土遺物(5) 1/2

## 石 古 遺 勝

石斧類を中心には、砥石、敲石などが出土する。

局部磨製石斧（1・2） 1は扁平な黒色頁岩を使用し、両面ともに両側縁から粗い剝離を加える。刃部および片面の中央部に研磨を施す。刃部先端と側縁部の一部に磨滅が認められる。2は縦灰質砂岩製で比較的厚味がある。自然面を多く残し、周縁部に大まかな剝離を加える。刃部は両面から研磨を加えてV字状に研ぎ出す。

打製石斧（3・5・6） 3は全体的にやや長方形に近い形を呈する。全面に粗い剝離面を残す。5は両側縁に粗い調整剝離を施すが、その他は自然面を残しており、未成品と思われる。6は片面に大きく自然面を残し、もう一面には粗い剝離を施す。

磨製石斧（4・9・10） 4は全面に細かい敲打痕を残すが、研磨は施されていない。9は大型始刃石斧の刃部である。全面に丁寧な研磨が施され、刃部には細かな擦痕も認められる。10は研磨を施すが一部に敲打痕も残る。頭部は研磨を加え、やや平坦にする。

礫石器（15） 凝灰岩製の扁平な礫を使用し、一部に剝離を施す。反対側は打ち欠いた痕跡があり磨滅している。表面には擦痕も認められる。

打製石鎌（7） 砂岩製の継長の剝片を使用する。両端を欠失するが、片側に細かい剝離を施し、やや内湾した刃部をつける。背部は第一次加工をそのまま残す。

砥石（8・12・14） 8は扁平な凝灰岩の一面を砥面として使用する。12は凝灰岩頁砂岩製で欠損部以外の3面を砥面とする。いずれの面も滑らかである。研磨痕がはっきり残る。片面と側面には浅い敲打痕が認められる。14は砂岩製で平坦部と側面にU字状の溝が残る。

敲石（11） 自然礫の両端に浅い敲打痕が残る。砂岩製。風化のため磨耗が著しい。

石製品（同図13、図版196—31）

切り子玉形石製品である。断面変形六角形を呈し、それぞれ端部から中央にむかって研磨する。両端は平坦になる。穿孔は認められない。

須恵器（第30図2・3、図版196—15・16）

図示できたのは2点のみである。2は环蓋でかなり丸みを帯び、腹部は意識的に上下を凹ませてはいるが突出しない。3は环身片で、立ち上がり部がやや内傾し、受部はやや三角形状に突出する。<sup>若9</sup>どちらも天井部および底部を欠損してケズリの状態が明らかでないが、山陰の須恵器編年でいうⅢ期に相当すると思われる。

土製品（第29図、第30図1、図版195—35・36）

歓面状上製品と上製支脚が出土する。第29図は小片で全形を窺うことはできないが、手現ねで断面が山形をなし、外面突出部とそのまわりの4ヶ所にへラ状のもので線刻がはいる。突出部の2個が鼻、上部の三角形を呈するものが目、下の弧状をなすものが口に相当すると思われ、全体として動物の顔のような感じである。時間不明。第30図1は支脚の脚柱部である。突起は3本で脚柱は空洞になっていない。古墳時代末から奈良時代のものと思われる。

（片桐詩子・足立克己）

## IV. 小 結

石台遺跡は、馬橋川河床に縄文時代から中世にかけての遺物を出土する遺跡として著名である。今回のバイパス予定地内の調査地区は、その馬橋川の沖積地の南側丘陵部にあたり、縄文時代以降の集落関係遺構の検出がその焦点となった。しかし水田部のⅠ・Ⅱ区については概要でも記したように、かつて大橋川に続く入江のようになっていたと考えられ、わずかな遺物が採集されるのみであった。さらに丘陵に近いⅢD区でも、丘陵の地山が張り出していることは確認できたが、その周辺はⅠ・Ⅱ区と同様の土堆堆積状況を示し、遺構は確認できなかった。しかしⅢC区からⅢD区にかけて確認された遺物包含層、およびⅢA区の厚い遺物包含層は、この南側丘陵上に遺構が存在することを示唆するものである。ⅢC区の堅穴住居跡状の遺構、築造時期のはっきりしないⅢA区の遺構などは、これらの一部と考えられるが、遺跡の全貌を知るまでは至らない。ただ包含層中の遺物から推定するのみである。

その出土遺物には、弥生時代中期の土器を中心として、石器、縄文土器、土師器、須恵器などがある。縄文土器は、馬橋川河床では早期末から晩期まで、中期を除く各時期の土器が採集されているが、今回の調査では前期須の条痕土器のみであった。このことは馬橋川沿い（主に北側の宇舟津田地区）と南側丘陵部とでの居住時期あるいは規模が異なることを示すものかもしれない。弥生時代についても、今頃は中期後葉の土器が主流である。このことから丘陵部にあると考えられる集落遺構もこの時期が中心となる可能性が強い。古墳時代以降の遺物は特に少なく、今後の調査に期待するところが大きい。

その他の特徴として、石器が多数出土する点があげられる。抉入柱状片刃石斧は県内では4例目、石台遺跡では2点目であり、以前採集された磨製石斧、大形打製石斧、大形石臼<sup>註10</sup>の出土とともに、弥生時代の石器のあり方を解明する手掛りになるものと思われる。また、切子玉形石製品や人形石製品、線刻繊など、極めて珍しい遺物もあり、今後これらが何を意味するのか解明していく必要がある。

石台遺跡の調査は、包含層中から多数の遺物が出土することから、単に遺物にのみ囚がちであるが、その背後には、大規模な集落が存在するわけで、今回の雄岡原区の丘陵は今後も注意する必要がある。特に東に隣接する勝負遺跡では古墳時代の土壤や堅穴住居跡が検出されており、弥生時代以降何世帯かで構成された集落が時期を異にして転々と丘陵上を移動して営まれていたことが考えられる。しかも石台遺跡では碧玉製の管玉も採集されているところから、住居のみならず墓域も存在したことが考えられる。

以上のように今回の調査区は從来の馬橋川沿いの地点とはやや様相を異にしているが、それも含めて馬橋川沿岸に縄文時代から中世まで延々と生活が営まれたことが想定されるのである。

（足立克己）

## 石 台 遺 跡

- 註1 岡崎雄二郎「山陰の編文後・銚期の諸問題」(日本考古学協会昭和52年度大会発表要旨、昭和52年)  
前島己基「複痕のついた縦文土器の破片」(『季刊文化財』31号、昭和52年)  
岡崎雄二郎・恩田清「石台遺跡について」(『松江考古』創刊号、昭和53年)
- 2 島根県教育委員会『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』昭和56年
- 3 前掲1の岡崎・恩田論文に紹介されている。
- 4 浜田市治和町鰐石に所在し、周布川河口の沖積低高地に立地する弥生時代前期～中期初頭の上墳墓群が検出されている。  
文献には、前島己基「調査報告、浜田市鰐石遺跡」(『季刊文化財』第22号、昭和48年)があるがそれには挿入柱片や刃石斧は紹介されていない。
- 5 穀床構造をもつ第1主体部から斜縫二神二獸鏡や勾玉、劍などが出土した寺床1号墳の東側斜面裾で検出された堅穴住居跡から前期末頃の圓形土器とともに出土している。
- 東出雲町教育委員会『寺床遺跡発掘調査の概要—D・E地区—』昭和57年
- 6 島根県八雲立つ風土記の丘資料館『八雲立つ風土記の丘研究紀要I、弥生式土器集成』昭和52年
- 7 鳥取県では米子市青木遺跡で中期後葉の甕形土器に箇ヶズリが施されているのがわかっている。  
青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書』I・II・III 昭和51年～53年  
また島根県内でも、八束郡東出雲町寺床遺跡D地区の堅穴住居跡(S I 02)から出土した中期後葉の甕形土器に箇ヶズリが施されていることが確認されている。前掲5文献参照。
- 8 仁多郡教育委員会『道路改良計画に伴う島根県仁多町下鳴合遺跡緊急発掘調査報告』昭和56年
- 9 山本清「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』昭和46年、所収)
- 10 前掲2と同じ
- 11 線刺繡については從来から呪具として取扱われている。前掲9でも呪物か魚形を模した抽象的なもので呪具に類するものとして紹介されている。
- 12 本報告、VI勝負遺跡参照

第1表 石台遺跡石器計測表 (1)

種類 番号	遺物名	調査区 遺構(部位)	全長 (現存長) cm	最大幅 cm	重量 (現重量) g	石質	備考	写真 番号
3-1	磨製石斧	II	(13.8)	5.0	(470.1)	流紋岩	刃部欠損	191-6
2	抉入石斧	タ	(7.5)	3.0	(150.8)	タ	タ	5
9	敲 石	III A SD01	13.6	6.8		粗粒砂岩	両端使用	194-38
15-1	菅 玉	タ	1.2	0.4	0.2	不 明	完形品	193-46
2	タ	タ	2.15	0.42	0.5	碧 玉	タ	47
3	石 鐵	タ	(1.6)	1.5	0.8	黒 嘴 石	凹基式(脚部欠損)	6
4	タ	タ	1.75	1.1	(0.5)	タ	半基式	7
5	タ	タ	1.9	1.3	0.8	タ	未成品	9
6	タ	タ	1.4	1.1	0.3	タ	凹基式	8
7	タ	タ	2.4	1.6	1.5	硬質砂岩	平基式	14
8	タ	タ	2.11	2.05	0.9	黒 嘴 石	0.65、0.6(脚長)	4
9	タ	タ	(2.6)	1.2	(0.7)	タ	基部わずかに欠損	5
10	局部磨製石斧	タ	2.6	1.8	1.5	硬質砂岩	凹基式	13
11	石 鐵	タ	2.5	1.55	1.1	黒 嘴 石	0.3、0.25(脚長)	3
12	タ	タ	3.2	2.0	2.2	タ	0.3、0.31(タ)	2
13	タ	タ	2.7	1.5	(1.7)	硬質砂岩	0.17(タ)	12
14	タ	タ	3.2	1.7	1.9	黒 嘴 石	凹基式	1
15	タ	タ	3.35	2.2	2.9	硬質砂岩	平基式	11
16	スクレイバー	タ	2.7	1.3		黒 嘴 石		16
17	タ	タ	3.0	2.0		タ	擦痕、刃こぼれあり	15
18	タ	タ	3.5	2.9		硬質砂岩		
19	石 鐵	タ	2.1	2.2		黒 嘴 石	刃部欠損	194-17
16-1	打製石斧	タ	(6.3)	4.5	(102.8)	緑色凝灰岩	タ	194-29
2	タ	タ	(9.0)	7.5	(126.9)	流紋岩	基部欠損	31
3	局部磨製石斧	タ	(7.1)	4.7	(164.5)	砂 岩	刃部欠損	23
4	タ	タ	12.7	4.9	317.3	凝灰質砂岩		24
5	打製石斧	タ	(7.5)	5.9	(99.5)	砂 岩	刃部欠損	32
6	タ	タ	(5.2)	4.1	(57.1)	泥 岩	未成品	30
7	局部磨製石斧	タ	9.7	3.7	88.8	黑色質岩	完形品	20
8	タ	タ	(9.5)	6.8	(540.9)	流紋岩	刃部欠損	26
9	タ	タ	10.5	4.2	211.3	緑色凝灰岩		25
10	磨製石斧	タ	11.8	3.9	318.0	タ	完形品	19
11	タ	タ	(6.1)	6.3	(203.1)	角閃石安山岩	刃部欠損	22
12	石 斧 丁	タ	4.4	4.5		硬質砂岩	破 片	38
13	タ	タ	(8.2)	7.7		黑色質岩	タ	37
14	タ	タ	(4.1)	4.3		砂 岩	タ	40
15	タ	タ	(2.8)	7.5		質 岩	タ	42
16	タ	III A	7.4	6.9		流紋岩	両端刃部	43
17	タ	タ	(5.0)	4.2		タ	破 片	39
18	タ	タ	(2.4)	3.7		硬質砂岩	タ	41
17-1	石 鐵	タ	11.6	14.2		玄武岩	端部わずかに欠損	193-33
2	敲 石	タ	8.1	3.4		砂 岩	両端使用	34
3	磨 石	タ	6.3	6.7		玄武岩	片面使用	27

## 石台遺跡

第2表 石台遺跡石器計測表 (2)

拓図 番号	遺物名	調査 査定 構成(個数)	全長 (現存長)cm	最大幅 cm	重 量 g	石質	備 考	号 番号
17-4	不明	III A	8.1	7.4		凝灰質砂岩		
5	敲石	タ	6.9	8.6		硬質砂岩	周辺使用	194-35
6	砥石	タ	(5.6)	5.4		流紋岩	全面使用	
7	磨石	タ	6.9	6.9		硬砂岩	タ	194-28
8	砥石	タ	5.2	2.3		石英質砂岩	タ	195-5
9	タ	タ	5.1	9.2		流紋岩	両面使用	
10	タ	タ	7.9	3.3		凝灰岩	全面使用	7
11	タ	タ	7.1	11.0		タ	両面使用	
12	タ	タ	(6.9)	5.0		タ	タ	4
13	タ	タ	10.2	4.8		タ	全面使用	194-46
14	タ	タ	6.8	6.8		タ	両面使用	
18-1	タ	タ	11.0	6.6		砂岩	2面使用	195-1
2	タ	タ	10.4	13.7		凝灰岩	片面使用	3
3	タ	タ	(8.6)	11.2		タ		
4	タ	タ	(13.0)	8.5		石英質砂岩	タ	2
5	石皿	タ	(9.5)	11.7		凝灰質砂岩	両面使用	
6	砥石	タ	12.3	6.4		流紋岩	全面使用	194-44
7	タ	タ	(8.3)	7.7		凝灰質砂岩	両面使用	45
8	石鍤	タ	4.4	5.1	28.4	凝灰岩		195-9
9	有溝石鍤	タ	3.9	2.6	29.1	泥岩		194-18
10	石鍤	タ	10.0	9.5	383.2	泥岩		195-8
11	環状石製品	タ	9.2	3.6		凝灰質砂岩		12
12	石劍	タ	6.8	5.8		硬質砂岩	破片	11
21-1	石鐵	III C 黒褐色土	(2.4)	1.8	(0.9)	黑曜石	0.65、0.5(脚長)	195-22
2	タ	タ	2.0	1.4	(0.8)	タ	2.0(タ)	21
22-1	砥石	タ	(4.8)	3.1		流紋岩	3面研磨	195-20
2	人形石製品	タ	(6.7)	2.4		凝灰質砂岩	下端欠損	23
3	線刻碑	タ	4.9	2.3		凝灰岩	全面研磨	24
28-1	小形石斧	III D 褐色土	8.5	3.2	39.2	黑色頁岩	完形品	196-26
2	局部磨製石斧	タ	8.7	3.8	117.3	凝灰質砂岩	タ	23
3	小形打製石斧	タ	8.1	5.2	108.1	黑色頁岩	タ	27
4	磨製石斧	タ	(9.5)	4.8	(219.5)	凝灰質砂岩	局部欠損	21
5	打製石斧	タ	8.9	3.8	155.9	流紋岩	未成品	28
6	タ	タ	11.3	5.5	176.8	黑色頁岩	完形品	25
7	石鍤	タ	3.1	8.5		砂岩		30
8	砥石	タ	7.4	8.3		凝灰岩	片面使用	18
9	磨製石斧	タ	(7.1)	6.0	(213.5)	砂岩	基部欠損	24
10	タ	タ	(6.1)	6.4	(256.4)	タ	刃部欠損	22
11	敲石	タ	9.3	8.2		タ	両面使用	17
12	砥石	タ	(9.4)	6.6		凝灰質砂岩	全面使用	19
13	切子玉形石製品	タ	5.1	2.9		砂岩	断面5角形	31
14	砥石	タ	5.7	6.7		タ	2面使用	20
15	疊石器	タ	7.8	6.7		凝灰岩	擦痕あり	29

## VIII 出土遺物の自然科学的觀察

- 1 島根県宍道湖水田地層の種子分析について…………笠原 安夫…… 537
- 2 中竹矢遺跡火葬墓考古地磁気調査報告…………  
…………伊藤 晴明・鷺鼠 芳己・長井 正幸・時枝 克安…… 540
- 3 中竹矢遺跡火葬墓出土の人骨について…………井上 晃孝…… 543



# 鳥根県夫敷遺跡水田地層の種子分析について

岡山大学名誉教授 笠原 安夫

## 1 はじめに

鳥根県東出雲町出雲郷に所在する夫敷遺跡の発掘を1980年10月3日に（文部省特定研究「古文化財」藤原班の各位と共に）見学した。調査は、水田面、畦畔は未確認であったが、当時藤原氏らが柱状採土のプランクトオパール分析では、第4層にイネのプランクトオパールのピークがあり、第6層にはイネとイネ科のそれが検出され、水田層の存在が予測されていた。

プランクトオパール分析によって事前に水田を予測して、水田を確認する新しい試みとして、14m幅で80mの長さの面積を平面発掘を進めていた。そして第4層で幅15~20cm、高さ3~5cmの畦畔と共に8枚の水田跡が見つかり、内1枚は6m×4.5mの長方形の水田であった。なお掘下げると第6層からも水田の一部が現れた。藤原氏は翌年2月17日に再度柱状採土を行った。その時に同じ地層から300~500gの土を5試料送付され、2月23日にそれを受け取った。当時他の仕事の都合で、それを詳細に調べる時間的余裕がなく一応中間報告として、一試料100gづつ後述している水選別法で調査し、鳥根県文化課宛に送付した。それは第5層を除いて典型的な水田雑草のコナギ種子が出士したので、第2、3、4および6層とも旧水田跡と推定できるという報告であった。

採取土地層と第4、6層の畦畔のある水田面の写真によれば、第1、6層がやや暗色があり、第7、8層とくに第8層は黒色、第2~5層は白色あるいは上色（灰褐色粘土）が見える。No.1は現生水田、No.7、8層に、もし水田雑草種子が出土せず自然に生える植物種子が出れば、第6層から水稻作が始ったことが証明できると考え、その旨を通知したが、既に採土できなかっただしく、連絡がないので、6月上・中旬に残り100gを追加調査した。第1表成績は2回を合せた分析、同定の結果である。

## 2 試料の分析と結果

送付されたNo.2、3、4、5、6層の地表下の位置、厚さ、土の色などは第1表に示されたようである。

各地層の試料土200g（100gを2回）をビーカーにとり、水道水を入れ、1~5日間放置した後にガラス棒をもって、静かに土塊を砕いた後に、均子状の金網にガーゼを2枚重ねて敷き、水洗しながら、できるだけ土砂と有機物を分けた。分離できない土砂は有機物と共に径9cmのシャーレーに入れ、水を注ぎ双眼実体顕微鏡で見ながら種子を1粒ずつピンセットで拾い出した。この方法は分析に時間がかかるが、径0.5mm位の微細種子まで検出できる。

第1表によれば、第5層は種子の検出がなかったが、第2、3、4および6層とともに、典型的な稻田に生えるコナギの他にオモダカ、ハリイまたはノミノスマが分析されたので旧水田跡と確認

できる。ただ本遺跡の水田土層が灰褐色乃至茶褐色粘土褐色斑の土からは、従来の例では種実（種子と小果実）は検出しにくいもので、その多くは乾田耕作のために分解され易いためと考えているが、このように出土が4種に限られているのがコナギがNo.2、3層のように多いのは異例と言ってよかろう。

第1表 土200g分析結果（種類と粒数）

No.	土層	地表下の厚さ	種類	粒数	計
2	灰褐色粘土 少し褐色斑あり	30cm下	コナギ オモダカ	521粒 19粒	546粒
3	同上	4cm	コナギ ノミノフスマ	194粒 1粒	オモダカ 計 9粒
4	同上	40cm下	コナギ 不明	12粒 1粒	ノミノフスマ 計 1粒
5	灰褐色粘土 褐色斑あり	50cm下	6cm	種子検出されない	
6	茶褐色粘土 褐色斑あり	62cm下	コナギ オモダカ	8粒 1粒	計 9粒

備考 1981.2.23受取り (2.17藤原宏志博士の採土罐)

第1回100g分析3月上旬、第2回100g分析6月上・中旬に分析、同定した。

### 3 考 察

本遺跡は出雲国房とこれに併設されていたという意宇郡家跡に比定されている。1979年に発掘調査が行なわれた時、耕作土の下の青灰色粘土層または灰黄色粘質層上に弥生時代から奈良・平安時代に至る各時期の遺物が出土しており、付近に何らかの遺構の存在が予想されていたが、今回の発掘で水田遺構が確認されたのである。

筆者は全国各地で約30遺跡の土層から種実分析を試み、うち20遺跡から水田遺構の種子群を検出した。たとえば、温田稻作遺構と推定された津山市大田十二社、岡山県久米郡宮尾遺跡などでは、弥生中期または後期に水稲が導入されたが、前者では弥生、古墳時代にコナギ、ハライがきわめて多數、ホタルイ、オモダカ、イバラモ、スブタなど少數が出土し、後者では古墳、奈良時代に多數のコナギとやや多數のヤナギスブタおよび少數のイバラモ、スブタ、シャジクモ、ホタルイ、オモダカ、ホシグサ、コウガイセキショウなど6~10種が出土している。また乾田耕作と見られた岡山市津島、雄町、川入、倉敷市東上東遺跡などの弥生前、中、後期とも、少數のコナギ、ヤナギタテ、ホタルイ、タイヌヒエ、タガラシ、ノミノフスマ、タカカプロウ、サナエクデ、ユズメガヤツリ、ヌカキビ20種の他に、やや多數のザクロソウ、アカザ、と少數のイヌホウズキ、エノキグサ、カタバミ、スペリヒユ、イヌビユ、イスクデ、ハルタテ、カラムシ、アナムグラ、クワクサ、エノコログサなど人里植物や畑雜草など10~20余種も出土している。なお半湿田耕作と推定された群馬県日

高、大阪市長原遺跡の弥生後期および古墳期ではきわめて多数のコナギの他にやや多数のホタルイ、オモダカ、コウガイゼキショウ、ハリイ、シャジクモ、イバラモ、イヌノヒゲ、少數のヤナギタデ、ボントクタデ、ノミノフスマ、コゴメガヤツリ、ヒメクグなど10～30種が出土している。

本遺跡では前述したように、No.5層では出土種子がなかったがNo.4と6層は少數のコナギ、オモダカ、ノミノフスマが、No.2、3層ではハリイ、オモダカ、ノミノフスマは少數だが、コナギは194～521粒のように多数出土した。種類は他遺跡に比較して少ないが、典型的な水田雜草コナギの出土から見て、半湿田耕作が営まれた水田址であることが認められる。

#### 文 献

笠原安夫、黒田耕作；宮尾遺跡より出土した植物種子の同定。

笠原安夫；津山大田十二社遺跡からの発掘植物種子の種類同定。

笠原安夫、武田浩子；岡山県津島遺跡の出土種実の種類同定の研究。

農学研究58（3、4）117～179、1979。

# 中竹矢遺跡火葬墓考古地磁気調査報告

島根大学理学部

伊藤晴明・蛎屋芳己  
長井正幸・時枝克安

中竹矢遺跡には長方形の火葬墓があり、壁土および底に敷かれた石は良く焼けていた。この焼土遺跡の熱残留磁気の方向を測定し、西南日本における地磁気永年変化曲線と比較して、火葬墓が使用された最終年代を知るためにこの調査が行われた。

## (1) 試料

焼土を石膏で固め、方位を磁気コンパスで測定することにより、火葬墓の壁から24個の定方位試料を採取した。また底部に敷かれている焼石も一つ、定方位試料として採取した。この焼石は、約12cm×20cmの平坦な鉛出面をもち厚みは約10cmであった。試料採取場所は図-1に示されている。

## (2) 測定結果

### ・壁上の残留磁気

試料は、一辺が約3cmの立方体に整形した後残留磁気の方向を無定位磁力計を用いて測定した。図-2に、菱形中に纏めた2個を除く22個の試料について、残留磁気の方向の測定結果を示す。G・G・Nは地理的北方向を示している。残留磁気の方向はかなり分散しているが、12個の試料については、よくまとまっている。これらの、方向のまとまりが良い12個の試料について計算された残留磁気の平均方向と、方向の分散の程度を示すバラメーターは次のようになる。

Im :	平均伏角	50.9°
Dm :	平均偏角	4.7°
K :	Fisher の信頼度係数	313
$\alpha_{95}$ :	Fisher の95%誤差角	2.5°
N :	計算に使用した試料数	12

Kの値が大きいほど、又  $\alpha_{95}$  の値が小さいほど方向の分散が小さい。

### ・焼石の残留磁気

採取された焼石から、ダイヤモンドドリルを用いて、径24cm、長さ24cmの円柱形試料を作り、スピナーマグネットを用いて、残留磁気の方向を測定した。焼石の残留磁気の方向は、伏角が53°、偏角が-16.7°となったが、この方向を壁のよくまとまつた残留磁気の方向と比べると、伏角はほぼ等しいが偏角は21.4°の差がある。それ故、この焼石は、火葬墓が最後に使用されてから動かされていることになり、年代推定のための試料として不適当であることがわかった。しかし、火葬墓の温度がどの程度まで上昇していたかを知るために、焼石の表面と中心部の試料について交流消磁を行い、磁気の安定性を調べた。100エールステッド毎に、1100ニールステッドまで行われた交流消磁

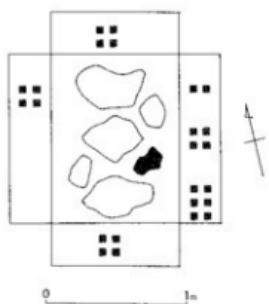


図-1

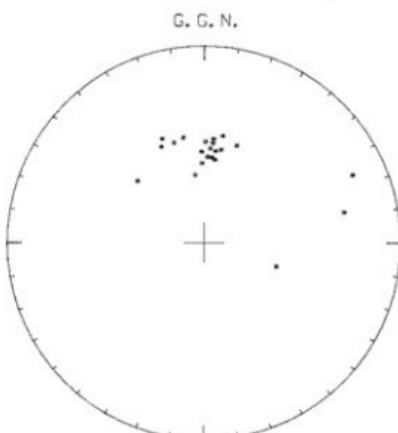


図-2

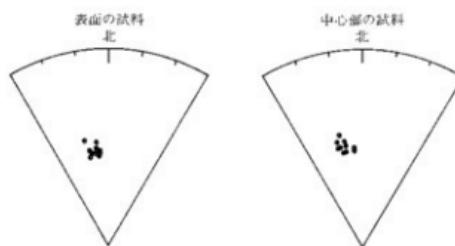


図-3

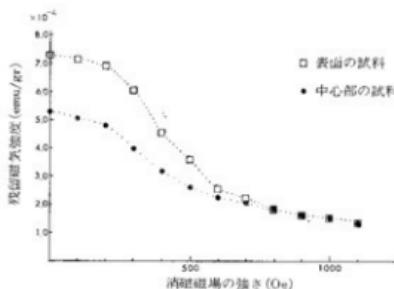


図-4

に対して、双方の試料の残留磁気の方向はほとんど変化せず、又残留磁気強度も $\sim 10^{-4}$ emu/gr という強い値を保持し続けることが判明した。このことから、この焼石の磁性鉱物は磁鉄鉱であることと、又岩石の温度は、その中心部まで、磁鉄鉱のキュリー温度である578°C以上になったことが推定できる。図-3に上述の交流消磁に対する残留磁気の方向の変動を、又図-4に残留磁気強度の減衰曲線を示す。

### (3) 年代定稚

図-5に、(2)で計算された火葬墓の残留磁気の平均方向と、広岡(1977)による西南日本の地磁気永年変化曲線を示す。+印は残留磁気の平均方向を、又点線の枠内は誤差の範囲を示している。火葬墓の考古地磁気推定年代を求めるには、地磁気永年変化曲線上に、残留磁気の平均方向から最も近い点を求めて、この点の年代を読みとればよい。このようにして得られた中竹矢遺跡火葬墓の考古地磁気推定年代は、AD1350±25、AD400±25又はAD125±20のいずれかということになる。正しい年代をこれら三つの値から決定するためには、別の分野からの証拠を必要とする。考古学的には、この火葬墓は、奈良時代以降と考えられるので、AD1350±25を適正な年代として選ぶことができる。

#### 参考文献

広岡公夫(1977) 第四紀研究、15・200-203。

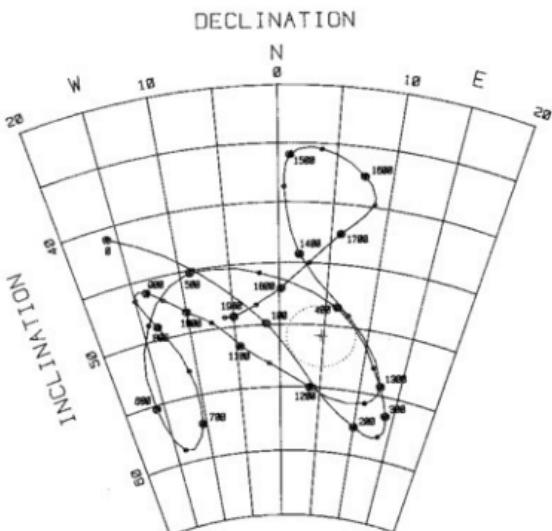


図-5

# 中竹矢遺跡火葬墓出土の人骨について

鳥取大学医学部法医学教室

助教授 井上晃孝

## 1 資料骨について

中竹矢遺跡III区SK32から出土した骨は採取番号（B-1～12）が付されており、付着土砂を除去した骨はすべて破損骨で、小骨片化しているが、その形態学的特徴から明らかに人骨である。

本資料骨の白色～灰白色（外面は一部青味を帯びている）を呈し、一部のものは土砂のために汚赤褐色を帯びた箇所もある。

しかし、これらの骨はあまりにも小骨片化して、各骨の特徴的部位のものはほとんど残存してなく、骨の名称のわかる部位は極めて少ない。

残存骨の数量も少なく、大半のものが1～2cm位の小骨片であり、最大長の骨片で4.4cm位である。これら残存骨片は頭蓋骨片と四肢骨片から成るが、詳細な部位は特定し難いが、全体的にみて恐らくは1体が埋葬されたものと推定する。出土骨の配置図と骨名は図1に示す。

## 2 火葬骨の特徴

一般に火をうけた骨は火力によって形態、硬度、色調が色々と変化すると云われている。

焼骨は完全焼骨と不完全焼骨に分けられるが、前者の焼骨の色調は、白色、銀ネズミ色～青みを帯びた灰色を呈し、骨の表面に亀裂や捩れを生ずることが特徴とされている。

後者の場合は、骨の表面が黒く焦げただけで、骨自体はあまり変化がみられないことが多い。

完全焼骨は、その骨質と火力によってある程度（3～10%位）の収縮が認められている。

本資料骨は、上記に示した完全焼骨の所見を呈しているので、明らかに焼骨であり、幾分収縮しているようである。

## 3 火葬前の遺体の状態

被葬者が死後間もなく、自然な形で火葬された場合、遺体はまず表面の軟組織（皮膚、筋肉）から焼け始め、最後に骨も焼ける。

完全焼骨は、骨の表面に深い亀裂や横方向に輪状の亀裂、長軸方向に裂開あるいは骨の捩れを生ずる。

本資料骨は、火葬骨（完全焼骨）の特徴を有しているので、死後間もなく火葬（荼毘）に伏されたものと推察される。

火葬の場合、遺体と火葬用の薪との関係で、骨の位置がある程度異なってくるが、残存骨の位置関係をみると（図1）、ほとんど①の石付近

採取番号	骨の部位
B-1	四肢骨の一部
B-2	四肢骨の一部
B-3	四肢骨の一部
B-4	四肢骨の一部
B-5	四肢骨の一部
B-6	四肢骨の一部
B-7	頭蓋骨の一部
B-8	頭蓋骨の一部
B-9	四肢骨の一部
B-10	頭蓋骨の一部
B-11	四肢骨の一部
B-12	四肢骨の一部

に集中しており ( $50 \times 40\text{cm}$ )、この状態が果して斎庭後の自然な残存骨の位置であるのか、又は後で故意に動かしたものか全く不明である。

成人骨の場合、各部の骨は大きく、太く（例えば大腿骨は $40\text{cm}$ 内外、上腕骨は $30\text{cm}$ 内外）、焼骨でもこの様な狭い範囲に集中することはなく、薪による火力程度では（後で故意に破壊しない限り）骨はこんなに細片化することはない。

残存骨はあまりにも小骨片化しており、長管骨をみると、丸味厚さからみて、小さく細く、（焼骨はある程度収縮することを考慮に入れても）、一見して小児の骨であると推定される。

次に、遺体が伸展位だったのか屈位だったのか不明であるが、一つの仮説をあげてみることにする。

伸展位の場合、 $120\text{cm}$ の長さの遺跡には成人は入りきれないのでは、当然 $120\text{cm}$ 以下の身長を有する者となる。時代によって小児の身長は若干の差はあるが、参考までに示すと、現代の小児の場合では大約7才以下であると推察される。しかし、時代が古くなるにつれて年令は若干上昇する。

又、伸展位の場合、薪が焼けてくずれ落ちる際に骨がある程度移動することは事実であるが、一箇所に頭蓋骨と四肢骨が集中することは全く考え難く、遺跡の全面に骨が散乱するか、伸展位に近い状態で残存するのが普通である。

残存骨の配置をみると斎庭後、故意に動かしていないと仮定するならば、あまりにも狭い範囲に ( $50 \times 40\text{cm}$ )、残存骨が集中していることから、むしろ屈位の方を想定することが妥当かもしれない。

仮に屈位だとしても、被葬者の骨が小さく、細いことから小児であることは間違いないから、この場合は身長は $120\text{cm}$ 以上にこだわることはなく、それより若干大きい年令の者も、その範囲に含める必要がある。

#### 4 性と年令の推定

##### 性 別

残存骨は小骨片化しており、性的特徴を示す部位は全く皆無で不明である。

##### 年 令

被葬者は先に小児であると推定していることから、残存骨の中の頭蓋骨片（B-7）に一部縫合面の部位があるが、小児の中でも乳幼児の場合、頭蓋骨の縫合部は未だ骨化していないのでこれは除外できる。

その他の長管骨をみると、完形の骨がなく、小骨片で比較検討できないが、経験的に云えることはこれららの長管骨の丸味、厚みが極めて小さく薄いことから小児のものである。

性別・年令別の身長 (cm)  
昭和51年度

才	男	女
1	80.8	79.1
2	89.3	88.5
3	96.0	95.1
5	108.7	107.4
7	120.9	119.2
8	125.8	125.0
10	137.5	137.3
12	148.0	149.9
15	166.0	155.1
18	168.5	156.0
20	167.7	153.5

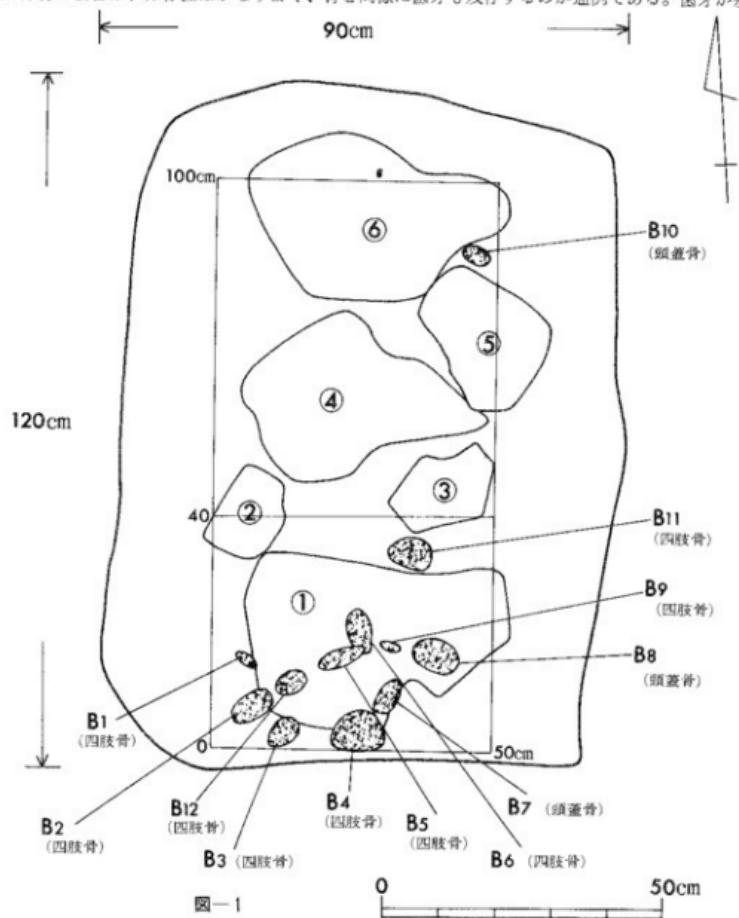
(厚生統計 昭和53年)

伸展位の場合、身長は120cm以下とすると、7、8才以下（多少個体差はあるが）、屈位の場合は10才前後～12才前後まで考えられるが、この場合、歯牙が問題となる。

即ち、この時期は永久歯の萌出時期にあたる。しかし、本遺跡からは歯牙は全く検出されていない。

硬組織の中でもっとも強固なのは歯牙であり、乳歯よりも永久歯の方が強固で、長年月経過した古墳から出土する人骨は、一般に風化が著しく原形を留めていないのに、歯牙はかなり完全な形で残存することが多い。

火葬骨の場合は、保存性はかなりよく、骨と同様に歯牙も残存するのが通例である。歯牙が残存



していたら乳歯、永久歯の区別がなされ、その萌出の程度、磨耗度（咬耗度）から年令推定の一助となる筈である。しかし、今回は歯牙は全く検出されていない。

以上から被葬者は小児（乳幼児は除く）であるが、年令は限定できない。

## 5 血液型、その他

### 1) 血液型

本屍骨は火焼骨であるので、高温のため血液型抗原物質が変成したり、又は消失するので、一般的に血液型検査には適さないので、割愛する。

### 2) その他

残存焼骨には病変らの異常を認めない。

## ま と め

中竹矢遺跡から出土した火焼墓人骨は小児（性別不明）と推定され、死後間もなく荼毘に伏されたものと考えられる。

昭和58年3月15日 印刷  
昭和58年3月30日 発行

国道9号線バイパス建設予定地内

埋蔵文化財発堀調査報告書IV

編集・発行 島根県教育委員会  
松江市殿町1番地  
印刷・製本 株式会社報光社  
平田市平田町993